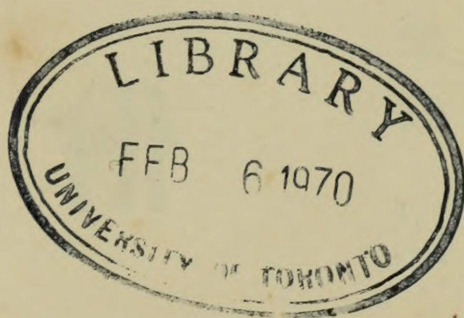
井上博士序
釋宗演老師序
蘇峰學人序
松本博士序
近重博士序

五山詩僧傳

閑堂　上村觀光　編輯

和田學士序
黒板博士跋
荻野博士跋
藤井博士跋
吉澤學士跋

東京　民友社　發行


LIBRARY
FEB 6 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

友人上村觀光君五山詩僧傳を著述せられ余に一言を寄せんことを需める君は年來五山文學を研鑽し之に關する著作今や積て汗牛充棟に及べり顧ふに五山文學を讀まんとするものは必ず先づ作者の傳記を知らざるべからず傳記を知らずして詩文のみを讀むは其趣味を解するに於て精神を缺けるが如き感なき能はず故に今回の著作は五山詩文集に精神を注入するものたるべし此人にして此著ある世間爭て歡迎するは必然ならんと信ず聊か所思を陳して貴需に應ず

明治四十五年二月五日

井上圓了

五山詩僧傳序

倦鳥巣林。歸雲繞岫。正是夕陽春西之時。有客剝啄碉戶。出而見則道友上村觀光學人。乃延請座。共喫冷茶。學人徐曰。我頃者撰五山詩僧傳。特來請師序。予曰否。予素不能詩文者。如君求可謂酷矣。學人曰我聞師曾唱詩禪一味說。世皆知之。然今輒拒我請。是遁詞耳。於是乎予言窮。乃莞爾語曰。古人云禪道在妙悟。詩道亦存于此。又云諸佛慧命非文字。然托之文字以傳萬世。故善讀有化文字爲慧命。不能善讀者化慧命爲文字。又云詩人不必能吟詩者。唯能胸境超絕。相對溫雅。雖未曾知一字。可謂眞詩人。善哉言也。予以謂禪詩心。詩禪聲。天地咸有心。萬物豈無聲。可看春鶯夏蟬秋蛩冬雁。各自吟自然之眞情。弄天性

之妙機。乃至山紫水明花紅柳綠。謂亦皆非乾坤最上之韻文乎。予常愛誦坡翁無情說法一偈。云溪聲便是廣長舌。山色豈非淸淨身。夜來八萬四千偈。他日如何擧似人。予唱詩禪一味之微意亦根于此。若夫論詩偈之體裁。格法。人物。歷史。世不乏其人。予不敢當。學人曰我會焉。唯乞記今日之話頭。以充小序。乃書贈之。

洪嶽　釋　宗演

上村君閑堂著す所の五山詩僧傳の排印既に了る、君、余に囑するに一言を以てす。余もまた平生喜んて五山の史藉を讀む者、卽ち君とその志を同うす。今や此の書の江湖に出るに臨んて、之を悠揚一番することを辭すへけむや。

盍そ試に仁山、古山二兄弟か去つて後の室町時代を看さるや、天下の武人といふ武人は、干戈を擁して互ひに相爭ひ、亂麻の收拾すへからさるか如く、文藝遂に地を掃ひ、滿目荒凉、一片の病葉殘紅を留めさるの觀あり。此間に在りて、特り五山の僧侶は、他の渦中に捲き去られす、禪板蒲團、幽寂の境に枯淡を甘し、盛に內典外典を講し且つ之を抄して、天下の學人に惠與し、恰かも春蘭秋菊の姸を爭ひ芳を鬪はすか如く、能く文藝天地を黼黻す、豈に多とせさるへけむや。

蓋し五山僧侶の業たるや、啻たに詩文の遊戲酬酢に止らす。

或ひは政治、外交の帷幄に參し、或ひは美術百工の事に一臂の力を假し、其の業頗る多方面にして、其の功績もまた大なるものあり。然れは南北朝以來の政治、外交、經濟、文藝、美術を研究するには、必す五山僧侶の事蹟を知らさるへからす。五山僧侶の事蹟を見るへきの書は、虎關の釋書の後、師蠻の延寶傳燈、義諦の東胤錄、高泉の扶桑禪林僧寶傳、東渡諸師傳等數種あるのみ。儒林には林道春の五山諸僧傳一卷あるのみにして、僅かに十の一を擧けたるに過きす。久しく史學界の缺典として學者の憾とする所なりき。

上村君、五山名藍の間に游ひ、名匠の史籍を涉獵すること此に十年、その造詣尤も深く、五山通を論すれは、世人必す君を第一に推す。此の書の如きは、固より君か緒餘に過きすと雖も、學界に貢獻する所甚た大なり。室町時代を知らむとす

る者は、皆必す先つ此の書を讀むへし、此の書豈啻たに五山詩僧傳と謂はむや。

蘇峰學人

五山詩僧傳序

我邦中世、王室式微し武人政を擅にしてより、劍戟の向ふ所庶民慴伏し、國君空しく虚位を擁し、大臣成を野人に仰ぐ、聲譽一に兵力に由り、權勢全く武門に歸せり。權勢の盛なる所は人爭ひ求め、聲譽の大なる所には人競ひ趨く、是れ人情の自から然るところなり。是に於て乎文學の士は殆んど其痕を俗間に絕し、唯緇素の徒の僅かに遺文を後昆に傳ふるあるのみ。然りと雖も馬上天下を獲るも烏ぞ馬上天下を治めんや、國家文武の偏廢すべからざるや明かなり、是故に方外の士を羅して幕府機務の間に參ぜしめ、皀衣の輩を致して外交文書の事に從はしむ、斯くの如くにして海內文武の權は遂に二分し、而して僧侶は殆んど其一を有するに至れり。蓋し出離を

樂ふもの丶國政に干與し、菩提を證するもの丶文藝に從事するが如きは、素と常軌を逸し其志とするところに非らずと雖も、而も當時の勢亦洵に已むを得ざるものありしなり、而して我邦の藝術之に由つて以て隆に、政綱之に由つて以て擧がれりとせば、彼等の功勳亦甚だ偉ならずとなさゞるなり。頃者閑堂上村子五山文學の士二百廿餘人を擇び、之に繫ぐるに其傳を以てし、題して五山詩僧傳と曰ふ。詩僧といふといへども彼何ぞ唯に樹下石上閑葛藤を弄し、春花秋月徒らに枯腸を搾るの徒のみならんや。當時五山は王者武人の擁護する所にして、又實に文學藝術の叢苑たり、而して彼權門に出入するもの亦多く此に輩出す、然らば則ち近代藝術の淵源も此に求むべく、政治の半面亦得て窺ふべきなり。閑堂子は五山文學に精通博達し、珍籍祕笈之を探ぐらざるなし、斯人にして

斯書を爲す、嗚呼洵に適材を適處に用ゆるものか非か。余性詩文に疎なりといへども、閑堂子の此著必らず一世を裨益するの大なるものあるを信じ、著者の需に應じ一言を卷首に題すと云爾。

明治四十五年三月

京都文科大學に於て

松本文三郎

五山詩僧傳序

前輩爲人徹困なる處已むを得すして酬酢すれは一言半句忽ち叢林に流落す後の虚を承け響を接する者之を目して詩となし偈と稱す巧拙醜美の論又隨ふて起る殊に識らす古人の言句總に皆大寂無爲の中より發し信手拈來初より揀擇なきことを譬へは月の天に在るか如し東行する者之を視て謂へらく月之と倶に東すと西行する者は謂へらく月之と倶に西すと中間不動の者は謂へらく月之と動かすと各所見を執り異を立て名を存す而かも明月當空未た曾て東西不動を別つことあらさるなり頃者吾友上村君五山詩僧傳の著あり微を發し幽を闡く旁索多年其人と詩と再ひ世に傳ふ蓋し勉めたりと謂ふ可し僕未た其書を讀むに及はす疑くは君の意只た明月を指すに在る歟抑又

東西不動の巽を立つるに在る歟君か序を徴せらるゝに當り敢て質す

明治四十五年春三月梅花白處

物庵居士謹識

五山詩僧傳序

室町時代の五山文學は我漢文學史上の一大貯水池なり。上、平安朝以往より鎌倉期に至る諸溝渠を承けて下、德川時代以後明治に迄ぶ諸川流の源を成し以て我漢文學をして前後二千年其灌漑の利を國文學の園圃に及かしむ。但其時世の所謂暗黑時代に屬する爲に又其作家の方外の人なるが爲に後世概ね此特殊文學の存在を知らず。偶之を知る者ありても作家個々の傳歴を明かにし如何にして彼等が相寄りて此鬱然たる大文學を成形せしかの所由を詳かにする者に至りては殆ど之有らず。友人上村閑堂君太く之を歎き夙に心を五山文學の顯彰に留め其超倫の精力を傾けて五山文學全集を編輯し又五山文學史等を著し以て前哲の遺業を不朽に傳へむとす。其志洵に壯

なりと謂つべし。君今亦五山詩僧傳を撰び雪村絕海義堂中巖別源岐陽等二百有餘家の本傳及逸事を輯錄し前行諸書と相待ちて五山文學の淵源を審かにするの絕好資料たらしむ。抑五山文學の精粹は主ら其詩文に存し從來久しく稡氣乳臭を脫せざりし邦人の詞調も此に至りて頓に一生面を開き其最も優秀なるものゝ如きはさしもに我を輕侮したりし唐山の人をして中華亦及び易からずと歎稱せしむるに至れり。然るに邦人中之を識る者鮮く良匠能工の所作を擧げて單り外人の賞鑒に委ねしむ。是れ豈學界の恨事に非ずと謂はむや。幸に上村君の在るあり將に湮滅し去らむとする文豪の事蹟こゝに始めて一道の光明を得天下炳焉として彼等の遺勳の景仰するに足るもののあるを知らむとす。惟ふに君の緇林文學に關する努手必ず此著を以て終止せざるべしと雖も微を發き幽を闡くの勞苦に

至りては恐らくは此を最とすべし。然れども苦心の裡には自ら得意の色あり。予は切に君の苦心に同情し且つ大に君の得意に拍手せむとす。本書發刊に臨みて序を徵せらる。予や亦多く五山文學を知らざる者の一に居る。而して之を識るは一に本書の賜なり。便ち數言を題して麗澤の恩を謝すと云爾。

明治壬子初夏下澣

辱交和田萬吉謹識

例言

一近時五山文學の名は漸く人口に膾炙せらると雖、其の實相に至りては未た深く之を知るもの鮮し。余曩きに五山文學小史を著はして少しく之を闡明し、今亦再び鎌倉以後慶長以前に渉り諸碩德の言行超卓なるもの更に百二十人を裒輯し茲に再び之を公刊す。たゞ恨むらくは參考圖書大半散佚して博捜旁尋に便ならず、獲るに隨つて紀せしがため繁簡取捨宜きを得ざる所多し。

一五山碩德の詩文、固と是れ禪餘の遊戯三昧にして、彼の藝苑に從事し風月に吟詠して彫琢是れ事とする者と其の選を異にす、是れ偈頌の稱ある所以なり。余や誤つて本書に冠するに詩僧の目を以てす、其の時好に投せむがためにあら

ず、要は世人をして偈頌の詩と無二不別なるを知らしめむがためなり。

一本書の編纂に關して其の考援する所の書目二百八十有餘種の多きに及び、其の採纂する所各々典據あり一も口碑を交へず。今煩を憚りて一々之を記さず。本書の開版につき恩師井上先生並に平素余が畏敬する所の先輩諸賢より各々序跋を賜ひ本書に光彩を添へたまひしを感謝す。たゞ其の推奬の辭に至りては不敏敢て當らず、深く之を愧づるのみ。

一本書出版に關しては大狂森師兄の前後援助を蒙りしこと多く。又索引の分類は眞宗大學圖書館長大屋德城氏の手を假れり、一併に錄して感謝の意を表す。

明治四十五年六月歸馬休牛日

上村觀光識

五山詩僧傳目次

附錄

五山詩僧傳目次終

五山詩僧傳

上村観光 著

總叙

頼山陽、曾て五刹詩鈔を編し、其の後に記して曰く、

國朝詩運。兩開兩壞。猶文章也。初壞長慶體。後壞於萬暦體。中間爭亂。不暇爲中晩宋元也。五山僧侶。頗爲瘦硬絶句。其中巨擘。有若義堂絶海。頗雄奇。有臺閣儒紳不及處。當時王霸盛衰。渠輩冷眼傍觀。頗形之吟詠。含有譏諷。又非近時士君子。徒鏤刻風月、爲無益詩比也。

と。江村北海も亦曾て日本詩史を選するや、五山僧の詩中、其の佳なるもの數十首を錄し、且つ論じて曰く、

五山禪林之詩。固不易論也。蓋古昔文學。盛于弘仁天暦。陵夷于延久寛治。泯沒保元平治。於是世所謂五山禪林之文學代而興。亦氣運盛衰大限也。（中略）元和以來。文運日隆。近時學者昂々乎蔑視前古。卯角之童。尙能詆排五山之詩。即其徒亦或倒戈內攻。要非篤論也。余

謂五山之詩。佳篇不尠。中世稱叢林傑出者。往々航海西游。自宋季世至明中葉。相尋不絕。參學之暇。從事藝苑。師承各異。體裁亦岐。其詩今存者數百千首。夷考其中。不能不玉石相混也。（下略）

五山作者。其名可徵于今者。不下百人。而絕海義堂其選也。次則太白仲芳惟忠謙岩惟肖愕隱西胤玉畹瑞岩瑞溪九鼎九淵東沼南江心田村庵之徒。不堪枚擧。

絕海義堂。世多並稱。以爲敵手。余嘗讀蕉堅稿。又讀空華集。審二禪壁壘。論學値。則義堂似勝絕海。如詩才。則義堂非絕海敵也、絕海詩。非但古昔中世無敵手也。雖近時諸名家。恐棄甲宵遁。何則。古昔朝紳詠言。非無佳句警聯。然疵病雜陳。全篇佳者甚稀。偶有佳作。亦唯我邦之詩耳。較之於華人之詩。殊隔逕蹊。雖近時諸名家。以余觀之。亦唯我邦之詩。往々難免俗習。如絕海則不然也。

と。二人の論ずる所、義堂絕海を擧げて他に及ばずと雖蓋し其の肯綮を失はざるに似たり。顧ふに慶元以來、儒學の勃興と共に五山の詩文を讀むもの絕えてなく、惺窩羅山活所の如き僅に其一臠を嘗めたりと雖も、之れを推奬して前賢の美を發揚するが如きは敢て爲さゞりき。隨て其詩其文、湮沒聞ゆるなきを致すや久しく、漸く山陽北海等によりて又少しく當代儒流の注目を惹くに至りしも而も惜むべし、

是れ亦博觀廣攬の用を缺き、ために五山文學の全幅を捕へて醇疵を甄擇し咀嚼翫味したるもの三百餘年間殆どなくして空しく闇黑の裡に葬られたり。

謂ふ所の五山文學とは、鎌倉の末期より足利時代を通じて臨濟五山僧徒の手により て漸次發達したる文學にして、其の範圍は漢詩、漢文及び當代の日錄、又は講抄、隨筆等に限らるゝも、我が中世の文明史上に一道の光彩を放つべき特長を有するものたるを疑はず。蓋し當時、戰亂相尋ぎて、文教の頽廢も亦極れり。此際、風塵の外に超然として、文權を旣廢の餘に維持したるは、疑ひもなく五山學僧の力にして、其跡宛も歐洲中世期の文明が、耶蘇教徒の手によりて維持せられたると相似て五山の僧徒は、實に我が中世の文明を聯絡せる橋梁なりと謂つべし。

加之、德川時代儒學勃興の起源を討ぬる時は、是れ亦五山學僧の功其多きに居り、德川初期の儒流は、概ね其の訓陶を受けざるものなく、更に此の時代に於ける宋學の淵源を見るも、亦全く虎關岐陽得巖桂菴等の碩學に負ふ所、寔に大なる者あり。果して然らば我が中世より近代に至るまで、文明扶植、教化宣揚の功は、半ば五山の僧徒に歸せざるべからず。

近時五山文學の起源に關し、學者各異說を樹つと雖も、余は寧一山を推して先鞭

者と爲すを至當とする者なり。一山が文保の初年、一度歸化するや、大に當時の支那思想を鼓吹し、宋學はこの時よりして我が學界に傳播するに至り、雪村友梅の入元以後、元亨、正中の頃より、五山の僧徒踵を接して支那に遊學し、夢窓の出世するや、その門下濟々たる多士を以て充たされ、就中、義堂絕海鐵舟觀中古劍の徒輩出し、五山叢林の文學爲に蔚然として興起し、降つて南北兩朝合一の後に至つては蘭菊各その芳を競ふの美觀を呈するに至れり。之を歷史的に觀察するときは、五山文學の草創は、寧ろ一山なりと雖も、その之を大成したるは、半ば夢窓の功に歸せざるべからず。

蓋し五山の文學は、我國に於ける漢文學發達の頂點にして、平安朝の文學は和文に傾き、漢文は極めて無勢力なりき。鎌倉時代に及びては、漢和兩文併立して、文章の體も亦和漢混交するに至りしが、文權一たび五山僧の手に歸するに及びて、純然たる漢文學に立ち返りて長足の發展をなし、漢人をして喫驚せしむるに至れり。明僧道衍が、絕海の蕉堅稿を見て『淸婉峭雅、晉唐瀉躰、靈徹の名筆に越へ、詩に於て能く性情の正を寫出せり、詩を云ふもの必ず師を以て法とせざるべからず』と評せしが如き。又天寧の埼公が義堂の空華集を見て『意はざりき日本に此

郎あらんとは、人皆云ふ、疑ふらくは中華の人其の國に住する者の作ならん歟[二]と稱したるが如き。二師の技倆と識見とは、平安朝の漢文學界中に求むるも、決して其匹儔を得べからざるなり。

五山の文學は、大體に於て二期に分つを至當とす。即ち應永以前は、主として詩文の發達したる時代にして、この後半は、注疏の時代なり。今試に此の後半の產物たる、重なる著作を擧れば、桃源瑞仙の史記抄、周易抄、瑞溪周鳳の臥說、太岳周崇の翰苑遺芳、前漢書抄、江西龍派の東坡詩抄、梅菴の天下白、漆桶萬里の帳中香山谷詩抄心華元棣の心華臆斷、笑雲清三の古文抄、桂林德昌の史學提要抄等、數へ來れば、註疏の類、六十餘種の多きに達せり。就中東福寺の岐陽方秀、建仁寺の桂菴玄樹の如き、盛に宋學を鼓吹して德川時代に於ける、儒學勃興の源を開けり。彼等が應永以後、騷亂紛々、國民堵に安んせざるの時、超然として時流の外に立ち、紡經績文、先賢の遺教を紹述したるは、塞に歷史上沒すべからざるの功績にして、彼の謠曲の如きも、亦當代の創作に出でしといふ。新井白石輩て、其の著俳優考に、謠曲を論じて明の戲曲を飜案したる者となせり。而もそが飜案者は、明に往來したる禪僧たるとは疑ふべからざる事實にして、佛教思想を以て

成立せる文學中、今日に現存し命脈を維持しつゝあるは、只是れのみ。加之、書畫の流行も、亦當時甚だ盛にして、禪僧の書が、一種の風韻を帶びたるとは、漢人も稱揚して措かざる所、畫に於ては祥啓雪舟明兆周文等。書に於ては斗南鐵舟愚極中正等は、其の最も錚々たる者と謂ふべく。就中、斗南の書が、明人を驚かしたるが如きは、有名なる事實なり。

五山文學の發達に伴ふて、五山と外交とは、密接の關係を生ずるに至れり。請ふその沿革を略論せん。始め四明、天童等に通ずる禪僧は、便宜上、密に海外の事情を探ることを依托せられたるも、終には公然として彼我の音問を通ずる使節となり、遂に當時の外交官たるの實權を掌握するに至れり。加之、多年の戰亂により、文學地を掃ふて空しく、苟も僧徒にあらざれば、彼れが信事を解し、我の公文を草すべき學識なかりしが爲め、僧徒にあらずんば、外交に從事する能はざるの情勢となれり。足利尊氏の天龍寺を嵯峨に造營せんとするや、直義と謀りて勸化の使節を元に派し、興國三年を以て第一回の航海を始む、之を世に天龍寺船と云ふ。爾後天授二年より、天文年間に至るまで、十餘人の使節を派遣するに至りしが、今その中著明なる者を擧ぐれば、

天授二年　文珪祖來　應永八年　祖阿
應永九年　堅中圭密　永亨四年　龍室道淵
永亨六年　恕中中誓　寶德三年　東洋允彭、如三芳貞
寛正六年　天與清啓　文明七年　竺芳妙茂、玉英慶瑜
文明十五年　周璋　明應四年　壽蓂
永正六年　了菴桂悟　天文八年　湖心碩鼎（副使策彥）
天文十七年　策彥周良

等にして是等は當時の所謂外交官にして、五山僧徒中、才學秀拔の士なり。而して其の齎す所の表文の如き、絕海中津惟肖得巖瑞溪周鳳嚴中周噩綿谷周瓞横川景三月舟壽桂等五山僧の手に成りし者多く、彼の張搘の『四千客路皆由海。數十陪臣半是僧』と詠せしは、以て其の我が外交官たる圓顱方袍の禪僧を形容し得て妙なりと謂ふべく、膝桶萬里が其の著、帳中香の抄中に記して『近來跨南船者。太半爲利。而不爲法。錙林憔悴哀哉』と歎せしも、當時の我が國勢如何ともすべからざるものありしを知らざるべからず。

蓋し禪僧の海外渡航は、土御門帝の建仁二年、千光祖師榮西の求法に始まり、尋

いで建保三年榮西の滅後數年を出でずして道元圓爾の二師入宋し、當時北條氏の累代禪宗に心を傾け、就中、時賴時宗の二人に至りては深く宗旨に悟入し、自ら建長、圓覺の大精舍を建立して大檀那となり、一方は大覺禪師を請し、圓覺は佛光國師を仰ぎて開山となし、禪宗の興隆に意を用ゐしがため、我國の禪僧も勢ひ支那に之きて名師巨匠に參見するもの相踵ぎ、又彼土の尊宿にして我れの聘に應じ、又は自ら進むで重溟を越へて應化せらるゝ者ありて、鎌倉の中葉より足利時代を通じては、彼我禪僧の往來倍々繁く、隨つて我が文學技藝の末に至るまで、多大の影響を與へたり。今參考のため試みに寛元四年（紀元千九百〇六年）以來、來朝の名師を擧ぐれば、

蘭溪道隆（建長寺開山）　兀菴普寧　無準の法嗣（京都西加茂正傳寺開山）
西澗子曇　石帆衍の法嗣　大休正念　石溪月の法嗣（淨智寺の開山）
無學祖元　無準の法嗣（圓覺寺開山）　鏡堂大圓　環溪一の法嗣
一山一寧　頑極孫の法嗣　石梁仁恭　寧一山の法嗣
東里會　月潭の法嗣　東明慧日　直翁擧の法嗣
靈山道隱　雪岩欽の法嗣　明極楚俊　虎岩伏の法嗣

竺仙梵仙　古林茂の法嗣　　清拙正澄　愚極惠の法嗣

東陵永璵　雲外岫の法嗣　　義翁紹仁　蘭溪の法嗣

東陵香　知別山の法嗣　　一菴一如　元叟端の法嗣（應永九年建文帝の命を奉じて來朝す）

天倫道彝　愚菴及の法嗣（應永九年一菴と同じく來聘す）　　雪軒成　秋潔の法嗣（應永十年太宗の命を奉じて來使す）

仲猷祖闡　元叟端の法嗣、天寧寺の住持（明の洪武六年、本朝應安六年、明主の命を奉じ天台の敎僧無逸、克勤と來聘す、將軍義滿、闡を留めて天龍寺に住せしめんと欲す、其命を奉ぜずして去る）

以上二十一人の中、一菴天倫雪軒仲猷の四師は國際上の使命を奉じて來朝したる者にして、餘の十七師は或は我が將軍の聘に應じ、又は自ら進んで來朝したる者と云ふべく、更に又彼の土の僧にして我國に來至し、法を我が知識に嗣ぎたるもの五人あり。

東洲道　東福寺聖一國師の法嗣　　丁堂安　同源の法嗣

不昧眞　圓覺寺開山無學祖元の法嗣　　空室空　高麗人高峯顯日の法嗣

龍室道淵　聖福寺の宏書記に嗣ぐ（天龍寺九十一代）

而して我國の禪僧にして、求法の爲め入宋したるは叡山の覺阿を始めとして、其數甚だ多し。

明菴榮西　虛菴敞の法嗣（文治三年再び入宋）　　永平道元　長翁淨の法嗣（貞治二年入宋）

圓爾辨圓　無準の法嗣(嘉禎元年入宋)
法心性西　無準の法嗣 松島
妙見道祐　無準の法嗣
天祐思順　北礀の法嗣
南浦紹明　虚堂愚の法嗣(正元元年入宋)
古先印元　中峰の法嗣(文永二年入元)
東傳正祖　笑隱訢の法嗣
中巖圓月　東陽輝の法嗣(正中二年元に入る)
愚中周及　卽休了の法嗣(歷應三年元に入る)
遠溪祖雄　中峰の法嗣
明叟省哲　中峰の法嗣
石室善玖　古林の法嗣(武州平林寺開祖)
大拙祖能　千岩の法嗣
大初啓原　傑峰愚の法嗣(彼地にて寂す)
秀崖全俊　月江印の法嗣

寒巖義尹　長翁の法嗣(文永元年再び入宋)
了然法明　無準の法嗣
心地覺心　無門關の法嗣(建長元年入宋)
無象靜照　石溪月の法嗣
樵谷惟仙　別山智の法嗣
別傳妙胤　虚谷陵の法嗣
圭堂瓊林　虚舟慶の法嗣
寰中元志　楚石琦の法嗣
無隱元晦　中峰の法嗣
復庵宗己　中峰の法嗣
月林道皎　古林の法嗣(元亨年間元に入る)
以亨得謙　見心復の法嗣
無門元選　古梅友の法嗣(康曆二年元に入る)
無得　一　無文璨の法嗣
木禪　中峰の法嗣

以上の卅二師は遠く蒼溟を越へて彼の土に入り、巨匠碩德に就て參詳功を累ね、後ち法を嗣ぎて歸朝したる者にして、此の外、神子尊の如きは聖一國師の法嗣にして無準に參じ、白雲惠曉の如きも亦聖一の嗣にして曇希叟の證明を受け、友山士偲は南山士雲の法子にして卽休了の證明を受け、業海淨は古先の嗣にして中峰本に參見したるが如きの類多しと雖も、今は入唐傳法の數に列せず。以下更に求法又は官府の使命を帶びて支那に入りたるの諸師を擧ぐれば、

神子叡尊　聖一の法嗣
藏山順空　聖一の法嗣
無我省吾　月堂規の法嗣
物外可什　大應の法嗣
直翁智侃　聖一の法嗣（一說に宋の濟大川に嗣法とあり）
古鏡明千　清拙の法嗣
中山清誾　清拙の法嗣
義空性忠　清拙の法嗣
韶（侍者）　清拙の法嗣
無關普門　聖一の法嗣（倫斷橋に法衣を受く）
白雲惠曉　聖一の法嗣
山叟惠雲　聖一の法嗣
天岸惠廣　佛國の法嗣
約翁德見　大覺の法嗣
獨芳清曇　清拙の法嗣
龕峰靈巨　清拙の法嗣
友石清奕　清拙の法嗣
無涯仁浩　鐵菴道生の法嗣

此山妙在　佛國國師の法嗣
友山士偲　南山士雲の法嗣
寂室元光　約翁德見の法嗣
可翁宗然　大應の法嗣
可菴圓惠　無外の法嗣
龍山德見　寂菴照の法嗣
以中　元に入り用章俊公に謁す
椿庭海壽　竺仙の法嗣、南堂錄に日本壽藏主と謂ふもの是れ也
無夢一清　東福寺天得菴の僧なり（宋に在ること三十年）
平田慈均　道山の法嗣
古源邵元　雙峰源の法嗣
子建淨業　中岩圓月の法嗣（元に入り彼土にて寂す）
汝霖良佐　普明の法嗣
堅中圭密　璣叟旋の法嗣（應安六年將軍の命を奉じて明に使す）
至本　歷應年間、天龍寺船を領して航海す

放牛光林　闡提の法嗣
雪村友梅　寧一山の法嗣
虎溪道壬　大燈の法嗣
鐵舟德濟　夢窓の法嗣
了菴桂梧　大疑信の法嗣（奉命入明）
孤峰覺明　法燈の法嗣
範堂令儀　（護法錄に出づ）
業海本淨　古先の法嗣
愚直師侃
別源圓旨　東明惠日の法嗣
絕海中津　夢窓の法嗣
無雲義天　鏡堂圓の法嗣
觀中中諦　夢窓の法嗣、絕海と共に明に入る
簡中原要　寶燈の三世（護法錄に出づ）
一峰玄　中岩圓月と同船にて歸朝す

文珪祖來　天授二年良懐親王の命を奉じて明に使す

約菴德久　高山の法嗣　嘉興府の圓通寺に住す

元章周郁　夢窓の法嗣、相州の人　天龍寺廿二代

碧岩璨　無文元選の傳に「至正十六年與南菩薩及璨碧岩發船東歸」とあり

岱宗祖嶽　天外の法嗣

明空　嗣承不詳

祖阿　應永八年義滿の命を以て明に使す

周護（書記）　應永十六年義持の命を奉じて朝鮮に使し大藏經を求む

鈍菴俊

正菴良因　雪村の法嗣

至道弘

象先梵超　春屋妙葩の法嗣

等聞（首座）　堅中に從つて明に入る

鳳（侍者）

用林材　天龍寺の僧、文明七年國信使に從つて入明

珠（侍者）　中岩圓月傳中に出づ

清溪通徹　夢窓の法嗣

南菩薩　徹翁義亨の俗弟

性海靈見　虎關の法嗣

祥菴梵雲　普明の法嗣（應永九年足利義滿の命を奉じて堅中密明空と明に使す）

宗猷　太初原と同船して元に入る

壽允　明德三年十二月朝鮮に使す

德林（藏主）　同上

竺芳祖裔　石梁の法嗣（建仁寺六十代）

足菴祖麟

果（藏主）　夢窓の法嗣

竹（上人）

心月圭（侍者）　文明十五年明に入る

喬年用林　絕海中津の的孫、（文明七年明に入る）

蘭隱磬

子璞（藏主）　使を奉じて明に入る
華洲（西堂）　天澤に從つて明に入る
南叟龍朔　九淵に從つて明に入る
明室梵亮　龍湫の法嗣、（絕海に從つて入明す）
圭岫久
如心中恕　天龍寺の僧なり、位は首座に止まる、（絕海に從て入明）
東伯希元（歟）博多聖福寺九十世
太年祥登　建長寺了堂の法嗣、（伯英と共に明に入る）
東岳澂昕　天龍寺慈濟院の世代、一條禪閤の庶弟也空谷明應の法嗣、自ら西山遺樵と號す
約菴德久　高山の徒、建仁寺僧
天澤宏潤（歟）佛光の法孫
昌繕　普明國師の徒、（使を奉じて明に入る）
永播（沙彌）　仲猷祖闡の歸るに從つて明に入る
周瑋（長老）　文明十五年義政の命を以て明に使す
斯立光幢　東福寺の僧、嘗て明に遊ぶ、張楷卽ち戢松の二篆字を書して授く故に齋に名く寶勝院に寂す、

翰（上人）
九淵龍賝　寶德三年允澎と共に使命を奉じて入明
東林如春　九淵に從つて明に入る
文成梵鸞　絕海の法嗣（建仁寺百廿代）
肅元壽嚴　使命を奉じて應仁元年明に入る、天龍寺百五十五代
禪佺
溫中宗純　椿夫に法を嗣ぐ、明に入る、
伯英德俊　應安年中、太年と共に明に入る、天龍寺廿六代、
權中巽
翺之惠鳳　東福寺岐陽方秀の法嗣（永享八年明に入る）
古劍妙快　夢窓の法嗣
斗南永傑　法燈派下の人、城州鳴瀧妙光寺の一代支那に入りて書名あり、
正球（首座）　文明四年義政の命を奉じて朝鮮に勸緣す
等堅（首座）　文明十八年義政の命を以て朝鮮に使し大藏經を求む、延德四年歸朝す、
永嵩（西堂）　建仁寺の僧、康正二年義政の命を以て朝鮮に使し建仁寺の起廢を勸化す、

全密（西堂）　永嵩と偕に明に入る

惠光（藏主）　同上

仲芳中正　師承を詳にせず相國寺に在て藏主寮に居る、楷書を善くす、明に入て永樂通寶の新錢文を書す、

龍室道淵　永亨四年明に使す、道淵は明人なり、卅歲にして我國に來り、筑前聖福寺にて出家し法を聖福の五代宏爲に嗣ぐ、永亨四年天龍寺に住し、尋て明に使す、明主僧錄司右覺義を授け本國に歸て天龍寺に住せしむ途中にして寂す、聖福寺九十三世

愕隱慧奯　絕海中津の法嗣、歸朝の日、仲銘克新、行中以仁偈を作て送る、

祖繼大智　洞宗の僧、詩名あり、明峰哲の法嗣

恕中中誓　物先格の法嗣、天龍寺百三代、相國寺卅三代、（永亨六年義敎の命を以て明に使す）

攸叙承倫　應永十六年頃入明、（東山養源院記に「余時賓大明以傳國命」の語あり）

南英謙宗　傑堂勝の法嗣　越後の福地寺を開く、永亨七年命を奉じて明に使す、留ること四年宣宗帝大滿行果禪師の號を賜ふ、

桂菴玄樹　應仁元年天與清啓と共に入明す

東洋允澎　寶德三年命を奉じて明に使す、招慶院の二世

紹本（居座）。應仁元年天與清啓に從つて入明

天與建祚　約翁德見の法孫

如三芳貞　寶德三年義政の命を以て明に使す

天與清啓　寬正六年義政の命を以て明に使す

古川勤　文明元年命を奉じて入明

竺芳妙茂　文明七年入明、天錫成綸の法嗣（天龍寺百七十九代）

玉英慶瑜　文明七年明に入る、招慶院の三世

湖心碩鼎　天文八年入明す、（博多聖福寺の住持）

策彥周良　天龍寺妙智院の世代　天文八年、十六年兩度明に使す

雪舟等楊　備中國藤氏の子なり、初め相國寺の春林藤公に謁し、後に建長寺の玉隱永璵に依りて嗣法す、永璵爲に雪舟の號を立て且つ漁樵齋の記を附す、寬正四年支那に遊び天童に在つて第一座となる、三年の後歸朝す、防州山口村雲谷寺に住し八十余歲にして寂す、等楊は曾て相國寺の周文に從つて畫を學び遂に丹青の妙あり、弟子に等觀秋月、等繼雪村の二子あり共に又畫を善くす、

周靑　文龜三年義澄の命を以て朝鮮に使し勘合符を求む、

月渚永乘　大永三年大内義興の命を以て明に使す、桂菴玄樹の法嗣

以上列擧の外、或は求法のため、又は國命を奉じて帆游を試みたるの諸師猶ほ少からずと雖も、今はたゞ余が寓目の一班を擧げたるに過ぎず。蓋し當時の五山禪僧と海外交通とは其の一流行たりし觀なき能はざるなり。

又禪宗にては古來より二十四流あり、是れ前に擧げたる來朝僧（蘭溪より東陵香まで）十七人の外に求法のため支那に入りたる卅二祖（榮西より木禪まで）の中より派生したる者にして、來朝僧の中、石梁恭は寧一山に嗣ぎ、東里に嗣法の弟子なし故に十三流となる。又我が求法の高僧中、叡山の覺阿は其法を傳ふと雖も、本と天台の僧徒にして歸朝の後、法を叡山に開く能はず。寒岩義尹は一説に嗣法すとの説あり、寰中、太初の二師は彼土に寂して歸らず、法心了然道祐天祐樵谷東傳圭堂無隱明叟無得秀崖の十一師は幷に嗣法の弟子なく、石室遠溪復菴月林以亭無文の六師は其兒孫ありと雖も五山の官刹に住せず、故に外游求法の師に流派あるは僅に十一にして併せて廿四流となる。表記すれば左の如し。

二十四流

明菴榮西入宋　永平道元入宋　圓爾辨圓入宋　心地覺心入宋　道隆蘭溪來朝

兀菴普寧來朝　大休正念來朝　無學祖元來朝　鏡堂大圓來朝　西磵子曇來朝
無象靜照入宋　南浦紹明入宋　一山一寧來朝　靈山道隱來朝　淸拙正澄來朝
古先印元入宋　別傳妙胤入元　明極楚俊來朝　愚中周及入元　東陵永璵來朝
竺仙梵仙來朝　中巖圓月入元　東明慧日來朝　大拙祖能入元

以上廿四流の中に於て、現に其の宗派をなす者は榮西の建仁寺に於ける、圓爾の東福寺に於けるを始めとして、蘭溪の建長寺、無學の圓覺寺、大應の妙心寺、大德寺、道元の永平寺、愚中の佛通寺等にして餘の十七流は纔に其の塔所を存するも法系の斷滅せる者多く、甚だしきは塔所すら既に廢滅に歸したる者あり。然も中古禪宗の興隆は主として此等の流派に淵源したる者なることを知らば、その廢を繼ぎ、絕を興すは法子法孫の責任にして、徒らに吳越の觀をなすべからざるなり。

抑も平安、鎌倉兩時代の文學も各其の特長を有せざるにあらざるも、五山文學の氣韻の高遠には、比すべくもあらざるなり。夫の漢詩に於ては、雪村の岷峨集、絕海の蕉堅稿、天岸の東歸集、別源の南游東歸集。文に於ては虎關の濟北集、義堂の空華集、中巖の東海一漚集、中正子、惟肖の東海瓊華集、岐陽の不二稿、彥

龍の半陶稿の如き、之を平安、鎌倉等の作家に求むるも、決して得べからざるなり。況や雪村の莊子に、中巖の楊子に私淑したる、一庵の柳文を愛し、虎關の韓文を好み、絕海の唐詩を愛吟したるが如き、豈文選香山集を寶典とせる王朝文學者の夢にだも想到する所ならんや。更に又史料に關する日錄の、尤も有益なる者あり、義堂の空華日工集、瑞溪の臥雲日件錄、季瓊以下三師の筆に成る、蔭凉軒日錄の如き、豐臣時代の西笑承兌の日記の如き、德川初期の以心崇傳の日錄の如き、當時海外交通の狀態は勿論、政治の內容を知るを得べく、又彼の南北兩朝合一の如き、我が歷史上重要なる史實に、五山僧の與つて力ありしことをも、亦知るに難からざるなり。今左に詩文、日記、抄類等の書目の梗概を錄して五山文學の一班を知らんと欲する人々の便に資せんと欲す。其の詩文として今日に傳はれるものゝ中、重なるものを擧ぐれば左の如し。

（書名）	（卷數）	（著者）
鈍鐵集（寫）	一	鐵菴道生
禪居集（版）	一	清拙正澄
東歸集（版）	一	天岸慧廣
濟北集（版）	廿	虎關師錬
岷峨集（版）	二	雪村友梅
附、雪村大和尙行道記（版）	一	大有有諸

寂室錄	（版）	二	寂室元光
龍涎集	（寫）	二	天祥一麟
鵝臭集	（寫）	一	太白眞玄
雲門一曲	（寫）	一	春屋妙葩
了幻集	（寫）	二	古劍妙快
松山集	（寫）	一	龍泉令淬
天柱集	（版）	一	竺仙梵仙
業鏡臺	（寫）	一	心華元棣
南游東歸集	（版）	二	別源圓旨
早霖集	（版）	二	夢巖祖應
無規矩集	（寫）	三	天境靈致
若木集	（寫）	一	此山妙在
東海一漚集	（版）	三	中巖圓月
隨得集	（版）	三	龍湫周澤
石屛集拾遺	（寫）	一	性海靈見
丱餘集	（寫）	三	愚中周及
閻浮集	（版）	二	鐵舟德濟
蕉堅稿	（版）	二	絕海中津
空華集	（版）	二十	義堂周信
雲溪疏稿	（寫）	一	雲溪支山
龍石稿	（寫）	一	東漸健易
雲壑猿吟	（寫）	一	惟忠通恕
繫驢橛	（寫）	三	同
懶室漫稿	（寫）	三	仲芳圓伊
南游稿	（寫）	一	愕隱慧奯
眞愚稿	（寫）	一	西胤俊承
青嶂集	（寫）	一	觀中中諦
高園集	（寫）	一	汝霖良佐
不二遺稿	（寫）	三	岐陽方秀
續翠集	（寫）	一	江西龍派

豩雲稿	（寫）	一	江西龍派
續翠疏稿	（寫）	一	同
聽雨集	（寫）	一	心田淸播
春耕文集	（寫）	一	同
蟬闇外稿	（寫）	一	瑞岩龍惺
流水集	（寫）	五	東沼周曮
駢驪四十八篇	（寫）	一	伯英德俊以下三人
桂林疏稿	（寫）	一	桂林德昌
臥雲夢語集	（寫）	一	瑞溪周鳳
竹鄕集	（寫）	一	同
臥雲稿	（寫）	一	同
善隣國寶記	（版）	三	同
狂雲集	（版）	一	一休宗純
續狂雲集	（寫）	一	同
村菴稿	（寫）	三	希世靈彥
默雲稿	（版）	一	天隱龍澤
天隱文集	（寫）	一	同
島陰漁唱集	（寫）	三	桂菴玄樹
島陰雜著	（寫）	一	同
蕉菴遺稿	（寫）	一	季弘大叔
京華集	（寫）	六	横川景三
東游集	（寫）	一	同
翰林葫蘆集	（寫）	十七	景徐周麟
湯山聯句	（版）	一	同
半陶稿	（版）	六	周興彥龍
縷氷集	（寫）	四	仁如集堯
桃隱集	（寫）	一	桃隱玄朔
竹居淸事	（寫）	二	惠鳳翺之
東海瓊華集	（寫）	四	惟肖得巖
漁菴小稿	（寫）	一	南江宗沅

鷗巣集（寫）	一	南江宗沅
四六稿（寫）	一	同
梅花無盡藏（寫）	六	萬里周九
幻雲稿（版）	一	月舟壽桂
幻雲文集（寫）	三	同
水拙手簡（寫）	一	祖溪德濬
枯木集（寫）	一	春澤永恩
角虎集（寫）	一	龍崇常菴
崇常菴文集（寫）	一	同
寅闇稿（寫）	一	同
寅闇序跋集（寫）	一	同
春和驪語（寫）	一	春和啓閭
春和絕句集（寫）	一	同
梅溪集（寫）	一	雪嶺永瑾
謙盧稿（寫）	一	同

草根集（版）	十	清巖正徹
雪樵獨唱集（寫）	一	蘭坡景茝
雪樵集（寫）	一	同
松蔭集（寫）	一	琴叔景趣
驢雪集（寫）	一	驢雪鷹灞
猶如昨夢集（寫）	三	彭叔守仙
鐵酸餡（寫）	二	同
鷄肋集（寫）	一	古桂弘稽
悅岩集（寫）	一	悅岩東悆
柳西落葉（寫）	一	繼天壽戩
蘋齋集（寫）	一	九鼎器重
倒痾集（寫）	二	英甫永雄
雄長老百首（版）	一	同
三益詩稿（寫）	一	三益永因
三益艷詞（寫）	一	同

禿尾長柄帚(寫)	八	正宗龍統
蒙菴百首(寫)	一	春莊椿
越雪集(寫)	一	正楞元方
惟高吟稿(寫)	一	惟高妙安
三脚稿(版)	一	湖心碩鼎
枯木集(寫)	一	煕春龍喜
南游詩集(寫)	一	策彦周良
城西聯句(版)	一	同
文英韓長老詩文稿(寫)	一	文英清韓
南浦文集(版)	三	文之玄昌

以上列擧の書は、其の内容多くは詩文に屬するものにして、この外、日記に關するものも亦少しとせず、今其の目を擧ぐれば

(書目)	(卷數)	(著者)
空華日工集(寫)	四	義堂周信
臥雲日件錄(寫)	二	瑞溪周鳳
蔭凉軒日錄(寫)	六十五	叔英、季瓊、龜泉、益之等、
鹿苑日錄(寫)	卅五	鹿苑僧錄累代の日件記、
蕉軒日錄(寫)	三	季弘大叔
碧山日錄(版)	五	太極藏主
壬申入明記(寫)	一	了菴桂悟
戊子入明記(寫)	一	天與清啓
初渡集(寫)	四	策彦周良
再渡集(寫)	二	同
天龍紀年考(版)	一	
渡唐方進貢物諸色注文	一	
下行價銀帳	一	
異國來翰誌	一	西笑承兌

文祿中日記	三	西笑承兌	日韓書契　一函
本光國師日記	四十六	以心崇傳	膳驢山編年考略　一
異國日記	四	同	

等にして、是等の記錄は、室町時代の政治、外交、乃至幕府と五山との關係を知るに、極めて重要なる者と謂ふべく、悉く五山禪僧の手になりたる者なり。就中、蔭凉軒日錄の如きは、相國寺の僧、季瓊眞蘂龜泉集證等が、永享七年より明應二年に涉り記錄せし者にして、當代の記錄中尤も正確なる者と見るべく。空華日工集は、義堂と足利三代義滿との關係、幷に幕府と五山との關係を知るに足り。臥雲日件錄の如き、是れ亦、義政前後の幕府と五山との事情を知るに、極めて便益あり。其他西笑崇傳、二老の日記が、是れ亦豐臣時代德川初期の政治幷に外交の內容を知るを得べく。初渡再渡の二集、幷に壬申、戊申の兩入明記は、足利の中世より末葉に於ける彼我の外交、幷に貿易の一班を知るに重要なる等、我が學界に禪益する所、實に大なる者ありと謂ふべし。

更に又、應永以後、文明を中心として盛に行はれたる儒釋の注抄類を一幹せんに其の主なるもののみにても

（書名）	（冊數卷數）	（抄錄者）
人天眼目抄	三	抄者不詳
禀明抄	一	愚中周及
色塵集（宗鏡錄抄）	三十	無極士玄
貞和集抄		一瑞中曇
東山外集抄	三	同
傳燈錄抄		椿庭海壽
碧巖抄	十	同（？）
五燈會元抄	五	蒙山智明
五燈會元抄		笑山周念
五燈會元抄		古篆周印
五燈錄抄		大有有諸
五家錄抄		抄者不明
禪儀外文抄	十二	義堂周信
東山外集抄	十	同

（書名）	（冊數卷數）	（抄錄者）
枯崖漫錄抄	二	義堂周信
百丈清規抄		萬宗中淵
百丈清規雲桃抄	四	雲章一慶 桃源瑞仙
百丈清規抄		義堂周信
百丈清規抄		雪嶺永瑾
寶翁規抄口訣	欠本二冊現存	雲章一慶
蒲室抄	二	仲芳圓伊
法華經抄	八	
蒲室抄（一名、蒲芽と云ふ）	五	村菴靈彥
蒲室疏抄		月舟壽桂
僧寶傳不二抄		岐陽方秀
碧巖不二抄	十	同
中峰廣錄不二抄	二十	同
佛語心論抄		玉崖受環

法華要抄　痴兀大慧　人天眼目抄　六　越山晦照
心經秘鍵抄　一　原古志稽　日用清規抄　二　笑雲清三（?）
六物圖抄　一　建仁寺洞春院十首座　碧巖古抄　十　大燈國師
五燈會元抄　叔英宗播　碧巖新抄　十　高雲和尚
碧巖抄　九　自悅守擇　叢林兩部抄　二　上、如月壽印　下、策彥謙齋
碧巖抄　觀中中諦　佛語心論序跋抄　三　瑞岩龍惺（?）

の數十種あり。而も是は禪林の語錄又は文集傳記類の註疏にして、半ば應永以前の著作に屬する者なるが、以下更に唐宋詩文の註疏書類を列擧するも實に左の多きを見るを得べし、

心華臆斷（杜詩抄）　心華元棣　中興禪林詩抄　一　萬里周九
前漢書抄　太岳周崇　古文眞寶抄　梅屋宗香
翰苑遺芳（東坡詩抄）　同　江湖風月集略註抄　四
江湖風月集抄　三　東海、似天雨和尚の聞書　古文眞寶抄　十三　笑雲清三
三體詩抄　義堂周信　三體詩抄　十三　雪　心素隱
同　村菴靈彥　三體詩絕句抄　六

山谷詩抄	二十	一韓智翃
四河入海（東坡抄）	百	笑雲清三
中華若木詩抄	三	如月壽印
續錦繡段抄	五	繼天壽戩
錦繡段抄	五	月舟壽桂
帳中香（山谷抄）	二十一	萬里周九
曉風集（三體詩抄）	六	同
天下白（東坡抄）	二十五	同
天馬玉津沫（東坡詩抄）		江西龍派
脞說（東坡抄）	廿五	瑞溪周鳳
史學提要抄	二	桂林德昌
蕉雨餘滴（東坡抄）		桃源瑞仙の講 一韓智翃の抄
左氏抄	十八	三要元信集註
江湖集抄		江西龍派
古文眞寶抄		桂林德昌
易略抄	七	
大學抄	一	文之玄昌
蒙求抄	七	
風雅集抄		東岳徵昕
史記抄	廿一	桃源瑞仙
百衲襖（易抄）	廿二	同
湯山聯句抄	一	一韓智翃
山谷幻雲抄	廿一	月舟壽桂
杜詩抄	二十四	雪嶺永瑾
杜詩續抄	一	抄者不詳
東坡詩抄	三十	破關子
史記世家抄	八	月舟壽桂
孝經抄	一	歇書記
青玉案抄		繼天壽戩
左傳抄	八	南禪瑞雲東長老聞書

柳文抄　六　（奥書曰、永録第八繼天首座本借用云云）

以上はたゞ當代抄類の一班を擧げたるのみにて、此の他子細に撿索すれば猶ほ二百有餘種の多きを見るを得べし。更に眼を轉じて、歴世の語錄を一瞥すれば、是れ亦今日に於て、史料として實に重要なるものあるを發明すべし。其の書目の大概を擧ぐれば

（書名）	（巻数）	（著者人名）
隆蘭溪語錄（版）	二	蘭溪道隆
寧一山語錄（版）	二	一山一寧
佛光錄（版）	七	無學祖元
佛國々師錄（版）	二	高峰顯日
聖一國師錄（版）	一	辨圓圓爾
兀菴錄（版）	一	兀菴普寧
東明錄（版）	三	東明慧日
廣智錄（版）	五	乾峰士曇
鐵菴錄（寫）	一	鐵菴道生

（書名）	（巻数）	（著者人名）
佛德錄（版）	一	元翁本元
明極錄（寫）	六	明極楚俊
清拙日本錄（寫）	四	清拙正澄
竺仙錄（寫）	一	竺仙梵仙
鏡堂錄（寫）	二	鏡堂大圓
東山錄（寫）	一	東山湛照
白雲錄（寫）	一	白雲慧曉
雙峰和尚語錄（寫）	一	雙峰宗源
佛觀禪師語錄（寫）	一	青山慈永

常光國師語錄	（寫）	四	空谷明應
太清宗渭語錄	（寫）	二	
南山士雲語錄	（寫）	一	
黃龍十世錄	（版）	二	無等以倫編
雪村錄	（寫）	二	雪村友梅
大休錄	（版）	六	大休正念
無涯和尚語錄	（寫）	一	無涯仁浩
夢窓國師語錄	（版）	二	夢窓疎石
普明國師錄	（版）	二	春屋妙葩
無文和尚錄	（版）	一	無文元選
佛燈錄	（版）	一	約翁德見
中巖和尚語錄	（寫）	二	中巖圓月
義堂和尚語錄	（版）	二	義堂周信
絕海錄	（寫）	一	絕海中津
雲溪錄	（寫）	一	雲溪支山
觀中錄	（寫）	一	觀中中諦
堆雲和尚語錄	（寫）	一	大愚性智
心田和尚語錄	（寫）	一	心田清播
雪嶺語錄	（寫）	一	雪嶺永瑾
龍湫錄	（版）	三	龍湫周澤
東漸錄	（寫）	一	東漸健易
友山錄	（寫）	三	友山士偲
蘭洲錄	（寫）	一	蘭洲良芳
仲芳和尚錄	（寫）	一	仲芳圓伊
大道和尚語錄	（版）	二	大道一以
天隱錄	（寫）	一	天隱龍澤
玉隱和尚錄	（寫）	一	玉隱永璵
瑞岩和尚錄	（寫）	三	瑞岩龍惺
江西和尚錄	（寫）	三	江西龍派
伯師錄	（寫）	一	伯師祖稜

月舟錄(寫)	三　月舟壽桂	二　春澤永恩
桂林和尙語錄(寫)	一　桂林德昌	二　東輝永杲
月泉錄(寫)	一　月泉祥洵	四　以心崇傳
春容語錄(寫)	七　春容宗恕	

春澤錄(版)	
東輝錄(寫)	
本光國師錄(寫)	

以上の語錄、之を文學の範疇に容るゝは稍ゝ隱當を缺くの嫌あるも、其の多くは碩學巨匠の手に成り、當代思潮の半面を窺ふに足るべきものあると共に、史料として重要の事實を發見すること少からざるを以て特に此に列載したる所以なり。若し夫れ是れによりて從來闇黑裡に葬られたる五山の文學が一般に紹介せられ、幸に第二の賴山陽、江村北海等の出づるの曉は、余が數旬日の閑絡索も亦啻に徒勞に歸せざるのみならず、永く沈淪したる我が中世の文學史上、枯木再び華を生ずるの感なくむばあらざるなり。

一寧一山

一山字は一寧。宋の台州の人なり。俗姓は胡氏、南宋の理宗皇帝、淳祐七年(日本後深

皇帝の寶治元年）を以て生る。資質瑞重にして氣宇神秀なり、幼にして學に就く。鄕黨其の英敏を稱せざるはなし。稍長じて郡の鴻福寺に投じ、無等融公に侍すること二年。辭して四明に往き、普光寺の處謙和尙に隨て經典を習ふ。後兩歲を踰えて剃度受具し、律部を應眞寺に聽き、台敎を延慶寺に學ぶ。幾もなくして義解の學を嫌ひ、天童山に登つて疑を簡翁居敬に質す。敬問ふて曰く一心三觀何を以て體となす。師卽ち一笑す。參堂を許されて參詳すること二年、又育王山に上つて藏叟善珍に依る。後又頑極に侍すること年あり。師一日宗要を問ふ。極曰く。我れ一法の人に與ふるなしと。師言下に契悟し、尋いで大藏の開鑰を典る。又去つて更に天台、鴈蕩の間に雲游し、當時の諸老に飽參して、敲磕酬酢益造詣を深うす。元の至元卅一年夏四明の祖印寺に住す。居ること十年にして、慶元府の補陀山に遷る。此に住持たること又六年、海岸の靈區、師の道義と並び騰る。是より先き、至元十八年、世宗忽必烈、日本を兼併せんと欲して、戰艦六萬、軍卒二十萬を發し來つて五龍山下に屯す。一夜颶風大に吹きて海軍悉く沒す、成宗の野心猶未だ歇まず、有道の名衲を遣し勸誘して、以て附庸と爲さんと欲す。大德三年、我が商船偶明州に泊す。是に於いて、師に金襴の袈裟並に妙慈弘濟の號を賜ひ、東渡

を勸む。師命の違るべからざるを見て、卽ち我が商船に搭じ、十有三日にして筑前の太宰府に著す。時に我が後伏見天皇の正安元年なり。北條貞時、師を疑ふて伊豆の修禪寺に編置す。師晝夜禪座して悠々たり。時に人あり、貞時に說て曰く、寧公は彼の國の名衲なり、その來ること抑逼に出づ。有道の士は萬物に無心なり。豈必しも區々として子卿が節を慕ふべけんや。且つ夫れ沙門は福田なり、元國に在ては元の福なり、我國に在ては我の福なりと。由つて相摸に赴かしむ。四衆隨喜して、門前市を作すに至る。この冬、十二月建長寺に住し、一住四年にして法規濟々たり。後二條天皇の乾元元年十月遷つて圓覺寺に住す。職に在ること兩載にして、又建長寺に歸る。幾くもなくして淨智寺に移る。四方の名衲鑽仰して道望愈高し。正和二年、京の南禪寺適席を虛しうす。後宇多上皇、師に命じて住持たらしむ。師後に老病を以て免退を請ふ。優詔して允さず。濟に越州に適る。上皇宸書を染め、諭示して宣く。

親書じて、特に、南禪長老一山禪師に告ぐ。朕師の道價を聞くこと久し。所以に詔を關東に下して、官差を以て、請て來るなり。一たび會晤することを得て、宛も司南の車を獲たるが如し。德を慕ひ、風を欽で、三たび靑貴を閱ぶ。而し

て、退席するに心あつて、數々行裝を理すと聞き、去年親しく寶刹に詣して之を勾ことを爲す、近者亦行李を打拚すと聽て、書を以て慰諭す。公乃ち蒲輪を屈し來つて朕が意を諾許す、料らざりき晴裏に城を出で遠く山川を涉らんとは。若し回り來つて再び、相見することを得ば、必ず自便に隨ふて病を菴中に養ひ、懷璉の古風を追ふことを許さん。何ぞ更に東關に歸ることを須ん。直饒ひ南禪の東堂に燕居して小師等をして元の如く安著せしむとも何の不可かあらん、寧ぞ又魔賊の擾あらんや。大都公長く此方を化して、廣く四衆の緣を結ぶことは、朕が願ふ所の者なり、宜しく快に歸り來るべし。(原漢文)

文保元年秋疾を示す。上皇南禪寺に幸して蹕を龜山廟塔に駐めたまふて、時々疾を問ひ給ふ。廿四日の曉、遺表を手書して廟塔に献じて曰く。

一寧頓首法皇陛下、聖駕本山に幸す、寔に緇門の觀光なり。一寧不幸にして疾に臥すこと數日、百體擧て不仁、再び龍顏を瞻ること能はず、大變時至つて幻質、將に摧んとす、僭に忠情を攄べて無庄三昧に入るのみ(原漢文)

又、偈を書して曰く『横行一世。佛祖呑氣。箭已離弦。虛空墜地』筆を於て座化す。壽七十一。上皇表を得て匆忙として寢室に幸す。趺坐儼然として生けるが如し。皇

一寧一山墨蹟

雪村友梅自畫贊

情震悼し便ち國師の號を贈り、又源有房に敕して文を作て之を祭らしむ。敕して塔を龜山廟の側に建て、奎書して「法雨」の額を賜ふ。又像贊を御製して曰く『宋地萬人傑。本朝一國師』と。其愛崇せられたること此くの如し。

一山、仁慈にして和氣人を薰ず。博覽多識にして、儒流百家の典籍より、稗官小說、鄉談俚語に至るまで讀まざる所なし、宋學の我が國に普及するに至りしも、全く師が輸導の功に歸せざるべからず。又筆翰を善くし、楮帛を持して書を需むる者、常に門に盈つ。遺著若干卷あり、就中四會の語錄は、師自ら手删して一卷となす、門人あり齎して元に入る、靈石芝古林茂中峯本の諸老各題跋を著けて之を證す。爾餘の著述は本篇の附錄に掲げたれば、今爰に錄せず。

鐵菴道生

道生字は鐵菴。其俗姓を詳かにせず。弘長二年（紀元一千九百二十二年）羽州に生まる、或は云ふ相摸國古蒼の產なりと。久しく大休正念禪師に參じて眞源を徹底し、又出でゝ諸方の知識に參ずること殆んど三十年、博く內外の典籍に涉り、又文雅あり。故

に至る所の侯伯、待つに優禮を以てす。始め、羽州の資福寺に出世す、當時の作に曰く、

鐵庵和尙　鈍鐵集

金川曉行

又得羽州消息回塞馬破曉海雲堆隨潮月與山高下喚客舟經岸往來數峋青邊螺髻卷一絲白處浪花開竹枝曲盡滄茫遠鷗鷺雙上落釣臺

感懐

西錫東歸六十一羞將衰朽對殘陽青鞋猶負百城債白髮重添昨夜霜應是堯天無遠近爲怜祖域易昏黃寸畦尺畝戰蠻觸何處乾坤安折床

次瓶梅韻

蕙死蘭枯獨振奇頃城不下二喬姿銅瓶水暖小窓

五十三年羽越客。七千里外塞雲天。功名已在莊周夢。先進還輸祖逖鞭。

次いで、筑前國聖福寺、洛の建仁寺、相州の萬壽、壽福兩寺に歴住す。包笠景の如くに從ひ大いに師道を闡く。新春の作あり

每逢春事心先動。句裏推敲吟未休。雨洒溪梅千點淚。烟籠堤柳一堆愁。

と、以て詞藻の一班を知るべし。元弘元年正月六日、壽七十にして、東山の瑞應菴に示寂す。遺偈に曰く。『罵詈佛祖。今七十年。一舌拖地。兩脚踏天。』と。勅して本源禪師と謚す。四會の語錄あり、鐵菴錄と名づく。又外集一卷あり、鈍鐵集と云ふ。

南山士雲

士雲字は南山。遠州の人。幼にして東福寺の圓爾に投じ、稍長じて諸老の門に游び、又佛源に建長寺に侍して究明する所多し。永仁六年、筑前の承天寺に住し道化關西に行はる。延慶三年東福寺に遷り繼いで鎌倉の諸刹に移り至る所、龍象を鞭笞すると三十年。元弘の初め槌拂に倦み、化門を戢めて東福の莊嚴院に退居し。建武二年十月七日寂す。壽八十二。語錄一册今猶ほ存して世に傳ふ。

清拙正澄

正澄字は清拙。支那福州連江の人なり、宋の咸淳十年正月十三日（我が文永十一年）を以つて生まる。齡四歳にして、初めて村塾に學び、敏慧人に過ぐ。年十五にして父の劉氏、師を州の報恩寺に送りて、出家せしむ。十六歳にして、具足戒を開元寺に受け、十七にして、鼓山の平楚聳に依り、僧堂に坐すること六年、發藥頗る多し。二十三歳、浙江の淨慈寺に至り、佛心和尚に侍す。二十七歳、佛心寂す。乃ち方山に從ふこと十五年。後に一錫飄然として、諸山の宗匠に參見し、尋いで、遠州の太守王本齋の聘に應じて、鷄足山に出世す。元の泰定三年、齡五十三にして本朝の請を受け、海に航して筑前國博多に著す、實に我が嘉暦元年なり。放洋中の作に曰く

六月二十二日放洋寓懷

南國山容盡。扶桑水面開。只同双舶去。不見片帆來。照膽海色苦。向人天影回。遙觀大乘象。吾道正悠哉。

鎌倉の執權北條高時、迎へて建長寺に居らしめ。次いで、淨智、圓覺の兩刹に移り、後又建長寺の禪居庵に退居す。元弘三年後醍醐天皇勅して京の建仁寺を董さしめ、建武三年、南禪寺に陞住す。暦應元年十二月、東山の禪居菴に退休して老を養ふ。翌年己卯正月十七日寂す。壽六十六。敕あり大鑑禪師と謚す。師住する所の諸刹、專ら百丈の古規を行ふ。吾が叢林の規矩、師に依りて大いに肅清す。師建仁に在るの日、無隱晦に謂つて曰く、吾が滅は當に百丈の忌辰に在るべしと。果して然り。世壽も亦百丈と同じ。故に世傳へて百丈の再來と稱す。信州の太守小笠原貞宗、師の德に歸崇し、稟戒受衣、弟子の禮を執り、信州伊賀良の莊に開善寺を建立し、師を請して開山第一世となす。且つ囑して云く、吾が子孫たる者法系を禪師に承けずんば、我子孫にあらず、又吾が家緒を嗣ぐべからず、開善を以て氏寺となすべしと。今の小笠原諸家は、貞宗に出で、其家禮等專ら此人より興ると云ふ。

西澗士曇

士曇字は西澗。宋の淳祐九年、浙東の台州路仙居に生る。弱冠にして州の廣度寺に薙染し。咸淳元年、十七歳にして石帆衍に淨慈に參じ侍香六年。適々石帆、天童に遷る、師も亦隨つて侍す。七年本邦の北條時宗、書を具して請す、石帆、法語一段を以て其の行を勉む。因て海に航して來朝、時に文永八年なり。師年二十有三、鎌倉に入るに及びて建長の蘭溪、東福の聖一、各敞軒を闢き榻を下つて相待つ。宋の德祐三年春二月、元興つて宋亡ぶ。師本邦に在る八年、弘安元年、再び元朝に回る、時に元の至元十五年なり。天童の環溪一に侍して藏鑰を司り。二十三年、台州の紫岩に出世し、居ること四載、衣を拂つて古杭に入り西錫東筇幾多年、到る所、祖風を激揚せざるはなし。次いで本邦の正安元年、北條貞時、使を遣はして師を聘し、待つに師禮を以てす、止を獲ずして再び海を逾へて來朝す。蓋し曩年と相阻つること二十有九年、師年五十一歳也。秋八月著岸、十月十九日圓覺寺に住し、叢規嚴肅、衲子勇奮す。龜山上皇、其の道譽を聞き親く綸綍を降し

て心要を咨問したまふ、師、法語一段を献ず。圓覺に在ると四年、嘉元元年建長に移り同く四年十月正觀寺に退居し、月の廿八日手書を執權に贈つて曰く『子曇。茲風火相逼。弗及面違。佛法正宗。全賴一力主盟。至囑。』又遺偈を書して寂す。壽五十八。傳燈庵に葬る。勅して大通禪師と謚し、塔を定明と號す。

明極楚俊

楚俊字は明極。支那明州慶元府の人なり。南宋の景定五年（本朝龜山帝の文永元年）に生まる。年甫めて十二、靈巖の竹窓喜和尚に投じて剃髪受衣、出家の道を學ぶ。後に辭して玉几峯に詣り横川珙に參じ、又歳時を歴て虎巖伏の道風に私淑する所あり、去つて參學すること多年。既にして金陵の奉聖寺に住して香を焚いて虎岩に嗣ぐ。繼で又瑞巖、普慈の二寺に歴住し、元の至順元年（本朝後醍醐帝の元德二年）我が書幣に應じて來朝す、時に年既に六十九。洛に入るや後醍醐天皇特に宮闕に召し、師に問ふて曰く

棧レ山航レ海得々來。和尚何以度レ生。

答て曰く
以佛法緊要處接衆。
帝曰く
正當恁麼時如何。
對て曰く
天上有星皆拱北。人間無水不朝東。

翌日中使を遣して佛日燄慧禪師の號を賜ふ。又攝津に廣嚴寺を剏建して、開山第一世たらしむ。幾もなくして相州に抵る、北條高時、請じて建長寺（廿三世）に住せしむ。時に後醍醐帝船上より還幸し、天下一統の策成る。師、卽ち賀表を奉りて曰く、

賀後醍醐院天下一統表

伏以　聖躬有慶。妖氛滅而紫氣騰々。天道好還。浮雲散而白日杲々。民思舊主。群兒戴瞻父母之慈容。神輔明君。四海忻復乾坤之定位。至尊量廣。俱無得失之懷。盛德光嚴。大啓更張之化。除苛救弊。發政施仁。金湯佛法爲先。不忘靈山之付囑。撫治國家最切。盖依唐祚之典謨。某向覲光上國之初。首趍殿陛。蒙顧問禪宗之要。親奉冕旒。久歷星霜。修練之□□。喜

覩雲漢昭回之瑞色。特伸賀表。以聲□□。但某誠惶誠恐下情無任瞻天望□□切屛營之

至

右謹具

明極元朝錄　五山版

明極和尚初住建康定林奉聖禪寺語
住金華寶屛禪寺嗣法門人大雲等編
山門我此法門含攝一切於諸境界一一堪入
因甚諸人透這此不過
佛殿法報化三佛那箇是真佛提起坐具露
據室拈主杖道得也須喫棒道不得也須喫棒
且道這棒是賞伊是罰伊咄無孔鐵槌

表聞伏希

天鑒謹表

元弘三年五月日相模州巨福山建長興國禪寺住持唐沙門某表上

居ること二載にして雲澤菴を創して靖退す。又公命に應じて再び建長寺に住す。時に山中に一檀越あり律を革めて禪となし報恩寺と名く、師を請じて開山始祖となす。建武元年詔を奉じて洛の南禪寺（十三代）に住す、時に朝廷、南禪寺を陞せて五山第一となす。寺内に少林院を創して靖居し、翌年又建仁寺（廿四世）に移る、一時の名緇英衲風を望で至る。來朝の始め、大友直菴に寄するの詩あり曰く

萬里凌波到岸時。民音國語未諳知。但聞口裏吧々說。不解言中歷々辭。大旆忽臨孤客舍。卑情方識異邦儀。通人爲報吾儂道。此是朝官一白眉。

又

客舍隣居未久時。締交往來熟相知。通心吾以筆傳舌。領意君將眼聽辭。展席尙存唐宴禮。對賓猶習漢冠儀。最忻洞曉禪中旨。話葛藤時略露眉。

復

參闡提禪向筑州。玄關一透顯宗猷。頓安達磨眉稜上。剔出文殊脚指頭。道播西乾中印土。話行東海古瀛州。夢魂應入仙家去。十二玉樓臺上游。

來朝の當時、天下爭亂、後醍醐帝位を遜れたまふ。師之を相して曰く、君亢龍の悔ありと雖も、後必ず踐祚せんと。是に因て帝祝髮せず、建武中興の後、重祚し

給ふ。是に由て群臣、師の言の違はざるを異とす。建武三年九月二十七日建仁寺の方丈に寂す。辭世の頌に曰く『七十五年。一條生鉄。大地粉碎。虛空迸裂』と。火化して爪髮を相州の雲澤、洛の少林菴等に分藏す。遺稿に明極語錄六卷あり。來朝以後の詩文をも併せてこの中に收む。

天岸慧廣

慧廣字は天岸。俗姓は伴氏。龜山天皇の文永十年（紀元千九百三十三年）武藏國比企郡に生まる。弘安八年齡十三にして鎌倉建長寺の佛光國師祖元に投じ、黃紙の度牒を受けて剃度す。尋で南都に往きて東大寺の戒壇に受戒し、歸つて佛國國師に那須の雲巖寺に依る。天性怜悧にして、禪學の外、粗ぼ文翰に通ず。既に印訣を受け出でゝ諸刹を敲き、造詣益深く、後に又圓覺寺に歸りて第一座に居る。元應元年支那の天目中峯和尙の高風を聞いて、同志數十人と筑前の太宰府に往き、翌年船を浮べて南遊す、時に年四十九。船中忽ち中峯の遷化を知り、哀一偈を打して曰く、『萬斛堅舟何所載。都盧一箇大疑團。中峰昨夜刹竿倒。打破疑團無應看』と、同船の衆唱

和す、編して巨海一滴と云ふ。即ち天目山に登り、前偈を以て寺主に呈す、主其の求道の遲きを感じ、中峰の眞蹟幷に拄杖及び幻住菴の記を以て師に與ふ。古林茂淸拙澄に謁するに、皆悉く優賞せらる。[illegible]諸靈區を踏みて徑山の正續塔を拜し、又翰林學士揚傒斯に謁して、佛光國師の塔銘を請ひ資政大夫全柱をして篆額せしむ。後再び鳳臺に回りて古林に侍す、林甚だ器重す。時に竺仙同じく席下に依り共に住す、人に語つて云く、廣首座、二六時中坐禪言句を做すを除いて、別に他の想なし、謂つべし佳衲子なりと。正中元年明極竺仙の二師を伴なひ歸朝して物外庵に寓す。元德元年春、幕命を奉じて相模の淨妙寺に住す。建武元年、足利家時(尊氏の父)相州に建忠報國寺を剏め請して開祖となす。後に又北條高時、伊豆に香山寺を建てゝ敦請す。又淨智寺の請あり、皆高臥して就かず。建武二年三月八日微疾に罹り、辭偈を書して曰く『末後一句。佛祖不知。揭翻大海。躍倒須彌。』と、又手して寂す。壽六十三。敕して佛乘禪師と諡す。語錄數卷、巨海一滴等ありしも今は泯びて世

天岸慧廣印影





に傳はらず、東歸集一冊を存するのみ。

嵩山居中

居中字は嵩山。建治三年紀元千九百三十七年遠江國吉良鄕に生る。年十九にして京に上り、興聖寺の敬翁欽を師として剪髮受具し、去つて無爲元桂堂林に參ず。堂一日人に謂て曰く、這の後生を看るに、志趣高遠なり、必ず吾宗を弘め去ることあらんと。後辭して當時の諸老に參ず、會ま一山西澗の二老來朝して、法を建長圓覺に開く、鏡堂偈を作て二師の東渡を賀す。執權北條貞時、諸山の長老に命じて之を和せしむ、師も亦預る、軸成て證を西澗に求む、澗、師の偈を閱て曰く、衆角多しと雖も、一麟足れりと。貞時乃ち師を擧げて建長に侍客たらしむ。澗の建長に遷るに及び、內記を掌る。延慶二年春、海に浮びて支那に游び、天童山に登りて東巖日に參ず。依止すること久しからずして歸朝し、一山に隨從す。文保二年再び支那に入り古林茂雲外岫の二老に謁す。後に蔣山に造る、住持曇芳忠擧げて第一座に居らしむ、職滿ちて又四方の諸老に參詳すること六年、元の至治三年秋歸朝し、

京の西禪院に住し居ること三載、愛宕山に退居す。幾もなくして檀越の請に應をて梵刹を丹後の天橋に開創す。元徳元年詔あり、衆林精舍を補はしむ、疾と稱じて起たず。元弘二年詔を奉じて南禪寺に住す。翌年辭して播州の集雲山に卜居す、未だ朞月ならざるに、天下大に亂れ、寧所するに由なし、卽ち跡を丹後の山中に移す。時に足利尊氏厚く請して建仁に住せしめ、直義と共に山に入りて法を問ふ。後に廣燈菴に退居す。久我通冬卿、朝に聞して特に大本禪師の號を賜ふ、師謙辭して受けず。康永元年相模の圓覺寺を董し、尋で建長寺に遷る。遂に瑞雲菴を圓覺寺の側に結びて寓居す。

佛涅槃の頌に云く

日圓四十九年曉。花發二千餘歲春。百囀黃鶯鹿長舌。那伽定裡是何人。

茶筅の題に云く

截斷兩頭在一節。分身百億體完全。玻璃盞裡發機用。端的擧揚趙老禪。

又、年苕箒に題して云く

大地山河一掃淸。人間何處有埃塵。全機頓息空王殿。野老謳歌却外春。

節分の夜熬豆を吃ふの作に

粒々冷灰爆一聲。年々今夜發威靈。暗中信手輕抛散。打著諸方鬼眼睛。

貞和元年二月六日病に罹り遺偈を書して曰く『生死涅槃。春行冬令。將錯就錯。仲和提景』と筆を抛つて寂す。壽六十九一説に六十二火化して京の廣燈、相の瑞雲に塔す。久我通冬、哀慕に堪へず師號を以て塔下に鎮す。師は博覽淵才、尤も偈頌に巧みなり、その外集を少林一曲と曰ふ。今は泯びて叢祉の間に傳らず、可惜哉。

虎關師錬

虎關字は師錬。俗姓は藤氏、京師の人なり。父母倶に賢行あり三子を產む、錬は其季子なり。弘安元年四月生る紀元千九百三十八年性多病なり。八歲にして三聖寺の寶覺眞空に依り、十歲にして祝髮、叡山の戒壇に禀具し、歸りて寶覺に侍す。覺常に策勵を加へず、嘗て曰く北溟の物其の自ら鵬と化するに聽すのみと。後に南禪の規菴圓、圓覺の桃溪悟等に參じ、又洛に歸り無隱一山約翁等に侍す。年二十餘にして三藏の聖教、諸家の語錄、九流百家の典籍、本朝の神書に至るまで涉獵せざるはなし。嘗て謂く、今時此方の庸流、奔波して宋に入る、是れ國の恥を遺すな

り、我れ其れ支那に航して、彼れをして國に人あるを知らしめんと。正安元年將に海に浮ばんとす、母强て之を止む。正和元年洛西嵯峨に寓居す、後伏見天皇詔して師を河東の歡喜光寺に寓せしめ、屢法要を問ひたまふ。翌年梅坡道人なる者あり、白河に濟北庵を刱めて之を招く、乃ち是に移り、室を掩ふて專ら著述を務となす。文保二年、伊勢國本覺庵に移り、嘉暦元年、三聖寺に出世す。正慶元年、伊勢西明寺の僧、敎刹を革め請して住持せしむ、衆萬人を安んず、後醍醐帝、陞けて官寺と爲す。秋九月移りて東福に住し、暦應二年光明帝、詔を下して南禪に住せしむ、入寺の日、帝、勸修寺經顯を遣して法筵に臨ましむ、上堂畢つて闕に詣で恩を謝す。帝敎外の旨を問ふ、奏對旨に稱ひ、夏五月詔して其の著す所の宗門十勝論を講せしむ。四年南禪の印を解て東福の海藏院に居す。康永元年、後村上帝、其の道價を崇ひて國師號を賜ふ。同く三年光嚴上皇地を城北の柏野に賜ふ、乃はち楞伽寺を建つ。貞和元年、足利尊氏書幣を具して建長に聘するや、辭するに老病を以てす。師久しく臂疾を患ふ、一日剃浴趺坐して大衆と永訣す、衆遺偈を乞ふ、手の不仁なるを以て字を作すこと能はず、侍僧に書せしめて曰く『勿レ啓二予手一勿レ啓二予足一脫體現成。其人如レ玉』と泊然として寂す。實に貞和二年七月廿四日な

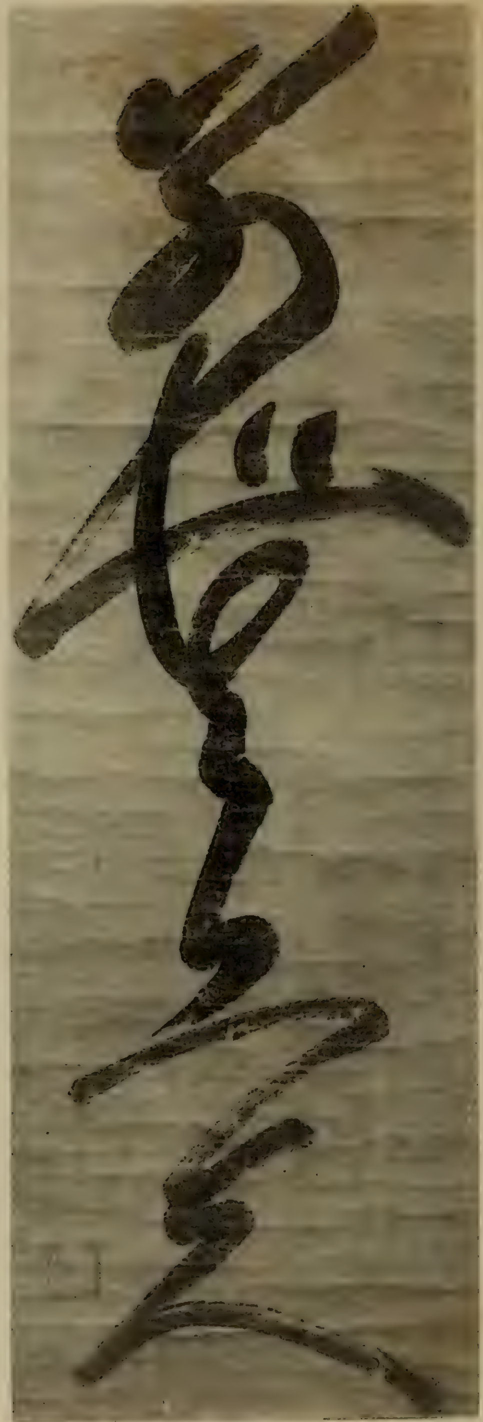
り。壽六十九、法臘六十。

嘗て衆に謂て曰く、吾れ幼より儒典を學び、顯密の旨を究む、皆所以あり。汝等唯だ心を祖宗に究めば善し、否らずんば吾が徒に非ずと。又曰く余正和以前は書を以て心を質し、正和以後は心を以て心を質すと。師又壯年の比、寧一山に建長に逢ひ儒釋古今の書を雜へて審詢す、一山因て本朝高僧の事蹟を問ふ、師記せざる者多し、一山曰く、公の博辯異域の事に渉りては章々悅ぶべし、而も本邦の事に至りて頗る應答に澁るは何ぞやと。師其言に慙ぢ且つ服す。是に於いて遍く國史並に雜記等を考へて元亨釋書三十卷を著す。其餘の述作に佛語心論十八卷十禪支錄三卷禪餘或問、禪儀外文各一卷づゝ正修論一卷禪戒論一卷聚分韻略五卷等あり。又平生雜著の文集二十卷あり濟北集と名く。

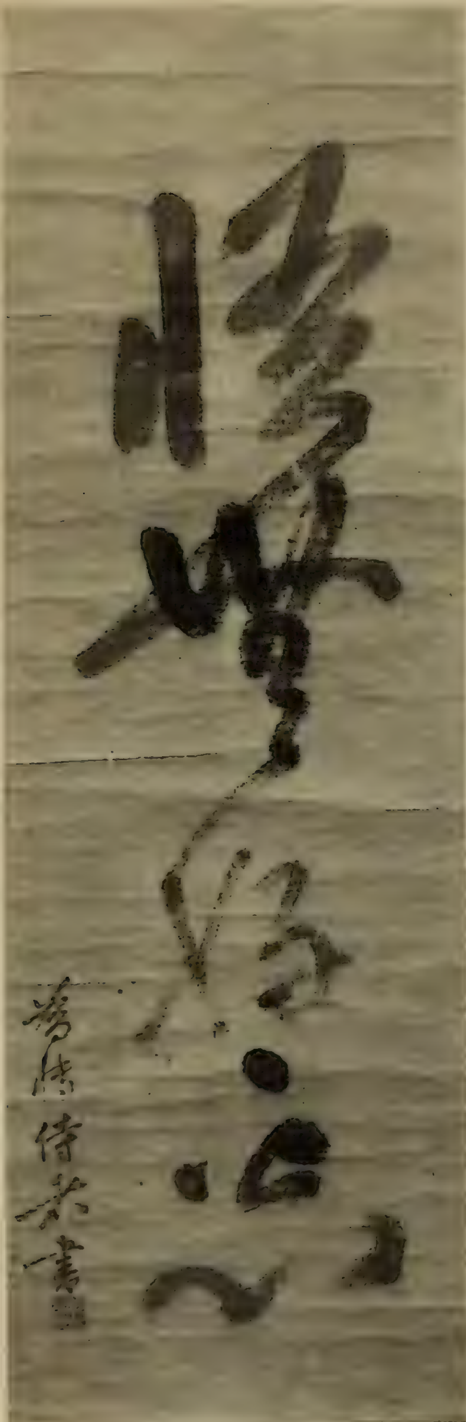
龍泉令淬

令淬字は龍泉。後醍醐帝の庶子なり。其胎に在る時、帝母を源氏の某に賜ふ、尾張國海東郡に生る。幼にして東福寺の虎關和尙に侍して童役を執る。關、各地の

諸刹に住す、皆從侍して左右を離れず、內外の典籍通曉せざるはなし。建武元年衆に濟北に首たり。帝便殿に召して宗要を問ふ、寵遇益々渥し。帝又疑難數條を寫して師に問ふ、師卽ち釋疑論を造て進奏す。貞和二年師瑞松院にあり、後村上帝詩を賜ふて海東の牡丹を求む、師御韻を次で曰く『夢破春闈塵事空。芳心一點遠相通。同根知是在二天地一。花開南山與二海東一。』蓋し帝は師の兄なればなり。虎關寂して後、海藏院に靖居し、觀應元年東福の第一座に擢でらる。職滿ちて後、楞伽圓通の二院、筑前博多の承天寺、京の萬壽寺等に主たり。その圓通に在りし時、一夜賊あり鉢を盜み去る。師偈を作つて曰く『應供隨レ身三十年。幾乾幾濕ロ朝レ天。夜來忽有レ人拏去。感得誰家猫鉢傳。』と。元亨二年虎關和尙、元亨釋書を選述して、藏函に入れんことを請ふて再度上表す而も朝議行はれず。越へて延文五年師、其の先志を繼ぎ禁闕に詣りて表奏す、敕して入藏を許さる。貞治四年十二月十一日、東福の海藏院に寂す。其生時と世壽とを詳にせず。松山集、並に海藏紀年錄の著あり、今尙ほ世に傳はる。



夢窓疎石墨蹟



絶海中津墨蹟

夢窓疎石

疎石字は夢窓。伊勢の人。建治元年を以て生誕す。十八歳、慈觀律師を禮して具足戒を受け、顯密の教を學習す。後に志を決して洛に上り建仁寺に入り無隱圓範に就て禪に參ず。又鎌倉の建長に至り、圓覺の桃溪等に依て控問勤確一日も怠らず。寧一山の來朝して建長に主たるや一見深く之を器許す。佛國の萬壽に住するや特に往いて咨決する所あり、嘉元三年夏、一日契悟、佛國の印可を得て甲州の常牧山に往き菴居人煙を遠ざかると三十里。佛國の建長に主たるや師を招いて上野の長樂寺に住せしむ、師力め辭して濃州の古溪に到り菴を卓て、又土佐に錫を飛ばし茅を縛して吸江と名け、禪座不臥聖胎を長養し、又暫らくして三浦の臥龍山に往き泊船菴を營み門を杜ち客を謝し、後に上總に之きて退耕菴を作る。正中二年、年五十一、洛の南禪席を虛ふす、後醍醐帝、特に詔を降して師を請す、疾と稱して起たず。重て朝旨あり、上意の逆ふべからざるを知り八月廿八日、寺事を領す。後ち樞府の命を以て鎌倉に至り淨智寺に住す。幾もなくして退鼓を打ち

錦屛山に歸つて瑞泉蘭若を作る。元德元年秋、圓覺寺に住し翌年に至り潛かに瑞泉に歸る。此の頃、檀越の請に應じて山を慧林に開く。元弘二年、後醍醐帝宸翰を降して師を召し、臨川寺を營み、特に夢窓國師靈龜山臨川禪寺開山初祖と賜ふ。尋いで南禪寺に再住し又臨川に歸る。曆應二年臨川を退かんとし家訓を制して以て諸門弟子を誡しむ。會々攝津の太守某、西芳敎寺を革めて師を請す、忻然として往て曰く『西山亮首座の風を慕ふこと年あり、今我願を遂ぐることを得たり』と、池を鑿り泉を引き、堤を築き柳を植へ、舟を蓮漪の上に泛べ、暑を橋亭の中に避く、湘南潭北軒窓相對し、琉璃殿の裏、四面淸漣、弊を去り廢を興して之れがために一新す。此の年八月十六日、後醍醐天皇、吉野の行宮に於て仙去したまふ、是に於て追修の道場を嵯峨に建立し天龍資聖禪寺と名く。實に曆應二年より貞和元年に至る六載の間にして山門、法堂、方丈、廊廡、厨庫全く備る。翌年退て雲居菴に居り嗣子志玄をして席を補はしむ。此の冬朝旨あり特に夢窓正覺國師と加ふ。觀應二年八月十五日、朝廷又旨あり特に手詔を賜ふて夢窓正覺心宗國師と加賜せらる、蓋し一代の寵榮なり。次で微疾を示し八月三十日怡然として寂す。僧臘六十。嗣法の弟子二十餘人。語錄の外、年譜、塔銘等あれば今玆に詳錄せず。

夢中問答三策、夢窓國師和歌一册現に存して世に流布す。若し夫れ其の詞章に至つては世既に定論あり、今更めて贅せず。

東陵永璵

永璵字は東陵。支那四明の人なり。少年にして出家し、天童山の雲外雲岫に就て曹洞の宗旨を領し、法を天寧寺に開いて學徒を接化す。常に本邦に來游せんことを志し而も渡海に由なし。至正十一年の春人あり謂て曰く、大倉縣に往く船ありと。師宿志の遂ぐるを欣び、包を整へ船に上り舟行廿三日を經て本邦の博多に着す、時に我が觀應二年なり。錫を聖福寺に留むること七十日、七月洛に入りて夢窓に謁す、窓、その遠渉を犒ふて西芳寺に延き待遇懇切なり。會々、無極志玄、天龍寺を退き、窓も亦病に臥す、茲に於て師をして天龍の住持たらしむ。時に觀應二年八月なり。翌九月卅日、夢窓、臨川寺に寂す、師文を作つて之を祭る。翌年四月詔を奉じて南禪寺世卅三に陞住し、幾もなくして寺内に西雲庵を創して靖退す。師本國に在りし時、清拙正澄と親善なり、來朝するに及び、澄既に遷化す、

師大息して已まず、因て塔銘を作る。後に又相府の命を禀けて建長寺（廿二代）に住し、一次で圓覺寺に移り大に化を關東に布く。是れより先き、師天龍寺に住るの時、一侍者あり隨ふこと兩歲、その去るに臨み一偈を餞して曰く、

四明野衲東陵永璵奉餞太淸記史老師尊友足下

我從元國來遠方。且無朋友論哀腸。語言不通衆所忌。惟喜太淸獨稱揚。聚首三載若一日。新詩妙偈交載□。大雲西□設賓主。兎甌白雪凝春香。有時散步明月下。有時吟遶蓮池行。掌予記史兩閱歲。胸襟落々多文章。忽然百來話別□。使我心識皆倉忙。問言此行欲何去。濃州別業堪龜藏。我云汝齒正壯年。宗門九鼎當力扛。彼言諸刹塵滿甑。且於何處聽升堂。不如歸去自冷坐。凜然心地淸氷霜。予聞此語甚慶快。恨身不羽徒嗟傷。時將秋仲月圓日。春包短策依淸光。

以て師が來朝當時の事情を窺ふに足るべし。貞治四年五月六日遺書を將軍幷に西雲の檀越に贈り、安詳として寂す。世壽詳ならず。その遺書の一に云く、

西雲永璵端肅申覆

大將軍樞使相公鈞座左右。永璵南國僧也。昨因大三條相公。令侃藏主請。至本朝得蒙相公與老相公作成。十年之間。四住五山。雖無補於宗敎。亦得洞上孤宗一興。感德之心不敢

忘也。玆因火風相逼。不得專去奉別。佛法萬望　相公一力護持。永璵後事西雲東雲塔所。亦望　相公主持成就。使子孫有所依倚可也。伏祈鈞亮。仍冀保社穩安。萬民是幸。

五月六日　　　　　　　　　　　　　　　西雲永璵端肅申覆

又檀越に與ふるの遺書に云く、

大慈山十方接待妙智禪寺住持永璵謹修。遺書奉別大檀越光祿相公台座左右。永璵外國來此與相公有前緣。又蒙夫人喜捨田地於西雲塔所。恩德之感不能忘也。玆因火風催逼。不能面別。專此代稟。妙智必用增添田地。可作十方洞上諸山名字。蓋天下皆臨濟宗旨。得此一宗非獨永璵成大恩賜。洞上諸祖。於大寂定中必亦歡喜。千萬々々。西雲塔所官府今有田地可緣。相公官人一力成就。臨行書不成字。伏祈台亮。更冀外護佛法主持永璵後事可也。

五月六日　　　　　　　　　　　　　　　西雲寺永璵申覆

滅後、朝廷德を崇び敕して妙應光國慧海慈濟禪師と謚す。遺稿世に傳らず、余近頃故紙堆中に詩偈數十首を拾ひ獲て、輯錄して東陵遺稿と稱し、今次活刷して後世に傳へんとす。

無極志玄

志玄字は無極。京師の人。弘安五年（紀元千九百四十二年）に生る。順德天皇四世の裔なり。幼にして願成寺の南洲海に從つて受具し、後に東寺に行きて密乘を習ふ。後又捨てゝ無爲昭元（東福七世）に從ひ、東福、圓覺等に游ぶ。本源を透得して聲譽叢林に播く。元德年間、夢窓國師、圓覺寺に住して法席鼎盛なり、而も師は氣を負ふて顧みず、一僧あり切りに慫慂して謁見せしむ、國師素より其名を聞く、故に師を上座に延き、與に語つて機契ふ。擢でゝ版首と爲す。國師再び南禪に住するや、復擧げて分坐す。貞和二年國師七所說法の衣を付して天龍の席を紹かしむ、大衆皆師の輪下に歸して化を助けて衆事を辯ず。天龍に在ること六年、宗風大いに振ふ。光明帝屢々幸して法を聽き、寵賜甚だ渥し。國師寂するに及び詔を奉じて再び天龍に住し、後に印を解きて臨川寺に退居す。文和三年南禪陞住の詔あり、老を以て辭す。延文四年春、微疾に罹り門人に謂て曰く、吾れ十六日に行かんと、期に至り衆を聚め遺誡して坐逝す。享年七十八、法臘六十六。諸徒龕を奉じて慈濟院に塔

ず、敎して佛慈禪師と謚す。師天性雄辯にして强記、機に當つて讓らず。一日華嚴の講師、雲居菴に夢窓國師に謁して宗旨を問難す。國師卽ち華嚴を引て之を證す。講師、笑て曰く經に此文なしと。時に師傍らに在りて曰く、闍梨只だ舊譯を知つて未だ新譯を知らず、國師の引く所は新譯の經に在り、自宗だも猶且つ委うせず、敎外の旨を探らんと欲すとも得べけんや。講師赧然たり。語錄あり、天龍一指といふ。又外集あり色塵集と曰ふ。兩書共に泯びて、今や叢林に傳らず。碧山日錄長祿三年九月廿一日の條に遺事一則あり、錄して補傳に充つべし。

二十一日庚子。又會洞書記。予問其祖無極禪師之行。洞曰。無極諱志玄。始爲元菴之徒。一日侍雲居師。講首楞嚴之席。師罷其講。而延玄語此事。有甚所契也。其約曰。他後若出世。名藍互出。以輔道儀云。師竟以詔命住於南禪。玄聽之從東州來。師悅之。推請之於板首。玄應宿諾也。師後開天龍而住之。不幾退。而延玄以住之。乃第二世也。因供香於先師某也。住期滿而退。舊棲之地。師再請之以住也。于時以香供師。竟爲師之的子也。一日東陵和尙。問師於病榻。師援筆書一簡。曰。後事悉囑玄老也。乃以之付東陵。曰。公後爲玄證之。又示寂之先。以七處衣（雲居住七處之衣）鎖口訣（佛光法語）付玄也。其後東陵咨雲居之徒弟曰。公等將謹某甲爲師兄哉。答曰未有所決也。東陵乃出雲居之□書以示之。徒弟覩此咸伏膺而以玄爲師兄也。

無極居於慈濟。預知入寂之日。延文二年二月十日。門人明應繪師肖像求贊。紀其尾以二月十六日也。果至其日而坐化。世以爲克知來也。洞公敦實不虛。故不疑而書之。

無象靜照

靜照字は無象。相州の人。文曆元年に生る。弱歲にして出家、洛の東福寺に在つて博く書を學ぶ。適々宋に大善知識ありと聞き、建長四年、遂に海を渡りて宋に到り徑山の石溪月に參ず、卽ち言下に省あり、因て嗣法傳衣す。同く五年、宋の寶祐二年、徑山に在て佛源禪師と石橋頌軸の序を見る。此の時、北條時賴の書至る。寶祐四年春三月、徑山を辭す。時に石溪送行の頌あり、佛光國師亦無象の號頌を記して贈る。宋の景定元年（本邦の文應元年）錫を育王山に掛け知賓の職を司る。五年秋に至り洞庭に游び頌あり曰く、

雁落洞庭蘆岸秋。楚天雲淡畫圖幽。孤舟游泳波心月。七十二峯一目收。

宋の咸淳元年（本邦文永二年）虛堂の會下を辭す、又、頌あり

十載從師幾詬拳。到頭一法不曾傳。有無句蕩家私盡。萬里空歸東海舡。

文永二年歸朝、凡そ宋にあること十四年。師、育王の知賓たりし時、朝廷より臨時の禳災祈禱あり、疏語を調べて行者に付す、宋人、師の機鋒を試みんと欲し、白紙を卷いて可漏に入る、歎辭畢つて疏を開いて之を見れば白紙のみ、師、本疏の如く之を暗誦す。潛に官人あり彼の疏本に對して之を見るに一字も差ふ所なし、卽ち疏を擎げて座に入り之を賀すといふ。因て諸大老賀頌あり以て今に傳ふ。傍に日本僧圓海なる者あり、之を聽き誓て曰く、我歸朝の日、寺を建て、師に歸し奉らんと。果して師と船を同うして歸朝し、圓海は洛に留まり、師は鎌倉に歸る。因て鎌倉の常葉に寺を建て龍華山眞際精舍と曰ふ、今の淨智寺是れなり。圓海又、洛に於て六孫王遺廟の地を買ひ一寺を創建して師を請して開堂演法せしめ平安山佛心寺と號す。文永九年相州胡桃谷の法源寺に住す。適々比叡山の衆徒、禪宗を破却せんと欲し書狀を捧げて禁裡に奏聞す。時に隆蘭溪、跡を甲州に寄せ、或は奧州の松島にあり、師之れが隨伴をなす。偏に我宗の絕へんとするを嘆じ、書一卷を作つて朝に上る、命けて興禪記といふ。是に於て常州の吉源入道善行なる者、寺を建てゝ師を請し名けて興禪寺といふ。建治三年十月、聖福寺の請を受け、又大慶寺に移り、尋いで淨智寺に上る。德治元年五月十五日化緣已に畢つて寂す、

世壽七十三、法臘五十五。興禪記の外、語錄三策印行して世に傳ふ。

不聞契聞

契聞字は不聞。武州河越の人。乾元元年十二月八日生る。幼にして鎌倉圓覺寺の東明日に侍し驅烏の屬に入り、壯に及び洛に上りて東福寺の虎關雙峰等に參じ、廿五歲、商舶に附して明に入り定海縣に着す。又台州の寧海に抵り一時の諸老に參ず。一日、錢塘江に游ぶ、官吏、師を捕へて武昌に送る、詩を舘壁に題して曰く、

孤筇遠入異鄕雲。滿耳語音渾不分。唯有簷頭深夜雨。蕭々猶似舊時聞。

會々高昌國の王子、謫せられて此州にあり、詩を讀で感あり、召見歡甚、有司に請ふて之を赦さしめ、養ふて義子となし、內宮賜ふ所の金縷の袈裟を以て師に付す。師受けて喜ぶ色なく、送つて帝師殿の講主に與ふといふ。元の文宗皇帝、梁王たりし時、金陵の潛邸より武昌に幸し帝殿に到る、適々講師在らず唯々師一人のみ。王、展べて師を拜せんとす、遽に之を避く。王、師を推して座に就かしめ

且つ曰く、朕は佛氏たる者を拜す、必ず卿を拜するに非ずと。師、止を得ずして拜を受く。時に高昌王子、召に應じて北京に赴く、師をして携へ去らんとす辭するに尋師訪道の志未だ償はざるを以て、直ちに裝を促して金陵に往き茂古林に謁し、又印月江恩斷江道竺源等の宿匠に參じ心要を咨決し、再び南屏に歸つて靈石の會下にあると三祀。此の頃、東明日和尚、書を商估に附して師の歸朝を促す、依て回舶に乘じて博多に着す。東明に侍すると數年。武州の瑞應寺に住し、四十九歲、駿河の清見寺に移り居ると四年、『四載鰲峯孤頂夢。五更樓上一聲鐘』の句あり。六十歲、足利義詮請して相州の金山寺に住せしめ、六十五歲にして圓覺寺に視篆し、六十七歲、瑞應に歸隱し新たに菴を築きて梵音と號し、萬休叟と稱す。明年、建長、席を虛ふす、師を請して之に補す、辭するに偈を以てして曰く、

老病相侵氣力衰。鳥飛西欲入崦嵫。國恩曾荷乾坤大。放待昏鐘一杵時。

六十八歲の二月十九日、疾に染みて愈へず、七月十二日に至り遺偈を書して寂す。

古先印元

印元字は古先。相州の人なり。生れて異徴あり。八歳にして桃溪悟公に投じて童役を執り、十三歳にして具足戒を受く。後に諸方の門庭を遍歷するも咸な證入する所なし、乃ち慨然として嘆じて曰く、中夏は佛法の淵藪、往いて法を求むべしと。是に於て鯨波の嶮を憚らず奮然として舶に上り、先づ無見覩和尙を天台に禮す、時に華頂峯公師に語つて曰く、汝の緣、斯にあらず、中峰本和尙、現に法を杭州の天目山に說き爐鞴正に赤く、遠近の學徒其の鍛錬を受けざるはなし、汝急に行くべしと。卽ち出でゝ中峯に見へ、左右に給侍すると多年。一旦所契あり、辭して又虛谷靈公古林茂公東嶼海公月江印公等に歷參し皆獅子兒を以て稱せらる。會々淸拙正澄、日本に入り法幢を建立せんとす。師送つて四明に至る。澄曰く、子、能く同く歸り以て我を輔佐せんやと。師曰く、雲水の縱跡、無住無心、何の不可かあらんと。卽ち衣を卷いて同く舟に上り一帆恙なく博多に着す。後に淸拙の化を四方に擧ぐるもの皆師の力なり。甲州の惠林寺に出世し辨香中峯に酬ゆ、

時に足利尊氏、京の等持教寺を革めて禪苑となす。物論、師に非ざれば衆心を壓伏する能はず、竟に師を迎へて之に主たらしむ。又俄かに洛の眞如に住し尋いで萬壽寺に移る。幾もなくして相州の淨智寺に遷り、已にして事を謝して奥州に行化す。師の俗兄藤氏、新に普應寺を建て延いて第一世となす。又關東元帥、長壽院を相州に建て復た請して開山となし、乘て圓覺寺に主たらしめ、又建長寺に移る。此の間、爲人說法、孜々として倦まず。俄に建長を退いて長壽に歸り終焉の志あり。應安七年正月廿日微恙を示し廿四日に至り起居應接常の如し、午時に至つて侍者を召して云く、時至れりと、趺坐して寂す。世壽八十、法臘六十又八。曾て語錄幷に外集を取つて火中に投じて曰く、吾祖文字を立せず心印を單傳す、此の糟粕を留めて何をか爲さんと。又、門人、師の像を畵き預め贊語を索む、乃ち一圓相を作り其上に題して曰く『妙相圓明。如々不動。觸處相逢。是何面孔』と、其方便爲人、皆此れに類す。

蒙山智明

智明字は蒙山。建治三年正月、攝津四天王寺伶官の家に生る。偶々文永の歳、元の兵我が西國を偵す。萬戸將軍あり本朝に降る、盖し儒にして將なる者なり。師を乳ふて子となし、唐音を操て詩書を授く。後來能く唐音に通ずるは是を以てなり。正應五年十六歳にして南禪寺の南院國師に侍し、潛鞭密錬遂に藏鑰を司る。正和二年南院寂す、一山尋いで主たり師又之れに侍し、又策を振ふて相州に往き明極に建長、圓覺の間に侍す。元弘元年、建長寺の宗渧寮に寓し病後閑吟十首を作る、竺仙、稿の端に序し、淸拙以下の諸老其の尾に跋す。中に『地水火風元屬我。孤燈相對眼如眉』の句あり、萬口之を傳唱す。曆應元年、足利尊氏、博多の聖福寺を以て請す、住すると六祀。康永二年冬洛に歸り翌年建仁に住し、貞和元年南禪寺に視篆し、文和元年歸雲院の正北に上乘院を搆へ以て終焉の地となす。遍照寺益性法親王の資發する所なり。貞治五年、齡九十歳。然も視聽聰明にして衰憊起居に形はれず、凡そ傳灯已下の禪錄、講せざるものなく、且つ自ら抄し且つ

筆すといふ。此年適々微恙あり而も笑語常時に異らず、八月二十日の平旦に至り遺誡十餘條を書して寂す。師、平居、手に卷を釋てず、內外の典籍涉獵せざるはなし。語錄の外、外集に雲泉集ありしも今は泯びて傳らず、洵に惜むべし。

雪村友梅

友梅字は雪村。自ら幻空と號す。越後國白鳥鄉の人なり。俗姓は源氏、父は一宮、母は信州の人、須田氏といふ。正應三年紀元千九百五十年庚寅を以て誕る。甫め童子を以て寧一山を禮す。時に三童室に入る、特に三友を取りて之れに名づく、友松、友竹は時に顯れず、師は其季子にして友梅と稱す。一山に侍すること數年、後に京に入りて登壇受具、錫を建仁寺に留む。參禪の餘暇、指を外典に染め特に莊子に通ず。是より先き本邦の衲子、多くは南洵して大事を決す。師年纔かに十八、一錫飄然として海に泛び、當代の名宿を參叩し、後に湖の道場山に登り、叔平隆和尙に執侍す、命ずるに大藏の關鑰を以てせらる。是より先元の世宗日本を略せんと欲して利あらず、仁宗起つに及びて其志を繼ぎ、罪往々我が無辜の僧に及ぶ。

師も亦日本人たるの故を以て、捕へられて霅川の獄に下り鞠勘萬端、水火倏治、其苦實に想像の外にあり時に作あり『百城煙水一枝筇。觸目無非是幻空。童子曾參無厭足。鑊頭爐炭起淸風。』と、從容自若毫も迫らず。叔平隆公、師に連坐して竟に獄中に亡ず。刑官刃を師に加ふるに及びて、怡然として懼れず、佛光の偈を朗誦して曰く『乾坤無地卓孤筇。且喜人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。』と。刑吏感伏して朝に奏す。繇りて免るゝことを得たり、時に元の皇慶二年二月七日師時に廿四歲なり。然も尙獄中に在ること三年、旣にして朝議あり、西蜀に逐竄せらる。師の志毫も屈せず、道函嶺を出でゝ、秦隴を度り、崧華を望み、賦詠して其志を見はす。西川に至るに及で大官左儒道を問ふ者多し。十年の後大赦あり召し還され、長安に留まること三歲、忽ち故國の老親夢に入りて歸思大いに動く、茂古林偈を送て云く。

道人海外來。歷涉幾艱阻。不唯凌驚濤。益遭世網苦。脫身萬死中。尅志在佛祖。有如百鍊金。遶指色可觀。玄機歷落如轉丸。迅手展托胡爲難。萬人叢中獨穎拔。一鏃解破三重關。重來兩臉鐵色黑。欲話三生緣未得。茶甌放下便言歸。爲省慈親走匍匐。床頭主丈不假擧。一句臨岐聽吾語。水宿風飡宜善爲。扶桑夜半金烏飛。

時に元の泰定四年我朝後醍醐帝の嘉暦二年に當るの九月なり。會々文宗卽位す、詔して京兆の翠微寺を董さしめ、又、特に寶覺眞空禪師の號を賜ふ。師また叔平和尚の獄中に死せしことを悼み、肖像を畫て之を祀る。天暦元年夏、商船に乘じて歸朝す時に歳四十。博多に着してより母の所在を知らず、相模に赴かんとして由比ヶ濱を過ぐ、偶々乘る所の馬蹶き泥濘の中に陷墜す、路傍の一家に入りて水を索めて衣を澣ふ、舍に一老嫗あり出でゝ泣く、師其由を問ふ、嫗の曰く我れに二子あり皆出家し、一子は遠く游んで歸らず、我れ其の季子を待つこと已に久しと。感激することある者の如し、師熟ら之を視れば乃ち母なり。子母相見て、悲喜交も集り、涕倶に下ると云ふ。師嘗て一金を藏す、母に遺らんと欲し、饑寒を忍で漫りに使用せず、乃ち出して以て母に献ず。此歳母に侍して孝養誠を竭くす、喜慰想ふべし。元德二年春、鎌倉に抵り、建長の玉雲庵に寓す。偶々信州の慈雲寺席を空うす、郡守金刺氏、師の歸朝を喜び懇請す。四月九日入寺、大鑑竺仙の二老疏を製す。元弘元年神氏爲頼、德雲寺を山部に創めて開山始祖となす。翌年小串範秀、道風を欽て京師の西禪寺に住せしめ、建武元年の夏、豐後の萬壽を董す。三年の後、印を解きて山城國栂尾に隱遯す、偶作に曰く『豈料山茶延俗客白雲還逐馬蹄塵』と、延

元二年播州の大守赤松圓心、法雲寺を赤穗郡に鼎建し、請して開祖となす、暦應二年宸翰の寺額を賜ふ。同く四年南朝興國二年足利尊氏、朝命を奉じ京の萬壽を以て請す、上書して再三之を辭す。赤松圓心、自ら往きて闔を排して入り、具さに尊氏の意を陳ぶ、師已むを得ずして應ず。居ること纔かに周歲にして、建仁の淸住院に退居す。貞和元年二月十八日、朝命を奉じ建仁寺に住す、宗風大に振ふ。時に虎關和尙、疾で東福の海藏院にあり、十二月六日師特に往て之を問ふ、延接して談笑、互に賓主を忘ると云ふ。關遂に寂す、人傳へ云ふ、火化して舍利を現ずと、師笑ふて曰く、練公すら尙ほ縱迹を存するやと。貞和二年十一月、香資を石梁和尙の塔所に寄せて曰く、法弟久しからずして行脚せん、兄忌來る十八日に在り、我れ此香を供する能はず、預め忌齋を修せば可なりと。二十日其の齋に臨みて楞嚴咒を誦す、第五會に至りて燒香大展、起立未だ定まらざるに、忽ち右手不仁なり、朝廷醫藥を進む、皆之を却く。十二月二日黎明に紙筆を呼び左手を以て偈を書す、字畫成らず、憤然として筆を牀上に擲ち、墨痕未だ乾かざるに、泊然として寂す、壽五十七。翌年赤松圓心、特に塔院を建仁寺に創し、朝命を以て院を大龍と扁し、塔を幻空と曰ふ。語錄二卷の外、又南遊の集あり岷峨集と云ふ、共に

世に行はる。

寂室元光

元光字は寂室。俗姓は藤氏、美作國高田の人なり。正應三年紀元千九百五十年五月十五日誕生す。幼にして京に上り、東福寺七世の無爲昭元に就て學ぶ。年十五にして落髪受具し、近江國田上の鄕に寓す。幾もなくして關東に赴き、約翁德儉に參ず。其の至るの日、儉云く昨夜諸聖降臨して、光山河を照すと夢む、卽ち名づくるに元光を以てす。德治二年約翁、公命に膺つて建仁寺に視篆す、命じて湯藥に侍せしむ。延慶二年約翁鎌倉に歸る、師をして金澤の慧雲律師に從つて毘尼を學ばしむ、三月を經て其梗概を盡す。又東里會寧一山東明日の三大老に謁して鉗鎚を受く。元應二年歲三十一、可翁然鈍庵俊等と海に浮びて元に入り、直ちに天目山に登つて中峰和尙に謁し、また元叟端古林茂清拙澄等の尊宿に參じ其推獎を蒙る。元の泰定三年我が嘉曆元年歸帆を理め、長州の濱に着し、三角に寓す、備後國古津平居士永德寺を創して延請す。觀應元年七月、長勝寺の命あれども辭して就かず、歸朝以

來二十五年の間、備作二州の間に韜晦す。觀應二年攝津の福巖に移り、又江州の往生、美濃の東禪、甲斐の棲雲に轉ず。延文五年江州の太守佐々木氏賴、奥島、雷溪の二境を獻ず、師其の雷溪の僻邃なるを見て梵居を締營す、山下の吏民競ひ至りて役を執り、幾もなくして殿堂寶閣林際に聳立す、卽ち永源寺と號す。是の時に當つて四來の龍象來り從ふ者二萬餘人、皆巖に倚り茅を縛して安居す。光明帝屢々手詔を賜ふて其德を旌はす、又建長、萬壽の請あるも赴かず、光明帝詔して大龍の住持たらしむ。當時、春屋妙葩中巖圓月等書を寄せて其出世を趣かす、師堅く辭して就かず。帝復た手詔を賜ふて法要を問ふ、師復奏するに法常禪師馬大師に問ふの因緣を以てす、帝見て忻然たり。曾て僧に示すの偈あり曰く『個事明々呈似君。不須特地策功勳。風和日暖黃鸝囀。春在花梢已十分』と、其文藻の婉雅なること概ね此の如し。貞治六年九月一日、諸子を含空臺に集め、遺誡訖つて偈を書して曰く『屋後靑山。檻前流水。鶴林雙趺。熊耳隻履。又是空華結空子。』と、筆を投じて卽ち化す、壽七十八、法臘六十三。諡を賜ふて圓應禪師といふ。遺稿に寂室錄二策あり、盛に世に流布す。

天境靈致

靈致字は天境。正應四年（紀元千九百五十一年）甲斐國に誕生す。早歳より剃染して澄清拙に師事し、參禪の餘暇、博く百家の書を涉獵し文雅を以て名を四方に馳す。後諸山の宗匠を叩きて、淸要の高職に歷任し、康永三年十二月、肥後の淨土寺に住し、貞和二年九月、豐の萬壽寺に遷る。文和三年京の萬壽寺を董し、延文五年八月十八日、建仁寺に遷る。貞治五年の四月八日、南禪に陞住す、應安元年四月二十七日、播州の法雲寺に移り、同く六年十月二十八日、天龍の主席を董す。幾もなくして病を以て退院を求む、述懷に曰く

老病相依氣力疲。半輪斜日迫崦嵫。餘生願得寬閒野。座待双睛落地時。

と。永和二年再び建仁寺に住するや、隨從雲の如くに集まる。晚にまた南禪の善住庵に退隱す。一日微疾に罹る、自ら入壙の語を作り、又徒弟に示して曰く

寓止人間八十秋。因緣旣盡賦歸休。諸徒日夜勤精進。穩密田園在脚頭。

と、終に奄然として寂す、時に康曆三年（永德元年に當る）十一月十八日なり、壽九十一。師常に風雅を喜び病床に坐すと雖も客と句を聯ぬ、其の句調の高格遙かに文字の

性を離る。閑中の卽事に云く、

茅簷人不到。物外寄幽懷。乞得隣庵米。炊成午鼎齋。二三升筧水。一兩束山柴。淡處知眞味。吾生亦有涯。

と。建武三年丙子の秋、序侍者嘆世の韻に和して云く

擾々干戈競殺傷。烏鳶飛下啄人腸。城中破壁塵空翳。火後遺基土轉黃。短晷頻催秋已晩。寒風稍動露爲霜。間居不用憂衣服。盡日南軒坐向陽。

師は又、居常玄慧法印と相交り斯文を商量す、法印の寂するや之を悼むの偈あり、

胸懸五典與三墳。問難叢中慣解紛。今日祠堂風冷淡。簡編惟見舊香芸。

遺稿あり無規矩といふ、今猶ほ世に傳ふ。

遠溪祖雄

祖雄字は遠溪。丹波氷上郡佐治庄の人、弘安九年に生る。嘉元二年十九歲にして出家、後に天目中峰の爐韛正に赤ふして當時の龍象輻輳すと聞き、憤然として越海の志を發し、德治元年海に航して直に天目山に上り國師に謁し、晨昏參扣、孜

々として研究すること七年。元の皇慶二年八月三日、宗門の大戒、血脈圖等を受け、本邦の正和五年、慈母の手澤、杭州に達するを觀て、中峯の會下を辭し大洋に浮びて歸朝す。嘉曆元年、丹波の故里に一院を創し、山を瑞岩と號し、寺を高源と名づく。四衆憧々として往來し周歲ならずして叢規一新す。康永三年六月廿七日寂す。行年五十有九、僧臘四十一、師、平常、徒に示して曰く、我が身後に於て肖像を畫くべからず牌を安ずべからずと。今に至つて其の言の如くすといふ。

大道一以

一以字は大道。俗姓は平氏、雲州島根の人なり。伏見天皇の正應五年紀元千九百五十二年に生る。生れて頭に肉角あり、掌に印紋あり、父母以爲く不祥なりと、之を野に棄つ。十一にして州の枕木山に投じて落髮し、十四歲にして叡山の戒壇に登る。此頃禪風を慕ふて備前の光明院に詣り藏山に謁して侍すること久しく、又建長寺に往いて約翁德儉に參じ、洛に歸りて南禪寺の規庵祖圓、一山一寧、東福寺の南山士雲、乾峰士曇に歷侍す。乾峰の南禪に遷るや從遊して高職に任じ、虎關の東福

に住するや招いて後版の職に充て、關の南禪寺に移るや尋いで參侍す、後に游方に倦みて永明院に閑居す。康永元年五月夢窓、請して阿州の補陀寺に住せしむ、時に淡州の太守細川氏春安國寺を建てゝ請す、居ること三載にして七堂備はる、國人此に於て始めて禪宗あることを知るに至れり。文和二年六月、一條相公の鈞旨を以て東福の普門院に住す。師少より薄福にして至る所の住院修持に遑あらず、故に『道慚無力撐門戶。漏屋尋常持傘眠』の句あり。此年十一月衣を卷て淡州の故居に歸る。延文元年正月再び一條相公の鈞命に應じて東福寺二十八代に住し、尋で南禪寺三十二代に陞住す。後に又老を謝して、淡州に回る。自照の讃に曰く『年々幾度冬。白髮雪重々。要レ見老僧頂。先登二富士峰一』應安三年二月二十六日寂す。辭世に曰く『無生一曲調滿虛空。陽春白雪碧雲淸風』壽七十九。遺稿あり赤肉團といふ。今時法社の間に傳へて得る者之を珍とす。滅後、性海靈見、師の頂相に讃して曰く

師諱一以。自號大道。與二正光老人一同爲永明之上足也。四坐道場。令行遐邇。化緣既畢。示偈西歸。盖報壽七十九歲也。徒弟一雅藏主。繪其頂相請レ讃。々曰。

師之相兮不可描貌。師之行兮不可追陪。依俙當戶半輪月。彷彿推蓬一朶梅。

永和乙卯九月下澣　　東福住持靈見九拜

石室善玖

善玖字は石室。筑前の人。弱冠にして出家、求法の志あり、文保二年、古先印元、無涯仁浩等と船を同うして元國に入り、金陵に古林茂に謁し遂に印可を受け、又東西に遊歷して一時碩匠の門を叩かざるはなし。嘉曆の初年、諸友と偕に歸朝し、梵竺仙に南禪に隨ふ。會々中巖圓月、萬壽寺を退く、洛下の故舊、師をして之れが席を補はしむ。尋いで天龍に遷り又鎌倉の圓覺寺に轉ず。義堂、絕海時に鹿山にあり友從相親むと久し、應安元年建長寺に移り住持六年、金龍菴を寺內に構へて禪誦一日も怠らず、永和元年檀越の請に應じて武州岩槻の平林寺に遷り開山第一世となる。康應元年九月廿五日平林に寂す、壽九十六。嘗て人のために鄂隱の號を頌して云く、

舞棹呈橈古渡舟。隨波逐浪老巖頭。無端辣手打婆子。驚起白沙灘上鷗。

語錄一策、現に傳へて內閣文庫にあり。師、元に在りし時、行中仁と親善なり。行中の嘗て謙上人を送る偈に『若逢石室頻通問。歲晚南湖學種蓮』の語あり、彼の

士に重んぜられたるを知るべし。

竺仙梵仙

梵仙字は竺仙。來々禪子と號す。支那明州象山の人なり。俗姓は徐氏、母は歐陽氏、十歳にして呉興の資福寺に投じ、別流源和尚に從ひて驅烏となる。十八歳杭州の靈山に行きて瑞雲隱公に依る。師、機鋒穎脱にして英氣人に迫る、去つて諸老を叩きて皆優賞を蒙る、而も疑情未だ破れざるを以て憂となす。一日僧あり、來つて古林茂和尚の鉗鎚辛辣なることを語る、卽ち晝夜兼行して至れば、林の陞座に遇ふ、一たび擧唱を聞いて、心地頓に寥廓たり、林忽ち參堂を許す。元の天曆二年（我が元德元年）夏徑山に登る、明極楚俊の日本に赴くに會ふて倶に海に浮び、我が元德元年六月を以て太宰府に着す。北條高時明極を請して建長に住せしめ、師を第一座に居らしむ。正慶元年高時、淨妙寺を以て師を請す、卽ち之れに移る。足利尊氏直義相共に師を敬し、其亡母のために私第に請して供薦虛日なし。建武元年淨智寺に主となり尊氏金三萬、地三千畝を給す。又明年天柱山の故址を施して

哭勝選居士三七日拈香語

維丁亥十二月十四日愚中比丘周及恭惟
是月十日如夢如覺忽見一介僧重告以
四十餘年檀越
金山嚴選先公禪定門[illegible]
月二十四日而[illegible]仍遺屬布袋畫像
表生死不忘之[illegible]音嗚呼哀哉痛哉
八十五歲老[illegible]何堪世哉雖破碎枯[illegible]
已盡獲[illegible]僅存未絕之故扶起病[illegible]
為[illegible]謹[illegible]法[illegible]此香仰答
常[illegible]之遠那論諸易諸佛一心
戒識
與頼金剛真大士伏願
圓[illegible]嚴選先公禪定之門出生入死本[illegible]
新[illegible]中心不動進[illegible]無邊利益一切[illegible]
[illegible]

愚中周及墨蹟

[illegible]



維摩像　梵仙盡圓月贊

楞伽院を刱む。又筑前の太守大友氏の息大友氏泰、三浦の無量寺を以つて請して開山第一世となす。曆應元年淨智寺を退き、同く四年南禪に陞住す。康永二年五月、花園上皇臨幸あり、御前に對して玄談刻を移す。皇情大に悦び、饌を賜ふて曰く、師其れ加飡せよと。明年又楞伽院を南禪に刱めて退居す。貞和二年春、移て眞如寺に住し、翌年又建長に轉ず。その至る所叢規典禮、後學をして古道の顏色を見せしむ。師又相形に妙あり、百丈淸規抄に其の事を錄して曰く、

日本デハ竺仙和尙ノヨク地形ヲ御覽シタソ、南禪寺ノ長老ティラシモタ時ハ法性寺ノ塔ノ影カウチ覆タヲ、人カ其影ヲ踏テ往來スルホトニ寺カ衰微セウストテ鎖春亭ノ池ヲ堀テ影ヲウツサシモタソ、其ノ時、池ヲホルニ竺仙自身、モッコヲ御モチアツタソ、云々。（百丈淸規抄の一）

後に淨智寺に再住し、貞和四年五月疾に罹り秋に至りて楞伽院に回る。足利義詮、房州正木の田莊、若干を捨て以て其塔を贍す。七月十六日遺偈を書し泊然として逝去す、壽五十七、法臘三十九。語錄並に外集あり、曰く來々禪子集、曰く天柱集、曰く住時集、曰く東渡集。又注疏あり、圓覺經注といふ。外に宗門千字文、損益淸規、續叢林公論等あり。

別源圓旨

圓旨字は別源。別に縦性と號す。永仁二年（紀元千九百五十四年）十月越前に生る。七歳にして郡の佛種寺竹菴圭に投じて童行となり、十六にして鬀具す。一日菴云く、汝が氣字を觀るに、久しく村院に留まるべからず、頃ろ東明日和尙、遠く元國より來りて、盛に曹洞の宗風を關東に唱ふ、亟かに往て之を拜せよと。師、命を受けて鎌倉の圓覺に往き、一見して參堂を許さる。左右に侍すると十二年の久しきに涉りて師資契投ず。元應二年商船に乘じて元に游び、一時の英衲に謁し、一挨一撥、機に當つて讓らず。元に在ること十一年、後醍醐天皇の元德二年歸朝して圓覺の後版に任じ又建長の前版に轉ず。康永の初め越前に歸る。太守朝倉金吾、弘祥寺を建て請して開山第一世となす。尋いで鎭西壽勝寺の請に赴き、翌年弘祥に還る。又檀越あり善應、吉祥の二寺を創し、師をして第一世たらしむ。文和三年東陵永嶼南禪寺に住するや書を送りて師を招く、師、偈を作つて善應寺の可休亭に題して曰く、

孤松三尺竹三竿。招我時々來倚欄、細雨隨風斜入座。輕煙籠日薄遮山。沙田千畝牛馬痩。
野水一溪鷗鷺閑。自笑可休休未得。浮雲出岫幾時還。

南禪に抵りて分座說法す。延文二年台命を承けて眞如寺を董し、翌年脚疾を患て越に歸る。貞治三年足利義詮、建仁を以て請す、公命辭すべからず、疾を力めて之れに應ず、其上堂に曰く『籬邊不見白衣客。爭得淵明興味濃。今日黃花應笑我。白頭扶病上東山。』と。此の年九月十一日病革まる。十月一日將軍義詮、使を遣して慰問し、越の弘祥寺を陞せて位諸山に列す其道義を重んずるなり。同く八日諸弟子相集り建仁の東偏に就て、塔基を築き、菴を構へて洞春と曰ふ。輿して塔所に至る、師環視して曰く、此地千光祖師入定の處に鄰す、老僧此に歸す、亦幸ならずやと。中巖圓月を招きて後事を委し、十日の三更に至り衣を更へ偈を書して寂す。壽七十一、法臘五十六。

師は生來偈頌に巧にして夙に作者を以て鳴る。南游、東歸の二集あり、今尚ほ叢林の間に喧傳す。

月林道皎

道皎字は月林。自ら獨歩叟又は圓明叟と稱し、晩に西山暮翁と稱す。俗姓は源氏、久我中納言具房の子なり。永仁元年を以て生る。幼にして越前に之き平泉寺に入りて童子となり經教を學び能く大義に通ず。十六歳、具足戒を受け相州に往いて高峰顯日に依止す、時に高峰建長に在るの日なり。高峰の寂後、洛に上り大德の宗峰妙超に師事す。時に、花園上皇荐りに師を召して心要を咨訣し給ふ、師が提唱專ら聖慮に契ふ。元亨二年元國に入り金陵の保寧に上り古林茂に謁す、時に齡三十歳なり、古林の提誨を受くると凡そ八年、深く其の旨に契ひ法衣を以て師に付す。卽ち本邦の元德二年、元の至順元年本朝に歸り茅菴を城西に結び妙峰と扁す。又、一敎僧あり師に投じて服を更め、其の管する所の寺を以て師を迎へて遷らしむ、梅津の長福寺是れなり。山を大梅と云ひ、雲堂を枯木と稱し、方丈、寢室を淸居といふ。淸居は金陵に在りし日、所居に扁するの號なり。花園太上皇、愈々崇尙し或は皇居に延ひて入室し、或は山に入つて參控せらる。是を以て當時

の英衲、公卿大夫、耳目之れがために新たなり。又、塔院を長福寺の北に起して清凉といふ。休居の像を安し、後に其の右に師の像を安す。觀應二年二月十三日微疾を感じ、十八日葉室相公疾を問ひ、次日、久我相國疾を問ふ。廿五日に至り安坐して寂す、閱世五十九年。滅後七年敕して普光大幢國師の號を賜ふ。語錄、外集今傳らず惜むべし。

仁浩無涯

仁浩字は無涯。俗姓を詳にせず。永仁二年甲午（紀元千九百五十四年）を以つて羽州に生る。始め鐵菴道生の門に入りて受具し、參究年を累ぬ。廿八歲の元亨元年辛酉、海に帆して南游、姑蘇、金陵の間に名宿に參叩し、貞和元年乙酉、五十二歲にして歸朝す。菊頌軸の序に曰く

元朝。至治。泰定間。余作吳頭楚尾之游。久留於金陵石頭古城。城北關下有店、以白下爲名焉。四十余處之館廳。每廳置盆菊、而有四十余樣之花、面以青黃等色。而外加以淡白雪白幷淺紅濃紅之種々艷色重々萬狀矣。蓋以春花幷秋草之凡卉。應無可比者也、（下略）

又、金峰柏が秋思詩軸の序に曰く

余。辛酉秋。打海舶遠入古宋之地。自發足於東雪豆。徑到西虎丘暫留。正淸秋時也。斯寺正在姑蘇臺畔。介松江之上。水光接一碧。千里是乃水月之國也。與鄕友二三子嘯風。夜榻邀月矮窓各賦言懷下略云々

其の山水圖の讃に云く

天台雁蕩之前。岷峨衡岳之後。達觀逸游者。不語而知有。其の一

樹蒼々而落翠。山岩々而露骨。下有一扁舟。撑出中天月。其の二

雪竹の題に云く

嚼雪嚥氷。拔俗淸雅。方外友林下人。可以語此。

雨竹の頌に云く

雨聲可听。垂葉可摘。無李氏非長公。不足議矣。

無涯錄一策、讀み去り誦じ來れは當年元朝の風物を窺ふべく、又當時南渡僧の韻事を知るに足るものあり。歸朝の後、貞和四年十月肥前國淨土寺に住し、文和二年相模國東勝寺に轉じ、延文三年四月京の建仁寺に陞住す。宗風大に擧る。延文四年正月五日、病で建仁寺の永源菴に寂す、壽六十六。塔を寶明と云ふ。語錄あ

り、無涯錄と稱す。

此山妙在

妙在字は此山。俗姓を詳にせず。信濃の人なり。永仁四年紀元千九百五十六年を以て生る。初め佛國々師を拜して出家し、參究年久ふして佛國記莂を授く。卽ち辭し去つて孤錫飄然、海に浮びて元に入り、名師の間に遊ぶ。其の石霜に在るや藏經の鑰を典る。歸朝の後、衆に天龍に首となり西芳寺に住す。當時別傳妙胤と道交最も深し、胤嘗て師に與ふるの書に曰く

拜復。此山西堂尊屬和尚侍几。妙胤昨蒙尊訪。甚荷不少。屢欲一來面控謝悃。然而日々冗々。弗獲如願。悵恨而已。日外偶過西芳因便欲詣盛寮得聽高論。而正値開浴之辰。恐成下接之勞。不敢造前。于今怏々于懷。正景仰之中。忽辱珍翰。喜慰不可量。就審。從天龍擁。法體勝常。欣羨々々。某衰朽之餘。只宜投老巖谷。以聊殘生。不意妄以斗筲之器。叨居高大之位。素滄之誚安可免乎。況是應酬百於弗克少安。無補宗教。而徒役身心。可笑々々。但吾尊屬和尚。待時一於奮起補天之力。扶持法門。是吾至禱至祝也。卽日酷暑礫石。千萬順持保愛。

以道自重。不宣。

某頓首拜復。

以て其の推重せられたるを知るべし。尋いで建仁、南禪、圓覺の三道場に歷住し、隨處雲衲㵎として門堀に盈つ。晩年にして圓覺の定正菴に退居し、永和二年の冬病に罹り、門弟子に遺誡して曰く、正統菴の可翁悅公を請して喪を爲し、以て荼毘の儀を行へ、諸山に牌を入れ幷に祭典を設くべからずと。翌三年正月十二日偈を書して曰く『寶弄一生過。彌天罪犯多。今朝機轉位。無佛亦無魔』と。筆を置て坐化す、壽八十二。火浴の後、靈骨を分ちて本菴並に建仁の十如是院に塔す。遺稿に若木集一册あり、今猶ほ世に傳ふ。

中巖圓月

圓月字は中巖。相模國鎌倉の人。姓は平氏。土屋氏の一族、桓武帝の遠孫なり。正安二年庚子（紀元千九百六十年）を以て生る。八歲にして州の壽福寺に入りて僧童となり、十二歲にして道慧大德に隨ふて孝經、論語等を讀む。翌年梓山律師に依りて剪髮稟具し、顯密を三寶院に學び、每日寶篋印塔を遶ること一匝し、弘法大師の像を

禮すること百拜、率ね以て常となす。後に大事因緣あることを知り、棄てゝ寛通圓和尙に就て諸家の語錄を閱讀し又約翁儉、嶮崖安、雲屋輪の三大老に謁し所偈を呈して稱せらる。尋いで圓覺寺に掛錫し、東明慧日を師として、叩くに洞上の宗風を以てす。文保二年筑前の太宰府に到り、支那に遊ばんとす、太守許さず洛に上つて萬壽の絕崖禪師の會下に寓す。此冬越前の永平寺に行き、義雲禪師に參じ五位の訣を得たり。元應元年鎌倉に歸りて東明を覲し、淨妙寺の玉山璇公、建長寺の靈山道隱の二老に參ず。元亨の初め、京に上り關提具公に相見して、錫を南禪に掛く、時に虎關國師、濟北庵に退きて、元亨釋書を撰し、門を閉ぢて客を謝す、然も獨り師の參拜を許す。年を越へて建長に還りて箋翰を掌る。正中元年の秋、遂に海に浮びて元に遊ぶ、時に年二十五、卽ち元の泰定二年なり。此冬雪竇に寓し、鄕友の金珠侍者に値ふて偕に吳興に往て、天寧の靈石芝公に參じ、明年保寧の古林茂に見へ冬に至り雲巖の濟川楫に謁す。時に龍山德見單位に在り、故鄕の俊傑なるを以て日に就て參敲す。四年の夏吳門に往き、絕際和尙に參じて甚だ溫顧を受け、又淨慈の雪巖欽に謁して所見を語る。天曆元年東陽輝和尙に百丈山に參ず、命あり記室を司る。時に天下師表閣を建つ、師その棟梁の文を作る。

此冬東陽和尙密に眞訣を付授す、卽ち去つて諸刹に游び、路を廬阜に借て龍巖、柏巖の二尊宿を訪ひ又鄱湖を過りて永福の竺田心に見ゆ、其到る所の諸老、待つに高賓を以てす。三年の春吳門に歸るや絕際既に寂す、乃ち文を作りて之を祭り又、途を淞上に轉じて宗廓を東菴の挹翠樓に訪ふ。廓、其の韻に和して贈て云く、

中巖書記自雄峰來。訪余淞上。出示行藁。因得擊節盡讀。茲其還千尺山中也。輙奉和首篇。以寫盛藏之意。○中巖詩曰。蟹步先聞窗外竹。夢敲寒枕響踈々。紅雞宿處知灰死。白易生時覺室虛。群玉府開通遠近。假銀城賣莫乘除。高樓厭厭誰知冷。肯管寒江獨釣漁。

讀盡汗牛充棟書。道情純熟世情踈。希蹤積翠質而野。方駕鐔津實若虛。靈境山河居掌握。玄兎滄海在庭除。上方孤絕遊人少。冷眼庸庸竭澤漁。

此の夏玄一峰と日本の舶に駕して、孤帆恙なく筑前の博多に着す、時に我が元弘二年なり。暫らく州の顯孝寺に寓し、翌年京に入り南禪寺の明極楚俊に依りて蒙堂に歸す。建武二年鎌倉に旋る、東明和尙建長に主たり、命じて後版に充つ。同く四年梵仙淨智寺に住す、師を請して前堂に居らしむ。曆應二年江州の太守大友貞宗、上野國利根の鄕に吉祥寺を剏め請して開堂せしむ、卽ち一瓣の香を薰して東陽の法乳に酬ふ。尋で又下總の龍澤寺、相州の萬壽寺、豐前の萬壽寺、京の

萬壽寺等に歴住す。師曾て書を東陽に上て曰く『法席を拜別して一紀週し、渴仰の勤なる言に在らず、鯨波萬里鴻飛の能く到る所に非ず、故に尺書爾く容易に之を通ずる事を得ず、憶ふ昔親く法誨に沐して旨味を開發す、恩酬る所以を知らず、但だ侍奉の日久からざるを以て恨と爲すのみ、古人洪覺範の師を離るゝこと早きが故に、未だ其道を盡さずと議す、惟ふに覺範の才すら此くの如し、何ぞ況や其才に非ざるをや、之れを思ふて臍を噬むのみ、玆に商船發すれども、自ら座下に赴きて親く區々の情を陳るに由なし』云々と、東陽、其の回信の尾に記して云く、

大雄峯頂寃憎會。大罵分離不㆑計㆑年。近日人從㆓海東㆒到。前秋書向㆓陝西㆒傳。陽昇㆓大地㆒無㆓偏照㆒。月至㆓中天㆒分外圓。萬里由來同㆓咫尺㆒。杖林山下竹筋鞭。

以て其の師資道誼の厚きを知るべし。延文六年菴を萬壽の東北隅に搆め、牓して妙喜世界といふ（後に建仁寺内に移す）康安二年詔を奉じて建仁寺に住し、尋で等持建長の兩刹を董す、其住する所の名藍衲客悉く影附す。又江州の龍興寺に住す、時に南禪天龍等の請あり、皆老を以て固辭す。應安七年の冬微恙あり、天授元年正月八日病愈革まる侍僧末後の句を乞ふ、師聲を勵まし叱して曰く、吾れ平生口過少からず、今尙ほ何をか言はんと。午時に至て安詳として寂す、壽七十六。門人遺命を

守り全身を奉じて建仁の妙喜世界に塔す。師常に徒に謂て曰く、吾祖大慧禪師七十五にして順世す、老僧も亦年を同うして行かんと。是歳立春正月九日に屬す、其言を食まざることを知るべし。後ち數月を經て、朝廷謚を賜ふて佛種慧濟禪師と曰ふ。語錄あり、又文集數卷あり名けて東海一漚集と云ふ。外に雜集あり文明軒雜談といふ。師、知見縱横、辯才無礙、蓋し當時叢林の白眉なり。歸朝の翌年原民、原僧の二篇を作りて後醍醐帝に上り、且つ附するに一篇の表を以てす、其時弊を救はんとするの念太だ切なりしを見るべし。其の文に云く、

上二建武天子一表

十一月。傳法臣僧圓月。謹昧死上書

皇帝陛下。竊以。王者受二禪於人一者。襲二其統一而沿レ之。得二命於天一者。通二其變一而革レ之。受二禪於人一者。如二夏后殷周之克繼者一也。得二命於天一者。湯於レ桀武王伐レ紂之類皆是也。故易曰。湯武革レ命順二乎天一而應二於人一。豈止湯武而已。漢高祖世祖。唐太宗。宋太祖皆其人也。文中子曰。通其變天下無弊法。執二其方一天下無善教。教化法度之成。三代莫二之踰一者。然久則其法又弊。法弊則革レ之所以通二其變一也。所以夏法弊則殷湯革レ之。殷法弊則周武革レ之。周之衰時法之弊甚。時衛鞅入レ秦變二其法一。行レ之朞年。國都言二新法之不一レ便者。以二千數一。於レ是太子犯レ法。鞅言法之不レ行自レ

上犯之。太子君嗣也。不可施刑。輙刑其傅。黥其師。明日秦人皆趍令。行之十年。秦國道不拾遺。山無盜賊。民勇於公戰。怯於私鬪。然後其初言不便者。來言令便也。然而秦得天下之後。弗能知復變其法之理。故弊甚極至暴酷。是以二世而亡。漢繼秦之後七十餘歲。雖欲理之無可奈何。法出而奸生。令下而詐起。則無佗。以秦之遺民。習俗薄惡民人抵冒也。是故董仲舒對策曰。如以湯止湯湯愈甚。琴瑟不調甚者。必解而更張之。乃可鼓也。爲政而不行甚者。必變而更化之。乃可理也。仲舒之言至矣哉。恭惟　陛下。明繼周文德承　神武興王除覇。柔遠包荒。高天之下。厚地之上。莫不賓順。非聰明叡知。得命於天者。孰能與於此哉。然今天下爲關東所伯。百數十歲之弊積焉。斯民漸漬惡俗。貪饕諛誑。故自朝至暮獄訟滿庭。又沙上偶語者亦多矣。乃與漢繼秦之時偶相同也。更化則可理之時也。天地之初。臣不得而知之。　陛下。除覇興王。不乃萬世鴻業之始。固在斯時乎。舊法之弊可不革耶。臣是山林一芥。宜當與草木共朽也。世之利害非所交關。然所以區區是言。不避煩瀆之誅者何也。實爲天下不爲身也。實爲萬世不爲于一時名望之榮也。伏望　陛下。感董生王通之至言而收臣懇誠。則天下萬世之幸矣。臣不自揆。輙撰原民原僧二篇。以塵　叡覽。如有可采。敕有司施行之。謹奉書以聞。某誠惶誠恐。

其の識見の卓絶せる當時の搢紳緇流中亦之に及ぶものあらざるべく、その凡を拔

き群を越ふるの資、蓋し當代の第一人を以て目すべきなり。

耕叟仙原

仙原字は耕叟。始め聖一國師に依て高職に歴任し、後に鎌倉に往て、佛光國師無學祖元に謁し、歸り來つて法を聖一に嗣ぎ、筑前の承天寺に出世す。時に肥後の檀越某、竹林寺を剏め、師を延て開山始祖となす。學徒雲集して門閭に充つ。雪に因て衆に示すの偈十六首あり其一に云く、

寥々宇宙絕遮欄。佛國三千一目間。誰把須彌藏芥子。白乾坤外更無山。

櫻に因て示衆の偈に云く、

新洗仙粧開笑唇。風光豈比上林春。人間却作衆香國。滿地鋪成萬斛銀。

と、又聽雨の詩三首あり、

殘經讀罷至中宵。獨坐寥々萬慮銷。聞亦忘時聲亦絕。不知窓外有芭蕉。
雲鎖千山水浸天。簷頭滴々耳無眠。客思添得孤蓬底。人在瀟湘江上船。
青々燈火送殘宵。一室蕭然萬慮銷。少却耳根妨□點。不須窓外種芭蕉。

其終所と年月を詳にせず。遺稿一篇あり、世に傳ふ。

大本良中

良中字は大本。丱歳にして建長寺の東林に投じて出家し、嗣承の後、海に浮びて明に入り諸山の老宿に參ず、時に本邦貞和の初年なり。歸朝の後、上野の長樂寺、信州の善應寺等に住し應安元年十一月寂す、世壽四十四。平素義堂周信と深交を訂し、才も亦相拮抗する所ありしといふ。『待故人歸』の題に曰く、

天涯不見故人回。風雨孤村落盡梅。羨殺沙頭双白鳥。暫時飛去又飛來。

秀涯全俊

俗姓は神氏、信州高井縣の人なり。建長寺鈍夫の法嗣。曾て元國に入り大儒宋景濂と文を以て交はる。一日景濂詩を寄せて曰く、

自從離却日東國。隨影江南濕翠間。滿地落花春似海。不知猶憶五龍山。

と。師之れに和して云く、

一回錯買離鄕船。抹過鯨波五里間。震旦扶桑無異土。參方飽看浙中山。

其の生沒年代を詳にせず。

鈍夫全快

其の本貫を詳にせず。相州鎌倉淨智寺の靈岩照に就て嗣法し、元國に入りて靈隱寺の印月江に參ずると久し。歸朝の後、建長寺に住し又華光菴を創して靖退老を養へり。至德元年八月十四日寂す、壽七十六。

默翁妙誠

妙誠字は默翁。肥前の產なり。正安二年（紀元千九百六十年）生る。八歲京に上り、夢窓國師の室に投ず。齡十二にして薙髮受具し、隨從稍々久し。國師一日竹篦を拈して曰く、汝作麼生か會す、師茫然として答ふる能はず。是れより激發淬礪して、一朝

契得す。後に命せられて後版に居り、後出でゝ阿波の寶陀寺に主となり、尋で洛西の臨川寺に遷るに及び、光嚴上皇宮に召して法を問ふ、奏對旨に稱ふ。晩に華藏院に靖退し、至德元年壽七十四歳を以て寂す。法臘六十一。備中の華藏寺、河州の妙禪寺は實に師が草創の地なり。外集一卷あり禪餘吟と曰ふ。今は泯びて世に傳らず。

古源邵元

邵元字は古源。越前の人なり。初め京に入り東福寺の南山士雲に隷す。嘉曆元年、海に浮びて元に入り直ちに雪峯に上つて樵隱逸に見へ偈を書して之を呈す。又天台に往き觀無見に見ゆ、語未だ通せざるを以て書して來意を述ぶ。次で義斷崖に天目山に見へ、又龍山に在つて千岩長公に就いて法語を求む。師大都に在る時、朝旨あり僧百員を選で禁中に大藏經を轉せしむ、師之れに預る。後に水月に居して大藏を披閱し、初めて般若を讀む。寤寐の間、忽ち母を夢む。因て燃指して誓て曰く、吾が母存するときんば身心安康なるべし、亡きときんば樂土に超昇せん。

と歸朝すれば其の母既に亡し、乃ち夢む所の年月にあり。貞和三年本邦に歸る。雙峯源に嗣ぎ大聖寺に出世す、將軍又等持寺を以て請し、九條丞相延いて東福寺を補せしむ。幾もなくして赤松氏播州の法雲寺を以て請す。後に洛に歸り東福の南泉菴に靖退し、貞治三年十一月十一日寂す、享年七十。嘗て自ら如幻道人と號し又物外子と稱す。遺稿傳らず惜むべし。

蘭洲良芳

良芳字は蘭洲。嘉元三年（紀元千九百六十五年）若狹國に生る。俗姓は橘氏、諸兄大臣の胤なり。幼にして州の敎寺に落髮し、齡志學に及びて、京に上り寧一山の道望を聞て南禪寺に抵る。時に國師既に入寂す、乃ち無相眞公に謁す。後に辭して叡山に登り、横川に菴居すること三年、又愛宕山に登て茅を誅して禪坐す。建武三年、夢窓疎石再び南禪に住す、師を招て內史に侍せしむ。攝津溝抗の檀越、善法顯性の二寺を建て師を請して居らしむ。貞和元年、雪村友梅、建仁寺に住す、師趨謁して入室す、雪村顧みて之を記して曰く、今日の掛搭は、他日此の山の長老、我門

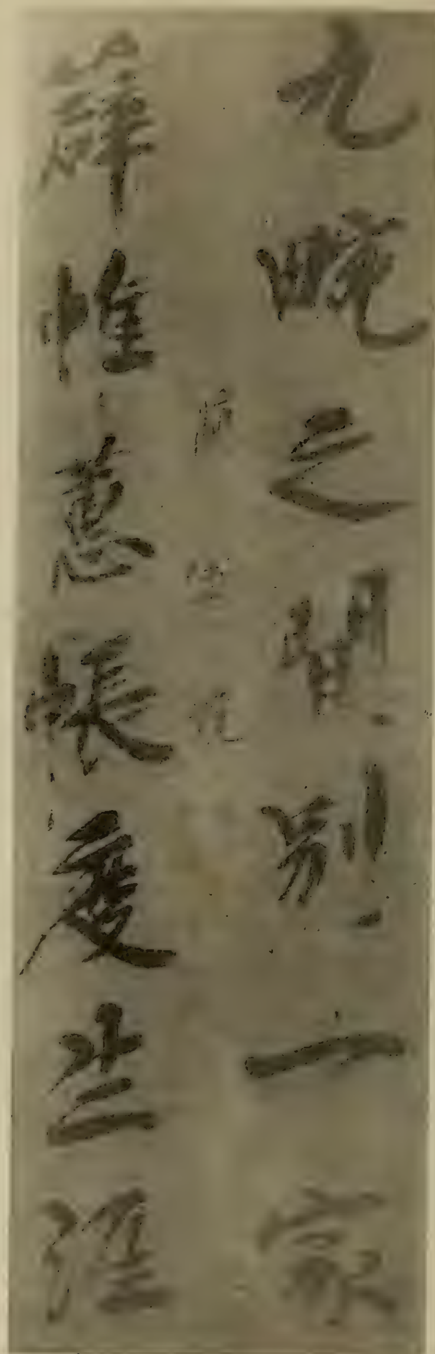
頼ることありと。師時に四十一。雪村の滅後退て大龍の塔を守り文和元年出でゝ甲州の淨居寺を董し、又京に歸る。播州の太守赤松則祐、雪村に參じて師と昵交なり、大義金剛の二寺を刱め演法の場となす。正和十六年楠正儀細川淸氏等軍を率て京に入る、足利義詮亂を江州の武佐寺に避く、嗣子義滿時に歲僅に四歲、左右の人抱持して夜に乘じて師の室に投じて衣中に匿す、師躬ら輿に乘り晝夜疾く馳せて播州白旗城に入り、虎口の厄を免る、明年義詮京に歸りて師に謝し、特に攝津濱田の莊を割て永く衆供に充つ。正平十七年相模の萬壽寺に住し、同二十年京の萬壽寺を領し、天授四年建仁寺に住す、果して雪村の記する所に應ず。同く六年詔を奉じて南禪寺に住す、止まること三年にして建仁の淸住院に投老す。元中元年十二月六日沐浴淨衣、三更に至り偈を書して曰く『須彌倒卓。虛空消亡。日面月面。常時寂光』と、筆を擲て長逝す壽八十。敕して弘宗定智禪師と謚す。語錄一卷あり、今尙叢林の間に傳はる。

春屋妙葩

妙葩字は春屋。所居の室に扁じて芥室といひ、又自ら不輕子と稱す。甲州の人なり。俗姓は平氏、應長元年紀元千九百七十一年十二月二十二日生る。夢窓國師の族姪なり。文保元年七歲、美濃の虎溪山に投じて夢窓に隨侍し。嘉曆元年默翁妙誠と偕に京に上り南禪寺に入り夢窓に就て下髮受衣す。爾來、元翁本元、竺仙梵仙、淸拙正澄等の諸老に參じ、貞和元年天龍寺に歸りて又夢窓に侍し印可を得たり。延文二年足利尊氏の請を受けて等持寺に住し、康安元年臨川寺に遷る。貞治の初年、光嚴帝屢々召して法要を問ひ、禮遇甚だ篤し、特に國師の號を賜ふ。師之を辭して云く、先師夢窓、道三朝に契ふて徽號を賜ふ、然して佛光、佛國の二祖未だ此號を蒙らず、願くば二師に諡を賜はゞ、恩此れより大なるはなし某何ぞ敢て之に當らんやと。帝之を善とし、重て佛光に諡して圓滿常照と曰ひ、佛國に應供廣濟と賜ふ。細川賴之、阿波に光勝院を剏めて師を請す。時に國中大に饑へ餓殍途に滿つ、師粥を作つて之を救ふ、太守以下隨喜して効ふといふ。三年伏見の大光明寺に遷り、此冬天龍寺に住す。明の怒中慍、楚石琦、了菴欲、西白金の諸老、遙に師の道風を聞て偈頌を寄す。同く六年高麗の國信使金龍等以下二十五人來る、一行師の道望を聞て弟子の禮を執る。應安二年南禪寺新に三門を建つるや、疆域延

春屋妙葩畫像





虎關國師墨蹟

暦寺の舊封を犯す、山徒等公府に訴へて南禪の伽藍を毀たんとす、師卽ち管領細川賴之に語て云く、南禪は朝家重崇の道場なり、然るに山徒の嗷訴を恣せしむ、啻に吾宗の陵夷のみに非ず、抑も亦國家の威信に關す、公之を思へど。賴之諾して果さず、山徒遂に日吉の神輿を奉じて京に入る、是に於て南禪の一衆衣を拂ふて分散し、師も亦退て丹後の雲門菴に隱る。偶作七首あり其の一に曰く、

丹陽山下雲門寺。白髮倚ㇾ窓江雪深。水鳥浮沈雲斷續。漁舟載得一閑心。

江湖の衲子其の跡を慕ひ來つて請益する者多く、頌古酬酢頗る多し、門人編して雲門一曲といふ、會々明國の使臣趙秩、可庸、朱本等來朝して周防の大内氏に館す、卽ち之れが序跋を作る。又天寧の闡仲猷、死官の勤無逸等使命を奉じて同く來朝して博多にあり、師の聲望を聞て物を贈りて信意を表す。師丹後にあること十年、康暦元年春、南禪に住す、翌年徽號を賜ふて智覺普明國師といふ。將軍義滿も亦敕を奉じて僧錄の事を總轄せしむ、本邦の此職實に師に權輿す。當時東福寺の疆界、豪貴の者の爲に侵さるゝこと久し、師又官に告げて舊に復し、且つ開山祖塔と殿堂との溪磵に長橋を架して往來に便し、扁して通天といふ、一時の諸老偈を作て之を賀す。又普門院を升せて十刹となす、東福の一衆議して師を請す、

三請すれども就かず、此時將軍義滿、城西に寶幢寺を建てゝ請し、又寺後に小院を搆て壽塔所となす、其地白鹿の來るあるを以て鹿王と牓す。永德元年鎌倉の執權足利氏滿、建長寺を以て請す行かず、明年又天龍寺に住す。至德元年義滿、萬年山相國寺を建てゝ請す、先師夢窓を追請して第一世となす。嘉慶元年の秋微恙に罹り移て鹿王院に退居し、翌年八月十二日夜に衆と永訣し且つ遺偈を書して曰く『幻生七十有餘年。了卻先師未了緣。一國黃金收拾去。古帆高掛合同船』と、黎明に寂す、壽七十八。全身を鹿王の塔に窆す。遺稿に普明錄二卷、雲門一曲一卷あり、今時猶ほ叢林に傳ふ。師は又當時盛に宋元の語錄詩集等を飜刻し、學者に利便を與へ文化を催進たるの功洵に少々にあらざるなり。滅後十八年を經て、門人、其の語錄を携へて明に入り、序跋を當時の宿老に需む。僧錄司姚廣孝之れが序を作り、天童の希顏其の後に跋す、錄して未だ見ざる人の價に資す。

普明國師語錄序　　姚廣孝

大丈夫秉慧劍。般若鋒兮金剛焰。非但能摧外道心。早曾落却天魔膽。日本智覺普明國師。其握吹毛劍。三住名藍。爲一切人。全生全殺。外道天魔。奔走乞命。可謂出世之大丈夫也哉。其門人芳通業甲來中國。持師語錄。過余請題。遂焚香再四展玩。愛其軒釘截鐵語不留礙。不能無

擊節歎賞。而書以歸諸。永樂二年。歳在甲申。冬十月二十又六日。資善大夫太子少師兼堤調僧錄司事姚廣孝書。

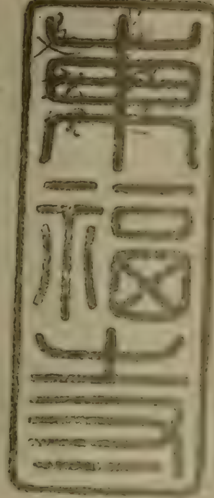
同　跋

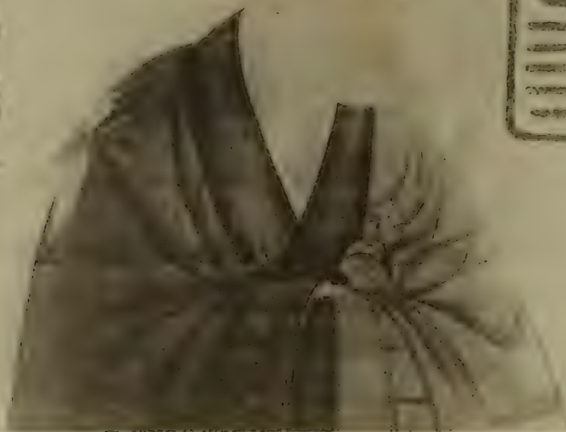
智覺普明國師春屋和尚三會語錄。其徒芳通茉甲航海持示。拜而求跋。余懸燈而讀之。譬若轉圜石於千仞之坂。了無阻滯。亦猶春行大地。那有痕跡。吁誠所謂善說法要者也。觀者當具眼。切不可作文字會。永樂三年。蒼龍集旃蒙作噩。正月二十又五日。太白名山天童禪寺悉叟希顏。

性海靈見

靈見字は性海。自ら不還子と號す。室を昨夢又は煨芋といひ、樓を明月と云ふ。俗姓は橘氏、其本貫は信州横山鄉の人なり。兄弟十二人あり、師は其の第十なり。幼にして聰敏七歳家塾に入り、記問應酬群兒に穎脫す。十一歳髮を相州の建長寺に薙り、十九歳にして建仁寺の澄淸拙に參じて、侍客の職を司り服侍すること數年、華嚴の頓を南都に探り、正觀の圓を北嶺に學ぶ。氣性高邁にして解路に止らず、時人之を稱す。時に虎關國師南禪寺に住す、師其道風を慕ひ、移りて之に隨ふ、晨昏參請、懈怠の氣なし。康永二年の秋、商船に錫を移して支那に遊び、冬

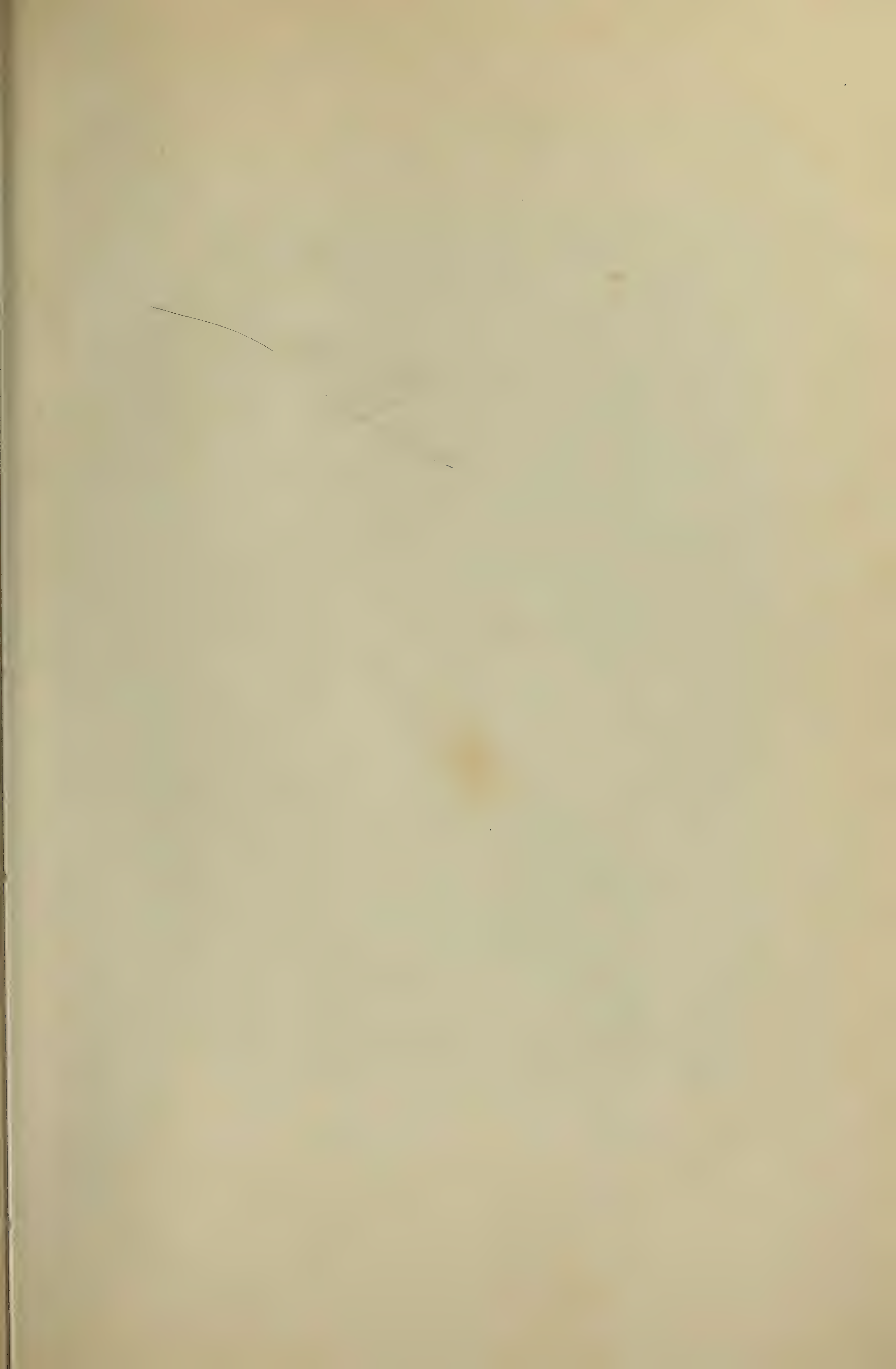
十月明州の漢江に達す、時に順宗の至正二年なり。浙西浙東湖南湖北の勝槩その足跡を印せざる所なく、尋で嘉興府天寧寺に抵り、空海念に謁して機々投合し、一夏藏典を掌る、兼て月江印即休了竺源遠に見へ至る所優賞せらる。一日謂らく吾師虎關に踰る者なしと、遂に徑山の正續院に詣して虎關の牌を入れ、至正十一年三月纜を解き、五月本邦の博多に著す、時に我が觀應二年なり。是より先き貞和二年、虎關寂す、預め一伽梨を以て弟子龍泉令淬に遺命して云く、『靈見首座、夙に佛祖の淵源に徹し後來宗門の棟梁と成り去らん、唯恨らくは海雲萬里信謫を絕す、宜く歸撓着岸の日を待て此伽梨を授けよ』と。泉、師の歸朝を聞き、之を泉南に迎へ、遺命を述べて之を附す。師旣に囑を受けて丹州の藥山深處に隱る、彼の地の信士法を聽きて悅服する者多く寺を創して延請す、長壽禪居興勝の如き共に鬱然として一方の精籃たり。貞治二年冬、將軍足利義詮、招いて三聖寺に住せしむ、休休の歌を作て之を辭す。義詮其の風韻嚴旨に感じ三たび鈞命を下す、此に於て発るゝ能はず。遂に京に上り、直ちに三聖に住す。應安元年足利義滿、師をして東福寺を董さしむ、相尋で天龍南禪に陞る。前後天龍の席を董すること二回、南禪の席を領すること三會。三聖海藏の兩刹刼灰の後、殿堂門廡數年ならず





兆殿司畫像

性海靈見贊



して本に復する者は皆師の力なり。晩に東福寺の退耕菴に閑居し、江湖飽參の者に非ざるよりは妄りに門を開かず。永德三年、足利義滿、聘するに常在光寺を以てす、堅く辭すれども許さず、住すること僅に二年にして退耕に歸る。應永三年春三月微疾を感じ二十一日の午時諸徒に遺誡して造塔を許さず、歸壙の後、靑松一株を植ゑて以て塔樣を表すべしと。紙筆を索め、偈を書して奄然として化し去る。壽八十二、法臘七十二。塔を淸淨覺地と扁す。滅後卅二年、足利義持兆殿司に命じて塔を營ましめ、影像を彫刻して、龕中に安置せしむ。遺著あり石屛集といふ。本集十卷拾遺二卷ありしも、既に泯びて今存する所拾遺十餘紙に過ぎず。碧山日錄、長祿四年閏九月廿三日の條に、遺事一則を錄す、其の當世に重んぜられたるを觀るべし。云く、

廿三日丙寅。過永安。謝以昨日退耕之西堂。號旭昇者在座。余因問其祖性海禪師之事迹。粗謂其一二。曰。師入唐遍歷諸老之門。于時金山愚仲爲同伴。共硏究己事。愚仲參了郎休而得其印可也。師每怏々曰。我參大唐諸師莫如日本鍊和尙者。歸朝遂嗣於海藏。大山相公。欽仰道風。累聘住諸大刹。而三住南禪。師每受辭命。固辭之。至再三請。則欲晦韜於山藪。相國知之。遣使曰。和尙若辭之。海藏一門之徒。固禁止畿內之往徠云。師乃幡然曰。以老朽

豈帶累數人乎。乃出勤其住。相公大悦。晩年甚嫌赴於宮齋。屏居退耕。幣衣垢面。不剪爪髪。髪鬚鬖々宛然一丈夫也。應永甲戌之歳。相國新寺災。相公憂之。止接謁之禮。絶海和尚自忖曰。若非性海之至。相公不出接。遂扣退耕告之。師諾焉曰。余有出乃可剪髪鬚。海先告之於相公。々曰。師若去其頂髪。猶富士峰頂無雪也。海又密告相公之意。師散髪幣衣而至。相公喜之出迎。乃出金襴五條衣奉之。又乞師所着之衣着之。師慰問新寺之厄。且説法要移刻而退。公自是出接諸寺名宿列廷大臣及諸大夫也。師又一日以相公之請。遊於西芳精舍前池。有舟師先乘焉。相公手執師之履以納舟。師看之自若也。師平生得台意。皆類之云。

無求周伸

周伸字は無求。甲州の人。法を夢窓に嗣ぎ、應永の始め嵯峨の景德寺に住し、同く十一年七月臨川寺に移り、同年十月廿六日萬年山相國寺に視篆し、幾もなくして南禪寺に昇住す。後に檀越あり新に精舍を建て、開祖たらしめんとす。師受けず、三會院に屏息し扁して環中といふ。又和州に游ぶ、郡主信福寺を創して以て請す、詩あり曰く、

棲息不レ應レ過二一枝一。雲林隨レ處是生涯。昨是今非俱忘却。只聽二松風一十二時。

京に歸りて天龍寺内に大慈菴を卓てゝ靖居し、應永二十年八月天龍寺に住す。相國退院上堂の偈に曰く、

息席萬年老病身。天恩重問舊時因。秋風葉落祖庭冷。獨向斜陽掃塔塵。

無求周伸自筆稿本

攀盡千尋方到顚　詩驅好景杖難前　風狂松鳴若聞海　霜染楓林
欲醉天　山色高低何有限　水明遠近更無邊　地靈亦識人皆傑　早
晩誅茅寄老年　　自和韻馬寺韻
籠中幾歲夢林巒　終見摧翎蹩我前　空使好音猶在耳　由來薄命
豈尤天　祇雲影滅落日泥　飛紫翠過開道　青田偶鶴曾皈來華表
僅千年　　書其上　　借韻悼小會
龜山吾國最初禪寺　擁種林幾歷年　英葉繁芳宗益振　枝第連茹
棠仍寧　惠雲蓋覆三千刹　法雨盛傾百大泉　想子諱師當遠大　將
求欲作濟川舡

周防の太守大内盛見、師に參ずると久し。一日師の肖像を繪き來つて贊を請ふ、師筆を染めて曰く、

予今八十叄頑嚚。土木形骸咲倒人。大先獨愛醜陋甚。五彩畫成面目新。

又、居常、足利義滿の寵遇を受く、一日頌を呈して曰く、

幾年雲外仰星表。今日那期辱見招。東閣華筵披宿霧。西園琪樹動涼飇。座間天近蓬萊闕。簷際秋高河漢橋。愧我疎才非鼎賦。謾聯拙句答瓊瑤。

師、石室善玖と道交尤も親善なり、石室の天龍寺を辭して武州野火止の平林寺に靖退するや來韻に和して曰く、

不拜慈顏六七年。相思幾夜撫朱絃。雪顱想見垂々白。華偈投來句々圓。烏賊海中拋舊話。鳳凰臺畔憶先賢。匡徒自咲無才補。夢達平林萬木邊。

緇食城隈僅半年。秋簷又見月成絃。談禪不解分玄要。講敎何曾辨頓圓。橫臥北窓消永日。懶開東閣接高賢。豈期老宿猶尋舊。千里傳書到枕邊。

天詔三徵憶去年。節高不屈直於弦。禪林花草心應渴。洛水沙漚夢未圓。大覺焚盂名益振。木平掛履道彌賢。釣竿附與兒孫手。繋卻孤舟臥柳邊。

應永廿年十二月寂す、壽八十一。文名一世に喧しく、無求錄一策今猶ほ世に傳ふ。

愚中周及

愚中字は周及。美濃國岐阜の人なり。其先は伊勢國藤氏の一族なり、事に因て此

地に來り數世民間に居る。元亨三年癸亥（紀元千九百八十三年）に生る。元德元年父携て郡の東山教院に投じて童列に就かしむ。釋典を勤學し兼て儒書を習ふに同學の者皆下風に立つ。元德二年父難あり刑に罹らんとして一家惶怖す、師獨り觀音に祈誓して旦より夕に達す父果して脫るゝ事を得たり。依て世相を厭ふて沙門に歸せん事を請ふ、遂に其志に任す。師喜で曰く若し然らば禪宗に歸すべしと。年十三にして京に上り、夢窓國師を臨川に禮して受具す。國師一見して曰く、此兒骨格奇異、頗る博達の相あり、宜く周及と名くべしと。又高身なるを以て高沙彌と呼ぶ、即ち春屋妙葩に依らしめ教ふるに禮策を以てす。目を過れば能く記す、葩曰く高沙彌伶俐なり、我今事繁くして成遞する能はずと、因て鑑翁士昭に侍せしむ。辛勤奉仕して怠らず、旁ら又龍湫默菴に親み日に慧證を增す。夢窓國師友雲菴に題するの偈あり、洛中の老衲競て和す、嘗て顧みて曰く、人汝の聰敏を稱す、試みに和せよと、師聲に應じて曰く『岩樹陰森日易ㇾ曛。無心來往洞中雲。凝然一榻乾坤闊。物外逍遙趣不ㇾ群』と。十七にして叡山に到て登壇受具し、十八、錫を建仁に掛く。曆應四年南詢の志切なり、時に光嚴上皇天龍寺を創し、足利直義等天龍寺船を發して什器、大藏經等を元に求む。是に於て喜で之に託し、秋博多を發し冬明州に

到る、州の太守錘萬戸、以て賊船となし艑艫數千海上に防ぐ、商主書を通じて以て陳す、疑怒已まず、愈禁防を嚴にす、船中水盡て猶上岸を許さず、師同志と懺摩法を修し以て雨を祈る、密雲忽ち布き大雨降る、船中の人之を飲て活を得たり、錘太守之を奇とし、獨り商人の貿易を許す。彼の一商客、師の求法の爲に來ると聞き一夜小舟に棹して之を迎へて岸に登る。時に印月江曹源に住す、進謁して道を問ふ、江其の遠來に感じ、垂慈提誘す、時に歳僅に二十歳。江、又師の擧措兀々として癡の如くなるを視て、愚菴の二字を書して贈る。又一日師に謂つて曰く、老僧退居して叢規を行はず、大方に抵て禪席の盛なるを觀るべしと、乃ち偈を與て曰く『贈君一滴曹源水。漲起西江十八灘。八十四人草窠裏。齒牙交下髑髏寒』と。去て錫を道場に掛く、本邦の密禪人あり、鄉を同うす、其の勸めに從つて金山に往き卽休和尙に侍す、休、室を開いて迎接待遇甚だ渥し。茶菓を進むる次で、柑子を指し問て曰く、日本にありや、師曰く有り。又栗子を指す、師曰く有り。休卽ち曰く佛法は一切所に遍在す、來て此間に到る、什麼をか作す。師曰く此間に到らずんば如何か和尙を見得せんや。休曰く目前に闍梨なく此間に老僧なしと、休曰く此子敎ふべしと、乃ち近侍せしむ。尋で休、師に命じて內書狀に充てしむ。

凡そ緇素の應酬尺牘、師をして皆代つて書せしむ。時に金山火後重ねて佛殿を建つ、師に命じて上梁文を書せしむ。又古今の名賢呑海亭に題する詩篇字劃殘缺す、師に命じて改め書せしむ。一日數官人來りて詩を題す、皆曰く日本の及侍者を請して之を書せんと。師出でゝ代り書し、又詩を作る。至正七年、本邦の貞和三年、辭して歸朝せんとす休、自ら頂相に題して曰く『妙高峯頂行レ船。楊子江心走レ馬。唐人不レ識二這容儀一。付二與日本及侍者一。』と。時に朝廷金山に敕して水陸會を修せしむ、休強て師を留めて經藏を典しむ。石室善玖、龍山德見等と時々往來して互に琢磨を加ふ。至正十年休微恙を示す、師に謂て曰く、來歳孟春吾れ必ず滅を取らん、殘喘絕へざる時、子速に日本に歸れと。示すに偈を以てして曰く

婁寺相親閲二幾秋一。左探右索出二時流一。機輪三轉輪元淨。定慧雙詮慧匪レ修。睡虎眈々抛二故穴一。游龍矯々奮二靈湫一。好翻二一滴長江水一。漲二起東方廣海州一。

囑して曰く子郷國に歸るも出世を要せず、山林に居して靜地の工夫を做して聖胎を長養すべし、他時必ず孤峯頂上に向て、吾が道を發揮し去ることあらんと。翌年春休の喪闋て、三月中旬纜を明州に解き、四月本邦に達す、卽ち我が觀應二年なり。龍山卽ち師の至るを喜び相伴ふて京に赴く。六月兵庫に達し疾に染みて廣

巖寺に寓す。七月天龍に抵り夢窓疎石を拜覲す、因て春秋を問ふ、對て曰く廿九、國師曰く汝青年にして、萬里に往還し我幸に長壽にして再び相見を得て甚だ老懷に愜ふと。此年九月國師遷化す。會下の僧大半散じ去る、師云く我れ少年にして辭し去る、今來りて寂に遇ふて奉勤を得ず、塔下に就て心喪三年、以て受業の恩德を報ずべしと、臨川に留まる。臘八に龍湫偈を寄す、師韻を次で曰く『未決如來一大緣。春風南國幾啼鵑。歸來臘月忽初八。孤負明星又一年』と。三年龍山南禪に住す、師を請して書記に充つ。尋で竺堂和尚萬壽を主る、又招て紀綱を掌らしむ。四年攝津の栖賢寺に寓し、住持致外和尙と日夕道話す。四年那珂宗泰、丹後國天寧の席を虛ふして延請す、乃ち往て住す。應永二年紀州に遊化し根來寺に寓す、七月安良見某龍門菴（後に禪頭寺と改む）を捌めて請す、四衆競ひ集る。秋關西に赴かんとし途藝州を過ぐ、小早川春平、一寺を建て請して開山第一世となす。寺を佛通と號す、蓋し其志先師を慕ふなり（先師即休の諡號は佛通禪師と云ふ）八年播州の雲門寺に遊び其幽邃を愛して菴を卓てゝ景德と云ふ。冬又佛通寺に還る。年已に八十餘。十一年肯心菴に退居す、十四年足利義持專使を遣して法語を求む、勸發文を述べて之を示す。翌年義持の命に應じ京に入る、山崎に至るに及び義持、畠山、細川の二臣に命じ

迎へて伏見の藏光菴に館せしむ、義持往謁して甚だ欽む。鄂隱慧奯正續國師に命じて城外の寺院五所を點して擇び居らしめんとす、師固く辭して就かず自ら等證院に寓す。義持參見して法要を問ふ、都下の緇素競ふて參謁を求む、堅く拒て接せず。一夜遁れ去て紀州の禪頭寺に至る、義持使を遣して紫方袍を賜ひ天寧に回りて性に任せて住持せしむ。十六年八月一日杖を携へて山に登り寺の東北隅に於て闍維場を定む。十七日微疾を示し廿四日自ら棺銘を書し、廿五日に至り施主齋を設く、齋罷て左右に謂て曰く、我が氣絶を待つて卽時に闍維せよ、刻を移すこと勿れ、髮を剃ること勿れ、澡浴すること勿れ、忌齋を營むこと勿れ、晝夜禪誦我が在日の如くせよと、遺偈を說き訖つて跏趺して化す。實に應永十六年八月二十五日なり。師住する所の寺院大小となく皆尼女の入門を禁せり。壽八十七。九月十三日敕して佛德大通禪師と諡す。遺著に稟明集一卷、卯餘集三卷あり。鄰交徵書に、師が歸朝の時、齋歸する所の元朝諸老の作數首を錄す、一併に揭げて參照に資す、

贈周及遊方

贈君一滴曹源水。漲起西江十八灘。八十四人馴窠裏。齒牙交下髑髏寒。　契了

愚中將歸本國偈以留之　卽休

雞聲唱徹炎天曉。已向聲前契祖機。楊子江流東入海。臨流未可買船歸。

賀愚中充東藏職　正印　月江

金烏玉兎如梭急。八駿如何追得及。滔滔楊子大江流。夜半穿靴水上立。龍宮海藏盡豁開。赤手擇得摩尼來。萬仭龍門一躍過。不假霹靂轟春雷。者回重入德雲室。不用參尋經七日。金鰲背上掉臂行。盡得眞人好消息。

寄愚中　梵琦　楚石

信得及時明得破。無邊海藏盡掀翻。休翁古佛呵呵笑。鎮海明珠只一丸。

日東周及藏主。自持香典教至居間。皆得以代昏耄撿閱之勞。可嘉也。今其歸里。偈以勉進云。　契了　即休

裴寺相親閱幾秋。左探右索出時流。機輪三轉輪元淨。定慧雙詮慧匪脩。睡虎耽耽抛故穴。遊龍矯々奮靈湫。好翻一滴長江水。漲起東方廣海州。

義堂周信

周信字は義堂。空華道人と號す。正中二年（紀元一千九百八十五年）正月十六日生る。姓は平氏、土佐國長岡の人なり。幼にして義淨法師に從て出離の道を問ひ、年十四にして剃髮叡山に上つて登壇受戒し道圓阿闍梨に依て密法を學ぶ。十七歲にして京に上り臨川に詣り、夢窓國師を拜して師となす。國師命じて湯藥に侍せしめ、參問久ふして遂に玄旨に契ふ。一日國師上堂す師衆を出でゝ問話し、機鋒捷速にして一衆を驚かす、國師下坐して與ふるに紫扇を以てす。師時に同胞に謂て云く、唯此の一柄、一生受用不盡と。國師遷化の後、建仁の龍山德見に依る。延文四年八月鎌倉の管領基氏、師を招て圓覺に居らしむ。貞治五年五月善福寺に住し、應安四年上杉氏鎌倉の城北に報恩寺を剏め請して開山第一世となす。師、宗趣贍博にして人を照すの鑑あり、四方の雲衲にして其偉器たるを見れば、府に告げて選擧す。康曆元年足利義滿鈞帖を下して京の建仁寺を董さしむ。入寺の日、將軍山に入り、名衲縉紳堂に塡ち廊に溢る。寺僧皆云く、雪村和尙住持以來、斯くの如き盛なることなしと。至德三年旨を奉じて南禪寺に移るや海內の雲衲先を爭ふて臻る。至德三年の夏足利義滿、朝に奏して京都、鎌倉、禪剎の位次を定め僧をして級を拾ふて升らしめ、卽ち南禪の位を陞して五山の上に居く。此年自恣の夜白雲端和尙

來り訪ふて曰く、化縁既に畢る、吾に隨ひ來るべしと。秋に及びて南禪の寺事を謝して慈氏院に退休す。嘉慶二年の春造和に遭ふて攝津の溫泉に浴す、旬餘にして慈氏院に歸る。又夢に永嘉の眞覺大師と對談す、大師囑するに生死大無常迅速の語を以てす。師左右に謂て曰く、吾が此の疾ひ起たじと、乃ち命じて龕を作らしむ。是に於て緇林の兄弟輦下の士庶、疾を問ふ者門に盈つ。師送迎常の如し。又西園寺公來り訪ふ對談揖送異なることなし。三日の初更衆を集めて出世の始末を說く、後光嚴上皇近臣に敕して安を問ふ、卽ち威儀を具し天使に對して恩を謝す。又西園寺公來り訪ふ對談揖送異なるとなし。三日の初更衆を集めて出世の始末を說く、侍僧辭偈を請ふ、曰く、吾れ四十年來人に抑逼せられて扛げて紙墨に上すもの豈剩語にあらずや。因て問ふ今幾刻ぞ、侍僧曰く五鼓已に鳴ると。乃ち端然危坐して寂す。實に嘉慶二年四月四日なり。遺命に遵ひ全身を慈氏院に窆す。享年六十四、法臘五十年。

師は天資器識淵深、道義古高にして常に衆と甘苦を同うす。禪坐諷經の如き、病むと雖も必ず闕かず。人の之を諫むる者あれば、卽ち云く人の世間に住することと草頭の露、風前の燈の如し、何の護惜することあらん。若し辛勤を以て死を招かば、余の願ふ所なりと。又幼より翰墨を善くす、或る人嘗て其稿を携へて明に入

義堂周信肖像



義堂周信自筆稿本

東山外集鈔

る、楚石琦公之を閲て曰く、是れ中華の者の作る所なりと。其人實を以て告ぐるや楚石歎じて曰く、意はざりき日本に此郎あらんとはと。伯英德俊明に在りし時、學士數人來り訪ふ、英、師の所作數十紙を出して之に示す、皆節を擊て稱歎し爭ひ乞ふて携へ去る。且つ云く憾む所は此人の律詩を見ざることをと。其文墨に工なること斯くの如し。著述する所、語錄幷に空華集、幷に日用工夫集等數十卷あり。又貞和の初め宋元二代禪林の偈頌を選び取りて以て十卷となし、名けて貞和類聚祖苑聯芳集といふ。共に世に行はる。其餘の記述等尤も多し。若し其の行實に至りては、空華日工集に詳なれば敢て贅せず。

師、諸山を退いて後、義滿切に其の等持寺に住せんことを請ふ。蓋し等持に住するの人、多くは其の樞政に與るを以てなり。師嘗て中巖圓月に與ふる書に『等持廼官寺。陰柄詮衡、密贊樞政、者之所宜居。故每難其人』の語あり。又、孝經抄の卷末に『昔天山相公。治世之餘暇。引菅原秀長。藤俊任。明經家清家良賢。以孝經爲論議。座有二條攝相。義堂和尚。』と。其の義滿のために密に大小の機務に參じて輔翼したるの功大なるものありしが如し。又、常に法道の陵夷を慨し清規の流傳に意を要ひしとは抄の序に『虎關雪村東陵龍山滅後。則敕修之行於日本也。義堂唱之。東漸和之。義堂問諸在唐

之僧而始講之』と。當時の政教に資したるの功洵に大なるものありと云ふべし。
師又、居常、室に扁して空華といふ。明の宗泐、ために偈を作つて之に送る。歌に曰く、

空華室歌爲義堂禪師作　宗泐

空華無蔕從何生。目前褵𩬊森從衡。得非目青華乃成。幻起幻滅無實相。道人空華榜其室。應知此室終非實。幻成幻住幻壞空。與彼空華體元一。豈獨此室如空華。是身世界曾不差。涅槃生死亦復爾。聖名凡號寧堪誇。道人燕坐此室內。一心廓爾空三際。手握寶劍金剛王。擊著須彌成粉碎。空本空兮華本無。趙州壁上懸胡盧。篆烟半銷月在牖。寥寥永夜棲團蒲。

心華元棣

元棣字は心華。濃州の人なり。生死の年月を詳にせず。幼にして建仁寺の定慧院現今慶亡すに入り頑石曇生に師事して句讀を受け、剃染受具の後、四方に參詳し還つて又法を頑石に嗣ぎ、建仁寺の第一座に補せらる。頑石の滅後、定慧院五代に住し文墨を以て諸山の長老と交る。當時義堂周信、惟忠通恕等尤も文名あり。常に二

師に從つて學得する所多しといふ。嘗て美作の興雲寺に住すること二年、又移つて山陽の聖壽寺に住し、更に備中の松山寺を董す。惟忠の師に寄する詩序に曰く『吾友心華老師。頃。屛迹于山陽。一榻澹如。實無悶於世者也。癸亥秋。同門老宿相奬曰。公德而望重。況四辨之瀰瀾。宜據師位。以馭學徒。乃具弊禮。俾董備之松山。不日而廢者興弛者張。祖道光輝。蔑以加焉。余恨山川阻脩趨拜未由』云々。又義堂の空華日工集、康曆二年六月の記に曰く『爲妙夫藏主。元棣侍者。求講日用淸規』と。同く九月の記に『請元棣首座。充後堂首座』。至德二年三月の記に云く『元棣首座至。出江湖疏稿而求改。有黃梅七百餘飽參衆角雖多一麟足。霜皮四十圍巨植。萬牛不動五丁愁之句』、日件錄の上、寶德元年十月の記に曰く『慈氏祖翁義堂のこと往常在光寺時一日心華來過』と。臥雲日件錄寶德元年閏十月の條に曰く『三日長照院竺華來過、竺華曰。慈氏祖翁義堂のこと往常在光寺時。一日心華心華元棣のこと來控。祖翁告之曰。若爲文字商量則頻來也不妨。若爲講禮則不可也。老僧惜日不徒對賓客也。心華爲之欽伏。以後來時。凡所疑之事。件々書之掌面逐一咨問。或有不是則□□此事常人所知。何故相問。心華曰常人縱□□棣不知』云々、その二老と親呢の狀を見るべし。當時、太白眞玄建仁寺に住して盛名威望あり、師常に往來して斯文を商量せり。太白嘗て道元首座に寄するの詩序に曰く『定慧心

華上人。乃獨步之才也。故天下桃李之士。悉競游其門焉。余亦幸而弃瑕。辱荊州之一識也。久矣』云々、その推重を受けたるを知るべし。 師作州に在りし時、 法弟子瑜元瑾（天龍寺六十六代）興雲寺に省覲す。 數日の後瑾が京に回るを送って曰く、

作陽。岩崖峭險。溪湍悍急。熊羆蛟蛇。穴之窟之。所謂天下之窮處也。故雖駟騎軺軒以申命令。扉屨襏襫以事參詢者。罕到焉。病夫何人。枯槁樵悴乎其中。終日一室如鳥粘黐而罕出

心華元棣自筆稿本

謙中說

前瑞岩寺益公座元禪師字以謙中特命其友東瑞棣
子敘其義焉吾倚深所敬畏更无小大雖易有命必座
於是乎敘曰易有六十四卦卦有六爻爻卦之德也莫尊乎
謙始乎乾坤終乎既濟未濟差有悔吝凶咎唯謙獨莫
有焉天益焉地流焉鬼神福焉而人好焉尊而光卑而
不可踰非謙之尊孰能与於此乎爻之位也莫大乎中
在初与上則曰无位在三与四則曰多凶多懼唯二与

焉。是歲秋八月。十又二日之薄莫也。與懷感動不已。遂起出游。倚杖凝睇之頃。青松夾逕。寺門數百步之外。不官不民。艾衣筇笻。厥形浮圖。進而到者有焉。近而眎之。乃吾法弟。京師東

山子瑜上人也。失喜而一咲。狂奔而顚倒。迺今。自賀殘骸猶託乎人間世之爲幸矣。吁罕到而到。罕出而出之得相遇也。豈翅虎嘯谷風至。龍擧而景雲屬。麒麟鬪而日月食。鯨魚死而彗星出而已矣乎。延焉而入。徐而問之。官禁之寛猛。叢規之沿革。文事之隆汙。宗徒之眞贋。耆季舊交之升黜存亡。其言衰々纚々。展盡余蘊。莫不如繭抽而棊布。於是乎。病夫。憑几聳聽。精爽飛越。莫不如親處身乎輦轂之下。凡如此數日矣。而山居荒凉。一杯橘皮湯之供。以慰三百里跋涉勞。以霑數日劇談之燥吻。未之能也。爲可愧也。方其將歸。請病夫敘山中會。以餞。吁。有以矣哉。子之請也。昔唐韋弘機。使西突厥之日。裂裾錄所過風俗物產。爲西征記。比還。太宗有問卽献之。帝大悅。上人其庶幾韋氏子乎。而不自爲。彼病夫代。蓋謙也。東入京師。則不有好事君子問以大悅乎。故敢代焉。亦所以擬古也。獨書松逕之遇。而不及關橘湯供。則豈實錄乎。故書焉。亦所以自責也。

又曾て頑石の喪に丁り、祭文を作つて薦めて曰く、

余甫十有三歲。玆就諸徒之行。倚而安焉。若太山之重。敬而畏焉。若眣眣之眡望九重君王。是歲也。行年三十有八。而得執役換二十六炎凉。其際潛鞭密練吾將以牛毛算之。以天下竹帛載之。不得而默。不可得而量。到乎永訣。欲默其可得乎。若水在防。前季屬師風疾彌留。散東山席。余亦無何。得二豎在膏肓。譬之病葉附乎老樹。父子喘々衰容相望。不意葉之未

隕。根扱而僵。烏虖哀哉。病革之日也。指諸子。顧命余曰。囑汝。汝當敎以典章。恐汝察々不能包容。一相友愛。毋鬩于牆。是時也。口未唯々涙已浪々。辱承治命。夫如此也。敢不奉揚。七月二十六。方夜之未央。獨召余諸徒之中。戒曰汝當今夕。愼勿遠予之傍。時雖不悉風旨。追而想之。蓋知父子相得獨在一夕。不可以長。不能包容之警。終身永矢弗忘。而更大故以來。形神益虛耗。起臥不小康。幾乎不得倚廬之中。而達心喪。況乎。久保頽齡支殘骸。春秋得奉綸音。虞遺囑終虛。而不孝惟大。乍覺湯火茅刺之在中腸。烏虖哀哉尙饗。

其の師を想ふの深く、弟を愛するの密なる文辭の外に迸出する者あり。位は西堂に止りて諸山に出世せず、應永の中頃東山の定慧院に寂す。常に杜工部の詩を愛誦して卷を釋てす、自ら抄して卷を成し名けて心華臆斷といふ。天隱の默雲稿に云く、

(上略)本朝禪林耆宿。太年。心華。太白諸大老。口義惟夥。後學抄以留之於中笥。留之机上者幾家哉。獨心華臆斷。與劉氏評點。盛行于世。云々。

此の抄、今は泯びて傳らず。遺稿に業鏡臺一冊あり。文辭豐麗、以て義堂に雁行すべく、太白に角逐するを得べし。蓋し一代の大詞宗なり。

龍湫周澤

周澤字は龍湫。又自ら咄哉と號す。姓は武田氏、延慶二年己酉紀元千九百六十九年甲州に生る。六歳にして夢窓國師に隨ひ驅烏となる。稍長じて剃髮受具し辭して諸方に參じ、後に歸て悟を夢窓の輪下に得たり。初め鄕の慧林寺、京の臨川寺等に住し、應安元年六月美濃の大興寺を開く。後ち貞治六年三月建仁寺に住し、應安四年三月南禪寺に陞住し、又永和二年八月天龍寺に視篆す。緇素靡然として化に嚮ふ。師平日夢みず、夢みれば必ず驗あり。一夕無準和尙の衣を傳ふと夢む、翌日果して衣を贈る者あり、一時の諸老偈を賦して之を賀す、號して應夢衣と云ふ。又密菴和尙の竹篦を得て、室中常に之を用ひて衆を接す。朝廷其の道價を聞き國師となす。師力め謝して敢て受けず、因て玄猷の號を先師夢窓に加賜せらる。後に東山の常在光寺に移り、又臨川に遷る。官卽ち臨川を陞せて五山の列となす。凡そ名山に主たる者七所、曾て不動明王に感ずる所あり、日に一像を繪きて期百日に至る。是の如き者廿年、其筆妙神に入て靈驗尤も多し、今に至つて之を得る者百

龍湫周澤墨蹟

慈聖院
不許諸役人所費
常住衛飯并雜用
物煩
至事切守此法制矣
状如件
康暦二年九月日
院主龍湫周澤

襲す。嘉慶二年九月九日天龍の壽寧院に終ふ。壽八十一。翰林葫蘆集に其の塔所の記あり曰く、

洛水之西。壽寧祖塔。不安木主。直掲額曰鏡像。開乎則翠竹數莖。團欒於古壇之上耳。叢林傳爲美譚矣。但不知其所親裁歟否歟。云々（翰林葫蘆集。題不秋齊詩後）

又、萬年の慈聖院に塔す。師在世の日、年譜語錄を編することを許さず、竊に書する者あれば、乃ち之を火く。滅後其遺弟仲項、七會の語錄並に遺文等を錄して四卷となし、入明の僧を价して、育王山の住持宗體原に序を作らしむ。其の文集を隨得集と云ふ。

可翁宗然

宗然字は可翁。筑前の人。幼年に南浦紹明を禮して薙染の後、參學年久しく、文保の初め寂室光、鈍翁俊と偕に元に入り天目中峯に參じ、又古林茂、元叟端、無見覩の諸老宿に謁し請益する所多く、元にあること十年。歸朝の後、筑前の崇福寺に住し、尋いで洛に上りて萬壽、建仁の兩刹に歷住す。會々泉州の太守某、禪通

寺を剏め師を請して第一世たらしむ。後に詔を奉じて南禪寺に視篆し、道業嚴肅、脇席を沾さゞるもの三十年なりといふ。天性丹青に巧にして畫く所のもの少からず。晩年に建仁寺内に天潤菴を創して靖退、貞和元年四月廿五日寂す。滅後、敕あり謚を普濟大聖禪師と賜ふ。

平田慈均

慈均字は平田。相州鎌倉の人なり。法を道山晟に嗣ぎ、早くより南游の志あり。廿七歳にして遂に元國に入り直ちに金陵の鳳臺に抵り茂古林に謁す。尋いで又中峯を天目山に、月江を何山に訪ひ、靈石芝、竺雲曇、無言宣、淸拙澄、雪竇常、鴈山泳等に歴參し皆、道號偈、送行の頌等を得て本邦に歸り初め豐の崇福、播の圓應に住し、次いで普門院に移り、又東福、南禪等に視篆し、貞和三年九月十六日寂す。遺稿泯びて今に存せず。

乾峯士曇

士曇字は乾峯。筑前博多の人。弘安八年を以て生誕す。南山士雲を承天に拜して師となし、乾元元年洛に入り、嘉暦三年、後明極の來朝に會ふて其の門に趨り參究年あり。元亨元年廣燈錄を讀で省あり。建武四年正月東福寺に住し、文和四年鎌倉に往き建長、圓覺等に歷住し、延文元年十二月十一日寂す。世壽七十二。滅後、後光嚴帝、敕して廣智國師と諡す。遺稿に廣智錄五策あり、禪文共に熟して琅々誦すべし、今猶ほ印行して世に傳ふ。

空谷明應

明應字は空谷。別に若虛と號す。江州淺井郡の人なり。嘉暦三年(紀元千九百八十八年)を以て生誕す。年甫めて九歲にして郡の廣濟寺に投じ志徹に就て句讀を受け、後、天龍寺に往いて無極志玄に依る。十七歲にして具足戒を受け、夢窓に侍して機辯日

に長ず。尋で又無極、東陵永璵、放牛光林等に參詳し、碧潭周皎、默菴周諭、中巖圓月等の諸老に從つて禪教並に九流百家の書を傳習して孜々怠らず。蒙山智明時に南禪寺に在り、其の英才を愛して箋翰を掌らしむ。又春屋妙葩淸溪通徹等の會裏にあつて分坐說法す。その諸老の推重を受けたるを觀るべし。永和元年十二月美濃の天福寺に住し、同く四年太守土岐氏州の天寧寺を以て請す。尋で詔あり大光明寺を管せしむ。至德三年十月足利義滿、相國寺を以て敦請す。此の時相國の伽藍未だ圓備せず、師遷て後、殿堂樓閣一時に具備す。嘉慶の初年鹿苑寺に退靖し、明德元年八月再び義滿の命を以て相國寺に住す。朝廷その道價を聞き、使を遣して特に佛日常光國師の號を賜ふ。後又鹿苑寺に還り、應永の初年三たび相國寺に住す。時に義滿、禪僧十人をして衣を更へて敎門に入らしめんとす、師固執して曰く、喬木を下て幽谷に入る、理然るべからずと。卽ち又鹿苑に歸る。五年北山の等持院に住し居ること三年、退て雲居の塔所を守り、先師箋注の勞を思ふて衆の爲に宗鏡錄を講ず。十一年歲首の偶作に曰く、

八十八人生只欠三。莊周胡蝶共虛談。毛頭百億全獅子。哮吼聲々異類殲。

十二月天龍寺に住し、翌年鹿苑寺に退休す。傳へ謂ふ師人と爲り疎眉秀目にして

音吐鐘の如く、常に王侯の寵錫を受くるにも拘らず身に約を守りて衣服の如き垢つき弊れば自ら補浣して弟子を煩はさゞりしといふ。同く十四年正月十二日微疾に罹り、十六日の夜遺偈を書して寂す。壽八十歲。遺稿に常光錄三卷あり、外に若虛集ありしも今時世に傳らず寔に惜むべし。

友峯等益

等益字は友峯。筑前の人。嘉曆二年初めて雪澗存に依て業を受け、後に古先印元に等持、眞如の間に侍し遂に其の嗣となる。蓋し存の命に從ふ也。次で夢窓、虎關、乾峯、蒙山、龍山、放牛、此山、東陵等の諸大老に歷詢し、又、石室玖に參ず。永德二年相州の淨智寺に住し、應永六年建長寺の鈞選に應じ、退いて長壽に住し以て養老の助となす。又晚に普慶菴を剏め菟裘の計をなす。應永十二年正月廿二日寂す、壽七十九。塔を澄心といふ。師資性剛正にして義の在る所、萬夫と雖も撓まず、後進を誘掖して言行相顧み、門弟班々として數ふべし。滅後二十年、南禪の聖瑞、塔銘を選して曰く、

哲人應世。存亡俱傳。心印授受。生氣凛然。澄心水明。垂々萬年。普慶神祐。燈々綿延。陵谷可變。堅石永鐫

天章澄彧

澄彧字は天章。永和三年丁巳五月、賀州直下里に生る。京に上りて空谷明應に師事して大事を決す。別に栖碧山人、嵐齋、呆菴等の別號あり。當時詩文の達者を以て知らる。綿谷行狀に云く『天章。居西山保宗院。閉門謝絕賓朋』云々。栖碧稿に自叙傳一篇あり、移して叙述に代ふ。

栖碧散人。生于賀江藤氏。年甫十三。入洛。禮佛日先師（空谷明應）於承天丈室。爲童。名以澄字。曰是香林遠清涼觀之所稱也。蕉堅翁（絕海）繼董法席。以語言妙天下。而學者仰之如泰斗。一日召造前。朗吟曰。山色透簾綠。汝童能對乎。余隨聲云。竹光當戶涼。時季夏也。翁大喜。執手展開視之曰。掌文似我。宜奇俊哉。後讀王充論衡云。人性奇者。掌文藻炳。方知翁之戲言本於此矣。及翁再住領藥司。小參上堂兩回問禪。其贈言也始云。嗣宗諸子姪早覺仲容賢。次云。我亦從來識英物。又嘗謂曰。文字之法。故事須活弄用。而辭要其簡。唉隱草疏曰。海上鉅禪

叢惟五。徑塢稱最。豈不偉哉。因中秋出題。使賦折枝桂華。余詩云。帝遣仙英月裡栽。天香細浥露花開。翁頗稱善。先師從容誡余曰。少年學博則下眎一切。宜於諸法空上看。前輩雖省緣。猶不廢做頌。蓋以其半工夫故也。余頌水晶筆管云。驀口生吞白兎公。通身映徹皎玲瓏。師云。第一句甚活。只恁地做將去。雪村和尚有言。頌子中無活句。卽不堪采。大明建文間。通

栖碧摘藁

白鷗社記　為萬年積修史作

賀江釋澂彧天章

洛之北涯有美一人字白鷗若樓雖寄跡世氛中情猶多樓遯之思常當韶陽時氣和景淑嘉藹覓芳登郷风

天章自筆稿本

信本朝。天倫。一菴。二師館于北山。余謁焉。寫白鷗社記。以呈天倫。琅然疾讀其音節若不差者。便把筆批云。文不加點。且作口號一首見示。有逸韻聞千歲。高才出萬方之語。一菴亦賦栖碧齋云。壯年文彩露全斑。抑余十七。隨大僧數讀生書解屬文。奥篇隱帙。無所不窺。自謂一癖也。十九爲侍史。三十侍薌。卅有一掌藏。是歲歸鄉。遂東游。得瞻士山雪焉。爾後拙菴相

仍百事懶廢。所謂黄楊木禪也。今平頭四十矣。將焚舊稿不能無鷄助之顧於是十摘一二成編。以遺其愛而忘醜者。噫。明眼人前不滿一哂爾。　戊戌嘉平。釋澄或天章自叙。

遺稿に栖碧摘稿一冊、外に梅城錄一策あり。共に世に傳ふ。

物外可什

可什字は物外。其の本貫を詳にせず。初め南浦紹明に投じて隨從年久しく、印證を受けて後、元應二年、天岸廣と偕に海に浮びて元に入り當代の明師に參じ、又錫を振ふて名區勝地を訪ひ、正中元年、俊明極、本邦の聘に應じて來朝するに遇ひ、梵竺仙、天岸廣と共に尾して歸朝す。船中、明極の禱風の韻に和して曰く、

大舶駕空滄海東。扶桑猶隔片雲中。龍王有願不忘囑。莫惜竿頭五兩風。

又、富士山を見て喜ぶの作あり、

見山同立喚山々。便覺歡心海樣寛。他日莫談波浪嶮。使人特地骨毛寒。

博多に着くの時、太宰の都督大友頼尙、崇福寺を以て請す。住すること幾年の後、鎌倉の管領遠く請して建長に主たらしむ。觀應二年十二月八日、建長の天源菴に

寂す。滅後敕あり諡を眞源大定禪師と賜ふ。曾て夢窓の遍界一覽亭に題して曰く、

山重々又海漫々。塵刹都來貶眼間。見得分明非見々。共誰高倚曲欄干。

遺稿傳らず寔に惜むべし。

一源會統

會統字は一源。肥後の人。菊池氏の出なり。延元四年、平田慈均に筑前の油山に投じ、十六薙髮して戒を受く。貞和四年、慈均、洛に入り雲居菴に居り、何くもなくして東福に住す、師皆之れに從ふ。後に冲太陽に參じ、均の南禪に移るや往いて衣鉢を掌り、後年、均の常在光寺に退老するや、辭して肥後に歸る。均、偈を賦して送て曰く、

僧聚散同雲去留。東西南北任悠々。青山隨處如々體。不管叢林黃落秋。

又、寂室に江州の飯高山下に侍し、貞治五年、錫を輦下に寓し、參究一日も怠らず。應安元年、尼玄智なる者、金一匱を嚫り菴を創して禪誦の所となさんことを願ふ、是に於て東山の祇園社畔に一字を建て名けて祇樹といふ。一衲寒暑を閱して

禪坐怠らず。偶々日向の大慈寺住持席を虚ふす、衆議して師を請す、就かず、天下の諸老景仰せざるはなし。葩春屋澤龍湫見性海快古劍俊伯英柔剛中剛南宗咸な數々往來して道話日を終へて去る。應永五年春、居を小山にトし以て終焉の地となし、明年四月廿五日端坐して逝す。壽七十一、法臘五十。滅後廿一年、岐陽方秀其の傳を選して世に傳ふ。蓋し一代の大宗師なり。

平心處齊

處齊字は平心。俗姓は千葉氏、肥前國小味の產なり。弘安元年生誕、此の歲、父沒す。弘安九年九歲の時、瓊林叟、元より歸朝して小味にあり、卽ち投じて驅鳥の役を執る。嘉元元年洛に上り、又鎌倉に入りて林叟を省す。正和二年、那須の雲岩寺に往き高峯顯日に參ず。時に夢窓寂室等同く會裡にありて互に相請益す。延慶元年卅一歲にして美濃の丹坂に竹翁に謁し、卅三歲、鎌倉の壽福寺に歸る。一日、渡宋の思を懷き、鄉に歸るや、遙に林叟の遷化を聞き忽ち壽福寺に返り祖塔に侍すると年あり。卅九歲、龜谷を去つて三河遠江の間に游歷し、元德元年又

洛に上り東福寺の一峯一の會下にあり。建武二年三州設樂の雲岩寺にあり、尾州の山內某、一字を水野に創し師を請して開堂演法せしむ。山を應夢と號し、寺を定光と號す。貞和三年、七十歲の時、濃州に長藏寺を創して居る。學徒益輻輳す。延文五年十二月廿七日、微疾を示し廿九日安詳として寂す、壽八十三。應永二年三月廿日、敕して覺源禪師と謚す。語錄、外集今傳らず。

寰中元志

元志字は寰中。俗姓は小足氏。肥後國合志郡の人なり。弱齡にして州の正觀寺に投じ、後に洛に上りて建仁の西來院に寓し南禪寺に依る。幾もなくして海に浮びて元に入り楚石琦に參ず。琦、贈るに寰中歌を以てす。歸朝の後、正觀寺に住し、菊池持朝、成道寺を剏して請す。山を萬歲と號し、晚菴を築きて西鶴軒と名く。菊池持朝、成道寺を剏して請す。

に玆に終る、壽八十三。辭世の頌に曰く、

日本非生土。大唐亦客鄉。虛空兼法界。平等我家常。

遺稿傳らず、可憾。

無夢一淸

一淸字は無夢。法を璿玉溪に嗣ぎ。嘗て元國に入りて諸方を遍歷し、歸帆の後、備中井山の寶福寺に住す。延文四年東福寺に視篆し香を拈して曰く『此香爇向爐中。供養在大唐三十年所參見諸大善知識。以報一句一語請益之恩』と。應安元年五月廿日寂す。其の元に在りし時、廬山の眞龍岩、雪峯の逸樵隱、無夢の號を頌して之に贈るといふ。遺稿傳らず、惜哉。

天祥一麟

一麟字は天祥。京師の華冑九條家の庶子なり。元德元年（紀元千九百八十九年）生る。幼にして建仁寺大中菴の東海源に依りて童役を執り、十七歲にして得度、南禪建仁兩刹の間に游ぶ。時に中立一鶚と連璧の稱あり。鶚は乃ち東海の子、南禪に檠董して當世に聞ゆ。師天龍眞如等に在て秉拂の後、龍山德見に謁す、叩問詳切、機鋒捷

出す。跪き語る毎に、動もすれば四更に至り退けと命せざれば終に起たず、故を以て龍山常に難得子と呼ぶ。延文二年龍山天龍寺に遷り、明年正月天龍火く。龍山、夜半に北山の歡喜寺に退く、事倉卒に出でゝ輿丁一人を缺く、師卽ち丁に代り躬ら舁く、其篤敬是の如し。此の冬、龍山天龍寺に寂す、師後事を提調して建仁の兩足院に歸歛す。永和三年薩州の大願寺に出世して、居ること三載にして、筑前博多の聖福寺に移る。康應元年京の萬壽寺に住し、尋で建仁（應永元年）天龍（同五年）の兩刹に主となる。應永八年七月自恣の日、南禪寺に陞住す。將軍足利義持、使を遣し師に告げて曰く、序遷此に止まる、請ふ宗機を活弄せよ、庶幾くは耳を傾けんと。山に入りて其提唱を聞く。後に建仁に移り住す。一時の名衲義堂龍湫太淸默菴絕海空谷等の如き、莫逆倡和す。平常檀越の施す所の物、一毫をも私せず、用ひて起廢に充つ。一日病に遘て侍者を顧て曰く、吾行かんと。侍者紙を出して偈を求む師書して曰く『有有有有有。無無無無無。裂破鐵絲網。擊碎驪領珠』と。筆を擱て曰く、老僧滅後、全身を祖塔の後に瘞め、我が祖師に定中に從はんと欲すと。言訖て化に就く、實に應永十四年十二月二日なり。壽七十九（或は日ふ八十一歳）法臘六十七。師嘗て、支那に游びし日、柳子厚の文法を傳ふと。其書室を泉聲幽處と曰ひ、軒

を也足と曰ふ。著す所の書、佛祖歷年圖二卷、藏叟簑十卷、龍涎集二卷あり。江村北海の日本詩史二卷に師の作を錄し且つ推奬して云く、

曹學佺明詩選載日本僧天祥詩十一首。機先詩五首。二僧被賞中土而湮晦乎我邦。甚可歎惜。天祥憶西湖曰

杭城一別已多年。夢裡湖山尙宛然。三竺樓臺晴似畫。六橋楊柳晚如煙。青雲鶴下梅邊暮。白髮僧談石上緣。午睡醒來信惆悵。堪看身世老南溟。

又楡城聽角曰

十年游子在天涯。一夜秋風又憶家。恨殺黃楡城上角。曉來吹入小梅花。

聲格淸亮。唐人典形。其他我邦詠言。爲華人所稱者甚衆云々。

と。以て述作の一斑を窺ふに足るべし。

子建淨業

子建諱は淨業。建仁寺妙喜菴の僧。中巖圓月の法子なり。位は藏主にて終る。護花鈴の詩に曰く、

掖外郎當風力斜。寧王心護玉皇家。漁陽烏鵲猶狼藉。蹴落沈香亭畔花。

此の作、最も人口に膾炙す。嘗て元國に入る時、詩あり『不識何山松竹底。又添一箇土饅頭』と。後ち果して彼の土に寂す。

靈巖道昭

道昭字は靈巖。其の本貫と沒年を詳にせず。弱齡にして出家、桑田海に淨智寺に謁して參詳歲月を累ね、嗣法の後、辭して撥草膽風、至る所、高賓を以て遇せらる。首め建長の第一座に補せられ、道聲府內に鳴る。是に於て幕府請して淨妙寺に主たらしむ。嘗て東漸寺に游び賦して曰く、

水遶山腰碧似藍。月離雲嶠落波瀾。數聲款乃漁歌外。風捲蘆花洲渚寒。

晚年に淨妙寺の瑞龍菴に終る。

天澤宏潤

宏潤字は天澤。法を雲屋に嗣ぐ。屋は佛光の法嗣なり。貞和四年二月世良田の長樂寺に住し、後に圓覺、建長に歷住す。貞治六年十月十四日寂す、壽六十歲。

『春睡』の作に曰く、

懶困風光倚翠帷。幽人黃嬭未醒時。起嗔啼鳥太饒舌。不夢謝公芳草詩。

大年法延

法延字は大年。伊豫の人なり。壯にして一時の諸大老に參じ、後に鎌倉に之き梵竺仙の室に入る。仙、一見之を印可し、附するに松源滅翁橫川古林的傳の衣を以てす。尋いで洛に上るや足利尊氏其の道風に歸嚮す。尊氏の幕下に大高伊豫太守重成なるものあり、若州を領す。尊氏に告げて曰く、願くば大年和尙を迎へて吾が邦を化せしめん可なりやと。尊氏之を許す。是に於て重成、敎寺を改めて禪刹となし、大年を第一世となす。今の若州高成寺是れなり。重成曾て夢窓疎石に謁し法要を問ふ、疎石、之れが爲に夢中問答を書して與ふ。重成之を刊行し又次で黃檗の傳心法要一卷を刊して世に布く。貞治二年十月二日寂す。遺稿一策あり今

猶ほ世に傳ふ。

無傳正燈

無傳諱は正燈。羽州の人なり。幼にして江州永源寺寂室和尙の巾瓶に侍し、又洛に上り天龍寺の龍湫周澤に參じて省あり。繇て菴を嵯峨に營み、梅熟と扁し、山を景常と號す。師、平生隱逸を好み衆と交らず。檀越あり請して名藍に住せしめんとするも辭して受けず。其の經歷する所に往々小菴を構へ攝津にあるを梅子菴羽州にあるを金勝寺、越後にあるを梅林といふ。師、學徒の懇請に應じて楞嚴、法華の二經を講じ、譬喩尤も妙にして因て妙旨を開發する者多かりしといふ。生死の年月詳ならず。

大朴玄素

玄素字は大朴。東福寺鈞叟の法嗣なり。元應の初め海に浮びて大元に入り、中峯

古林靈石月江等の宿老に參ず。元の文宗皇帝眞覺廣慧禪師の號を賜ふ。彼の土に在ること十三年、曆應二年北山に圓應寺を開き、又赤松圓心、播州に法雲寺を開きて固く請すれども赴かず、梅雪村を擧げて第一祖たらしむ。後に豐の崇祥寺に住し、貞和四年正月廿八日寂す、壽五十九。示偈に曰く、

大用現前。無途無轍。長劍光寒。虛空腦裂。拈主丈曰。披毛也得。作佛也得。要知末後句麼。擔杜杖而化。

九峯信虔

信虔字は九峯。明徹琮の法嗣なり。學德一世に高く、中山顯と其の名當代に喧し。居常淡泊に甘んじて出世を要めず、晩年に及び四衆相迫つて鎌倉の淨妙寺に住せしむ。在山三祀にして退鼓を打ち、偈を作つて曰く、

稻荷山下償宿債。杷牽犂拽已三年。春風吹得鼻繩斷。芳草原頭好放眠。

至德元年、祥光菴に寂す。蓋し東關の一老宿なり。

曇芳周應

周應字は曇芳。幼より夢窓疎石に參じて參詳歳月を累ね、印可の後、天龍に典藏たり。後に鎌倉管領の請に應じて圓覺寺に住し、又巨福山に移る、此の間、學徒輻輳して門前市をなすに至る。應永の頃寂す。遺稿一も存せず寔に憾むべし。

天鑑存圓

存圓字は天鑑。初め鎌倉圓覺寺の無礙妙謙に投じて參詳。嗣法の後、伊豆の國淸寺に住し宗猷を發揮す。曾て元亨釋書の入藏を賀するの作あり、曰く、

　敕自延文天子承。元亨釋史有規繩。瞿曇不說此經卷。留與扶桑五百僧。

永德三年八月、鎌倉の淨智寺に住し、後に圓覺建長の兩刹に視篆し、老を以て寂す。滅後、敕あり諡を賜ふて佛果禪師といふ。

在先希讓

希讓字は在先。越中の人なり。幼より洛に上り東福寺の龍泉令淬に師事し、大事了畢の後、建仁に之きて浩無涯生頑石永相山等に參じ皆其の證明を受け、至德元年建仁の第一座に上り、尋いで三聖寺に主たり。明德元年普門院の請を受け應永五年東福寺に視篆す。晩年、肺患に罹り、病を北越に養ふ。某人に與ふる詩の序引に『僕病肺以來。久謝筆研』の語あり、病中偶作に曰く、

我箇方丈一丈居。掃除摩詰與文殊。通身渙汗三更後。石鼎彭亭跨藥爐。

又、鄉卷に題するの作あり

白雲幾度望鄉岑。負郭歸耕謀未成。開卷某山亦某水。敎人眞箇越中行。

應永十年三月四日、海藏院に寂す。語錄一策、外集に越游吟あり。兩者共に世に傳ふ。

約菴德久

德久字は約菴。泉州日根郡長隴村の人なり。幼にして高山慈照を紀州の大慈山に拜して業を受け十三歳登壇具足戒を受く。後に帆游して元國に入り宗匠を歷控す。西齊南堂待遇特に厚く侍香の職を司り此間兩たび大藏經を閱す。淨行玉律四十年、檀信敦請して大明國、嘉興府、師子墩、圓通寺に住せしむ。卽ち開堂、一香高山に供ず。時に南堂和尙疏を制して其盛事を賀す。師日本の正和二年に生れ、明の洪武九年九月廿四日彼土に寂す、卽ち本邦の永和二年也。壽六十四、僧臘五十二。遺書、並に高山の塔銘、佛祖圖等、日岩侍者に附して日本山城國建仁寺靈洞院に附せしむといふ。

無功周功

無功諱は周功。京師の人なり。冠歲にして出家、夢窓國師に就て法を受け、建仁

に在つて衆に混ずるもの五十年、道を以て自ら牧ふ。時に或は吟咏を以て自適すといふ。人あり勸むるに名位を以てすれば、笑て曰く、七尺の單は吾が五山の位なり、一盂の飯は吾が千鐘の祿なりと。聞く者之を高しとす。行年七十。而も一節移らずといふ。義堂周信、師の軸後に跋して曰く、

無功道人之語。如龍無角。古劍法兄之題。似蛇有足。噫。義堂恁麼道。早是三人證龜成鼈。

哲岩祖浚

祖浚字は哲岩。俗姓は佐伯氏、播州の人なり。年十六歲にして州の長福敎寺に游ぶ、時に東福寺の雲龍谷行化してあり、依て其の室に投じて薙髮して戒を受く。資性、機辯無碍、人を敎へて倦まず。應安三年、攝津の澄心寺に住し、同く七年、東福の普門院に移り、明德二年萬壽寺に視篆し、明年又東福寺に住山す。同く四年、本寺を退き、本成寺に主たり。此の間、學徒輻輳して市をなす。又、南禪寺に移り、應永六年退いて常喜世界に居り同く十二年八月十七日寂す。遺偈に曰く『倒臥横眠。八十二年。失脚踏斷。刹界三千』僧臘六十二。遺稿傳らず可惜。

雲溪支山

支山字は雲溪。又別に牽性老人と號す。美濃の太守土岐賴淸の子なり。後醍醐帝の元德二年紀元一千九百九十年に生る。俗姓土岐氏を以て、岐の字を分ちて支山を名とす。法を雪村友梅に嗣ぎ、播州の長良に護聖寺を開き第一世となる。至德二年八月京の安國寺に住す、開爐上堂に曰く

迅景頻驚節序催。三秋已破一冬來。箕當掃戶寒風透。榾柮圍爐煖氣回。只任口邊生白醭。何嫌頭上積靑灰。無賓主話商量絕。雨後荒庭落葉堆。

後に相國寺に視篆し、晩に玉龍菴に靖退す。

師機語圓轉、才藻映發、毳衣の士美慕せずと云ふとなし。明德二年十一月疾を示し、十四日寂す、壽六十二。語錄一卷、西巖集二冊あり。室名を牕隱と云ふ。牕隱集五冊あり。この書今は泯びて傳らず、纔かに語錄を存するのみ。

中山中嵩

師は豐後の人。軒に扁して集慶といふ。法を夢窓疎石に嗣ぎ、後に正受院に住し、應永十年八月相國寺に住し、又天龍寺に移る。同く十七年五月寂す、壽七十六。文名一世に高し、而も遺稿傳らず惜むべし。

絕海中津

中津字は絕海。蕉堅道人と號す。延元元年(紀元千九百九十六年)十一月十三日を以て土佐國津野に生る。父は藤原氏、母は惟宗氏。歲十三、名を洛西の天龍寺に隸し、師訓に服し唔唔琅々たり。夢窓國師其の神秀なるを見て甚だ器重す。觀應元年剃髮して沙彌となる。夢窓時に西芳寺に在りて圓覺經を講ず、同學の未だ曉らざる所あれば師爲めに覆講す。而も一字を差へず、衆皆歎異す。旣に入室するに曁びて應答響の如し。夢窓忻で曰く、他日臨濟を扶起する者は儞なり、厚く自愛せよと。

同く二年戒を夢窓に受けて大僧となる。十八歳にして建仁の龍山徳見に謁し、義堂周信等と衣を樞て入室す。次で大林善育（建仁卅六世）交代董補す、師をして侍藥の職に登らしむ。翌年建仁東堂放牛、結制冬節、八坂の法觀寺に就き、五頭首を請して輪次に登座說法せしむ、放牛卽ち師を請す。師衆を出でゝ問話、機辯流るゝが如し。師建仁に在ること十有二年、風雨寒暑と雖も禪誦懈怠なし、皆精進幢と稱す。貞治三年一策飄然として相州に游び、義堂青山の二兄を省し、建長の大喜忻に依る、管領基氏待遇稠厚なり。師圓覺、建長の間を歷游して化を同門に助くること前後五星霜。應安元年卅三歲にして、佐汝霖等と船を同うして支那に游ぶ。時に明の洪武元年なり。杭州の中竺に寓して全室和尚に依る、全室後に徑山に住するに逮びて、師を招きて座元と爲す、就かず。九年正月太祖皇帝、師の聲譽を聽き英武樓に召見して法要を諮詢す、奏對旨に稱ふ。帝復た召して板房に至つて日本の圖を指して、顧みて海邦の遺跡熊野の古祠を問ふ、敕あり詩を賦せしむ、師卽ち制に應じて曰く『熊野峰前徐福祠。滿山藥草雨餘肥。只今海上波濤穩。萬里好風須早歸。』と。帝和を賜ふて曰く『熊野峰高血食祠。松根琥珀也應肥。當年徐福求仙藥。直到如今更不歸。』と。衣鉢、褐裰、柱杖幷に寶鈔若干を賜ひ、特詔して歸朝を許さる。康

暦元年十月、洛西の雲居菴に住す。時に性海靈見、天龍に主たり師を擧げて第一座に任ず。翌年春、赤松義則播州の法雲寺を以て請す、妙佐汝霖を差して之に代らしむ。この秋鈞選を以て甲州の慧林寺に開法す。京師、相陽の雲衲鱗の如くに萃りて、堂宇容るゝ所なきに至る。居ること三年にして天龍寺に歸る。至德元年直言を以て將軍足利義滿の旨に忤ふ、卽ち攝津の錢原に隱る。翌年細川賴之、阿波に寶冠寺を建て、師を請して開山始祖となす。十月に至り足利義滿、專使を發して師を徵す、疾を以て堅く辭す。義滿重ねて手帖を下し、賴之に命じて師を起たしむ。賴之寶冠寺に抵りて强いて曰く、法門の汚隆、陋邦の安危、師の出處に係れりと。師已むを得ずして京に上る。卽ち命じて等持寺を董さしむ。嘉慶二年の秋、義滿等持寺に往き、師の常に着くる所の安陀衣を乞ふて受持して出づ。明德二年七月十六日、等持寺を退きて等持院に移住す。この冬十二月、義滿、山名氏清滿幸等を討つて之を敗る、禪林の諸老、幕に入つて捷を賀す。義滿法服を着けて相見し、袈裟を指して曰く、此の回、頓に敵に勝つことを獲たるは、是れ袈裟の靈驗なりと。明德、應永の間、義滿師を請して三たび相國寺に住せしめ、應永八年七月、相國の寺位を陞し、五山第一となす。師の道價を重ずるなり。同く

十二年四月五日遺偈を書して寂す。俗齡七十、僧臘五十六。偈に曰く、『虛空落地。火星亂飛。倒打筋斗。抹過鐵圍。』と。

師、少時より翰墨に聲譽あり。壯歲に及びて奎章煥發、又明に入りて季潭の門生となる、故に最も四六に妙なり。四會の語錄あり、又外集を蕉堅稿といふ。共に世に行はる。滅後五年、後圓融天皇敕して佛智廣照國師と謚し、尋いで後小松帝、淨印翊聖國師と加謚す。滅後三年門人等聞、蕉堅稿を携へて明に入り左善世道衍に序を需む、其の文に云く、

蕉堅稿序

詩之去道不遠也。蓋其繫風俗關敎化。興亡治亂。足以有徵。勸善懲惡。足以有誡。故閭巷思婦之賦。田埜小子之作。其言出於性情之正者。而孔子亦取焉。況夫郊廟朝廷會盟燕享。贊頌功德。被之於絃歌。奏之於金石者哉。以斯論之。詩者其可以末技少之而已耶。故漢魏六朝之下。至於唐宋以來。太夫士之尙於詩者特盛。然有一以風雲月露之吟。華竹丘園之詠。留連光景。取快於一時。無補世敎。是亦沅物之一端也。吾浮圖氏之於詩。尙之者猶衆。晉之湯休。唐之靈徹皎然道標齊已。宋之惠懃道潛。皆尙之而善鳴者也。然其處山林草澤之間。烟霞泉石之上。幽閑夷曠。以道自樂。故其言也。出性情之正。而不墜於庸俗。誦之讀之。使人

清耳目而暢心志也。蓋亦可羨矣。日本絶海禪師之於詩。亦善鳴者也。壯歲挾囊乘艘。泛滄溟來中國。客于抗之千歲嵓。依全室翁以求道。暇則講乎詩文。故禪師得詩之體裁。清婉峭雅。出於性情之正。雖晉唐休徹之輩。亦弗能過之也。禪師平生所爲詩。凡若干篇。其徒等聞。裒爲一帙。題曰蕉堅稿。來求余序其卷首。余謂。禪師三住名刹。據大床座。以直指之道。開示學者。望重於海內。禪師之際於詩。猶土苴耳。況夫以蕉堅擬之。奚肎沉泥於吟詠者哉。無非游戲三昧而已也。噫爲禪師之後。有尙於詩者。當以禪師爲法。愼毋效留連光景取快於一時。則去道遠矣。去道遠矣。無非玩物喪志。亦何益之有哉。故余序于篇端。使學者覩之。蓋亦有所警焉。永樂元年倉龍癸未十一月既望僧錄司左善世道衍序

中怒如心

如心字は中怒。山城國淀の人、自ら碧雲と號す。古劍妙快の法嗣なり。位は侍者に止まりて諸山に出世せず。應安元年、絶海と偕に海洋に浮んで明に入り姑蘇、金陵の間に游び、留まると十余年、彼國に在つて文名を以て稱せらる。絶海の歸東を送るの作あり、

送絶海津藏主歸日本

送君歸故國。臥病楚山幽。只可相隨去。如何獨自留。天遥孤雁遠。海濶百川收。離思與春恨。人生欲白頭。碧雲稿

又、在唐中、時に眼を患ふ。其の偶成に云く、

不愁双眼未分明。默々淸齋近物情。歌水芙蓉半暝色。隔籬蟋蟀已秋聲。華翻空裡蔕何在。灯照窓間影忽生。欲見性眞多法喩。文昌樂府是虛名。

碧雲稿一册現に存して、續群書類從文筆部に收む。其の寂年を詳にせず。

汝霖良佐

良佐字は汝霖。遠江國高園の產なり。其の生年を詳にせず。幼より出家して宗說該通し、兼て詞藻に長じて聲名叢林に喧し。蒲室抄『一』に

文章ニヲイテハ汝霖ノヨカルベシ、宋景濂ニ鍛錬アルホトニ也。云々

當時推重せられたるを知るべし。之れより先き應安元年、絶海中津と大洋に棹して明に入り蘇州の承天寺に在りて箋翰を掌る。又五山の諸大老と鍾山に入りて大

藏經を點校す。翰林學士宋景濂、師の文稿を觀て賞讃措かず、其の尾に跋して曰く

跋日本僧汝霖文稿後

右日本以門汝霖。所爲文一卷。余讀之至再。見其出史入經旁及諸子百家。固已嘉其博贍。至於遣辭。又能舒徐而弗迫。豐腴而近雅。益歎其賢。頗詢其所以致是者。益來遊中夏者久。凡遇文章鉅公。悉趨事之。故得其指教。深知規矩準繩。而能使文字從職無難也。汝霖今汎鯨波東還。以文鳴其國中。蓋無疑矣。嗚呼汝霖。禪家之流也。蕩空諸相。視五蘊四大。猶爲土苴。況身外之文乎。苟執此而不遷。或將與道相違矣。雖然汝霖徧參名山。精於禪觀。其於此義。未嘗不知之。特以如幻三昧。游戲於翰墨間爾。游戲翰墨非難。而空其心爲難。所謂心空則一切皆空。視諸世諦文字。雖有祖迹。而本無祖迹。雖有假名。而實無假名。惟一惟二惟二惟一。初何縱於道哉。觀汝霖之文者。又當於此求之。汝霖名良佐。遠州高園人。姓藤氏。嘗掌書記於蘇之承天寺。繼同五山諸大老。入鍾山點校毘盧大藏經。其同袍皆畏而愛之云。

又、明の太祖皇帝、師と絶海とを召して、熊野三山の事を問ひ賚賜甚だ渥し。天授二年春、絶海と同く歸朝し泉州の堺に寓す。足利義滿その才德を聞きて、邀へ要して法を春屋妙葩に嗣がしむ。其受業の師に歸せんことを慮りてなり。康曆二

年赤松義則の聘を受け、播州の法雲寺に開堂す。この歳將軍義滿、寶幢寺を城西嵯峨に建て、春屋を請して開山となし、師に命じて住持たらしむ。幾もなくして遷化す。其の寂年と世壽を詳にせず。駢儷の遺稿を高園集と云ふ。筑の呑碧樓に題するの詩に曰く、

石城之寺跨江濆。上有層樓最不群。風捲浪花晴似雪。天凝海氣曉如雲。龍公窟宅凭欄見。鮫女機梭欹枕聞。萬里鄕關未歸客。登臨猶自對斜曛。

と、以て其の緒餘の高雅なるを觀つべし。

椿庭海壽

海壽字は椿庭。別に木杯道人と號す。俗姓は藤氏、遠州の人なり。弱冠にして相州淨智寺に入り梵竺仙に就て剃髮受具し、暦應四年、梵仙、京の南禪に主たるに及び侍して之に隨ふ。天資穎脫にして群を儕輩に拔く、故を以て竺仙之を器重す。貞和六年同志と偕に海に浮びて元に游び諸方の知識に參尋すると二十一年、南堂欲月江印了堂照の名衲に見えて優賞を受く。又陳居士の宅に僦居して大藏經を校

勘す、其室纔に膝を容るゝに足る、揭ぐるに木杯の二字を以てす。錫を應天府の天界に掛くるの時、明の太祖住持白菴金に命じて名緇を選で大藏經を點せしむ、師も亦之れに預る。一日、帝白菴に詢て曰く、和僧にして方言に通ずるものありやと、菴、奏するに師を以てす、召して奉天殿に見へて日本四方の遐邇、皇運の治亂を問ふ。洪武五年、鄞縣の福昌寺に出世し一期の後、印を解きて歸朝す、時に本邦の應安六年なり。愠恕中其の歸を送るの作あり云く、

次南堂韻送壽首座歸扶桑　無愠

屋頭鐵馬聲丁東。明明歷歷揚眞風。老夫夢熟蓬萊宮。鈞天廣樂滿耳中。覺來軒知與神遇。逸響遺音競奔注。夢覺會無起滅心。帖然一似霑泥絮。道人推門露未乾。相見一笑非顢頇。十世古今融當念。大千沙界歸毫端。愛爾年來手脚老。出沒神機電光掃。南堂室内早鷹揚。鉢袋千鈞已傳了。翻憶當時侍禪榻。開口便受攔胷蹈。罔象明珠離水泥。軒轅寶鏡開塵匣。明朝送君鄞水邊。博多遠泛東歸船。老夫閉門乃打眠。更無心力論單傳。

克仲銘も亦文を作つて其の歸るを送つて云く、

送壽上人還日本序

日本壽上人。將返其國。乞言於嘗所遊者。而屬予序。上人首參南堂禪師。復登諸大老之門。

其聞見之博。造詣之深。蓋不言可知矣。況其所得之妙。有非文字所能形容者。雖言之而奚益也。夫上人由中國而還也。宜知中國之事。諭其國人。而中國之事浩以繁。非上人所能悉。然則吾所宜言者。莫大於是歟。共惟我皇元。奮起朔方。撫有諸夏。四夷八蠻。罔不臣服。幅員之廣。疆宇之大。雖三代無有也。都邑城郭。人民生聚之繁。中外百司。文武材能之盛。禮樂文章紀綱制度。燦然可述。漢唐而下無有也。著令西天佛子。爲皇帝師。自皇帝諸王公卿大夫士。咸稟其戒法。崇立招提蘭若。殆遍寰區。象敎之隆。漢明以來無有也。猗歟休哉。億萬斯年之基可見矣。天地之高厚。無不覆載也。日月之明。無所不照也。雨露之潤。無所不濡也。中國之大。無所不統也。越裳氏之言曰。天無烈風。海不揚波。意者中國有聖人乎。今海外諸國。熙熙以樂其生。而安其土者。皆吾聖天子深仁厚德之所涵煦也。猗歟盛哉。今上人之還也。有問焉。則以斯言告之。使而國之人知越裳氏之言爲不誣也。上人自號椿庭。嘗典藏州之天寧。端愨勤敏有志。異日其將鳴南堂之道於日本也歟。

歸朝の後、足利義滿、請して洛の眞如寺に住せしめ、次で相州の淨智寺、圓覺寺、京の天龍南禪に歷住す。又碧巖を講じ碧巖抄の著あり、又傳燈錄抄あり。晩年に語心院を南禪寺に創して逸老し、應永八年正月十二日寂す、壽八十四。著述一も今時に傳らず惜むべし。

太清宗渭

太清字は宗渭。俗姓は藤氏、相州鎌倉の產なり。歲十三にして京洛に上り、西禪院に臻りて雪村友梅に依り十六にして受具剃染す。村、播州の法雲に移るに及びて之に從ひ、後京に歸りて南禪、建仁の間に歷參す。夢窓古先等の諸老、其才器を愛して授くるに要識を以てす。再び雪村に參ずるに至りて、記莂を受け、復た南禪に歸る。尋いで美濃の龍門に移り、永和、康曆の間に相模の東勝、淨智の二寺に歷遷す。應安五年播州の寶林寺に移り、幾もなく印を解いて京に入り、南禪の蒙堂に居る。將軍足利義滿、山に入り一見して道契ひ、之を府第に延いて金剛經を講ぜしむ。卽ち請せられて天龍に住し、永德二年冬、敕を奉じて南禪に陞住す。嘉慶二年義滿また聘して相國寺の住持たらしむ。晩に雲頂寮を相國の側に築きて退居す。明德二年六月微疾あり。十二日義滿山に入りて慰問す、師几に憑りて對談す。十九日に至り遺偈を書して曰く『夢幻空華。不生不滅。撥轉大機。虛空迸裂。』と、筆を置て化す。壽七十一。定身を舁て南禪の雲門菴に塔す。語錄あり、是無

上咒と曰ひ、別に金蘭簿あり、雲溪支山と倶に編する所なり。

不遷法序

法序字は不遷。俗姓は二階堂。幼年にして天龍寺に入り、夢窓に從游して參詳歲月を累ね、江州の德雲寺に住す。時に九莖の靈芝庭に產す。後天龍寺（十六代）に住して接化に倦み、三秀院に靖退するの日、人あり大唐諸賢靈芝畫帖を贈る、故に三秀と名け地藏の像を安置す。僧堂を清寥と曰ひ、寢室を明遠と扁す。元德元年南禪寺（四十二代）に陞住し、晚年に下生院を創して第一世となる。彌勒の像を安ずるを以て下生と名く。又男山に行願院を創し、攝津の天王寺に大慈院を開く。禪餘に諸錄の要語を編して禪林集句韻と名け、外に菩薩蠻、鳳林吒之、證龜成鼈等の著あり。今時一も傳らず洵に惜むべし。室內に密菴の竹篦あり、之に銘するに背觸雙行、密菴書の七字を以てす。師南禪寺に住するの日、足利義滿駕して法筵に臨み、金襴の袈裟、香合等を與ふ、一衆皆之を榮とす。永德元年十二月四日三秀院に寂す、世壽詳ならず。朝廷謚して佛照慈明禪師と曰ふ。自照の賛に曰く『握塵尾踞

胡床。無法可說亦無禪可擧揚。有時指鹿爲馬。有時認奴作郎。暗昏々地。一道神光』

物先周格

周格字は物先。日向の人、夢窓疎石の法嗣なり。初め天龍寺の慧雲院に住し、又相國寺に遷て含潤軒に住す。塔を湊源と云ふ。其の生死の年月を詳にせず。當時文名あり、而も其の作今や傳らず惜むべし。

古劍妙快

古劍字は妙快。其生國を詳にせず。幼にして塵俗を厭ひ、夢窓國師の門下に投じて其の記を受け、出でゝ江湖の知識に請益す。尋で支那に游び愠恕中琦楚石穆菴康等の諸老に謁して悉く器重せらる。歸朝の後、天龍寺に寓す、時に光明上皇伏見の大光明寺に在り、師を召して法を問ひ給ふ。一日官茶并に御製の詩を賜ふ、師韻を次で上謝して云く『春風煮雪吐奇香。碧玉甌中水一枝。白髮野僧從眠起。薰爐日

燬讀新詩』と。永德三年八月鈞命を受けて建仁寺（五十八世）に住し、後又鎌倉の建長寺（六十一世）に移る。性來風藻の才に富み、名當代に顯はる。明より歸朝の時、船中に結制に逢ふ、偈を作て云く『圓覺伽藍海上漚。安居禁足渡頭舟。蠟人解唱還鄉曲。欵乃一聲山水幽』と。當時僧あり明に入て此偈を以て穆菴康に似す、錯て解唱を以て喚作となす。菴曰く、恐らくは誤り傳ふるならん、喚作の二字古劍の作にあらずと。その賞識を得ると此の如し。了幻集中、春日行の作あり、

春山碧。春水碧。春風匝地有何極。威音那畔卽如今。日用現前誰不識。忽憶天台一萬八千丈之秀色盤空青。攀蘿陟蹬躋峻嶒。長嘯一聲欣絶倒。走殺五百一十六箇聾聞僧。更說甚麼明靈山之指月。續少室之眞燈。玉林峯頭重回首。山長海濶天冥々。我是乾坤無事客。三玄五位都拈却。歸來抛向白雲中。一枕高眠眞上策。

又病中書懷に曰く十首

春潮拍枕夜燈孤。百苦事煎一病軀。生佛己前安樂法。分明說與藥胡蘆。

老來多懶任疎頑。禪板蒲團匹以閑。幻空更無人問疾。唯將一默對青山。

百念如氷萬病平。月移海影紙窓明。夜深驚起爐邊睡。豆在寒灰爆一聲。

白髭生唇雪滿顚。衰殘落得恣憨眠。上門多是攪閑惱。無力攔腮與一拳。

揑聚虛空作一丸。咽喉塞斷鶻崙吞。若能流暢通身汗。除却從前萬病根。
無禪無道百無憂。身上麁衣口裏饌。待我明朝喫歸去。山前也作一頭牛。
寒衣不織鬢絲々。好句難療腹自飢。極到迢々空却事。茆檐雨歇曉風吹。
不能隨處立門庭。深臥寒雲鎖竹扃。昨夜東風三尺雪。獨看靈鶴一峰青。
煨芋無香火一爐。家風愧與懶殘殊。有些相似底模樣。寒涕垂々霜茁鬚。
素壁高懸破草鞋。曉來春雪著花開。南方二十年行脚。何似山齋睡一回。

晩年天龍寺の壽光院に靖退し、優閑自適老を以て寂す。其の生死の年月を詳にせず。入元の諸作蒐め題して扶桑一葉といふ、今は泯びて法社の間に傳らず。詩集に了幻集二卷あり、今猶ほ傳ふ。

清溪通徹

通徹字は清溪。別に天游と號す。俗姓は三浦氏、相模の人なり。初め鎌倉の壽福寺に入りて下髮し、壯歲支那に游び祖庭を歷訪すると三十餘年、歸朝して夢窓疎石の法を嗣ぐ。尋いで甲州の淨居寺に住し又京に上つて臨川寺に住し遷つて天龍

に主となり尋いで南禪に昇住す。足利義滿、台翰を染め又紫衣を贈る。光嚴上皇師を召して碧巖集を講ぜしめ又禪要を問ふ。上皇契省あり、師、袈裟を付して以て表信となす。後に丹波の常照寺に住し至德二年十一月四日寂す。門人遺骨を拾ふて之を大井川に投ず、遺囑に遵ふなり。善く文辭を屬す、其の操觚觀るべき者あり、而も今世に傳らず惜むべし。

明室梵亮

梵亮字は明室。龍湫周澤の法嗣、始め虛中と號す。十八歲にして絕海中津に隨つて明に入る、彼の土の人其の詩を善くするを聞き之を留めんと欲す、絕海漸く匿して之を船に載せ逃れ歸りたりと傳ふ。應永の初め、建仁寺七十四世に住す、其生死の年月を詳にせず、遺稿も亦傳らず。

元容周頌

周頌字は元容。別に龜洋と號す。幼にして春屋妙葩の會下に投じて參詳歷年、俊麾を以て時人に稱せらる。應永二十八年八月十二日相國寺に晋み、後に寺內に龜洋院を創して靖退す。是れより先き應永二十六年夏、大明の使者來朝し敕書を齎して彼我通商の利を說く、幕府、師に命じて之を拒絕せしむ。文は載せて善隣國寶記にあり。其の一節に『征夷大將軍某。告二元容西堂一。今有二大明國使臣一來。說二兩國往來之利一。然而有二大不可者一。（中略）西堂宜以二此件一。款々說レ之。』云々、當時折衝の任に擬せられし如き其の聲望ありしを知るに足る。法嗣に惟馨梵馨あり文名を以て又一代に鳴る。其餘の事跡詳ならず、應永三十二年三月十七日寂す。

鐵舟德濟

德濟字は鐵舟。其俗姓と生死の年月を詳かにせず。下野の人なり。幼にして桑門

に入り稍長じて京に上りて天龍寺の無極志玄に依る。嘗て元に入り遍く一時の諸老宿に參詳し心地を開明す。後に法を阿波の寶陀寺に開き、又夢窓疎石の室に入りて嗣承す。後に京の萬壽寺に視篆し、住すること僅に一歳にして天龍寺の龍光院に退休す。述作二卷あり閻浮集と云ふ。東陵永璵其集に跋して曰く『其文燦然として夜光結緣の如し、覺へず人をして心目開明ならしむ、以て後昆に垂裕すべく、以て千古に照映すべし、他日必ず具眼の者あつて此の證明を同うせん』と。師天性草書に妙なり、隻字片牋だも得る者これを寶とす。初め元に在りし時、順宗皇帝其道價を崇び特に圓通大師の號を賜ふ、其德の高き以て觀るべし。其の山居の作に云く、

山居十首

抖擻人間名利埃。禪袍靜衲坐青苔。西窻落日秋將晩。墜葉紛紛下石臺。
松根閑倚听飛泉。撩亂伽梨搭瘦肩。樵徑雲埋千仭嶮。更無俗客到林邊。
老杉古檜篆紅霞。盤石垂蘿小徑斜。猿鶴不來山寂寞。風吹桂子滿茆家。
翠竇無人快道情。燒柴爐上穗煙生。世間饒有連城璧。難換山中松石淸。
藤床蕙帳靜無塵。松食草廬容此身。貝葉飜來春日永。寥寥祖道有誰親。

滿目嵐光薄霧中。千尋瀑沫界遙空。靈禽啼破午窗夢。一鼎松濤萬壑風。
千里春光入座時。高低樹色映霜眉。蘿龕閑坐無餘事。又引煙鋤畊綠蹊。
萬法由來只一源。更將何事入吟魂。搴衣欲濯小溪上。山帶斜陽岳影昏。
床頭短葛作眠少。日點半簷初見勳。埋沒此生閑便得。百年富貴是浮雲。
那伽坐久日當午。開得眼來山已青。少室門風人不會。白頭道士讀黃庭。

又靈江山居、十首の韻あり、師が志の存する所を窺ふべし。

靈江山居韻十首

萬錢難買沃州山。埋却一生方是閑。歎息楚呉冰蘗事。沈升多在愛憎間。
分袂天涯不可尋。餘生寥落恨難禁。蒼顏白髮愧相會。枯木寒灰一寸心。
前峯吐月可中庭。雪意侵衣鴈影橫。湖上故人皆俊逸。相逢誰是說無生。
動靜還收一理中。塵情不似道情濃。紙衾擁到五更刻。柘葉桑枝舞北風。
浮世豪華慨作隣。碧芙蓉下有誰親。眼中不上野狐輩。池上鳳毛能幾人。
招隱年深少見君。半窗分與嶺頭雲。山中寂歷無人問。不忍松濤午夜聞。
雨餘西崦翠成堆。困枕高眠絕點埃。黃鳥喚驚南國夢。一雙睡眼對山開。
蒲龕靜坐不攀緣。素髮蕭々氣似天。佛法未曾怕爛却。吾宗已滅瞎驢邊。

人物煎熬自晉唐。可怜逝水去忙忙。狼煙遮日少青眼。千載門風誰肯當。
自笑一生眞旅泊。還知世外有斯僧。金剛幢下寂寥甚。何日高桃照世燈。

夢巖祖應

祖應字は夢巖。其の姓氏と生年月を詳にせず。雲州の人なり。幼より英發にして夙に桑門を慕ふ、即ち洛に上り東福寺の潜溪處謙（東福三十世）を禮して落髮稟戒し、藏經の鑰を司る。後雲州に歸り門を鎖して卻掃すると殆ど二十年、聲名遠く翔り道を問ふもの衆し。遂に鈞命を以て東福寺に出世す、時に應安二年十月十三日なり。

臥雲日件錄、寛正三年十二月五日の記に曰く

廿四日。東福常喜華岳和尚來。茶話之次。及夢巖和尚之事。岳曰。昔號出雲三藏主者。夢巖。玄一峯。三藏主皆一代有名之士也。雲州鰐淵有敎寺。行基建立之地也。夢巖在雲時。敎寺穿巖之次。得一石。有祖應二字。以此呈示夢巖。巖曰。當如本埋之云云。人皆謂。巖蓋行基再來歟。妙喜中巖。聞夢巖講蒲室。曰。彼不入唐。爭知蒲室近事。因令僧行聽之。歸來如所講。告之。然中巖入唐朝所見聞之事。夢巖亦能講之。中巖後送北澗箋。曰。當見之。夢巖令合寺僧。

一日寫之。明日卽還去。夢巖不要身后留蹤迹。遺命曰。以書籍等令供本成寺祖塔修造資。又畫師アセチ其弟子也。謂人曰。平生不許寫御影。故詹下行道時。自旁寫之。云云。又近時。尙有聞夢巖講者曰。本成寺內。不足容衆。然自門外遠處聞之。亦如左右。此異事之一也。又曰（華岳也）某師哲岩。往南禪時。椿庭來過。話次曰。和尙講碧巖之時。解參同契之義曰。參音針。針同契之義也。實然乎。哲岩曰。或說有此義耳。云云。岐陽後問某曰。哲岩之義。或夢巖之說乎。有記此義之抄否。云云。

以て其の傳を補ふに足るべし。

師、天資博覽、雄辯にして文章に工なり、當時中巖圓月と名を齊うす。太岳周崇東漸徙易大愚性智岐陽方秀惟肖得巖等皆其の門に游ぶ。應安七年（紀元二千零三十三年）十一月二日安詳にして示寂。遺徒全身を東福本成寺の塔側に窆す。敕して大智圓應禪師と謚す。語錄一卷並に外集二卷あり旱霖集といふ。寶永七年刊行して世に行はる。

太岳周崇

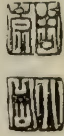
周崇字は太岳。又自ら全愚道人と號す。俗姓は一宮氏、興國六年（紀元二千零五年）阿波國

太岳周崇墨蹟

前席金剛和尚雅歸
季芳乃
佛智國師所命也俾余
作一偈以證焉云

生來在宋迴超羣
益仲須推德所薰
照覺施家第三子
一枝蘭蕊吐奇芬

太岳周崇書



に生まる。蚤くより州の寶陀寺に投じて、默翁妙誠に師事す。性敏利にして、內外の經書手に觸るれば輙ち其大義に通ず。默翁、京の臨川寺に遷るに隨ひ圓頂受具、尋いで相州に往きて金澤文庫の藏書を閱る。後に又京に歸り默翁の記莂を受く。將軍足利義滿、尊信禮接し、應永六年春、相國寺に出世し。繼で天龍寺に遷る。將軍義滿、奉ずるに金襴の袈裟を以てし、諸官員を率ゐて山に入り、筵に臨で聽法す。無績功、牧菴忠の如き、七十餘員の門人濟々として班に列る、世其多士を得たることを稱す。特に寵命を賜ふて天龍の寺位を陞せて五山第一と爲す。後又南禪寺に主たる時、畿內旱久しく、朝廷諸宗の碩德に敕して雨を神泉苑に祈らしむ、而かも驗なし。義滿卽ち師に乞ふ、師神泉苑に抵り、偈を唱へて曰く『泉苑欲尋空海蹤。靈山佛意敕神龍。方今天下憂枯涸。一雨宜沾萬國農。』と、靈雨忽ち降りて、人民抃舞す。應永十三年の頃、鹿苑院に住して僧錄司を掌り、晚年に相國の慧林院、天龍の性智院等に退休し、復た天龍に再住すといふ。

師常に漢書を講じて學徒を提撕す。幻雲文集、漢水餘波の序に云く

一百年前。慧林大岳和尚。齡未弱冠。遠遊關左以學漢書。克罵其說。業成歸洛。至乎游乎息乎之時。屢講此書。爲禦侮資。授諸的嗣妙智竺雲師云々。

應永三十年九月十四日示寂す。壽七十九、法臘六十六。遺著あり翰苑遺芳と名く。東坡の詩抄なり。又三國合運圖を製し、今に叢林に傳ふ。其學界を益する、蓋し尠少にあらず。

竹香全悟

大岳周崇の法嗣にして享德二年七月相國寺六十世に住す。居常慧林院にあり、軒を嘯竹と云ふ。讃詞の後、多く蓬萊竹香と書す。詞宗を以て當代に推さる。

東洋允彭

允彭字は東洋。絕海の法嗣なり。寶德三年幕命を承けて明國に使し、景泰帝に謁し、歸朝の後ち天龍寺に住す。晩年退いて招慶院にあり、招慶は其の師絕海の塔所たるを以てなり。文名を以て其聲叢林を壓すといふ、其の明國に在るや、一夜、彭城驛に宿して作あり、曰く、

扁舟停棹宿彭城。邃底水寒眠不成。因憶蘇仙對床地。中宵風雨弟兄情。

弟子に玉英慶瑜あり、又一代の作家なり。

東漸健易

健易字は東漸。遠江の人なり。興國四年紀元二千零三年を以つて生る。俗姓は藤原氏。母源氏、一夕龍石の徵を夢みて乃ち娠む。故に童名を龍石と云ふ。七歲にして壽福寺の華峯に投じて剃髮し、又讀書を好みて內外典を涉獵す。後に列刹に遍游して賓を建長に典り、衆に相國に首たり。明德年間出でゝ遠州の華藏寺、攝津の廣嚴寺に主となり、備中の瑞光寺に移つて、京の安國、東福六十七世南禪七十三世に歷游す。其東福に在るの日、一華庵を開剏し、南禪に移りて又回輝菴を創す。晚年常在光寺に退居し、應永三十年四月疾を示す。十四日將軍足利義持、寺に入りて疾を問ひ、十六日又使を遣して法語を求む。師便ち上堂、衆を辭して下坐し、其提唱の語を書して以て之を進む。十七日端坐偈を書して曰く『威音一箭。虛空雨片。脚頭脚尾。日面月面。』と、筆を投じて寂す。壽八十。遺徒法の如く荼毘して東福の回輝菴

に塔す。諸會の語錄若干卷、幷に龍石稿一卷あり。

惟肖得巖

得巖字は惟肖。別に蕉雪と號す。延文五年備中に生る。卯歲、州の護國寺に入り

惟肖得巖墨蹟

絶壁蒼ゝ東西崖遶欄容海似
臨池白鷗浩蕩双飛去放盡篙
梢尚未知　蕉雪老衲　得巖



草堂芳に就て剃度し、齡十六にして京に上り又、芳に從ふて參學年あり。臥雲日件錄、文安五年正月十五日の條に云く、

双桂曰。惟肖俗父。本藝州人。扶我俗父。死于戰場。故我父。養惟肖爲子。惟肖父。館于護國寺

備中門前小家。而惟肖生於此矣。爾後。芳草堂。與不昧。法昆弟。而爲護國第二世。惟肖爲其弟子。歲十六。而始出備州入京師。予曰惟肖文字。稱山陽備人。蓋指所生之地而已。非先祖本貫也。云々

以て其の所出を知るべし。又、碧山日錄、應仁二年二月十三日の條に關東負笈の記事あり、云く、

東海瓊華集　文明寫本

東海瓊華集



山門

絶海和尚住相國寺山門疏　師時居小山等持院

付千鈞於烏獲、孰敢爭能、授六轡於王良、坐將致遠、睽茲梵刹輪奐、宜得名師作新、某雖量窺浮高風、立懦採百城之諸友、海上橫行、對一乘之至尊、殿前作賦、宸奎錫寵、晝錦榮歸、嵩然玄獻、克家精甚、肅岡入鼻、一則仲父二則仲父、天作其達、是亦東坡非亦東坡、世責其任、黑作範喧人、毒氣破沙盂擲地金声、一時行藏何妨猿鶴怨三代礼楽以磬韶、鯨瘖天雨四華、山呼万歲、

客曰。建長珍藏海。一時名播於東西諸刹。少林岩惟肖。往于相。游其門年久矣。禪餘。學以韓。

柳。黃。蘇。竟究。其奥。而西回也。云々

資性叡敏にして、經史子集博捜せずと云ふことなく、文を以て一世に鳴る。將軍義持招きて和國の西堂に居らしめ、盛待顧遇す。後に攝津の棲賢寺、京の眞如寺、萬壽寺、天龍寺等に歷住し、又南禪を董す。後に少林院の雙桂軒に住して東坡の詩を講ず、人稱して双桂和尙と謂ふ。我國東坡の詩を講ずるもの師より始まる。又莊子口義を講じて抄十卷を作る。蓋し書中多く禪語を用ひて世人の曉り難きを以てなり。

曾て大有。有諸の惠襪を謝する八句あり、

垢襪着來三十年。忽看華贈意凄然。我才折線條々短。君意投針密々傳。綾足摠宜行道地。輕身欲學步虛仙。鴉頭結却靑鞋底。去訪雲門寺裡賢。

幃侍者の相陽に之くを送るの作に云く

晤蛩唧々夜漫々。相見旅懷難自寬。野寺近鐘催客暮。河關新月伴人寒。相陽覇府非全盛。常陸鄕邦可小安。前歲送兄今送弟。上東門外一長嘆。

又、書梅竹の屏風に題するの作あり。

京國探春三十歲。臨江今見早梅時。長瓶把酒風前好。短艇掀篷雨裡奇。黃鵠尋香多失侶。

白鷗玩影合能詩。繁花亂挿畫屏上。憑仗村楊寄一枝。

淸關未許雜賓干。但對此君情最親。落筆不揮金孔雀。開屏唯束碧琅玕。黃岡夜雨小樓聽。翠袖天寒空碉看。惆悵長安道傍客。釣竿苔臥舊沙灘。

語錄、疏稿の外、平生の述作を東海瓊華集と曰ふ。月江錄を按ずるに、明極楚俊を悼むの語に『耕開東海種瓊華』の句あり。東海瓊華の題名蓋し此義に取るか。永享六年十月選述の石屋眞梁の塔銘に『今年七十五齡』と記するも其の寂年を詳にせず。

玉畹梵芳

梵芳字は玉畹。春屋妙葩の法嗣なり。天資隱逸にして沈退節を守る。同門の徒、開法を勸むれども謙辭して就かず。足利義持、其の高風を慕ひ歸崇特に渥し。應永廿年の頃、南禪寺八十一代に陞住し、後に投老菴を構へて退休す。因て作あり云く、

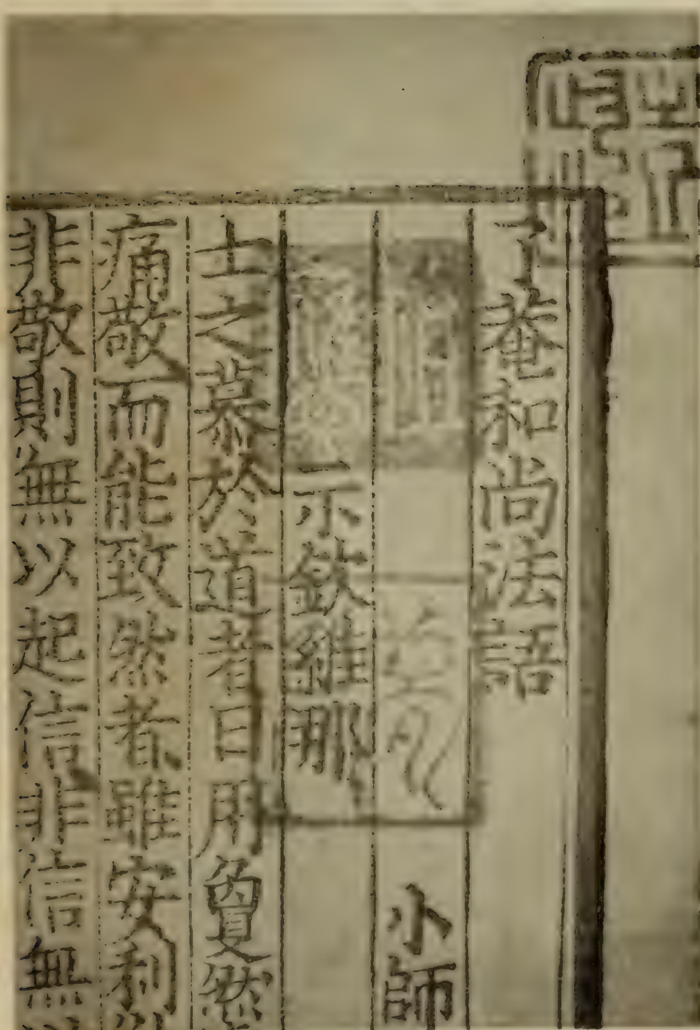
軒前脩竹綠婆娑。玉立三竿不用多。好是滿山風雨夜。虛心相對亦無他。

と。後に經を讀み感ずる所あり、乃ち紫服を脫して誓て曰く、而今叢林に出頭せ



玉畹梵芳自畫贊

夢岩祖應印影



了菴和尚法語

小師

示欽維那

士之慕於道者日用

痛敬而能致然者雖安利

非敬則無以起信非信無

ずと。又偈を作つて云く、
經過七十餘年事。寵辱悲歡夢一場。若得山中安樂地。看雲日々快移牀。
乃ち足利義滿父子に留呈して徑ちに近江に如き草菴を結びて風月を友とし優游多年の後、老を以て寂す。師、丹青を善くし好んで蘭を畫く。今時往々にして存す、獲るもの之を百襲す。

觀中中諦

建武、曆應の昔。七朝帝師夢窓疎石、一度崛起して法旌を京師に翻すや、天下靡然として其の道風に嚮ひ、爾來數百年、佛光法派は宗門の覇柄を掌中に納め、自餘の法派を席卷するに至れり。加之、夢窓國師の門下、名匠濟々として輩出し、所謂七十子を以て數ふるに至る。就中、義堂、絕海、空谷、觀中、龍湫、古劍の如き其の白眉を以て稱せらる。觀中の聲名は之は義堂、絕海に比するに未だ多く世に稱せられずと雖も、其の道德、其の高風、決して二師の下に在らざるなり。
傳を按ずるに中諦字は觀中、康永元年阿波に生る。九歲にして人に件はれて京師

に上り夢窓國師を禮して童役を執る。翌年祝髪受具、此の秋國師遷化す。依て一指頭の禪に參捻する能はず、卽ち諸兄に就きて習學す。又北嶺南都等の敎院に游ぶ。十九歲にして東の方、相州に之き老兄義堂に隨從す。堂諄々として垂誨して云く、速に南洵の策を揚ぐべしと。仍て贈行に五八の伽陀を以てす、其の頷聯に曰く、入海須窮底、登山莫憚危。と、盖し深く激勵する所あるなり。仍て別を義堂に告げ、且つ一絕を呈して曰く

眷々之餘。賦一絕。爲他時再會張本。

曠劫恩波攪不乾。白頭再會說佗年。激翻萬派西江水。將好歸來報舊緣。

と。途、九州を過ぎ博多の津に於て遙に故國を望み、又慨然長歌して曰く

海東聞說拔船頭。不是明州定越州。衣上無端今夜露。故園松菊入新秋。

と。一帆商船に掉して支那に入り、台州に到る、時に元の至正二十四年也。台州より又福州に到る。經過する所は洛陽橋なり。登臨する所は超凡閣なり。適々黃巾の亂あり、道路通ぜず、平生徧參の志を果す能はず。竟に裓を卷いて東歸し、名を天龍寺に籍す。初め書狀の職を領す、其の法兄普明國師の招きに因るなり。朝鍛暮鍊幾もなくして玄旨に徹す。後に建仁寺に寓し、記室の位に在りて法戰一

塲す。又天龍寺に還り後板位に轉ず、夢窓國師三十三回忌に當るを以てなり。又第一座に遷り應機說法、人天を聳動する者兩度。一は天龍初めて秉拂の法儀を擧行するにより、一は又天龍の法堂新に成るを以てなり。卽ち彼に此れに拂柄を持する者三たび、道聲漸く高くして嘉慶元年七月阿波の國南明山安國補陀寺に請せられ、故國の山川と相親むこと周歲。二年四月法兄義堂和尙、寂を南禪の慈氏院に示す。師遙かに哀悼の偈を打して曰く、

金襴已屬刹竿頭。夜雪鰲山恨未休。翻喜痛腸今日淚。更無蕭索爲人流。

幾もなくして安國を辭す。退院の日、上堂示衆に曰く

風露滿身眠未醒。又携瓶錫上靑萸。殷勤洞江長松樹。歲晚歸來劚茯苓。住山之間。門前種松

越て明德二年七月十八日、相國寺方丈の嶋寮に於て鳳凰山等持寺の請を受け、八月某日晋寺上堂す。住山後三年、癸酉元旦作あり曰く、

奮地失聲飛爆竹。曉間爐火賀新年。老婆裙子借來短。措大帽簷裝了穿。水鳥樹林千佛界。春風桃李一家筵。有人若問昇平事。只道街頭颺碌甎。

と。此の頃、法兄絕海和尙相國寺に住す。九月相國寺の法鼓新鞔、洪鐘又南都より至り、絕海和尙重陽上堂あり。師其の韻を和して曰く、

和絕海和尙重陽韻 于時法鼓新鞔

關河秋色送鴻雁。卽是三玄分折辰。九日菊迎靑眼友。萬年松護白眉人。巨鐘遠載鯨鳴海。法鼓鞔來雷起春。提唱問酬親目擊。後生何幸沐恩新。

應永七年二月二十四日、將軍足利義滿、相國寺を以て請す。師、崇壽院に就て請を受け、三月八日住山上堂あり。是の年重陽上堂に曰く

九日菊花迎令節。三玄戈甲屬昇平。汾州句擘虛空破。彭澤名垂宇宙淸。老去登高無脚力。歸來就下有餘生。宗門重繫諸郞手。洛社風流萬古情。

翌八年三月五日、朝廷、相國の位を陞して五山第一となす。師爲に謝恩上堂、台旆山に入りて證明す。次で四月十四日、法堂新に成る應永三年立柱師又慶讃上堂あり。提綱の語末に曰く『須知新法堂新法座。亦從大檀越自性根本智中流出。云々』此の頃の偶作に曰く

題嵐山二株櫻花爭先後

年々二月看花時。一樹先開一樹遲。無賴今霄嵐際雨。滿山無一未開枝。

偶作

隱逸新題隱逸情。飡芝服木氣靜明。壺中天地三千界。笛裡關山一兩聲。

寄遠友二首

天地秋高木末風。空山獨夜思重々。夢回枕上人何在。月落一聲長樂鐘。
牛南馬北情何限。燕去鴻來信不通。只道空山深夜夢。秋風吹入白雲邊。

話別

南去北來三十年。中間心事白鷗前。丈夫不洒離筵涙。若似今宵恐是偏。

この年孟秋、槌拂に倦で寺事を謝す。退院上堂に曰く、

提起何如放下輕。自慚身老絆浮名。幸有歸來雲山在。一把莿茨折脚鐺。

將軍義滿、仍て乾德菴を創し、以て師が休憩の地と爲さしむ。又細川賴之、永泰院を建てゝ延請す師此に遷る。應永十三年春、疾に罹り四月三日衆を集め、遺偈を書して寂す。壽六十五。遺偈に曰く『平呑佛祖。斡旋乾坤。末後一句。怒雷驚奔』兩所の塔院、天龍に在るを永泰と曰ひ、相國に在るを乾德と曰ふ。嘉吉元年六月、將軍義敎の薨後乾德を改め普廣院と稱す。永泰は既に廢亡して遺趾をも存せず、たゞ普廣の一院を存するのみ。滅後敕あり性眞圓智禪師と謚す。三會の語錄幷に外集あり、靑幛と名く。滅後、空谷明應和尙、師の像に讃して曰く、

髫齔詣雲居。朋輩推精銳。遠作江南游。欲救濟北弊。兵革梗七閩。瓶盂厄三歲。大唐無禪師。

扶桑決歸計。果熟薰道香。文彩拂塵翳。江湖名勝。叢社等儕。王侯碩儒。同門昆弟。瑞世補陀。知土地緣。遷席等持。受檀越禮。萬年山頂。法皷揚震天聲。永泰院後。窣堵鎮未來際。芝蘭玉樹蔚堦除。家風又有英靈繼。空谷錄、三

僅々百十有五字、而も師の生涯を叙し得て餘蘊なく、啻に其の小傳に充つるを得るのみならず、以て本傳の足らざる所を補ふべし。

大周周奝

周奝字は大周。法を天龍寺の大照淵に嗣ぐ。三河の人なり。自ら三周又は東川と號す。軒を同慶といふ。嵯峨に永安院を創して假居し文墨を以て樂みとなす。應永十五年十一月相國寺に住し、同く二十六年七月廿四日寂す。壽七十二。遺稿傳らず、惜むべし。

仲芳圓伊

巖中周噩畫贊



緜谷

萬年周瓞侍者見需別称字曰
緜谷偈以證焉
源出自西漸向東有如大法逐
時隆餘波文治之通漢造化將
推澤物切
應永三十二年乙巳平月書于
鹿苑東軒　巖中叟周噩

綿谷周健墨蹟

圓伊字は仲芳。長州の人なり。正平九年紀元二千十四年零生る。歳甫めて八歳にして筑前博多の聖福寺に往き、南嶺越を拜して鬀具し、長じて南都に往いて西大寺の高湛律師に從つて戒律を聞き、又洛に入りて禪林の諸老に參ず。錫を東福に掛くるに及で分坐接得す。應永九年七月法を播州の法雲寺に開き、一居六年。同く十四年七月廣覺寺に住し、十六年三月二日京の建仁寺に移る。後に台命を奉じて南禪寺に陞住し、晩年に及び建仁寺の長慶院に退居す。應永二十年の季夏、微疾に罹り八月十五日遺偈を書して坐逝す。壽六十。語錄二卷あり、轉々寫錄して叢林の間に傳ふ。又文集あり、蘭室集と云ふ。

儼仲周噩

周噩字は儼仲。九條報恩寺殿の子なり。自ら笑府と號し軒を養浩と稱し院を持地又は勝智といふ。又別に懶雲の號あり。春屋妙葩の法嗣、應永二十年三月、相國寺に住し、正長元年六月寂す。壽七十。敕して智海大珠禪師と諡す。當時幕府より明國へ遣はす表文、師の手に成るもの多し。文は錄して善隣國寶記にあり、亦

是れ一代の碩學なり。

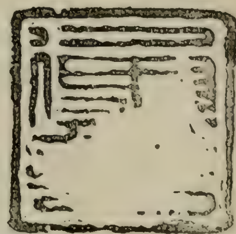
西胤俊承

俊承字は西胤。正平十三年（紀元二千零十八年）筑後國に生る。幼にして出家し、後に絕海の嗣となり大に法雷を振ふ。天資才藻に富み、詩偈を以て其の名叢林に高し。後に相國寺に視篆して二十三世に列し、晩年雲松軒に退居す。その凍鶴の賦に曰く『凍羽摧頹口似瘖。蓬萊夢斷海雲深。誰憐窮壑三冬雪。不鎖丹霄萬里心。』と。又曲肱亭に題して曰く『寵辱驚人易白頭。誰知陋巷百無憂。曉趨不踏宮街雪。一臥能輕萬戶侯。』と。應永二十九年十一月五日寂す。壽六十五。外集一篇あり眞愚稿といふ。

惟忠通恕

通恕字は惟忠。自ら雲壑道人と號す。貞和五年（紀元二千零九年）に生る。其生國を詳にせず。法を建仁の無涯仁浩に嗣ぎ、學內外に通ずるを以て衆の爲に稱せらる。應永

惟忠通恕印影





十年四月越中金剛寺の請を受け、同く十五年八月安國寺に住し、十七年八月建仁寺に視篆し、相繼いで天龍、南禪を董し、後に常在光寺に隱居す。輦下の士庶、其徳に歸する者衆し。師提唱の外、吟詠を善くす、集を雲壑猿吟と稱す。其偶作に曰く『遠游齋志是耶非。雨雪千山更落暉。嬌頭天涯倦飛鳥。翩々認得舊巣歸』と。永享元年九月二十五日遺偈を書して寂す。春秋八十一。

繋驢橛　惟忠通恕自筆稿本

樞府十詠　以下皆應鈞命

勝音閣　安觀音

圓通門戶絕追尋本自衆生悟入深竹雨松風閑側耳分明勝彼世間音

覺苑殿　安佛菩薩

新開寶殿五雲間覺苑春回幾許般博得微塵佛世界不妨親在掌中觀

塔を空海、軒を同文、錄を繫驟櫪、集を雲壑猿吟と云ひ、齋を白雲丹壑と號す。蓋し義堂周信の題する所なりといふ。

勝剛長柔

長柔字は勝剛。傳宗派の法嗣、自ら梅野々人と號す。東福寺の莊嚴院に住し、寶德年間、東福寺百四十七世に視篆す。秉拂の時、每に乾峰國師の例を擧げ、答話するに必ず押韻す。西待者を送るの句に曰く『從此無心愛良夜。任他明月下西樓』と。當時叢林の徒傳へて之を誦す。著述に梅野的聞あり。臥雲日件錄、寶德二年正月五日の記に曰く、

抄二梅野摘聞十六一。予瑞溪周鳳就二現住東福柔勝剛一借二此抄一。就中。抄取者過半。試二手於戊辰秋一。畢二功於今日一。名曰二梅野摘聞一。蓋勝剛少壯。聞二江西講一者再三。漢字和字相半。而書之。梅野乃勝剛齋號也。

と。今時既に泯びて傳らず。晩年石州の東光寺に佚老し、康正二年十二月十三日寂す。瑞溪周鳳曾て某人に寄する書の一節に云く、

上略予初居₂鹿苑₁之日。與₂普門勝剛₁同來。此爲₂初見₁。寶文安四年丁卯閏二月廿一日也。中略文安六年己巳。予住₂北山鹿苑₁。正月廿八日勝寄₂書₁。預告₂起龍可₁來。披書未₁了果來。中略寶德二年庚午九月廿八日。於₂永安龍岡座上₁相會。勝剛亦在₁此。同年冬。勝剛飯₂石州₁。閉₂門古寺₁者六年。於是。景南。竺雲等諸老。貽₁書招₁之。盖起龍與₁予所₁謀也。然。勝剛遂不₁來。乙亥八月來。傳₂勝剛書₁。中略康正丙子冬。勝剛唱₂滅於崇觀鄕寺₁云々。下略

當時、京師の諸老と交り其の推重を受けたるを知るべし。

愕隱慧竇

慧竇字は愕隱。又別に自ら關西と號す。正平十二年紀元二千零十七年筑後國に產る。幼より絕海に依りて業を習ふ。天資聰警にして楷書を善くし、辭藻に富む。至德三年明國に入り諸山の名師を歷詢し、飽參の後ち歸棹を催す。承天の仲銘新和尙、偈を送りて曰く、

蕃航轉₁舵浙江濱。歸到₂扶桑₁二月春。海若朝迎霞似₁綺。天吳夜舞浪如₁銀。心傳₂列祖源流遠₁。身被₂中朝雨露新₁。鄕國君臣應₂共喜₁。郭門幢蓋擁₂朱輪₁。

と。又崇報の行中仁和尚送歸の偈を賦して曰く『十年問法天王地萬里鄕山碧海東。

南遊藁

七言絶句

次韻壽詣五臺文殊二首

多費草鞋南北行五臺雲在九重城元無諸佛能然
迫手裡莫耶從自擎
文殊曾與善財行百十城如十五城知識門頭無一
物空拳元為小兒擎

己永歲窩吸江淳藏主賀元旦以偈同其韻見意
扶起宗門還尔曹岩隈竊得聽松濤吸西江尽無消
滴一國師前來覓島



愕隱南遊稿　古邦慧淳筆痕

雪室有禪傳鼻祖。蒲帆無恙轉秋風。』と。歸朝の後、土佐の吸江菴に逸居して、風雅

を以て歲月を送る。尋いで細川頼之阿波の寶冠寺を以て師を請す。應永十七年相國寺に視篆し、同く二十四年天龍寺に遷る。相國寺退院の偈に云く、

一片孤雲天地間。卷舒出沒不能閑。飄々更欲投何處。又逐秋風去此山。

後又相國の長德院に歸休し、應永三十二年二月十八日寂す。壽六十歲。詩集一卷あり南游稿といふ。康正二年、後花園天皇其の德を追崇し、謚を佛慧正續國師と賜ふ、敕使綸紙を奉じて山に入り伶人樂を奏し、順溪和尚陞座慶讃すといふ。

岐陽方秀

方秀字は岐陽。不二道人と號す。貞治二年（紀元二千零廿三年一説康安元年十二月廿五日）に讃岐に生る。時に州亂れ、父佐伯清泰北越に奔る。母師を携へて京に上り、外祖父に依る。祖父儒を業とす。師の英敏なるを見て、授くるに詩書を以てす。其の卒するに及び東福寺の石窓泉に投じて童役を執る。十二歲にして安國寺の靈源濟を拜して、親炙すること八年の久しきに及び、大いに知解を增す。辭して相州に往て錫を壽福寺に掛け、諸老に謁す。居ること周歲にして、京に回り南禪に寓す。又南都北嶺

の講肆に列して精探日あり。三十にして東福寺に歸り、藏鑰を司り、要職に歷任す。應永九年明の天倫彜一菴如等使を奉じて來朝す。師面識せんと欲するに、官禁許さず、屢々書を以て往來す。〔二〕師その博才を稱す。足利義持〔三〕常に請して法

南嶽馬祖百丈黃蘗臨濟乃至聖一寶覺虎關生身
嫡嫡正統證明傳授的的相承宿受佛勅而所撰出
佛書不論不損不害之傳法也自餘末書佛意而害皆爲
損害更何言與正傳諸禪非衆講讀何以故有不損
不害佛書不論佛眼所見之損害者豈可取乎無所依
是非爲自執有人言諸佛所通者外題先過猶不
及者是之謂乎夫諸佛所通有麁通有細通共爲

岐陽方秀自筆稿本

を問ひ、崇敬尤も膴し。應永十年九月法を讚岐の道福寺に開らき、同く十五年京の普門寺に據り、同く十八年東福寺に出世す。入寺の日、將軍義持贈るに金襴の

袈裟を以てす。師五十八歳にして天龍寺の請に應ず、俄に風痺に嬰りて東福の栗棘庵に退休す。又起つて南禪寺に陞住し、幾もなくして寺事を謝し、不二庵を東福寺の側に構へて以て靖居す。一侍者あり其の肖像を繪て贊を請ふ、師題して曰く『一則不レ二。不レ二則一。性相平等。匪レ影匪レ質』と。後ち舊痾頻りに發して奄爾として寂す。春秋六十二（一説に六十四歳）實に應永三十一年二月三日なり。師は天性閒思を好みて之を左右に資る。其著述啻に宗門に功あるのみならず、其の儒學界を裨益したる、蓋し亦大なる者あり。遺稿に琴川錄、不二遺稿等あり。文思豐麗後學の範となすに足る。

南英周宗

周宗字は南英。別に懶雲と號す。貞治二年（紀元二千零二十三年）武州に生る。俗姓は秦氏。齡十歳にして建長寺の古天周誓（同寺五十七世）に侍して童役を執り、十六歳薙髮進具し侍局に居す。常に文學を好み、典籍に通串し、又大年祥登、古劍妙快等の宿老に從ひて其薀を採る。伯英德俊建長寺に住するや命じて藏鑰を司らしむ。尋いで京に

上り春屋妙葩絶海中津等に參じ、皆稱賞を蒙る。後に相州に還るに及び、病に遘ふて起たざること三年。熟々生死事大を念ふに、前途茫々として、平生の所學一字も之を用ゆること能はず。且つ泣き誓て曰く、我れ如し病癒へば、無上菩提を求めて生死の根源を斷絶せんと。既にして平復す。武州の淸水山中に入て出でざること五年文書を棄てゝ禪修を專にす。時あつて食はざること旬餘。人の白崖生和尙の禪風を稱するを聞き往て參謁す。一夜僧の口を漱ぎ水を吐く聲を聞て忽然として省するあり、頌を作て崖に呈す。是れより、機辯捷出して衆皆欽仰す。崖後に圓福寺に遷る、師に命じて泉龍を補はしむ。應永五年越州の織田大隱居士、牛耕寺を創して請す、卽ち衆の爲に楞嚴を講ず。居ること五年、去て江州の枥木山に遯る。後に中原實際居士、請して山を出でしめ、京の私第に館して法を問ふ。居士又江州の治內に於て香積寺を創建し、請して開山第一世となす。後に檀越大江氏招くに泉龍寺を以てす、辭して赴かず。又建長の公命あり、諸老疏を製して慫慂す。亦辭して行かず。永享十年四月の初め、左右に謂て曰く、今方に寒からず暑からず、老僧行脚し去らんと、十五日の晩に至り微疾を示す。卽ち囑して曰く、老僧滅後闍維畢て骨を以て河に投ぜよ、塔を建つること勿れ、齋を設くるこ

と勿れ、勉强して道を辨せよ、愼て怠慢すること勿れと。跏趺して化す。壽七十六、法臘六十二。語錄一卷あり世に行はる。

大用無用

無用字は大用。其の師承と生死の年月詳ならず。南禪寺の雲門菴に住し、景南英文と時を同うして相交はる。辭世の偈に曰く『七十又一。大事了畢。虛空紙窄。擱須彌筆』と大聲に唱へて寂す。一生磊落を以て世を終る。而も當代詩文の達者を以て推奬を受けたりといふ。

海門承朝

承朝字は海門。後醍醐帝の庶子なり。別號を伊川、又は百拙翁と稱し、軒を睡足と云ふ。法を空谷明應に嗣ぎ相國寺の常德院に住し能書を以て當代に名あり。應永三十年九月廿七日相國寺に晋山し、永享の始め南禪に住し同く十一年秋再住す。

後に天龍に移りて慶壽院に住し、嘉吉三年五月九日寂す。壽七十。勅して寶智圓明禪師と諡す。嘗て松風澗水圖に題して云く、

澗水松風宿世盟。且憑繪事慰斯情。冷々堪洗移文愧。瑟々寧隨喝道聲。半屋孤雲多態度。同參夜雨有陰晴。華陽貞白鍾山遠。來受紅樓奉制榮。

雲居海門叟承朝

曇仲道芳

道芳字は曇仲。空谷明應の法嗣なり。當時性海靈見椿庭海壽太淸宗渭春屋妙葩乃至義堂絕海の諸老に謁して皆推重せられ、又足利義滿、義持等の寵遇を受く。四六文に工にして、當時大方の聘を承くる者、必ずその請疏を待て以て眉目となす。諸方より巨刹を以て請すれども門を掩ふて却掃す。後に相國寺內に養源院を創して屛居し、玄徒を提撕す。應永十六年三月廿九日寂す。遺偈に曰く『四十三年。不坐不禪。掀翻大海。抹過靑天。』遺稿に騈驪一策あり、今時稀れに叢林の間に傳へて、觀る者之れを珍とす。師、始め竺曇と號す、攸叙作る所の『東山養源院記』に其の

行狀を叙して曰く、

竺曇兄。百年佳士也。幼穎發。謁二佛日一（空谷明應）上二龜阜一。擢充二楞嚴唱首一。音吐容止。遣二意意消一。早爲二無已聖公。劍關提公。所二稱賞一。（中略）迨二佛日移二相國新寺一。陪從服勤。道陶德冶。侍二香司一藏。結制。爲レ衆秉拂（中略）凡承二大方聘一者。必待二翁請疏一以爲二眉目一。（中略）若二大智。壽寧。退耕。楞伽。慈氏。勝定。雲門。玉龍。全愚。乾德一則中古名宿也。忘年相交。若二嚴仲。惟肖。仲芳。太白。東漸。岐陽一則當時人傑也。欽レ衽服膺。又辱二天山。顯山二相公寵遇一。襟度痛快。談論雅閟。世指以爲二佛日法道所一レ繫。是以望而挹レ風者。就而就レ役者。曰禪。曰詩。曰文。各勵二其業一者。一經二品題一。齊二紫十倍一。戶履無二虛日一。門下徒弟。亦二十餘輩。皆非二庸徒一。嘗僑二佛日塔一。陰自榜二養源一。蓋其中有所養也（下略）

禪文共に一代の大宗師たるを知るべし。

堅中圭密

圭密字は堅中。天龍寺の僧なり。而も其の師承詳ならず。或はいふ春屋妙葩の法嗣なりと、善隣國寶記の中に訴笑雲の言を引きて曰く『天龍寺永育書記。堅中弟子。嘗謂レ人曰。我師三通使命於大明。其表皆我師所作也』云々。又曰『堅中。壯年游大明。能

通方言。歸朝後。屢通使命。如其應永中。隨天倫一菴行。則謝建文帝來使之意也。然及至彼國。永樂帝新卽位。天倫一菴爲前帝使。纔入國耳。不得反命。於是堅中號賀新主之使。仍通此表也』と。以て當代の作家たりしを知るべし。

景南英文

英文字は景南。俗姓は佐竹氏。貞治三年常州に生る。佐竹義基の第六子なり。幼にして洛に上り東福寺に入り大方用に就て句讀を受け釋典儒籍、目を游ばしめずといふとなし。嗣法の後、萬壽、東福、南禪に歴住し晩年に東山の常在光寺に靖退す。永享十二年足利義敎、洛東八坂の塔を修興して法觀寺に就て大齋會を設く。義敎、師を請して導師たらしむ、時に齡七十六。詞辯渙然として聞く者皆歸崇せざるはなし。幾もなくして南禪寺に東禪院を創し老を養ふ。夢窓國師百年忌の頌に云く、

門外河聲熾然說。屋頭山色本來身。百年三萬六千日。日々龍華三會春。

本朝高僧傳に享德三年九月廿二日、八十三歲にして寂すとなす。而も『享德改元

八月景南叟英文。暮齢八十八書焉』の識語ある雪岫朔首座の紀州に還るを送るの眞蹟現存するを觀れば、其の寂年詳ならず。併せて高僧傳の誤を訂す。

天錫成綸

成綸字は天錫。京都の人、絕海中津の法嗣なり。始め相國寺に居り、後に洛西の寶幢寺に住し、又鎌倉の圓覺寺に住す。後年に江州に善隆寺を創し、別に來薰軒を建てゝ居常讀書に耽りたりといふ。遺稿一も傳らず、又其生沒の年月を詳にせず。

大年祥登

祥登字は大年。紀州の人なり。建長寺了堂安の法嗣にして、應安の初年、伯英德俊と偕に元に入り名宿の間を參叩す。歸朝の後、建仁に住し、又南禪に陞住す。後年瑞龍山中に禪林院を創し常に學徒を提撕して倦怠なく、幾旬眞風を仰ぐに至

れりといふ。一日諸山の宿老と齊に足利義持の第に至る、義持一幅の畵幅あり席上諸老の題贊を需む、時に絶海も亦席を同うす、卽ち師に謂て云く、將軍の需に應ずる者は師に非ずんば不可なり、我當に筆を執らんと。義持、人をして之を壁上に掛けしむ、乃ち達磨の頂相なり。師口を銜て云く、

九年面壁。架一張弓。盡取天下。置吾彀中。

と。義持掌を拊つて稱嘆し列坐其の卽妙に感じたりといふ。其の沒年を詳にせず。

大用有諸

有諸字は大用。幼にして、太淸宗渭の門に投じて參詳功を累ね、印可を得て後播州の寶林寺に住し、尋で建仁寺一百四十一世に視篆す。後又公命に應じて南禪寺に陞り、退て雲門庵に住す。應永二十年正月南禪の表率寮にありて南禪寺記を作り、永享四年四月、雪村大和尙行道記一篇を著はす。其の生死の年月と壽臘とを詳にせず。嘗て法華撮注八卷を著はし、大に後學を裨益す。遺稿を獅子吼集といふ。今時既に泯びて傳らず、可惜哉。

大椿周亨

周亨字は大椿。豊州の人なり。夙に天龍寺に入りて句讀を受け、義堂周信に從つて參詳歳月を重ね、後に法を義堂に嗣ぐ。應永の中年南禪寺（六十三代）に陞住し、幾もなくして寺内に雲臥菴を創して靖退し、居常此に住して接化の傍ら講學を怠らず、盛に朱子の學風を鼓吹したるものゝ如し。一弟子あり梵蕚と云ふ、字は竺華、法を大椿に嗣ぎ、長祿二年南禪寺（百八十八代）に陞住す。竺華嘗て相國寺の瑞溪周鳳を訪ひ、師翁大椿が幼年苦學の狀を語る、その事載せて臥雲日件錄寶德三年閏十月の條にあり、云く、

三日長照院竺華來過（中略）竺華曰吾翁大椿築紫人也。少年東游就常州師〇〇學四書五經。始聞孟子講時食不足。就人求豆一斗掛之座隅。日熬一握以療飢耳。如此者凡五旬。後聞易講而乏資用。爲之西歸紫陽。求財於親族得錢十五貫。自持又東游。遂得易學云々。予曰（瑞溪）今時如此困學者不復夢見之。

その幼時苦學の狀以て見るべし。嘗て安國寺に晋住の時、太白眞玄、江湖の疏を

製して之に贈る、文は載せて太白の鴉臭集にあり。云く、

亨大椿住安國慈氏師相易之居號南陽

朝廷聘士。起諸葛於南陽。學者求師。仰韓公於北斗。顧宗通說之通具備。要獨善兼善之兩全。某劇壘俊機。臥樓豪氣。胸中兵甲。直透鐵壁銀山。舌上波瀾。倒流黃河碧海。發而中的。鳴則驚人。慈氏居補處尊。時運至矣。瑫公主安國席。衆心屬焉。矧茲弓旌。嘉招足舉禮樂盛典。叢林改觀。翕然象遶龍圍。湖海同盟。慰藉寒鷺冷。

應永二十年歟五月十日寂す。遺稿傳らず惜むべし。

古幢周勝

周勝字は古幢。別に無染叟と稱す。俗姓は清水谷、京師華冑の產なり。叔母玉淵は細川賴之の適夫人にして、賴之子なし故に眞子の如く之を視るといふ。七歲にして不遷法序に投じ名を天龍の籍に繫ぐ。永德元年、足利義滿法序をして南禪の席を董さしむ、師も亦隨つて移る。此の冬、法序寂す。是れより、義堂空谷觀中太岳の諸老に親炙す。是れ皆四海の僧望、一代の師範なり故に其の覃研涵育の功、

知るべし。廿三歳にして絶海中津の門に游び、名位漸く高く法齡已に壯なるに及び、離塵の志益深く、一夕飜然逃れ去つて南紀に竄伏し、三山を歷覽し、又阿州の五臺山に上る。時に義滿、官使を遣はし歸洛を迫る。遂に止を得ずして京に歸り空谷明應に相國寺に侍す。然も素心已に決して改むべからず、一夕潛かに小指を截ち一偈を血書して又逃れ去る。義滿其の慕道の志切なるを感じ遂に挽回せず。偈に云く、

天生魯鈍病相仍。說法爲人吾不能。去後是非揔無管。水邊林下一閑僧。

と。海内の學徒皆之を誦す。爾しより姓名を泯して自ら離幻道人と號し、撥草瞻風六十餘州を踏遍すること十有五年。山川の奇境、神仙の名踪に逢ふては優游留滯して以て進むを忘れ、又海岸湖島、嘉林奇崖、棲遲に堪ふべき所あれば、自ら榛を開き茅を誅して以て靜慮の室となせしもの布いて諸州にあり。其の關左に赴くや、路、遠州の潮見坂を經て一偈あり云く、

東行昔歲侍官游。烏帽黃塵輿不幽。雨笠烟簑江畔路。眼明今日看沙鷗。

と。常に熊野の境を愛し留游三回に及びしといふ。年四十一、足利義持鈞軸の始め師の道を慕ひ徵して洛に歸らしめ卽日、相國寺の表率寮に置き、數日にして西

山景德の命あり。三月入寺、任にあること四年。又等持寺の帖を受け任にあること七年。一衆欽服して赤子の慈父を視るが如し。應永廿六年七月相國寺住持の帖を受け、期に先つて將軍、金襴の袈裟を製して之を授け、就て華偈を求む。即ち一頌を寫し寵賜を謝して云く、

金縷裁成一領衣。恩光新自相公闈。萬年峯頂祝宵日。搭起須增朝旭輝。

八月入寺、三年を經て印を解き、嵯峨の三秀院に歸り、後に天龍の席を次ぎ、又鹿苑院に移つて僧錄の職を司る。幾もなくして南禪寺に昇住し一代の寵榮四衆目を拭ふ。永享五年二月、赤痢に罹り十二月、終に寂す。壽六十四。語錄外集ありしも、今は泯びて傳らず。

仲芳中正

中正字は仲芳。曇仲芳の法嗣、自ら一止子と號す。相國寺普廣院の僧なり。始め曇仲芳に從つて學び、後に絶海中津の門に游ぶ。博學を以て一世に名あり。又其の書法、眞草兼ね備へて自ら一家を成す。故に其書を求むる者、常に戸外に滿つ。

凡そ佛宇官舍の殿門に榜し、柱壁に題する者は悉く師の一手に出づ。而して獲る者之れを至寶とす。足利義滿、其名を聞き、徵して之れに見ゆ。爾來幕府に出入して献納虛日なし。應永八年我が國信使に從つて明に入る。時に彼の國、永樂改元の初年なり。明の世宗皇帝、其の筆札を善くするを聞き命じて永樂通寶の四字を書せしめ、之を銅錢に鑄せしむ。又相國承天禪寺の六字を書せしめ、之を法被に綉ひ、我が國に贈る。後に足利義政特に鈞帖を降し擢でゝ西堂に任ず。辭して就かず。寶德三年正月廿一日寂す。壽七十九。終身平僧を以て終る。横川の京華集中『書江山小隱圖詩後』の一篇、其の傳を補ふに足るべきものあり、錄して參照に備ふ。

書江山小隱圖詩後

江山小隱圖詩。我養源老漢作之。蕉堅師添竄之。書乃普光仲方老人之眞蹟也。可謂三絕矣。相國心月藏司者老人之寧馨也。祕之篋笥久矣。甲午載。心月適得江山圖。仍副此詩於其上。以爲一軸。裝褙完好可觀也。謂余曰。某單派孤宗。不能發揮先德。可不太息乎。儻借一辭。傳之不朽。賜孰加焉。况此軸也。若翁之驪珠。而不可棄置者也。余屢之絕嘆。詩中有筆。々中有詩。吾翁卽若翁也。畵又配之。上下江山樵村乎。漁落乎。何處不小隱哉。詩畵一意。如不

虛設也。異乎。靈石曾謂中岩曰。汝鄉風俗不欲成人。是憲言也。老人一代僧望。四朝遺老也。豈可與湛輩湮沒無聞也哉。余雖不敏。請舉其梗槩。以解鄉不成之嘲也。老人始從養源而學此詩。想此時所筆也。後遊蕉堅之門。凡所聞之道。不得於養源者得之蕉堅也。探牘百家。遊刃諸藝。其書法也。當世第一。眞草兼備。自成一家。求其書者。戶外之屨常滿矣。夫佛廬宮舍之碁布天下也。或榜殿門。或題柱壁者。盡出於老人一手。寔希世至寶也。鹿苑相公。丞聞其名。徵而見之。自此出入蓮府。獻納無虛日矣。應永辛巳從國信使而南遊。蓋奉鈞命也。時大明永樂紀元也。於是乎我使者不通華言。以牘奏對天子。以老人善於筆札。試御書院。遂命老人書永樂通寶四字。鑄之銅錢。書相國承天禪寺六字。綉之法被。以贈我國。々人到今榮焉。既而晝錦回國。硯於鯨海筆於燕山。書勢倍萬于前。可以知也。勝定普廣兩相繼起。老人又從事其側。如鹿苑故事。今相當軸之始。特降鈞帖。擢任大方西堂之位。辭而不就。壽七十九。絕口竟不言出世兩字。一榮一辱無移其守。賢哉。歲寒然後知松柏之凋也。其是謂歟。我聞秀紫芝叅盡張魏公幕下。有筆力有才略矣。而彼則一魏公。此則四相公。外而賛輔世敎。內而斧藻宗猷。非其筆力才略過人者。奚臻于茲哉。按天台陶九成。著書史會要。洪武丙辰鏤於梓。以行于世。其末有謂云。傑斗南。巽權仲。宗虞永興書全用造國字。假如而此三高僧。皆我國之產也。自丙辰到永樂。洎于三十年。恨天不留陶九成也。嗚呼使老人先光之於

史筆。三高僧風斯在焉耳。雖然牋上有鐵畫銀鈎。被底有懸針垂露。是無字之記也。是不摩之碑也。金聲乎中華之南。又玉振乎扶桑之東。又書史一編云乎哉。心月諱梵初。孜々於學。咄々於書。不墜父風。一麟足矣。北磵曰。近時直指似蘭亭。棗木梅花揔不眞。叢林凋謝一葉報秋。直指蘭亭。眞贋無辨焉。心月勉旃。

文明六年立秋後一日。萬年村僧横川景三書。

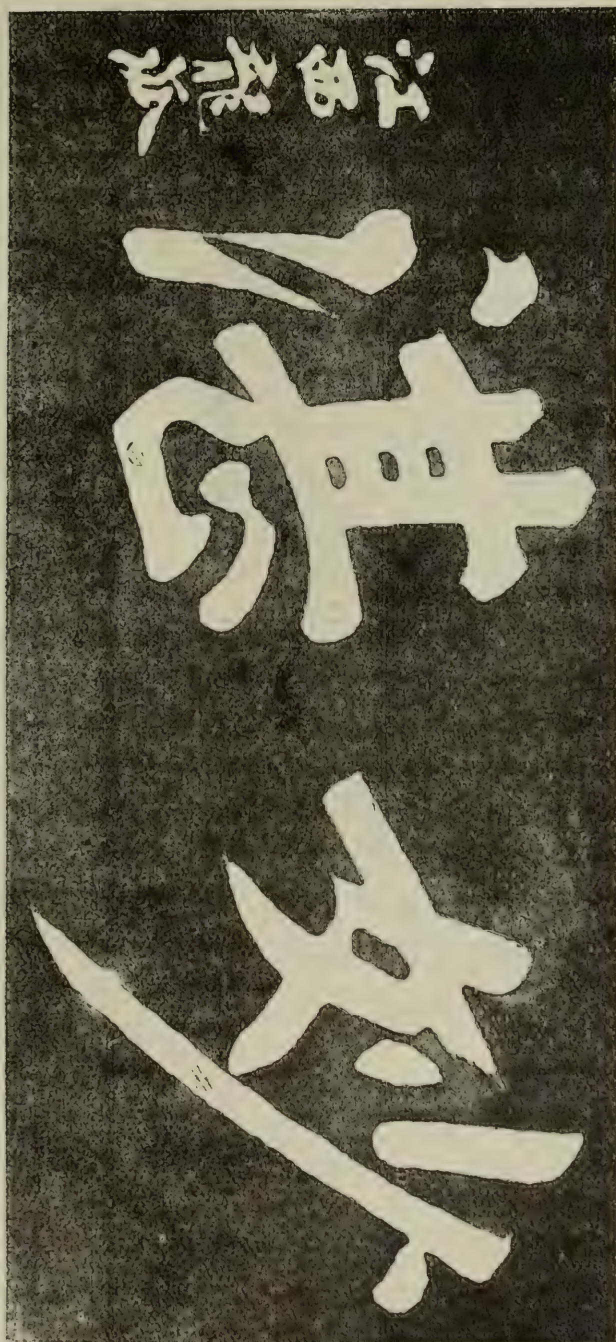
慶仲周賀

周賀字は慶仲。別に漚華道人と號す。春屋妙葩に法を嗣ぎ、相國寺二十五世に住し、晩年西山に勝寶菴を剏めて靖退し優々文墨を弄して樂みたりといふ。應永三十二年八月廿八日寂す、壽六十三。『四皓圍碁圖』の作に曰く、

太公一起髩斑々。不復磻溪把釣竿。四老安劉便歸去。山雲未濕舊碁盤。

江西龍派

龍派字は江西。別に豩菴、木蛇、續翠と號す。下總太守千葉師氏の二子なり。



江西龍派題

天授元年紀元二千零三十五年京師に生る。夙に建仁寺の天祥一麟に隨事して室に入り堂に升る。天性俊逸にして文辭を以て法社の中に鳴る。故に衆僧席を望み、公卿門に伺ふ。初め建仁百五十四世に住して後に南禪に陞住し、晩年建仁寺の續翠軒に退居す。文安三年八月十三日寂す。壽七十二。心田其の他界を悼むの偈に云く、

四海江西馬大師。緇門柱礎法耆龜。東山抔土掩光日。一慟呑聲不爲私。

嘗て東坡の詩を抄して、天馬玉津沫といひ。又外集を續翠集といふ。

平仲中衡

中衡字は平仲。俗姓は佐々木氏。法を天龍寺の太岳周崇に嗣ぎ、久しく天龍寺にあり。自ら臥游道人、又は金華道人と號す。嘉吉三年六月十八日相國寺に住し、又寺內に常德院を創し、軒に扁して享嘉といふ。公文を領して住山せず、洛西太秦の安樂院に掩土す。嘗て『洛西看花』の作あり曰く、

人是深衣司馬公。洛居花木鎖春風。禪心淡似梨雲白。詩興濃於桃雨紅。

梅陽章江

章江字は梅陽。近江の人、自ら茗溪章江と號す。建仁寺の僧にして平生述作する所多く、南禪の琴叔景趣と其の閭を同うし氣類の相似たるを以て深交あり。嘗て琴叔と應仁の亂を江州に避け、日に詩賦を以て酬唱す、因て『梅陽琴叔百絕』の作あり。其の卷首に曰く、

亂離之間。余與琴叔知藏。寓居湖陰。一日相與語曰。方今洛諸友。浮沈異途。存沒相半也。二人幸同枌社。非前緣之攸致也耶。願賦詩百篇。異日俱記萍水之會矣。云々。

と。其の村社迎燕の題に曰く、

民村二月餉東郊。社燕初來度柳梢。舊主相迎却相愧。杏花春雨屢漂巢。

扇面富士の作に云く、

勢壓群山壯氣增。何人扇上寫崚嶒。只疑手裡淸風起。吹落雲間雪一層。

梅琴百絕、今時存して、獲るもの之を珍とす。

攸叙承倫

承倫字は攸叙。相國寺常德院の僧なり。文名を以て一代に高し。應永十五年、幕府の命を承けて明國に使し、永享三年、東山養源院記を作る。晩年に及び眼を患ひて寂す。其の沒年と世壽を詳にせず。『假山富士』の作に曰く、

山跨三州白雪堆。庭前一簣小崔嵬。去他富士使誰守。夜半煩君負得回。

常に東山の曇仲と相交り道交太だ密なりといふ。仲の滅後、其の院記の末に記して『余於翁也。不道不泳其涯。蝦蟹爾。不道不假其潤。菅蒯爾。所謂向歐陽子說文字也。發大寂定中一輾者必矣』と。蓋し一代の宗師なり。

笑雲瑞訴

瑞訴字は笑雲。嵯峨の臨川寺季章の法嗣、夢窓の法孫なり。嘗て國信を將て明國に使し、歸朝の後、臨川寺に住し、寛正六年の頃南禪寺二百六代に視篆す。當時又、

詞賦の達者を以て聞ゆ。瑞溪の臥雲日件錄、長祿二年正月八日の記に曰く『等持寺首座訴笑雲來曰。某渡唐時。推齋四扇去。一扇以代翰墨全書一部』云々。其の餘の遺事詳ならず。

東旭等輝

等輝字は東旭。越前の人。相國寺嚴仲周噩の法嗣なり。後に南禪の上生院に住し、齊に扁して無々といふ、天章徵或之れが銘を作る。當時、詞賦を以て頗る叢林の間に名あり。又菴を嵯峨に營み龜巢と稱し、晩年滅を此所にとるといふ。『江天暮雪』の作に云く、

萬里淸湘雪暗空。諸聞玉立水西東。漁翁不覺暮寒重。醉看江天飛絮風。

竹菴大縁

竹菴諱は大緣。靈嶽の神足登山庸に嗣法の後、建仁寺に住し、學德一世に高く、

門下に季弘大叔の如き碩匠を打出せり。應永廿一年の頃、東福の永明院に住して抄書を專らにし、永享十一年四月廿二日寂す。嘗て『鷄冠花戲効陳宮愁』の題に曰く、

薄媚早秋含曉霞。後庭愁絶惜容華。君王不覺韓禽虎。玉樹歌長對此花。

慕哲龍攀

龍攀字は慕哲。建仁寺の一麟一菴の法嗣にして江西龍派の肉弟なり。常に建仁寺の護國院に居り諸老に就て經史を學ぶ。位は藏主に止まりて出世せず。中年故ありて左遷せられ、晩年に古人の詩を集め、新編集一卷を編す。生死の年月を詳にせず。

九鼎器重

器重字は九鼎。別に錦棻と號す。位は西堂に止まりて諸山に出世せず、久しく建

仁寺の大中院に住す。嘗て攝津の廣嚴寺に住し、幾もなくして又東山に歸り、深く江西龍派、九淵龍賝、慕哲龍攀と交はりて、斯事を商量したりといふ。傳燈錄に載する所、詩三首あり

潮

浪屋濤山能幾尋。閣浮提樹欲平沈。睡中歷々普門境。十萬軍聲作梵音。

睡足軒

車如流水馬如龍。何似高軒睡足濃。縛得枕中百年夢。不聞樓上五更鐘。

竹院閑話

竹裏閑房人不知。移牀款話逐襟期。雖然一宿同眞親。贏得俱參玉版師。

高逸の聲調、以て其の爲人を窺ふべし。遺稿を蘋齋集といふ。今は泯びて叢祉に傳らず。

心田清播

清播字は心田。別に又、春耕、謙齋、聽雨叟と稱す。淡路の人なり。天授元年（紀元二千

〇三五年十に生る。九歳にして洛に上り建仁寺の嘉隱軒に投じ柏庭清祖に就て習學し、十四歳にして削染納戒す。性資蒲柳の質、後年其の自述の中に『予年十四。始有瘰癧之憂。爾來灸以艾。傅以膏。未嘗一日不爲之煩悶也。然每煮通草以飮焉』（猿吟集）の語あり。十八歳にして南禪、建仁の間を往來して一菴麟、大中益に參じ、又津陽に於て惟

心田清播自筆稿本

肖に從ひ學ぶ。聽雨稿に

戊子之歲。余與季海外史。在海崎之僑居。從肖翁而學。麗澤之好。以不爲不少。日月過鳥。十稔于今。及來京邑。屢面分榻。

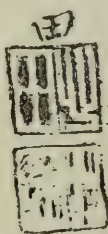
と云ひ、又、

丁酉暮春之季。予將辭少林惟肖講帷也云々。

と。其の盆を惟肖に受けたるの大なるを知るべし。曾て藏鑰を建仁に司り、結制秉拂す。社中の人、皆其の提唱を稱す。後に移て播州にあること九年、後年播陽の故人に寄するに、

雲萍蹤跡一分携。兩地三年魂夢迷。我亦同邦爲相覓。秋風飛錫海門西。

の作あり。諸菴西肇建仁百三十一代建仁に主たる時擧げて第一座となす、時に四十八歳なり。將軍足利義持鈞帖を下して伊勢の正興寺に出世せしむ。居ること十年猶ほ一日の如し。後に足利義敎、命じて、京の寶幢寺に移らしむ。嘉吉元年建仁寺に移り、次で又南禪に陞住す、時に年六十九。南禪に住せし時、會々三門の修造あり、其繁事を厭ふて退院上堂に偈を說て云く『補宗無力擧千鈞。白髮秋風一葉身。五鳳層樓修造手。還佗本分作家人』と。義政、命じて伏見の常在光寺を董さしむ。住すること久しからずして退院し、建仁の大統院に靖居し



心田清播墨蹟

史書の渉獵を以て樂みとなす。嘗て淡陽某人の畫軸に題して云く、
淡山淡水畫圖中。一夕歸心兩鬢蓬。自說京門羈旅枕。五更桐葉戰西風。
其の懶菴上人を送る七言八句あり、
丁亥之春。余始識懶菴老人于津陽寓舍。相看如故。共慰羈旅。今春余將卒業。復來于此。懶菴亦在焉。無何告余曰。淡之山也。淡之水也。余所以樂也。今將辭去。留之不可。乃借栖賢師山水圖詩韻。以喜其志。兼壯其行云。
萍水相看亦偶然。因來再見野花妍。空房夜雨疎燈下。曲渚春波白鳥邊。咫尺淡山堪送別。尋常京國少忘年。未應濕跡漁樵裡。鳳詔何時達九尺。
長樂夜泊の五言八句に云く、
夜宿萬松寺。曉聽長樂鐘。山光侵戸近。空翠上衣濃。游客倦雲鳥。老師高臥龍。風烟隣里接。此後更相從。津陽作、萬松山長樂寺、宵翁隱處、
文安四年に寂す、壽七十三。四會の語錄並に外集二篇あり、文集を春耕集と云ひ、詩集を聽雨集といふ。共に叢林の間に轉寫して、獲る者これを珍襲す。

翶之慧鳳

慧鳳字は翺之。貞治の初め美濃に生る。幼にして東福寺の岐陽方秀に投じ、這の事を究明して又出世せず。永享の初年支那に游び蘇杭の間に參尋す。江西其の行を送るの作に云く、

萬里浮盃鬓未斑。求師中國訪名山。扶桑葉走海塵起。學道莫成誓無還。

留まること數年。歸朝の後、東福寺の岩栖院に住す。嘉吉元年九月、將軍足利義政、德政を行ふ。師德政論一篇を作り、以て天下に布く。論に云く、

人君代天立極。爲天下之心焉。蓋心以御萬物。人君以御天下也。唐虞之天下。樂唐虞之心。桀紂之天下。病於桀紂之政。謂之暴焉。唐虞之政。謂之德焉。且夫人君以德重於上。則天下定於安矣。人君以暴重於上。則天下栗於疑矣。堯有不肖。舜有頑嚚。父不得而傳之於子。子不能得而受之於父。一暴一德。不移而遠。天下有暴主。一人之暴也。天下無人主。天下之暴也。民以相戮。天下失心。况德政仁治之主乎。昔至大宗皇帝。謂宰臣趙某曰。今南北征伐交發。一假寐。非朕之心也。朕聞。海外有國。國主南面而居其所而已。凡百司之務。佐扶之良。擧以總矣。朕甚美之。皇朝府公之權。與人民半。府公若有梁頹之變。則赦放罷市。於是。細民之奸猾者。乘以爲不飫之需矣。金谷之周於急者。土壤之鬻於人者。貧躬成良家之隸皂者。黨附氣應。群呼而類和矣。一鄕干而萬鄕喁矣。滔滔皆是。富兒鼠走。貧男螗睨。戈矛四攻。殆將

赭於山丘。謂之德政。嗚呼是何哉。昔汝之梁。朝將無繼於暮。汝之服。冬將有死於凍。彼出金以利汝之一冬。彼出穀以支乎汝之一日。方於此時。德彼如父。敬彼如主。彼何讐哉。百計將不有行利於彼之生焉。彼非徒富有其金谷奇貨。以豐碩其口體。聚蓄其聲色。以肆盈彼之所欲而已。彼亦昔如汝之貧。一圭之物不妄使。一黍之粟不妄分。飮不敢自啗。冷不敢自衣。守之如城。僅克臻於玆焉。而後沾親腃膽於窮族。國用之不足也。官吏不責汝。而責彼矣。軍實之不洽也。士卒不給汝。而給彼矣。彼保愛錐末毫芒。以俟於家國鄉黨不時之備焉。脫龜筒而割生肉矣。彼獨何人乎。僕切以爲。凡治天下。仁以成經。義以成權。雖寬不可忘於義。雖察不可忘於仁。天下不可以無重望之大臣。天下不可以無遠謀之機臣。無遠謀不能以應時變。無重望不能以服衆心。必有重望大臣。而副以遠謀之機臣。內以仁與義守之。外以寬與察資之。四海可坐而覩於掌上也。況里下黠氓。千鈞之弩。豈足假老擘焉乎。眉山夫子之言曰。人能碎子鈞。不能無失聲於破缶。能搏猛虎。不能不失色於蜂蠆。吾請論之。天下之民。一富而十貧。十饑而一飽。衆勝於寡。少歸於多。古今之勢也。如人之治不起之沉痾。先證知其脈路。而洞識其不平之氣。不調之血。在肝在肺。在於心脾命門府乎藏乎。然後視君臣上下之品。投之藥膏肓之病其可起也。察彼情。伺彼隙。不使彼知。而期彼於降矣。是不足多費術焉。今一細民之紛起。一家之竭乏。雖似小故。其弊有大可畏者焉。實其下而犯上之兆。上

而受制於下之漸也。幸而無陳吳之伍之唾手而睨天者而已。烏知手滑不知所止。有至於無所可奈之何者矣。可謂不飫之需也。嗚呼天下之爲天下。以勢焉耳。今夫庶民之從於士卒。士卒之從於將相。將相之從於一人。皆以勢耳。今且苟一失其勢。擧止不得其所。奸猾之流乘之。而百桀紂暴於下矣。故曰有暴主一人之暴也。天下無人主。天下之暴也。民以相戮。天下失心。繇此言之。是固蜂類之必不可不拂者也。經之常之理也。仁之不得止者也。昔者泰階和平。岳瀆封禪惠於下民。專示恩。方聖主之升霞。念彼貧匱無告之民。下以均等之法。謂之德政。時又氣淳。予者不甚傷。得者不甚競。可謂上下順承。政令發於德矣。方今四海待治。府中之權。如盤石焉。奇計妙斡。神威雷行。天下之勢。實歸乎羽翼大臣之手矣。然大大小小。權之道也義之本也。事之奇通也。元凶未誅。舊惡未報。不似小赦彼貧愚之所乞。以弭封內之啅啅。以事彼大之爲上策也。況富者之散財。如臨河汲水。雖失有餘。窮者得金。如涸鱗之遇於濕。飲小爲生。若能如彼之所乞。窮者可以忘半年之患。富者涉於三年。儆亦能有所復於其舊焉。而後致其主於唐虞三代之治。以使其民樂其治而醉於其化。於是乎黔首熙熙於下焉。衣冠濟濟於上焉。武作武之遊。文作文之遊。抃於市。歌於野。是則天下之心。失焉而後得也。可謂德政有驗矣。天下豈有勢之失仁治焉者哉。況社稷宗廟英靈。幡祠勢祚苟尙在上。必有所足爲者焉。區區痛心。曉敢克倣于杞人之愚焉也乎哉。

或責幼子謂。庖人之庖尸祝不踰蹲俎而代焉。子只子之道告於人可也。天下之事。自有其人。余咲曰。樵子之評臺閣簪者之說劉項是寧涉於事乎。余與子同是羽葉之人耳。余之論。有焉可也。子之誠也。有焉可也。否焉可也。奚以求譽於人。怯毀於人乎哉。子且卷子之舌。掩子之口。聽余之論可也。余只出於一時茶話之資緣而已。

寛正六年、周防に游び西游稿の著あり、九淵龍睬、村庵靈彥等之れが序跋を作る。遺稿を竹居清事といふ。清事は文多くして詩少なく、西游は詩多くして文少なし。後年、明人守黒子、竹居清事の後に題して云く、

右慧鳳禪師語錄一帙。其友蘭隱上人携至中華。求予印正者。如予既賛以一詩。不足以發禪師之蘊。故後言曰。觀師之文。蓋僧而達於治者也。使其早從吾道得入官使之列。其弘詞奥論。豈不有稗於化理哉。惜乎具大辨才。而悉歸於空諦。有大智慧。而卒付之覺乘。實斯文不幸也。然其望之理。卽抱之氣。則不以地位而有間焉。鳳也能以其窮文之心。窮究其師之道。不矜己不傲物。不以智自滿。不以學自高。優柔以求之。諷咏以得之。則祖祖相承之業。燈燈相續之談。將不在子而在誰也。文章云乎哉。遂識如右。

寛正五六年の頃寂す。蔗軒日錄、文明十六年十一月七日の條に

夜夢翺之。翺之話及眞淨文禪師之事。吁。此老逝去已及二十年。云々。

擾亂して族黨禍に罹る者多し。家人師を携へて深山に避け、一古寺に投ず。寺主その幼冲を愍みて、護摩壇の下に匿し、躬ら其座に登て手印口咒して云く、此兒難に罹らば、我も亦倶に死せんと。既にして追兵跡を尋ね來りて、捜索至らざる所なし、唯だ壇下を顧みずして去る。師遂に脱することを得て同姓の人に依る。十一歳建仁寺の一菴一麟に從つて沙彌となる。菴甚だ器重し十七歳得度進具す。

瑞巖龍惺墨蹟

嘗て云く、世間の文字に精ならずんば、聖賢の所爲を知る能はずと。乃ち經史百家の書より、古今の襍記に至るまで、榜捜してその及ばざらんことを恐る。後に其の學ぶ所を捨て、專一に禪坐し、菴に從ふて印記を受く、時に齡廿四。後に跡を諸山に寄せて、屢々高職に進み、建仁にありて分坐說法す。加賀の福昌寺駿河の清見寺、筑前の聖福寺の如き、或は同門、或は僧錄司より疏請せらるゝも堅く辭して就かず。文安三年將軍義政、請じて建仁に住せしめ寶德二年朝命を奉じて南禪寺に主たり。住すること僅かに半載、老を告げ印

を解きて、建仁寺の靈源菴に退靖す。長祿四年の秋微恙を示し、諸徒藥餌を勸む。師云く、我れ能事畢る、何の待つ所あらんと。叱して受けず、言笑常の如し。僧錄司瑞溪周鳳、自ら藥劑を持して安を問ふて之を薦む、師受けて嘗めず。一夜筆を援り偈を書して云く、『通貫三際。彌綸十方。一機瞥轉。石火電光』と。其の末に書して曰く『送於祖塔傍。掩土。煩九淵和尚。唱無常偈諸公珍重。長祿四年閏九月初五』と。筆を擲ちて遷化す。壽七十六。諸徒遺命に遵ひ、護國の塔下、一菴と江西との左に窆す。二會の語錄並に外集あり蟬闇外稿といふ。

常菴龍崇

常菴字は龍崇。別に角虎道人寅闇栗浦東里等の號あり、東野州常緣の子なり。幼にして京の建仁寺に投じ正宗龍統を師として童役を執る。資性明敏にして、早くより儒釋の書を讀む。齡十歲の時、人あり語つて曰く、小兒未だ詩を作ることを解せずやと、師聲に應じて吟じて曰く、『庭堅生八歲。口始解言詩。今古同中異。何恨二年遲。』と其俊才一時の美談となる。稍や長じて染衣稟戒坐臥苟もせず、參究年を

累ねて法を常菴に嗣ぎ、薩州の大願寺に住し、後に洛西の眞如寺に移る。居常相國寺の景徐周麟、建仁寺の雪嶺永瑾と深く交を訂し、禪餘文墨を以て樂しむ。嘗て潤甫の來訪を謝するの作に曰く、

月照閑庭半掩扉。仙風吹裊六銖衣。相逢猶訝相逢未。一片香雲繞夢飛。

と、梅花硯の詩に云く、

一泓寒碧是西湖。岸々有花鑴小孤。醉起試毫昏月下。從人誤作墨梅圖。

又、仙人春睡圖の作に題して云く、

疑是華山人姓陳。對花酣睡亦天眞。不騎白鳳騎胡蝶。吟遍十洲三島春。

永正十四年六月三日、幕命を以て建仁寺（二百六十三世）に視篆し住すること一年。越へて天文五年九月五日建仁の塔院に寂す。遺稿二卷あり、文集を角虎集、詩集を寅闇稿といふ。外に語錄二卷、崇常菴文集一卷あり。語錄は今時叢林の間に傳らず、惜むべし。

雲章一慶

一慶字は雲章。別に流芳と號し、書齋に扁して玉渚といふ。至德三年五月十二日京師に生る。九條經嗣の子なり。幼より朝紳の榮を厭ひ、齡六歲にして山崎の成恩寺に之き通言首座に就て句讀を受け、尋で名を東福寺に顯す。應永九年、明の使僧天倫道彝、一菴一如等本邦に來聘す、因て僧の覺曇を介して通謁す。又城北の聖壽寺に往き岐陽方秀に參じて內外の典籍を綜覽し就て學ぶ所甚だ多く、南都に游學して華嚴法相等をも研究したりといふ。岐陽の東福寺に移るや往て輪藏を掌管し、又常に岐陽と碧巖集を評論し、其の推獎を受くること多し。曾て奇山然の語を看て自ら領悟し、永享三年普門院に開堂し一香奇山の爲に拈出す。永享七年後小松上皇の詔に應じ、禁闕に入て元亨釋書を講ず。嘉吉元年東福寺百卅二代に住し四來の龍象を接化し、寶德元年冬南禪寺百七十二代に陞住す。居ること九旬にして東福寺に歸り寶渚菴に靖居す。師平日叢林の日に隱微に就くを悲み、恒に百丈清規を講じて學徒を警醒し、遂に諸家の說を考へて淸規綱要を著し、又五燈錄の異同あるを惜み五燈一覽圖を製し學者の便に備ふ。每に喜で程朱の說を誦し、仍て理氣性情圖を製し、後又、一性五性例儒圖の作あり。蓋し儒學は岐陽の衣鉢を襲ぎたる者なるべし。平生身を持すること甚だ嚴にして永享七年より寶德三年に至

る十七年間曾て脇席に著けず。寶德元年疾に嬰るや戯れに口占あり『一十五年坐不臥、一百余日臥不坐』云々と。應永の末年岐陽に從つて不二菴に在りし時、義堂周信の空華日工集を見て、葉間にありし義堂自筆の『近來京中禪院諸件』の一紙を私せんとして果さず、後年、相國寺の瑞溪之を得て裝軸し、後辭を師に需む、卽ち記して曰く、

一慶四十年前。在岐翁不二室。偶閲空華日工集。葉間挿自書禪院諸件。予將私藏以爲已有。而不果矣。後每悔之。一日訪前僧錄瑞溪和尙於壽德隱處。卽以此軸見示。披覽驚喜。所謂物見主眼卓竪也。因說以前事。嗚呼。是乃叢林千載龜鑑也。昔年不立斯規。吾徒豈得存于今日乎。和尙親裝祕之。蓋亦心在于斯矣哉。

寬正壬午孟春下澣鷲峯山主一慶書

而して其の義堂自筆の一紙は左の如し

近來京中禪院諸件

一、儉約。點心一麪一羔茶子幷菓子各三種。飯菜六種（或五）追膳汁菜共三種細飯一切止也

一、疊子緣。布高麗用之

一、大小院不許酒入門中。冷汁用醋調之若大齋會於門外調之
一、諷經罷。回向未終衆散事。堅制止之
一、五山以下住持。非器用人不許擧之
右件々皆依官府命大小院一變而守之

師は寔に岐陽門下の秀才にして、啻に宗內に功あるのみならず、我が中世宋學の流傳に貢獻したる大なる者ありと謂ふべし。寬正三年正月廿三日寂す。滅後諡を賜ふて弘宗禪師といふ。

碧山日錄寬正三年正月廿二日の記に、師が臨終の狀を記して詳なり。云く、

二十二日壬子。常照檀越醫師法眼某。謁寶渚伺候診脉。既而語話之次。以法眼年頭白所賦偈白之。和尙乃和之曰。居士手中誰及他。其行大過畢陵迦。先廬每歲耆英會。唱起滿城平樂歌。法眼辱之退也。又逮晩覓紙於傍侍。援筆大書曰。卽心卽佛非心非佛。不涉一途阿彌陀佛。師禪觀之餘脩淨法。故有此語也。云々。

同く二十三日の條に又其の滅後の事を記して云く、

二十三日癸丑。寶渚和尙示寂。遺偈曰。打破虛空。拗折主丈。秤尾無星。半斤八兩。子弟舉龕赴山崎成恩以掩土。赴寶渚以諸弟送葬於山崎而無人。只哭歸耳。云々。

同門の徒、翔之慧鳳、師の行實を記して餘蘊なし。併せ錄して未だ見ざる人の便に供ふ。其の狀に云く、

日本國東福雲章禪師行實之狀

海東有大宗匠東福國師聖一爾公。得法於杭州府臨安縣徑山佛鑑禪師範公。範公乃楊岐會公九世之孫。臨濟大師一十六葉之的裔也。國師道合王臣。化行國內。丞相藤道家公。最欽其德風。創大精藍於平安城之東南。命曰東福。推而考之。當是趙宋嘉熙淳祐之交焉。藤公之於吾國也。乃其世政柄者矣。其先甞封乎春日。謂之春日神焉。自大織冠淡海公。始領宰輔之任。子孫胥繼。獨專一位。而不敢援之他人者。凡二十一葉。成五百有餘年。國人目之曰執柄家也。東福於吾國也。五大禪刹之一也。國師之戢化也。其距今也。亦且二百星霜。爾來據其席者。率皆國師之一派矣。子生孫。孫生子。愈久愈繁。其僧廬之依山沿澗者。金碧耀而棟甍出焉。數里之際。寅晡之候。鐘梵互答。遊此山中者。如入佛國土。自然使人脫凡骨。先是國師嗣法之子。附墳塔於東福者。僅一十三人。尤號巨擘。奇山禪師然公。國師眞傳之子。而在族譜爲子姪也。甞以國師之囑。受常樂普門兩處之委託。使其徒弟。甲乙遞代也。後奇山之徒。以普門歸之東福矣。奇山之窣堵。在都城之南。可十數里。謂之成恩。成恩之徒相率而謀。又以常樂。如普門之例焉。且約東福元老宿師。回作之契券曰。吾之徒。微如此。萬

一得人。門庭或振。其歸吾徒乎。亦不為晩。人以為知言。比者。奇山之門。有大禪師。名一慶號雲章。平安城人也。姓藤氏。左丞相道家公七葉之胤。今關白相公之兄也。日本至德三年。丙寅五月十二日生桃花坊本第也。廿四年辛未。師甫六歲。入山崎成恩作童。初主僧通言首座。夢詣春日之社。取青蓮華。栽之殿前。翌日肩輿載師而臻。言公異焉。乃引手謁其祖塔下。俾拜其像。無何隷東福。三十四年辛巳。師十六歲。稟具足戒。明季壬午。皇華使者天寧天倫彝公。上竺一庵如公。來于國焉。師因价僧覺曇。以通謁矣。（曇乃入大明國。呼曇菩薩者）天倫一見器之。有偈示曰。十二年前蚤出家。因緣傳得祖袈裟。黃梅夜半曾分付。把住無容失左車。書其終曰。以祝遠到也。遂往城北聖壽。從岐陽秀公遊。旭鍛曛鍊。一莫不至厥極者矣。及秀公住東福。請師居藏主職。二十年癸巳。遊南台。染指於賢首慈恩之旨。以禪不外於敎也。壬寅二月。師命工肖岐陽禪師眞。求其自題。禪師乃題其上。其略曰。與慶藏主。評論碧巖集。至其羅紋結角之處。低掌一咲。而已。得其推重者如此也。三十三年丙午。在東福後堂寮。結制秉拂。庚戌三月。受普門請。入寺法語。一香供奇山也。師曾因覽奇山語。有自領者。遂曰薦福古公彼何人乎。吾不可自欺也。（古公讀雲門錄。有得。因嗣雲門。雲門古公。相距一百年餘）於是乎嗣奇山。乙卯。太上皇賜手書。講元亨釋書。嘉吉元年辛酉。遷東福。戊巳四月。敷政門院之薨也。命從於浮圖之法。而闍維之。俾師說法。法語載之本錄。寶德元年己巳六月。太上皇特命畫者。繪其自像。以請師之語於其

上。乃躬灑翰。膽國詞一闋其後。國人以爲榮矣。十月有南禪之帖命。南禪乃佛心禪師肇化之大道場。而先龜山皇所賜宅也。禪宇之布於吾國者。弗翅數百萬。然而其位實無與南禪伍矣。佛心亦國師傳道之上首也。寺舊有佛心像。龜山賜贊。以鎭乎寺。師住山之日。以謂寺之至寶莫以過矣。乃疊命繪之事。以聞之國皇。國皇又親書龜山贊語。以賜。其末有應南禪長老雲章禪師求之十字。又以爲榮也。十二月解印佚老。師天資不與時牽。力存古道。自悼正宗日就隱微。而流弊滋盛。平居之日。恒講百丈古規。以繩其太終於邪典之歸者。槩考長蘆澤山東陽諸家之言。自仍其舊貫。以幷乎一焉。名曰清規要綱。自乙卯及今年辛未。凡一十七年。未嘗脇沾席矣。己巳之歲。嬰於未疾。幾不可起。戲有口占曰。一十五年坐不臥。一百餘日臥不坐。放庇合著大石調。釋迦彌勒難作和。每喜誦程朱之說。仍製理氣性情圖。又有一性五性例儒圖。嘗以五燈錄。取捨不一。互有異同。造五灯一覽圖。以便於檢尋也。其他遊戲。形於紙墨。發乎語言。門人小師。錄以私於手卷矣。自扁退居之宇。曰寶渚。以附庸于東福之陰焉。其宇與凌霄先廬並。乃普門之地也清溪遠而茂樹園矣。居然韻勝。嗚呼。師乃遠追奇山以爲師。奇山之於國師也。在族譜爲正姪也。在法門爲的子也。師之於國師。於丞相也。爲的孫也。爲正胄也。奇山之有後者。國師之有後也。國師之有後者。佛鑑之有後也。佛鑑之道。光乎海東。是亦中州之化。克被乎無垠之謂也。是亦不可以不紀而託之於不朽也。仍摭師之始

卒。與傳道之源流。署其梗槩。切具之於大手筆焉。姑此爲述。

明遠俊哲

俊哲字は明遠。絶海國師の法嗣。嘉吉三年七月相國寺住持の公文を領して住山せず、山内に大慈院を創して靖居し常に讀書を好み、諸家の詩を類聚して芙蓉卌と云ふ寫本八册享德四年四月七日寂す。壽七十。

南江宗侃

居士名は宗侃。字は南江。嘉慶元年紀元二千零四十七年を以て生る。美濃の人なり。初め相國寺の玉龍庵に投じ、法を雲溪支山に嗣ぎ、又去つて濟洞の諸老に參じて省發する所多し。永享の始め一休和尚に侍して泉州堺の海會寺に捿止すること三十年、遂に俗に還り、漁菴と號す。五山雜考に其の略傳二說を擧げたり、錄して其の傳の足らざる所を補ふべし。其の一に云く、

漁菴諱宗侃。號南江。誕乎丁卯嘉慶三年寂乎癸未寛正四年亨年七十又七。本貫東濃。受業雲溪。少隷建仁。壯歸相國。江湖皆稱詩僧。後謁一休和尙參禪。永享初出萬年。放浪山林。壬子之秋永享四年偕一休和尙游泉南。土緣熟矣。往還三十餘年。緇衣友白河人有招水。次編茆自稱漁菴。薪有喬木曰妙樵。一村皆横嶽之法系也。因慕而居。一婆隨焉。癸未孟夏微恙。遂屏穀者月餘。而殂于住吉浦之草堂。癸未秋誌。

其の二に云く、

南江宗侃。嗣雲溪支山。或記曰。南江在江西會裡勵業者卅年。江西瘞履時賦一詩曰。昨夜木蛇云々。後厭世紛退居泉南海濱。築菴曰漁菴。萬年之一衆慕之。就中。水心。綿谷二老。到漁菴請歸。不諾。夜話之次賦詩。夢看故人醒忽逢。共譚洛社活心胸。可憐不似曾游夕。漁屋殘燈海寺鐘。或人寄畫軸求讚。還軸云。玉軸卷還君莫嗔。十年疎懶硯吹塵。江湖手熟釣竿雨。若弄文章鷗笑人。

居士又久しく江西龍派の門下たり。曾て江西諱物の頌を作て云く『昨夜木蛇飛上天。靈蹤未必在靈泉。娑婆世界怨憎會。風雨借窓三十年』と。江西は木蛇と號し、靈泉に住す、故にこの語あり。居士又後に城州薪の里に寓す。舊時酬恩庵の邊り、南江瀑の名ありしはこれがためなりと。その自述の詩に云く

竹竿十載見二鮎登一。何似冥々鴻鵠騰。衰色偏能欺二野客一。春愁終不レ到二官僧一。一村欲レ暮牛蓑雨。二月尚寒蠶具氷。無三復青錢償二鶴債一。經行攤レ飯午時恒。

又、碧山日錄、應仁二年正月廿一日の條に逸事一則を載す、

又曰。予家二於城中一。歳久矣。南江沅首座。自二泉南一至。則必僦二偏舍一以盤桓。或淹留三二年矣。東南有小構。廣袤僅數楹。沅公扁曰二留陽一。乃有二一語一曰。陽之留夕。茲焉抗レ屋。正東正南。宜二爾遊息一。予一時問二沅公於泉州一。及二其別一。有二詩并序一曰。滕家脱樵子。遠訪二漁菴於津南一。嗚呼斯交熄矣。曰レ漁曰レ樵。相逢爲レ歡。爲レ不レ殘也。方二其北還一。賦二一詩一送レ焉。必速旁哂。許眴支遁共風流。可咲宛家來聚頭。村舍白醪人不醉。津樓暮色起離愁。

寛正四年癸未夏病に罹り、住吉の茅菴に卒す。壽七十七。詩稿一卷あり鷗巣集といふ。今猶ほ江湖の間に傳唱せらる。

東岳徵昕

徵昕字は東岳。普明國師の法嗣、一條禪閤の庶弟なり。自ら西山遺樵と號し、軒を知足と號す。天龍寺慈濟院の世代なり。曾て足利義政の命を銜みて支那に游び、

歸來、相國、天龍、南禪寺に歴住し寛正元年鹿苑院に住し、同く三年脚疾に罹りて退院、翌四年四月三日寂す、壽七十六。翰林葫蘆集に『含雪軒圖詩序』一篇あり、以て師の補傳となすに足るべし。文に曰く、

龜阜育英座元。寄此幅。告余曰。吾嘗游乎大明。而獲之於中朝畫者。十襲以至此。命焉曰含雪軒圖。先師東岳壯歲。搆一室於天龍寺裏聚景之側。窓對西嵐。以含雪二字。揭之軒楣。讀書於斯。行道於斯。出世匠徒。率起於斯。初自前板。不歷甲刹。而視篆于眞如。然後住于相國于天龍瑞龍。竟任于僧錄司。自其棄諸孤。于茲三十五年矣。有其名而無其室。又其塔之附于慈濟曰知足。嬰於丁亥兵燹。比者意匠百計。以築白塔於舊地。且掛之壁間。致夫羹墻之思。先師亦自稱雪巢叟。盖白雪我家舊物。請以一辭係之。余云。先師謂誰。東岳大禪師是也。師世譜藤氏。於桃花坊故禪閤。則爲難兄也。幼入佛日門。因嗣焉。於正覺帝師則爲的曾孫也。可謂宗姓俱高。至若道德文章震耀乎一世。而戒乘急乎其內。則天下仰之。以爲古佛再矣。嗚呼雪山雪歟。少室雪歟。集而成胸襟中物。以此臨其衆也。到處使人望而心目清淨。含雪之義。於是乎可徵矣。今得見此幅。有思其道韻。弗克默止。謹題四韻一章。以塞其所請云。

遺稿傳らず洵に惜むべし。

叔英宗播

宗播字は叔英。別に交蘆老衲と稱す。播磨の人なり。其の氏族と生年とを詳にせず。幼より太清宗渭に隨ふて、遂に疑情を碎く。學は支竺を綜べ、才詞藻を善くす。性尤も朴實にして、常に綺靡を嫌ふ。足利義持嘗て師を召見し、其の麁服をみて、覺えず失笑すといふ。これより禮遇優渥なり。法を相國寺に開き、尋で南禪寺に陞住す。その門風高峻にして、大に宗規を整ふ。季瓊が松風澗水圖の讃に云く、

澗水松風佳趣深。聲聲襍響灑衣襟。湘娥鼓瑟秋無際。仙子吹簫月有陰。樂性偏知近聽好。入流不管外來侵。寒山一去賞音少。天地蕭條古又今。

晩年に南禪寺の慧雲院に退居し、嘉吉元年紀元二千百一年九月十九日寂を慧雲に示す。師嘗て五燈會元鈔二十卷を著し、又唐より元に至る諸尊宿入寺の語を集めて三卷と爲し、名けて曇華集といひ、以て諸刹に住する者の龜鑑に便すといふ。

斗南永傑

永傑字は斗南。蘭春谷の法嗣なりといふ。蔗軒日錄、文明十八年十二月廿九日の條に云く『貞菴。双桂。斗南。爲少林三徒。斗南爲蘭春谷之弟子』云々。城州鳴瀧村妙光寺の住僧なり。虞世南の筆法を得て書名一代に高く、傑斗南樣と稱して中外の人皆之れを習ふ。嘗て支那に入り書法を以て明人を驚かしたりといふ。生死の年月を詳にせず。相國寺の興彥龍、斗南の書を評するの詩あり曰く、

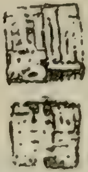
斗南翰墨續誰燈。咄々休言逼永興。書止晋人人不會。梅花直指付倭僧。

其の當時に傳稱せられたるを觀るべし。

竺雲等蓮

等蓮字は竺雲。別號を自强又は小朶子と稱す。明德元年に生る。其の生貫を詳にせず。幼にして才思風發、英童の譽れあり。天龍寺の太岳周崇に執侍して久しく

文化四年丁卯閏六月予赴
阿州南明之大會吾同門友
無績翁六浩来補真元處
初六發京九日之晡落帆于
阿岸既畢事越廿三日予去而
翁留時方風雨不止作一絶以
留別云
連宵風雨似留人々不可留
并送春孤負年来對牀約
從今白髮歎茎新
雲居 壽蓮頓首拜呈



其の訓示を受け、應永年中、明國に遊び、歸朝の後、自ら傳授する所ありと稱し漢書に訓點を加ふ。其の點當時官家の點と小異あり、其の本深く祕して人に示さず。常に好みて史記、漢書等を講ず、故に叢林の學徒、稱して等蓮漢書といふ。是れより先き太岳周崇、屢漢書を講じて師に其の奥を授けたりと見へ、漢水餘波の序中に

一百年前。慧林太岳和尚（中略）屢講此書。爲御侮資。授諸的資妙智竺雲師。竺雲師相傳而常開講席。於是乎。東西刹之僧。攘袂而趨吾邦書肆。云々

以て禪餘、講學に怠らざりしを知るべし。又聯句に工にして今時往々其の遺篇の存するを見る。法を太岳に嗣で後、京の萬壽寺に住し、永享七年八月十一日相國寺（四十世）に視篆し、寶德二年八月廿二日足利義政、夢窓の塔を拜して受衣の儀あり、法名を道禰と稱す、師參候して之が式事を掌る。其の當時に重ぜられたるを知るべし。翌年敕を受けて南禪寺（百五十五世）に陞住し、一香太岳の恩に酬ふ。住山の翌日、龜山法皇廟に詣り拈香の偈に云く

元縱極位聖中主。高踏毗盧頂上行。酬宴瑤池未回駕。忍聆秋雨滴階聲。

後に退いて嵯峨に妙智院を開創し靖退の地となす。是れより先き長祿二年二月、

將軍、高倉御所新造の障子に五山の名衲に命じて讃詞を書せしむ。師が瀟湘夜雨の作に曰く、

君山雲黑浪春撞。入夜瀟湘雨滿江。兩岸維舟旅游客。忍聽滴々打蓬窓。

文明二年正月七日、勢州の某寺に於て寂す。壽八十二妙智院過去帳に據る或はいふ八十九右文故事に據る遺稿二策あり。詩集を繫雲集と云ひ、聯句を瓶梅といふ。二書共に泯びて今世に傳らず惜むべし。

東沼周曮

周曮字は東沼。初め東洋と號し、或は自ら祥光老子と稱す。その本貫を詳にせず。元中八年紀元二千零五十一年に生る。南禪の游叟周藝南禪寺百四十一世に從つて心印を受け、常に支竺の墳典を究め、又好で莊子を讀む。阿彌陀院定泉老人を送るの詩に云く

阿彌陀院定泉老。和歌達者也。三載之前。奉使於朝鮮國。無何而旋。旋時朝鮮祖帳而送老人於江之滸。於是乎。換扇以見戲。所謂一時之盛事也。其後扇也秘在乎篋笥者三稔。今復領使命於彼國。因緣不淺者耶。扇也取出奉還之於需之祖帳之官人。以示

長坂寺鐘銘

播有寺曰長坂、明石郡魚住庄也、夫叢林之禮樂以鐘魚鼓鈸為最焉、今茲寺之大鐘缺日久矣、當郡之衛門法名道寶、唱于民醵白水真人者數十百緡、遂不日而成功、彼禱于當國太守縣吏豐清等、增福增壽、齊於毛海芥山者也、三代禮禪叢範始而書焉也、因掛銘々曰

器鳴者　勿迫鐘　小而簴　大而鏞
魚住樹　鳧氏鑄　神告音　民安封
增福海　國宗孝　上飛高　下盤柊
脫毛類　出色龍　記盛事　丁卯冬

寛文安丁卯十一月十日也

不忘之志云。因掛卑作於其上矣。　扇面白色也

素面妍々氷雪肌。出高麗又入高麗。再逢三載三祇劫。白髮倶歌春夢詩。

序引は以て一場の佳話として傳ふるに足るべし、故に玆に錄す。又、弧月侍者の九淵に隨つて明に入るを送るの作に云く、

寸心孤月去隨船。別後誰同鶴不眠。六十一翁天一角。梅花欲雪白頭前。

梅圃侍史に寄するの作に云く、

長安何處苦吟身。群玉山頭歸夢頻。花有春宵月秋夕。坐詩人勝北詩人。

流水集中、扇面に題するの作數首あり、其の二三を錄せん、

扇面　面有富士峯、裏有双白鷗

士峯手翻覆。翻覆有情不。吹落千秋雪。化成双白鷗。

同　列子御風圖

天下駒皆轡。此翁獨絡風。冷然馳去好。月白廣寒宮。

同　有瀑布

彼美似春風。春風在手中。三千餘丈雪。搖扇一時融。

同　孔雀

南海桄榔雨。文章染得工。青雲告身處。吹亂尾花風。

同　張　冝傳書

不志傳兵術。何曾跪老人。青松白雲色。共帶漢家春。

同　鶯宿梅

春勅花名貴。鶯嘗雨露韻。何時胡蝶夢。三宿約三春。

後に台命を稟けて相國寺五十世に視篆す、時に文安四年八月廿八日なり。相國に在りし時大智院に住し南禪に移りて後栖芳院に留止す。寛正三年正月二日五葉菴に寂す。遺偈に曰く「東沼行脚。北斗藏身。露。千江月。萬國春」と。遺稿あり流水集といふ。

祖溪德濬

德濬字は祖溪。別に水拙、又は鶴峰と號す。阿波の人なり。俗姓は一ノ宮氏。早歳、京に上りて建仁寺の光澤菴に寓し、參詳功を累ぬ。初め阿州の補陀寺に住し、尋で駿河の清見寺に移り、又京の眞如寺に住す。博識强記にして大般若經を諳す

といふ。建仁に在るの日、學徒の請に應じて儒釋の書をも講じけん、蔭涼軒日錄、文明十七年五月五日の條に柳文を講じたることを記せり、云く

午後。興子雲來曰（中略）德濬首座字祖溪。近日講柳文。蓋。華岩院適首座發起之。我亦可赴講筵（中略）子雲話云。今我所居者。建仁寺瑞松院也。塔主。瑞迦首座也云々。

東沼周曮曾て師のために祖溪の說を作て曰く、

東山濬公上人。瑞光的裔也。玆夏問禪。判七葉之圖。辯六種之震。言々句々。斬釘截鐵。七間法堂爲之起舞。大衆得未曾有。可謂滿衣大士之再誕者也。予具威儀往而謝焉。一日寄軸子。見需字說。予雖不腆。作序說。以祝其遠者大者。其說曰

支那國有谿曰曹。六祖大鑑禪師處焉。按傳。昔者竺土大聖人在鷲頭之山。拈一枝花百萬大衆中。惟有金色頭陀破顏微笑。微笑之旨深矣哉。慶喜氏以是傳之商那和修。商那和修以是傳之優婆毱多。優婆毱多以是傳之提多迦。提多迦。以是傳之彌遮迦。彌遮迦以是傳之北天國婆須密。曰佛陀難提。曰伏馱密多。曰脇尊者。曰馬人感戀馬鳴。曰月輪相裏龍樹。曰金環童子鶴勒那。曰神劍變化婆舍斯多。曰二十七祖般若多羅。般若多羅以是傳之香至國王季子。楊子江心。而乘三束之蘆。鬅䰐氏。鬅䰐氏六傳而得大鑑。大鑑之下。衮々沄々、派脈分流者。猶瓜蔓水而棼如也。夫以今人之心。準古人之心。以一器水。傳一器。則理一而

無二。莫不得而緡合者矣。何則淵焉。而祖宗龍淵也。豬焉。而祖宗鰻井也。雲焉。而祖宗餘澤也。鏡焉。而祖宗靈光也。彼岷之江水。發之於大國之楚。非發其波浪也。發其所來之源委也。祖之支派。傳之於支竺扶桑之域。非傳其文字也。傳其所相承之心法也。上人勤而不止。精而不止。精而不倦。蹠其心水法雨於四天下。蘇玉堂溪聲廣長舌云者。今之叢林祖溪其人也。

東沼は當時天下の宿老、而も師を視ること是の如し。以て其の當時に重ぜられたるを知るべし。 天隱龍澤も亦嘗て一書を寄せて云く

前年雖呈短札。未拆報章。頗怪之。道體堅固否。眠食佳味否。寺中事々依舊。逐日凋零者法道人才而已。諸人擡首。待和尚指山門之日。伏承。貴國因府命慈威。逆臣潛蹤。千萬祝之。晨夕慈雲院殿奉祈福壽康寧。愚僧荷恩顧者。耿々在中襟。所希愚僧餘喘之中。奉拜道容也。參陪之次。以卑臆具陳之。則故人之賜莫大焉。又光澤和尚已登八十。桑楡末景不可久。況時々四大不安。急々上洛。慰問之者。於義爲宜。諸徒切望之。欲言者惟多。枉閣之也。不宣。頓首敬白

六月五日　　龍澤拜

拜呈桂林侍衣

其の答書に曰く、

六月五日所賜教帖。十七日到桂幽。未脫封先。如在空谷而听足音。已逮復圭。如侍床下而親誨勵。余何人也。生象季而荷老師恩顧。如此之重哉。去歲枉尊簡。寵誘卑跡進止。幷。移書慈雲翁。見勸余旋洛。趨侍有期。答裁不遑。然為翁覊馵。因循至今。雖吾土而變非故。水為兵塵而流不清。況又袈裟非轅門之具。鉢盂非牙帳之器。孤雲野鶴。慚禪月者不少。鴻慈不以為怠。再頒寶函。忽華陋室。輒奉尊意。以達雲翁。翁喜曰。道候之健宗門之大幸也。必裁書以賀焉。且如示諭。老喜足。日逼崦嵫。再見難期。祖塔冷落。他人攢眉。且待秋涼。必控丈室。暑劇。為法珍嗇。不宣

六月廿二日

大昌院衣鉢侍者禪師

この外、桂林德昌、雪嶺永瑾、月舟壽桂、正宗龍統、桃源瑞仙等一時の名星と道交酷だ密にして、商量往來常に相絕えざりしと云ふ。東江知藏に寄するの書尾に左の一絕あり、

紙有餘白。依前詩芳押。以寓眷戀云。

平生交儀未嘗違。跡似風萍無所依。猶記柴門溪上月。來而尋與送而歸。

依㆓大春尊契韻㆒。以寄㆓卑臆㆒。傳達爲㆑幸

情是一家交二天。別來光景下㆑灘船。讀書勤剔㆓夜深燭㆒。翻手盛年成㆓暮年㆒。

又雪嶺に寄する手簡の末尾に曰く、

楮尾有㆑餘。次㆓題字韻㆒。寓㆓私懷㆒云

海絕㆓舟航㆒山絕㆑梯。長安何處夢魂迷。謝㆑君不㆑忘平生約。野水閑鷗入㆓品題㆒。

後に病に遘うて東山の瑞光菴に寂す。臨終の偈に云く『於㆓無生滅㆒。說㆓生滅㆒。紅爐雪飛。氷河焰發』と。其の世壽と生死の年月を詳にせず。遺稿に水拙手簡、水拙集の二篇あり。

瑞溪周鳳

周鳳字は瑞溪。俗姓は伴氏、別に又臥雲山人、蕉羊僧、竹鄉子、刻楮子と號す。明德三年（紀元二千零五十二年）四月八日泉州堺に生る。時に州大に亂れ、全家を擧げて丹波の桑田郡に徙居す。十歲の時、丹州も亦兵起り、父軍旅に沒す。母に伴れて京に入り、外祖舅性菴主に依る。菴主は明極楚俊の法孫なり。十四歲にして相國寺の

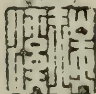
無求周伸に依り、十六にして納戒、名を天龍寺に隷して、大周に侍す。又鹿苑の嚴中周噩に随うて擇木寮に居り、尋で南都に游び、普一、玄啓の二講師に謁して、賢首、慈恩二大師の敎を聽き、兼て小乘部を研究す。歸りて嚴中に侍して學徒に敎へ、永享八年相國に在つて分座說法す。將軍義敎、擢でゝ景德寺に住せしめ、後洛北の等持寺に移る。十年關東の執權持氏、其家臣上杉憲實と相善らず、遂に上野に反す。將軍義敎師を遣はして往て諭さしむ。その驛程の歷る所、山川の勝概、閭巷の殊事、並に佛宇僧廬の狀況縷記して一も遺さず、入東記是れなり。同く十二年庚申四月十六日、八坂法觀寺の塔の修繕供養あり、將軍當時の八高僧を擧げて法會を行はしむ、師又其選に膺る（當日の導師は常在光寺景南和尙、八高僧は等持等の周鳳西堂。臨川寺の周沆西堂。法觀寺の貴龍西堂。乾德院の等金西堂。興雲菴の友南西堂。正法菴の珠嚴西堂。定林寺の等適西堂。法住院の周浩西堂なり）是の秋相國寺に遷る。嘉吉元年夏、軒を寺の北邊に剏め名けて壽星といふ。壁間壽星の像を掛け、終に此に退休す。將軍義政請するに鹿苑を以てして僧錄司に任ず。翌年壽德院に返る。康正二年再び鹿苑に住して僧錄司となり、職に在ること五年。斗室を構へ、北禪菴と號し此に隱居す。義政請じて智恩院に就て法華を講筵せしめ、筵に列つて聽く。文正元年夏、善隣國寶記三卷を著はし、隣交來往の概を記し、應永九年足利義滿

の遣明表に至り日本國王臣と書するの不可を論じて大義明分を正せり。其の論に曰く、

上略 彼國以吾國將相爲王。蓋推尊之義。不必厭之。今表中自稱王。則此用彼國之封也。無乃不可乎。又用臣字。非也。不得已。則日本國之下。如常當官位。其下。氏與諱之間。書朝臣二字可乎。蓋此方公卿恒例。則臣字屬於吾皇而已。可以避臣於外國之嫌也。又近時遣大明表末。書彼國年號。或非乎。吾國年號。多載于唐書玉海等書。彼方博物君子。當知此國自中古。別有年號。然則義當用此國年號。不然摠不書年號。惟書甲子乎。此兩國上古無年號時之例也。凡兩國通好之義。非林下可得而議者。若國王通信。則書當當出於朝廷。代言之乎。近者大將軍。爲利國故。竊通書信。大抵以僧爲使。其書亦出於僧中爾。大外記淸三位業忠。近代博學

瑞溪周鳳墨蹟

日暮天涯人未還南朝
古寺水雲間鷲峰爭似
龍峰好元是
吾皇御愛山
臥雲衲僧周鳳



之士也。與予從游者三十餘年矣。以向所謂年號及朝臣二字告之。三位以爲是。且記於此。
諭異日預此事者云。

其の識見の高邁卓絶、當時の縉紳乃至緇流中、師の右に出づるものあらざるべく、殊に身は幕府の寵遇を受けつゝ而も此の言をなすに至りては其の稜々たる氣骨千載の下、猶ほ欽仰に堪ふべけんや。

應仁元年京師大に亂る。嗣子默堂、慈雲菴を北岩藏に刱め請じて住せしむ。閑に投じて著述を事とす。台命あり復師を起して僧錄司を掌らしむ、時に歳七十七。堅く辭して受けず。卽ち國師に署して戒法を受けんとす、復就かず。義政奏して云く、夢窓國師を追請して師をして之に代らしめんと。卽ち夢窓の頂相衣盂を齎して殿に上る、公卿百官、其儀容の高古なるを嘆ずといふ。重ねて夢窓に謚して大圓と曰ひ、以て七朝の帝師となす。同く五年六月義政、普廣院を營み陞座を請ふ、師曰く、今年八十三、命朝夕にあり、況や期に餘月あり、乞ふ命を緩うして之を待たんと。五月七日微疾に罹り翌日早晨に寂す。實に文明五年五月八日なり。壽八十三。遺徒全身を北岩藏の麓に葬る。師壯年より蘇詩に精しく、諸說を萃めて

陛說二十五卷、補遺一卷を作る。又法華、圓覺、楞伽の諸經、傳燈碧巖等の諸錄を講じて四來の徒を策勵す。天性孝順にして相國に掛錫の日、其の母の喪に値ふや、書籍を典して後事を辨ずといふ。語錄一卷あり、外に刻楮集二百卷、入東記、溫泉行記各一卷、善隣國寶記三卷、夢語集一卷、臥雲日件錄二卷共に世に行はる。明の翰林學士四明楊守陳、宜竹和尚著す所の行狀に因てこれが序を作る。蓋し嗣子希宗、明に入りて求むる所なり。滅後十年、後土御門帝、其の道價を追慕し、勅して興宗明教禪師と謚す。

嘗て竺雲等蓮の東に歸るを送るの作に云く、

竺雲丈人將歸遠江。洛社同盟贈以言焉。余也非一日雅。豈可箝口乎。顧丈人易學尤精。今偶東歸。柳希丁子褒於千載邪。矧又其諱日連而前程有富士名山。此亦夏后氏所謂連山之易耶。故詩而及之。遠取諸物。近取諸身。聖者之言不可誣哉。

人正東歸易亦東。僧中今日見儒宗。天邊寫出連山象。雪白扶桑第一峯。

又、景南侍者の紀州に歸るを送るの作あり。

人棹仙舟遂避秦。神山祠古海之濱。君行未必拾瑤草。三秀芝肥有別春。景南三秀孫

その禪佛寺に櫻花を觀るの作に云く。

洛之禪佛古寺。丈室新成。時櫻花曰桐谷者盛開。大人相公入寺。釣游歡甚。花與主人皆榮矣。實長祿三年己卯三月十有七日也。予偶陪席竊作二詩以記。然腹稿耳。後三歲辛巳暮秋。筆之付禪佛。克家集樹侍者。盖東坡居士書壽星竹軒詩。寄通悟師之例也。

佛寺金銀花亦開。都人爭覩相公來。村僧何幸伴台席。白髮逢春又一回。

名花一種遍皇州。曾出相陽桐谷幽。鶯亦遷喬香雪底。金衣春暖侍鈞游。

以て其の風騷の一斑を見るに足るべし。

一休宗純

宗純字は一休。別に狂雲子と號す。應永元年（紀元二千零五十四年）正月一日に生る。母藤原氏、後小松帝のために愛寵せられ、その娠めるに逮び、讒せられて宮を出で師を民間に產む。齡六歲にして京の安國寺像外鑑の下に投じて童役を執り、十二歲にして壬生の淸叟仁に謁して敎乘を聽き、又建仁の慕哲龍樊に依り詩を作るの法を學び、每日一首を課と爲す。後に棄てゝ西金寺の謙翁に參じ、高風に服膺して執

侍すること六年。翁の寂するに逮び江州堅田に走り、華叟曇和尚の會下に投ず。叟拒で容れず、卽ち漁舟に宿し、或は露地に臥して懇求すること旬日、遂に相見を許さる。一夕鴉鳴を聞て、脱然として領悟し所見を呈す。叟曰く、此は阿羅漢の境界、作家の境界にあらずと。師曰く、某は只此境界を喜ぶ、作家分上を喜ばずと。叟頷て記を授け又傳來の印書を以て之に付す。蓋し授受の妄ならざることを表するなり。師便ち地に擲つて出づ。此れより放曠漫游して定處あることなし、京の尸陀寺、酬恩菴、泉州の慈濟、松棲兩寺は、其卓錫の地なり。後小松帝讓位の後、召して宮に入れ常に法要を問ひ、寵遇甚だ厚し。稱光、後花園二帝相繼いで崇信す。初め稱光帝、未だ東宮を立てず、叡心猶豫す。師密に奏して曰く、天曆の數正に彥仁親王にあり、時失ふべからずと。帝喜で云く、朕が儲定まれりと。親王立つ是を後花園帝とす。故を以て師は三帝の後を承けて至る所、衆常に席に盈つ。文明六年の春、同門の耆宿、敕を奉じ來つて大德寺に視篆せんことを請ふ。師二偈を作つて恩を謝し、自ら警めて終に住せず、但だ鳳書紫袍を賜ふのみ。七年城州薪の里に門人等壽塔を作る、師牓して慈楊といふ。同十三年十一月の初め疾を示し廿一日偈を書して曰く『須彌南畔誰會我禪。虛堂來也不直半錢。』と、瞑目して化す、

壽八十八。門人全身を舁て慈楊の塔下に瘞む。滅後三年、門人師の肖像を圖し入明の客に託して讃を彼地の名卿に需む。四明の張應麒、仍て讃して云く、

學通儒典。道闡禪宗。爲叢林之表率。致譽望之尊崇。源源才思。落落心胸。觀止水而自安。行藏有定。取狂雲以爲號。變化無蹤。是宜衍兒孫之昌盛。續燈餤於海東也耶。成化乙巳秋七月既望。都臺後人四明仕隱張應麒。焚香拜讃。

師は當時祖意を會せずして濫に大寺に主たる者を憤り、常に跡を混して威儀に拘らず、城邑聚落を巡行して緇素を諭す。又木劍を腰にし、尺八を吹き、偈頌を賦し、和歌を詠じ、頗る其言行を恣にして風狂の如くす。然も華叟の病に侍しては自から穢を雪め、又大徳の火後、四方を勸化して法堂を建て、龍翔寺の頽廢するを慨き、緣を募つて舊觀に復するが如き、洵に是れ大信根の所作なり。若し其の細節に至りては、一休年譜に詳なれば今爰に錄せず。平生の述作を狂雲集といふ。板行して現に大方に傳はる。

以篤信中

以篤字は信中。俗姓は三善氏。淡路國三原郡の人なり。法を東福寺の大蔭樹に嗣ぎ、永享の始め出でゝ淡路の棲賢寺に住す。居ること六歲にして、京の安國寺に遷り後ち台命によりて東福寺に住し居ること五年次で天龍寺に移り、歲を隔てゝ南禪寺に陞る、時に年六十八。此歲東福寺

以篤信中墨蹟

海嶠天長隔我群音塵別後杳無聲
春來飛盡北歸雁説與南征日暮雲
宗鏡掛衲　信仲





の南麓に宗鏡庵を構にて退休し、未だ幾もなくして遷化す。實に寶德三年十月一日なり。師は學梵漢に通じて文翰に優なり。是より先き明の潘少卿、本朝に使して來る。人あり、師の詩疏を編して以て一語を求む。潘曰く禪林の中、是の如き巨擘ありや、詩は猶商攉すべし、惟だ疏語の如きは、區々の及ぶ所に非ず、序跋は持し去つて名公大人をして之を作らしめん云々と。曾て鎌倉の慈恩寺に游ぶの

作あり、

孤錫東游客二相城。慈恩佳境勝レ聞レ名。仙山海上幾塵隔。佛國人間何刧成。翡翠護レ巢溪雨暗。
虹霓射レ墉嶽雲晴。猶思塔下留題處。滿塢梨花照レ眼明。

著す所の疏稿を晦夫集と云ひ詩稿を宗鏡集といふ。

原古志稽

志稽字は原古。俗姓は細川氏。應永七年に生る。始め相國寺二十世の简翁志敬に就いて剃度し、參詳嗣法の後、等持寺に住し、一時の諸老と往來し斯文の達者を以て稱せらる。碧山日錄寛正三年十月八日の條に云く、

八日。等持寺主。細州讃州之守叔父也。諱稽號二原古一年少時。以二風流一見レ稱。向來只甘閑。而禪餘嗜二文字一。近作二施食要集心經註解一。如二東岳。瑞溪等諸尊宿一皆稱レ之。此日以二趙關之命一赴二於等持一。與二原古一相會。又趙關在二其座一。揖茶爲レ禮。粗約二相過一。以嘗二道腴一也。原古命二其下一出二將軍尊氏甲冑之像朝衣之像一。蓋知レ欲二余之宿一見レ之也。下略

後年、移つて相國寺に住し、又丹波に往いて德溪軒に住し、自ら丹陽三柔叟と稱

す。後に軒を相國の寺内に移して開基となる。幾もなくして阿波の桂林寺に移りて寂す。時に文明七年三月十五日なり。壽七十五。滅後七年、横川其の像に讃して云く、

胸中包羅百氏。筆底鼓舞萬言。法相分三時敎乘。曾游南寺而挾册。瑜伽染五色阿字。晩學東密而攀轅。後人標榜有在。前輩典刑惟存。起威音以架聖籥。成住壞空。抹過多劫。坐景德以傳祖燈。廣續普聯。爍破群昏。禪風吹兮祖月照。棒雨點兮喝雷奔。法定等持慧等持華鬘。證等持王三昧。掛是莊嚴非莊嚴瓔珞。開莊嚴域一門。桃溪未忘常德。桂林尙記狀元。著施食集類之書。抜閼戻於水陸。作心經秘鍵之鈔。究淘汰於淵源。脊夫黼黻宗敎。是則眞實報恩。住世先鶴者五年。高掲古釋迦氏。下生後鷄頭者三會。有待今彌勒尊。嗚呼噫嘻。所謂眞淨舍飴。孫又生子。紹宏跨竈。子又生孫者耶。

文明十三年歲舍辛丑三月十五日。適當七周忌辰。謹題讃語。永充德溪寺供養。小補

野衲景三焚香拜書

遺著二策あり、横川の讃語中に擧げたれば今玆に錄せず。

惟馨梵桂

梵桂字は惟馨。別に東蘆と號す。所居の軒に扁して泰雲といふ。本貫を詳かにせず。應永十年(紀元二千零六十三年)に生る。始め相國寺の大智院に入り、元容周頌に侍して童行となり、剃染受具して後、諸方の叢席に參詳し、還て法を周頌に嗣ぎ光源院(舊號廣德軒)に住す。寬正三年三月十一日相國寺(七十二世)に視篆し人天を接化す。上堂の日、足利義政、山に入り、諸侯以下皆參侍す。翌年退て又光源院に在り。同く六年公文を以て南禪寺(二百五代)に陞住し、尋いで應仁元年七月十九日、再び相國寺に住す。この年山名、細川の軍、京師に戰ふ、兩軍合せて廿七萬人と稱す。十月三日山名の軍勢大擧して相國寺を攻め、庫裡より出火して七堂幷に東方の諸院、一時に焦土となる。越へて文明十年十一月十五日三たび相國寺に住し、新法堂に於て上堂す。足利義尙、山に入り、四衆觀を改む。卽ち伽藍再造の始めなり。長享元年、親ら杖を製して義政に献ず、且つ曰く『老僧十一年前、江州多羅尾に住するの日、杉樹の小梢を得て之を地に挿す、生長して今年此の如く杖と爲す、老いたるが爲

に木理を具ふ愛すべし、故を以て之を奉献す、昔古幡和尚、崇壽の祖塔に住するの日、杖を以て顯山相公（足利義持）に献ず、有名の尊宿、皆賀頌を作つて之を進上す、舊例を攀ぢて老僧も亦一偈を作り、杖に相副へて之を進上す云々』と。その詩に云く

得レ杖欽呈蓮府間。相携只要レ上二東山一。山游到處富二佳景一。送二盡斜陽一帶レ月還。

是より先き文明五年、鹿苑院に移り、僧錄の職に在ること十二年の久しきに渉り、延德二年十一月五日疾を獲て寂す。壽八十七。横川嘗て師の壽像に讃して曰く『御二衆兩街僧錄一。則鹿苑開レ場。脫二珍服一易二弊垢一。對二萬山夫人一。則台星照レ座。賜二金襴恩榮一。』云々。遺稿あり東蘆吟稿といふ。今時叢林の間に傳らず、惜むべし。

綿谷周瓞

周瓞字は綿谷。松鷗を以て其齋に名づく。應永十三年（紀元二千零六十六年）誕生す。郷貫を詳にせず。幼にして桑門に入り、若州高成寺の大梁梓に侍す。梁、後に京の寶幢寺に移り、永享二年十二月寂す。爾來瑞溪周鳳に從ひ、溪の等持相國鹿苑等に移

るや、皆侍衣となる。後に又溪に從つて壽星軒に在り。時に文名籍々として、緇林を壓す、是を以て幕府遣明の表を代作すると數回、相國の境地に一小菴を建て、松鷗菴と名け隱棲の所となす。長祿二年四月十五日前版職を以て相國寺に秉拂す。師座に登り畢つて、行者傳へ云ふ、相公足利義政法會に臨むと。是に於て拂を收めて之を待つ。既にして義政堂に入り、簾中に坐す、蓋し將軍秉拂に臨むの始なりといふ。後に景德寺に住し又等持院に移る。應仁元年瑞溪に從つて、亂を北岩藏に避け、翌年高野に有隣菴を擬めて之に居ると兩歲、又岩藏に來つて數間の竹屋を構へ、居ること四歲にして、文明四年二月二十二日寂す、壽六十七。遺稿なく、たゞ善隣國寶記の中に、遣明表二三を見るのみ。弟子に文總壽顯あり、曾て南禪に住し又左街の大僧錄となる。綿谷の寂後、松鷗の第二世となる。

天英周賢

周賢字は天英。相國寺の慈照院に住して文名あり。在中中淹の法嗣にして、材用堂と文交あり。長祿四年二月相國寺に住し、寛正四年二月寂す、壽六十。相國寺

退院の頌に云く、

萬年峯上一枝藤。欲拄宗門百不能。今日扶吾早歸去。何山占取白雲層。

村菴靈彥

靈彥字は希世。自ら村菴と號す。應永十一年（紀元二千零六十四年）京地に生る。幼にして穎出不群、膽氣老成、父母その法器たるを知り、愛を割き人を介して、南禪寺善住菴斯文和尙の下に投ず。文一見して異となし、之に名づくるに靈彥を以てす。師齡七歲足利義持、駕を細川滿元の第に枉ぐ、一見之を愛し、酒酣にして戲れて云く、我を以て父と爲すか、滿元を以て父と爲すか、師滿元を指す。是に由て養ふて以て之れが子となす。八歲の時、義持存撫の餘、携へて仙洞に上り、後小松上皇に謁す、上皇其名を聞き、謎を賜ふて制を試みしむ、師輙ち筆を援て曰く、『不意青雲上。揮毫賦野詩。』と。上皇大に嘆賞して曰く、此の兒の如き、古に聞きて今に見ず、唐に劉晏あり、八歲にして頌を獻ず、玄宗其幼なるを奇とし、張說に命じて之を試みしむ、說曰く國瑞なりと。又聞く李賀七歲にして詩を以て名あり、

韓退之始め聞て心に怪み、往いて賦せしむ、朕の意玆にあり間然なしと。時に師着くる所の韈解く、義持之を結ぶ。堂上の縉紳頸を引て爭ひ覩て皆云く、漢に王生あり、張廷尉をして韈を結ばしむ、時人王生を賢とし廷尉を重んず、然るを況んや相公をやと。其の器重せらるゝこと斯の如し。此れより聲名天下に布き、人皆呼で八歳彥童といふ。惟肖得巖、其の字を命して希世と云ふ、說を作て曰く『自幼嗜吟。五字七字。銜口而發。肆筆而書。名達相府。及至洞宮。皆召見之。面有所試。不亦偉哉。吁以恒兒視之。希世寔希世之才也。進學不已。則他日所成。豈啻

村庵靈彥墨蹟

南國江山画不如恐君到了愛
久蹲踞秋涼一夜長安雨灯火
我家人讀書
村庵靈彥



今日希世而已哉』と。十七歳にして披削稟具し、業少しも懈らず。十九歳の時、細川滿元、師の新作を輯めて一巨編と成し、江西龍派の筆削を求む、派その卷末に記して曰く『希世早歳已有能詩聲。上皇便殿賜座。東閣寵賚隆至。其聲耀若此矣。余疏賤何以應命乎。雖然留之數日。玩其藻繪。融液究於鍛鍊之工。而春容激昂。則幾於古作者。何其姿貌婉妙。而才氣老蒼也哉。非天地之鍾靈產秀。安能其所爲臻玆。然余猶有欲言者。古之

人。寓道於伎。所謂佛祖單傳之秘。發見於日用間。而詩外無禪。禪外無詩。希世勗焉。余將法社中興賀也』と。翌年又惟肖得巖に就て其の評點を求む。巖亦其の末に書して曰く、『聽松閣下。以希世壬寅稿一百首見示。今歲才半歲餘耳。此外必有不登稿者。何其多哉。名章俊語。連珠疊璧。拙目輙可定其價乎。然命不可拒。頗加批改。近世劉會孟閱少陵東坡全集。或批或點。會孟豈出于杜蘇之上耶。但述管見而已。』と。應永三十四年十月、滿元逝去す。師卽ち滿元が付する所の丹陽の田を以て善住院に屬し、十六員の僧を供養し、每日專ら冥資を修す。嘉吉元年江西龍派南禪寺に住するや師を後版に登さんとし、敦く勸むれども應せず。文安四年雲興庵祝融の災に罹る、雲興是に於て絕す。後六年享德二癸酉の歲、其地を購ふて大鑑（清拙正澄）の塔院を創す、滅後一百十五年なり。世人皆云く、希世は實に大鑑の後身なりと。院に扁して聽松と云ふ。乃ち滿元の嘗て號する所、丹の田を附し、滿元追孝の道場となす。文明十五年聽松院に遷る。是より先き聽松煨燼に罹り、兵止まざること十有餘年、太平の時至るを待つ。卽ち砂礫を拾ひ、蒙茸を披き、再造故の如くす。長享二年微恙あり、醫藥驗あらず遂に二十六日を以て寂す。世壽八十六、僧臘六十九。其夕全身を寶鑑の塔側に斂す。翌年、朝廷、敕して慧鑑明照禪師と諡す。

敕。希世和尚者存二喬木之故家一創二聽松之洪業一不レ謬二禪居令嗣一足レ興二愚極先宗一措二其身於山林一馳二其名於宇宙一斯道出レ震惟德重レ離。才高智高胸次蟠二三千風月一禪熟詩熟夢中閱二八十春秋一朕所レ聞克傳レ佛心衆所レ知丕承祖意。忘レ官品而持二鐵船之全機一授二徽號一而復二寶鑑之玄跡一諡曰二慧鑒明照禪師一

長亨三年六月十二日

師の位侍者に止まる。而して茲に徽號を賜ふ、蓋し異數と謂つべし。其の富士山の題に云く『富士峯高宇宙間。嵬崔豈獨冠二東關一唯應二白日青天好一雪裡看レ山不レ識レ山。』と、又天橋の詩に云く『碧海中央六里松。天橋勝境是仙蹤。夜深人待二龍燈出一月落文殊堂裏鐘』、遺稿三卷あり村庵稿雪巣集といふ。

存耕祖默

祖默字は存耕。東福寺に入り少室量公に嗣ぐ。或はいふ夢巖祖應の法嗣なりと。東福寺の本成寺に住し、寶德年間東福寺百三十四代に昇住す。詩文の達者を以て名一世に高く、又能書の譽れあり、自ら逍遙叟と稱す。應仁元年二月十四日寂す。遺

稿傳らず惜むべし。

存耕祖默墨蹟

春溪洪曹

洪曹字は春溪。空谷明應の法嗣、自ら睡快、又は有牧老人と號し、菴に扁して今是といふ。寶德元年相國寺に住し、居常文墨を以て游戲す。其の沒年と世壽を詳にせず。

以遠澄期

澄期字は以遠。空谷明應の法嗣なり。自ら雪披山人、又は西嵐殘衲と號す。相國

寺の常德院に住し、長祿四年七月本寺に晋み、同く八月十八日、寺內の西明樓、白日に自ら破却す、故に退院したりといふ。當時文を以て叢林の間に推重せらる。其の沒年を詳にせず。

天祐梵嘏

梵嘏字は天祐。應永十六年に生る。初め天龍寺の雪心安和尚に侍して童役を執り、後に遍く叢林の名宿を叩き寛正四年春、京師の萬壽寺に住し禪坐の傍ら學徒を接するを以て樂みとなす。嘗て壬生晴富の請に應じて其の文庫の記を作る。蓋し文名を以て當時官紳の推重を受けたるを知るべし。文に曰く、

大日本國史家壬生官長者文庫記

二條皇帝永萬初元乙酉。卽長寛三年也。創建史庫。東西南北三間。本朝大事小事之簡策。悉皆收藏之。宗廟天照皇太神祭儀。每二十箇年而廟貌一新。遷宮之規則也。齋宮齋院之儀。（此間若有落字歟）也天子讓位卽位大嘗會之盛也。諸神祠之祭祀也。修建也。文武百官之爵祿賞罰也。萬國之朝覲。庶民之貢賦。異域殊方來朝也。吉凶賓軍之禮也。瑞應怪異之兆也。

諸伽藍之崇奉供養也。禪教律諸宗之度牒。勅號贈謚。洎山川草木鳥獸等事。無不勝紀之。特有平將門藤純友追討時紀錄。六孫王經基幷藤秀鄉解狀。安陪貞任宗任追討時。源賴義八幡太郎義家解狀也。此史庫。後深草建長八年丙辰康元初元也重興嚴飾焉。鹿苑天山大相國又重修治焉。修營之事。沿先規自公辨之。若騷亂盜賊蜂起時者。自公令兵士衞護之。壽永之亂。以吉曾義仲數十騎守之。近歲文明第三辛卯冬。衞國勢之虛盜賊標掠數十函。將軍令嚴究搜還之者强半。遂誅賊焉。現存者千餘函。籤帙交加焉。蓋任此史家者。垂仁天皇後胤兄彥別命之孫。於和州卷向珠城宮一夜生千株槻樹。因賜姓爲小槻。其孫今雄。 清和天皇貞觀十六年始勅任大史之職。大史或又曰尚書大都事。又爲蘭省。廟食而號雄琴大明神。明神二十三世孫晴富。一日來曰。吾史庫無曩記。庶幾作記以傳不朽。余曰。嘗聞。釋門之流猶禁庫內出入。以天照太神諸神祇朝影擁護之故也。其可記之乎。曰禁釋氏非神意也。開國之初。宥魔方便之說也。海藏祖師元亨之書辨之。寧不見乎。或曰。尊重佛法。故釋氏來則神必下階接之。釋氏不欲勞神。故不到神前。非神之拒之。史庫之中已多釋門記錄矣。況吾祖天曆年中。割食邑苗鹿之田。奉天台座主慈惠大僧正之東林房。僧正有親書之狀。至今有師檀之好矣。和尙莫憚記之。由是摘長者所示之藁。作記焉。於戲乎。自永萬于茲三百一十載。有文庫無此記。今晴富公。兼才學識之三長。而有此設矣。其志勗哉。

記者提其要者也。後之人覽此記則知國家之有大典又知史家之有功於國家豈非至要哉。漢太史司馬班固劉向晉華嶠唐劉知幾蔣源等皆典此職或二世或三世而已。如吾富公克世其家未有之。子孫萬世成一家之書必應記太平典冊焉。

文明六年龍集甲午春王正月十一日

前住南禪天佑梵殿六十六歲書于京師萬壽覺雲窓下　印

大史晴富公索文庫之記。余以拙才辭之。再四强之不止。遂應其索。因又索詩矣。記已書之。則詩其可辭乎。賦七八一章云。累世吾朝大史家。詞章鸞鳳筆龍蛇。今時司馬皆云爾。昔日董狐無以加。萬國淸風編簡竹。三冬積雪短檠花。泰平春色紅蘭露。長沐殊恩樂聖涯。

覺雲老衲同題　印

外に著はす所、萬壽寺記一卷あり。詩稿傳らず惜むべし。

益之集箴

集箴字は益之。別に懶菴と號す。俗姓は織田氏。幼にして、季瓊眞蘂の門に入り、長じて雲頂院に住し、後に天龍寺に視篆す。季瓊に繼いで蔭凉の職にあること數

年、寛正六年十月、將軍義政、東山の慧雲院今ハ銀閣寺を以て山水の殊槪となし、山莊の地と定むるや師與りて力あり。居常、横川、景徐、桃源の諸老と道を以て相往來す。應仁の初め亂を避けて江州の牛山に遁れ龜泉集證を隨へて長林豐草の間に偃息す。當時横川に與ふる書の一節に『斯地。山圍溪繞。草屋如蓬。只竹影參差。禽聲上下。雖間有村僧田翁來。而桑麻秔稻之外無共說。睡餘則與禪翁龜丈。品座啜茶哦詩。以遣懷。欲借書以讀。而山寺村家無有一書。獨龜丈篋中有陳后山集一部。纔借之供眼矣』の語あり。時に横川、桃源の二老も亦亂を江州の永源寺に避くると聞き次韻十章を賦して横川に贈る。其の詩に云く、

君臣未決兩年師。京國煙塵緇素疲。死者可無千字誄。騷人只有七哀詩。家々沈竈產蛙日。
寺々長廊繫馬時。最恨承天作蕉土。塔婆獨聳鴨河涯。
敵餓近日不堪師。百萬官兵豈至疲。內苑花殘尙入夢。左街柳盡孰哦詩。將軍耽學杜元凱。
畫手潛蹤李白時。嗟又春來幾新鬼。啾々哭雨洛西涯。
惟公才望過先師。回得萬牛無筆疲。新長老筵雕疏語。賢亟相坐讀禪詩。紙衣布帽兮今日。
豆粥藜羹美舊時。好借山菴暫栖息。人間瀲泓豈知涯。
公年未老足爲師。我久交游腰脚疲。四海文章光一世。萬山風月費千詩。快於駿馬注坡去。

待以蛟龍得雨時。若問殘僧擺飯處。白鷗巢邊碧溪涯。

益之集箋墨蹟

小詩奉送
圓通岳英禅翁了渕左
和親之功帰越云
蔭涼 宗蔵拜稿
方伯和叔三折肱功業
天下得中興 詩翁帰
越之安枕吟取千巌
雲の洛僧

今世横川超珙師。波瀾寧使舌根疲。客中活計宜培睡。醉後狂言莫坐詩。虬戸鐘淸雲宿所。牛山被冷月殘時。兵間會面可難得。老矣此懷誰測涯。

吾自前年去洛師。山雲入骨覺形疲。離根種藥具多病。瓶裡揷花供小詩。鼠嚙楮衾其夜々。犬來蒲席亦時々。豈愁窮厄尙如許。那箇人生不有涯。

一枚僧似老農師。溪口田廬生計疲。提筥或桃諸葛菜。供書又讀後山詩。陰崕花氣襲衣薄。隣寺松風吹枕時。可笑豪

奢秘金玉。天誅遂不赦玉涯。

十首和篇惟我師。膾呑炙嚼若何疲。村夫太半無知字。野釋雖多不會詩。渇雨鵓鳩鳴日暮。眠雲麋鹿樂春時。任他人喚蜘蛛隱。鬱際松門晝閉涯。

胸中天祿後生師。惜矣爲他薪水疲。欲問懶王眞我懶。若尋詩將可公詩。叢林人物付平昔。田舍翁妾宜此時。偶遇漁郎通一信。武陵溪上有桃涯。此一章奉呈桃源上人

柳營記昔久無師。幾處雅鞘還往疲。萬口皆傳君綺語。一場入笈我村詩。梅光輦寺雪飛夕。荷淨天橋風度時。安洗乾坤塵氣盡。瀋江機海再窺涯。此一章呈景徐大人

應仁戊子春三月日　牛山睡隱叟箴頓首

長享元年十一月十六日寂す。遺稿傳らず可惜。蔭凉軒日錄の一部僅に其の消息を傳ふるのみ。滅後三年、横川和尙、師の像に讚して曰く、

織田望族。玉山正傳。詩禪文僧中無双。燈前萬卷夜雨。眞行草天下爲一。筆端五色雲煙。維社主盟。續耆英會。鹿苑官院輔僧錄權。古蔭凉。今蔭凉。甥舅氏。領職有日。甲宰相。乙宰相。父子恩。奉府幾年。評人才授登庸衣鉢。掌台命代造物陶甄。龍生龍孫。超紅葉變化之論。鳳產鳳子。誦碧梧栖老之篇。至矣盡矣。天然自然。宗風大興。一門二甘露。久要不忘。萬年三横川。咦。

第一山徒後堂上天龍恭敬大因緣

肯天龍益之和尙大禪師慈像。延德元十一月十六日。當大祥忌日也。法姪今蔭凉松泉老人。持此像來。爲其徒弟請贊。予與禪師三十年舊也。謹題拙語以充栖老室中供養云。

蔭凉軒日錄、文明十八年正月十八日の條に云く、

相公曰。箴東堂近日起居如何。答。老病相仍甚。雖然持病起則。其余氣五日十日在之。余氣散則如平常。至書字如舊。相公曰。於手蹟者尤可也。云々。

又其の揮灑を以て上下の推重を受けたるを知るべし。

天與清啓

清啓字は天與。別に海樵老人と號し、又自ら鵝湖清啓、或は萬里叟と稱す。其寮に名けて淨居といひ、院を杏花深處といふ。幼年建仁寺の禪居菴に投じ、伯元清禪（建仁二百四十三世）に特して童役を執り幾もなくして剃染受衣、稍長じて精勵刻苦、參詳日月を累ぬ。淸禪に嗣で後、信州の法金寺に住し、又禪居菴に移る。寬正四年幕府の命を奉じて明國に使し、歸途、書籍銅錢等を齎して還る。當時、東福寺の慧

鳳其の行を贈るの序あり、云く、

餞天與老人入大明國序

天地之西。日月之東。負其間出之資。而抱不世出之才者。世或有焉。而無能有之也。蓋夫天地之氣。日月之精。有時而耗乏竭僨之不遑也。何乎。吾疑其洙水不以再生。靈山不以三出者。玉府天與老人。身生瀛海。氣出中州。寔見東魯之書。而探西竺之秘者也。一日致余其所居之軒曰。吾禀生乎海區。是雖生非生也。目弗沾文物之觀。耳弗飫道德之聽。顧與草萊倶。所不慨乎。今有入貢之船。是其羽翼我也。時哉欲翔。予曰。吾曾過駕秘監湖。渡餘姚水。登蓬萊。而訪宣尼之廟。因眡内史王公之石刻。其他蕭山听雨。浙江候潮。觀燈市於吳山。泛小艇乎西湖。南北山諸寺。心治而目蕩者。宛然不在言也。天與如瑤林瑤樹。自然清人心目焉。一往歷其間。其所得。何啻倍蓰乎他人而已矣哉。況歷南臺。以達天子之都。其有不可測者。於是乎重告曰。吾非言此也。南屏有廬曰永元。先佛心之甘棠也。佛心以道鳴乎趙宋。父石田子清拙。其及吾者。僅六傳焉。先業烏有。弗克以振。不媿乎中也。其文物之悅目者。吾何所取。聊以爲之言而已。子以吾之必記焉。豈不爲君子之贈乎。予曰。士貴乎志。聖人因天地至清之精之氣。間出焉而不世出也。其可再生而三出也乎。原夫。小林六傳。以臻曹源。曹源七傳。得臨濟。臨濟八傳。而及揚岐會公。會公九傳。乃石田也。石田有愚極。有清拙。大矣哉。其擇人

以授。玉裔蘭譜。何不レ乏乎。雖レ曰二之靈山世世出一可也。天與之距二淸拙一僅四葉。不レ爲二甚遠一。才與レ德。在二乎躬一。是以發輝矣。此行。乃見二其志一。仲尼曰。人能弘レ道。因書以贈レ焉。亦君子之徒也。

應仁二年又幕命を奉じて、妙增、紹本、眷洋、壽敬、通擇、永扶、並に桂菴玄樹等以下百餘人を率ひて明國に再渡し文物を縱觀して其の齎持する所多かりしと云ふ。文明の初年台命を受けて建仁寺（一百九十一世）に視篆し、幾もなくして又禪居菴に靖退し、一時の宿老と共に文墨の間に游戲し、寂を禪居に示す。其生死の年月を詳にせず。遺稿に萬里集、再渡集、等ありしも今は兩者共に泯びて世に傳らず。僅かに戊子入明記一冊を存するのみ。

季瓊眞蘂

眞蘂字は季瓊。俗姓は上月。其所居の軒に扁して雲澤と云ふ。幼にして相國寺の雲頂院に入り叔英宗播に師事し、學得する所多し。嘉吉元年叔英寂して後、雲頂に住し、專ら文墨と親む。文明七年足利義敎、蔭凉軒を鹿苑院の南に置き、師をして記室簡牘の任に當らしむ。嘉吉元年六月二十四日、義敎、赤松の亭に赴き讌

祐の爲に殺さる、夜半に及び師亭に趨り、先づ亡骸を取りて鹿苑寺に送り、又等持院に就て荼毘の儀を行ふといふ。寛正三年七月、足利義政、鹿苑院の龍岡、等持院の竺華、壽德院の瑞溪に命じて高倉御所を建てしむ。亭子の名、後に晴月、琤玉等の類名を獻ず。同く二十六日義政問て云く、二條御所の舊名、蔭凉記し得るや否やと、師略記して之を獻ず。寛正五年、職を法弟益之集箴に讓り、雲頂院に歸り、方丈を紫藤と名け、室を安樂窩と曰ひ、書院を鶯雪と名け、亭を無双と稱し、又別に一堂を構へ、觀音の像を安して水月道場といふ。皆一方の佳致なり。更にこれを畫いて禪廬圖といひ、優游して以て樂む。後に天龍、相國の兩刹に視篆し、歸りて又雲頂に老ふ。其生死の年月を詳にせず。遺稿あり、季瓊日錄といふ。蔭凉軒日錄の一部是れなり。

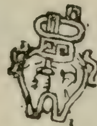
月翁周鏡

周鏡字は月翁。交蘆、三蘆、江侖老人等の號あり。其の所住の院に扁して栖芳といふ。師曾て記して云く『余有₂環堵₁扁曰₂栖芳₁』其の本貫と生死の年月とを詳にせ

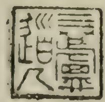
ず。法を巖仲周噩に嗣ぎ、文明七年の秋敕を奉じて南禪寺二百十五世に陞住し、一香巖仲に酬ゆ。文明十七年鹿苑寺に住し、延德二年退て相國の子院に住す。性來多藝にして雅思淵才、その筆墨に上せし者極めて多く、積むで十餘冊を累ぬ。江介集と題し、景徐周麟之れが後序を作る。其文に曰く

月翁周鏡墨蹟

龍山之麾除讓題辭　延悳
庚戌中穐之日廓公尊者
江介周鏡焚香謹跋







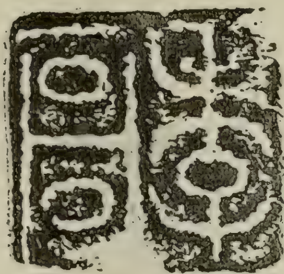
凡叢林宗師之有語錄。而行于世者。是盡自性海之中。流出將來。蓋天蓋地去者焉。夫陞座普說及高文大册。迄于短句小篇。皆是性海之中。一波瀾也。一涓滴也。噫觀於海者難爲水。余比者讀月翁老師之號江介集者併十鉅册。上從法語下至短篇具而在玆。若眉毛斷結。不覺老淚承于睫。尋之於今人。決而亡焉。比之古人。則蓋印月江訴咲隱之流亞乎。咲隱嘗叙月江錄有謂。曰。淞淮湊以深入性海。其大無外。其細無內者。夫是言之乎。余丁師唱滅之一年。適住當山。値師忌日。作文祭之。其辭曰。天無雙月。地有一翁。今思之

月江云乎哉。第恨欠㆓龍翔之擊節㆒焉。後生小長老太息謹焉。（翰林葫蘆集）

この集今は全く泯びて、その零冊をも世に存せず。纔かに翰林葫蘆集中にその後序を見るのみ。　師曾て東沼の流水集に跋を作て曰く、

吾祥光老師。廼北磵南堂曇橘洲秀紫芝之流亞也。吐㆑詞成㆑綱。下㆑筆爲㆑帖。遠焉而承㆓木訥孫㆒。近焉而繼㆓柏樹佛㆒。奘々眞々。乖々厓々。皮膚既脫。眞實獨存。應㆑世爲㆑人。歷㆓住名山㆒。二會法語。

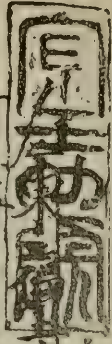
座㆓斷天下人舌頭㆒。厥換㆑韻者五十九焉。二㆓厥換韻之一㆒而增㆓卅二㆒。以爲㆓拈香小佛事之數㆒也。復二㆓厥數之一㆒而增㆓六㆒。以爲㆓佛祖曁自贊之數㆒也。三㆓信厥數㆒而減㆑七以爲㆓偈頌之數㆒也。至㆑若㆓疏疏





月翁周鏡印影

記序說五七言之詩各若干首。總九百五十篇。其手度弟子昇東江。跋爲㆓五策㆒目曰㆓流水集㆒。蓋老師所㆓會命㆒也。其佗散落江湖。膾㆓炙人口㆒。而未㆓輯錄㆒者。猶幾篇。後之君子庶補㆓厥亡㆒也。昔隴西李漢。編㆓昌黎集㆒。以㆓其門生㆒。不㆓敢論㆓先生道德文章之美㆒。僅擧㆓一集七百之大數㆒焉耳矣。余亦遊㆓老師門㆒。故竊傚㆑之。老師諱周嚴。字東沼。位至㆓相國㆒而止。唱滅太早。惜不㆑及㆑董㆓龍山㆒之


寺月泉

阿耨菩提種子香南能止秀誤商量思其人也妻其樹

三世如来正覚場　○菩提樹・菩提派侍者

多子塔前曽吐葉毘耶室裡又傳芳一枝拈出無人會

金色頭陀證父羊　○拈花室

三尺光寒按劍時黄頭老漢命懸絲昔年若出佛身血

未聖文殊五逆兒　○文殊按劍逼佛

二師作器有誰分臨濟雲門共策勳雲尚無心能出岫

不應君更懶於雲　○頌王聖與化出不出話

誰取黄金鑄鐵牛未生頭角出明州春風飽喫無根草

○永禄三年庚申仲夏吉辰書之

席。餘讓題辭。

延德庚戌中穐之日辱知厚者江介周鏡焚香謹跋

明應九年九月二十六日寂す。

月泉祥洵

祥洵字は月泉。幼にして桑門に入り、江月千和尙に執侍して得法進具し。嗣法の後、三聖寺に視篆し。後花園帝の享德四年（此歲康正と改元す）八月天龍寺に移り。幾もなくして東福寺（百卅六世）に住す。尋で寬正五年十二月三日、南禪寺（百九十八世）に陞住し大に人天を化益す。後に又東福寺に歸り、文明十四年三月廿六日寂す。世壽と本貫とを詳にせず。塔を掬月と扁す。偈頌一卷あり、月泉錄といふ。今尙叢林の間に傳ふ。

季弘大淑

大淑字は季弘。別に蔗菴、又は竹谷と號す。備州の人なり。幼にして塵俗を厭ひ

建仁（百二十九世）の竹菴大緣に就て進具得法、大事を了畢して後、江湖に周游し文明十二年、東福寺（百七十七世）に視篆す。禪餘諸子百家の典籍を涉獵し、文名當代に顯はる。後年病を獲て泉州堺の海會寺に寓し靜養年あり。曾て某人に與ふる詩序に『余在慧日之保社、倒指前後五十年矣、癸卯之冬、予來泉南先廬乍住』の語あり。癸卯は文明十五年にして堺に留まること大凡五年、今時傳ふる所の蕉軒日錄は此間の病床日記なり。而も病中常に學徒を提撕して倦むとなく日錄中、文明十六年十一月の條に『廿一日晴。爲請雛道者。講朱註論語。』といひ、又『廿二日雨下。爲諸子談論語』と記し、同く十二月に入りて『三日。晴講朱註論語』『五日。晴。講論語』と錄し。又大學をも講じたりと見へ十二月十二日の條には『十二日。雨。講大學』『十四日。晴。大學講了』の記事あり。其の朱註を用ひて之を講明したるが如き、宋學の造詣深かりしを知るべし。『春寒花較遲』の題に云く

寒重頗知天意慳。雪殘村落竹籬間。有如天寶年中日。花亦憂時易慘顏。
無賴春寒花較遲。野梅籬落雪生涯。群花亦有殿時咲。遮莫人呼老拾遺。
春早蝶園蜂埜叢。春來殘雪不曾融。東君亦有破慳意。未見入梅一點紅。

文明十九年八月七日寂す、壽六十七歲。蕉軒日錄の外、文集を蕉菴遺稿といふ、

稿中收むる所、疏二十二篇、說三十五篇、記五篇、贊九篇、題跋四篇、補遺二篇のみ。蓋し崑山の片玉なり。

清巖正徹

正徹字は清巖。松月主人と號す。俗姓は小田氏、備中の產なり。幼にして洛に上り東福寺の東漸健易に師事し、後に栗棘菴に寓す。碧山日錄長錄三年五月十一日の條に云く

城中有二一老衲一諱正徹。自號松月主人。初入二此山一東福寺師二事東漸一健易而司二記室於萬壽一。其性溫雅。工レ詠二和歌一兼善二和書一。一詠一唱形二於翰墨一則擧世珍レ之。故公卿大夫爲二方外交一者多矣。

又、南禪寺、希世靈彥の村菴稿に

諱正徹。號淸巖。松月者人因二其所居一以稱焉。尤長二於和歌一。每二一篇出一。人爭誦レ之。雖二士大夫家一。爲二專門之學者一。有所不及也云々

正徹が和歌に志を傾けしは十四五歲の頃にして其の師は冷泉爲尹、今川了俊なりしといふ。歌集草根集には一條禪閤兼良の序あり。當時縉紳太夫と交を訂し又風

清巖正徹墨蹟

雅の心ありし人と相往來したるものゝ如し。幼時よりの詠草、後に三十六帖三萬餘首に及びしを、洛東今熊野に住みし頃、自ら謂らく益なしと悉く燒棄したりと傳ふ。既にして悔い又詠ずる所堆をなし二萬餘首に及びしを、名けて草根集といふ。遂に其の技倆は當時の歌壇を壓しけん飛鳥井雅世、僧堯孝等の妬む所となり、二人『新續古今集』を敕撰するに當りて一首も彼れが歌を採らざりしかば、正徹意平かならず後に落桐新月といふ題にて

散らせなば見ぬ唐土の鳥もゐず桐
の葉渡る秋の三日月

と、大に諷刺の意を寓せり。乃ち忌諱

に觸れて美濃に流されしが

なか〳〵になき魂ならば故郷に歸らんものをけふの夕暮

と、盂蘭盆に因みて望郷の心を詠じければ、いつか禁裡に聽えて赦さるゝことを得たり。

彼は又筆札に巧なりしことは『梅菴古筆傳』の中にも記し、前に記したる碧山日錄の『善和書、一詠一唱形於翰墨。則擧世珍之』といふに見ても證となすべし。

長祿三年五月九日寂す。碧山日錄、此の歲五月十一日の條に云く

自春初染病不起。去九日而逝。享年七十九。言和者嘆惜之也。

と。又、蔗軒日錄（東福寺季弘大叔の日記）文明十八年四月四日の條に

松月正徹七十九歲逝。在能州正廣今年七十五歲。正播今年五十四云々

と記するに見ても其の七十九歲にして寂したるは明かなり。彼れが寂年につきて『鹽尻』には長祿二年五月九日といひ、『國史實錄』には文正元年と記し、『川岡雜談』には長祿三年八月と記せり。共に其の誤りなるとは如上の日記によりて明かなり。

徹書記物語は弟子正廣の編する所にして、中に作歌の心得、趣向の立て方、難字難句の説明等書き列ねたるものなり。今其の書中に散見するもの數首を錄して彼

れが歌風の一斑を見む。
契りつゝおくりし程の年を經は今宵や中の衣なるらん（寄衣戀）
かきこむるみつ野の岸による泡の消ぬも咲ける夕顏の花（夕顏）
時雨まて曇りて深く見し山に雪に奥なき木々の下おれ（山深雪）
色にふけ草木も春を知らぬまの人の心の花の初風（春風）
來る春の逢坂なから白河の關の戸あくる山の雪かな（山早春）
四海波治まらさりしりしるしには雲の上までのほる白波（失題）

雲澤叔衡

叔衡字は雲澤。東福派下の僧なり。其の師承と生沒年月詳ならず。横川の『百人一首』中、其の作一首を載せたり。曰く、

燕外晴絲

懸空一縷弄晴暉。輕燕高飛影自隨。天上痴仙愁底事。曉梳脫髮丈餘絲。

仰之泰

仰之諱は泰。南禪寺歸雲院の僧なり。位は平僧にて終り又諸刹に出世せず。亂後村居の作に曰く、

戰場何處不傷情。亂後村居次第輕。昨日英雄今日淚。春風原上草空靑。

其の沒年を詳にせず。或はいふ文明の初年寂すと。

太極藏主

太極。其の字を詳にせず。別に雲泉野衲と號し、其の燕所の軒に扁して吾雲といふ。應永二十七年を以て誕す、其の本貫を詳にせず。文安二年齡廿六の頃、伏見の退藏菴に昜仲和尙に侍し、已事究明を以て仲の鉗鎚を受くると多年。又去て建仁寺の瑞岩龍惺に師事し慈誨に沾ふ所多かりしといふ。碧山日錄、長祿四年九月五日の條に

瑞岩和尙入滅。余。出入和尙之門二十餘年。慈誨善諭所レ沾不レ少也。是以哀感不レ減諸弟。卽赴哭於龕前。

云々。其の親炙の久しきを見るべし。是れより先き一條兼良、淸原常忠に就て經史の講を聽き、東福寺の雲章一慶、華岳建胃、等持院の竺雲等連等に參じて竺墳儒典を授かりしにや日錄中に件々の事を記して詳なり、云く、

外史淸忠公來相會也。予素學二論語。孟子。尙書。毛詩。及左傳於此人一也。以レ故能相識也。（長祿二年二月十七日の記）

晩參。寶渚和尙（雲章一慶）蒙示誨。所レ沾不レ少矣也（長祿三年四月十六日の記）

等持院竺雲和尙。講二授漢史一。欲三予侍二其席一。（長祿三年五月三日の記）

參二寶渚和尙。講二敕修淸規一席。（長祿三年五月十二日の記）

十四日。乙未。侍二寶渚和尙淸規之講一。（同上十四日の記）

十七日。戊戌赴二等持院主漢史之講讀一。（同上十七日の記）

廿四日。自二木幡一直赴二北山一而聽二漢書之講一。張騫。李廣利之傳也。（同上廿四日の記）

是の如きの記述、枚擧に遑あらず。其の學に倦まざりしの狀、想見するに堪へたり。藏主又、詩を作るに妙なり。日錄所々に其の頌を錄す、『雨後溪聲』の題に云

く、

屋後青山宿雨晴。水涵溪脚舊痕平。白頭閑士雲林枕。夢裡朝參雜珮聲。

『凉書』の題に

十年圭竇一書生。秋對螢囊冬雪檠。今日微官入朝後。玉堂散佚午凉清。

の作あり。又、僧愛日の攝津の故廬に歸るを送る陽關の詞に云く、

禪衲何曾染ニ俗塵一。高蹤不レ止洛河濱。明朝西出ニ陽關一去。處々青山皆故人。

又、一夕親ら梅花を瓦瓶に挿み、夜深け燈を點ずれば其の影愛すべし、依て吟じて曰く、

幽磵僻居心自清。雲林寂々鳥無聲。禪眸尙有梅花習。燈背一枝踈影横。

太極又、書に妙なりしとは日錄中に

七日丙辰。菊阿來。需ニ小軒之扁。書ニ秋香之二字一。書レ之（長祿三年十月七日の記）

と記し、又

三日丁酉。臨ニ寫聖濟總錄第一卷。以ニ三寶院僧正之求一也

というが如き、其の一斑を窺ふべし。城南木幡の某院に住し、後年東福寺内に草菴を搆へ號して靈隱といふ。慧鳳の竹居清事『吾雲軒記』に

吾雲乃太極上人所扁其燕處之軒也。宇在先塔西北之罅隙焉。其地從衡不盈畝。宇之製也。不踰數楹。號曰靈隱。謂曰。此地光浮而苔色凝矣。夕鳥宿而午禽聚焉。不知其幾年。今入乎吾之手。叢片版以障風雨。架數椽以友歲月。有平頭之備指麾。有白足均氷蘗。朽策之注目也。則樂以忘年。座蒲之憩勞也。則靜以自怡。有親故故人。氣稱意合。則延以共話。頽然天壤內之一逸民也。吾嘗披北戶坐。前山蕩々以來碧。而集乎吾懷焉。因以碧山佳處命矣（下略）

其の日記を稱して碧山日錄といふは是れに因みしものなるべし。日錄は長祿三年正月に始まり應仁二年十二月に終る。十年有餘の日次記なり。舊と一條兼良の序ありしが如きも、今時傳ふる所のものは之を缺けり。日錄の應仁二年三月七日の條に

前關白一條殿下。賜碧山日錄序一篇。

と記し、同月十五日の條に

與左太史長公。謁一條殿下。謝賜日錄序。

の語あり。又當時、能文の譽れありしにや、日錄、應仁二年五月六日の條に

前板首座。見求余之製淋幹緣之疏。拒辭再三。請不已矣。

とし、同月九日の條に

問季弘大叔於長樂。出淋汗之疏。而求其品判也。

の語あり、又十日の條に

謁常喜和尚。華岳建碧亦出拙語。受慈教。

と云へるが如き、其の當時の宿老と斯文の交りありしを見るべし。季弘大叔の蔗軒日錄、文明十八年八月四日の條に

昨日雨中入充子寮。戲開机上冊子而見之。亂中慧山東福之諸友相偕所作之聯句詩。在此冊中。太周。太極郁文伯。瑚梅西等諸友也。此四人皆逝矣。其外存者僅愚老一人。愚在田舍。加以病。雖存非存。不覺讀之一潸然。太極與余同甲也。亂中南禪瑞要西堂。竺關。和先祖慈氏和尚與普明國師。雖字和答。四五十首八句也。各求和一首。月建及愚亦和一首。太極四五日之際。和者五十首。一代之絕作也。其中妙語奇對不爲不多。月建和尚絕賞特甚。余求其草稿於太極。祕之。好事之人奪之。云々

以て當代の作者なりしを知るべし。太極又曾て押韻集の著あり。季弘の蔗菴遺稿に跋文一篇を載す、其の首めに曰く、

我友太極。遁世方擾。避兵山中。杜絕人事。四換青黃。中略太極之此作也。偈頌以吾徒之先務。寘之於首。詩之與句岐而作二。而次焉。摘語甚簡。觸類而分。可謂能知所擇焉下略

と。此の集今時傳らず、而して存する所の碧山日錄も亦首尾脱簡の疑あり。而も好箇の史料たるを失はざるに見れば、當時無名の一老僧も後世の史界に貢獻したるの蹟大なるものありと謂つべし。日錄は載せて史籍集覽第廿五冊にあり。其の沒年を詳にせず。

旃室周馥

周馥字は旃室。生死の年月を詳にせず。洛西嵯峨の妙智院に住し、常に讀書を以て樂みとなす。嘗て東坡の詩を抄して翰林殘稿と名け、又善く史記を講ず。桃源瑞仙、其の史記抄に師の遺事を叙して云く

心華院旃室大和尚。廼山名氏之華冑也。幼養細川氏故讚州太守之家。自爾以來自謂。已冒性爲人之子。若出入其故家。則是事兩父母也。盖誓無貳也。是以山名氏之門無足跡也。其行義可見。少折節困學。痛洗臺閣之習。紈綺之心。自成大僧不喫放參。脇不霑席。凡無書不學矣。無學不精矣。尤長於易學。（中略）盖皆家學矣。賢首慈恩之敎。能究其奧焉。至宗門語錄以爲已任云々

當時葦航廣和尙天下に名あり、而して廣と名を齊うす。葦航も亦善く東坡の詩を講ず、此を以て時々兩老、坡詩と史記と換へて之れを講じたりと。葦航は久しく江西龍派の門にあり。後に天龍寺に歸り、日夕往來絕えざりしといふ。

桃隱玄朔

玄朔字は桃隱。永享の始め京都に生る。幼より建仁寺に入り、芟染參請の餘暇翰墨を喜び、詩名當代に鳴る。時に日峰舜和尙、妙心寺に住して爐韛孔だ熾んなり、卽ち往て陶鑄を受く。一夜窓下に坐して豁然として證あり、偈を作て曰く『白日青天三十棒。都盧大地黑漫々。夜來依舊開窓坐。蘿月松風毛骨寒』と。辭して讚州に行き、茅を結びて菴居し、偏して慈明といふ。佳聲遠近に聞えて參詳の徒門に踵ぐ。偈あり云く『烟雨三年南海涯。一簑空睡釣魚臺。幾多蝦蜆貪香餌。未遇金鱗銜波來』と。住すること四年にして伊勢に赴く。郡守朝倉氏、大樹寺を建て、師を請して開山となす。後に又尾州の瑞泉寺に移る。達磨忌衆に示して云く『籬根殘菊猶堪雨。溪畔寒梅早著花。具眼若知今日事。老胡未必過流沙』と。享德三年の春、退隱示衆に云く『一

住五年如履冰。春風捲衲下危層。不知何處得安枕。萬里江山七尺藤』と。復た大樹寺に還り、幾もなくして病に遘ふて寂す。其生死の年月と壽臘とを詳にせず。諡を禪源大澤禪師と賜ふ。遺稿一卷あり桃隱集といふ、叢林之を珍とす。

萬里集九

集九字は萬里。別に梅花江左漆桶道人等と號す。幼にして相國寺の玉龍菴に投じ、大圭宗价（建仁百六十八代）に隨て業を受く。資性穎脱にして博渉の聞えあり。應仁元年亂を避けて、江濃尾三州の間に放曠し、遂に俗に還りて美濃の鵜沼に捿居す。後に京に還り横川景三景徐周麟の二老に從遊し、又妙心寺の悟溪東陽の二老に師事して、請益甚だ多し。文明十七年季秋、武州に遊ぶ。太田道灌之を過することと至つて厚く、道灌の沒後、濃の舊寓に還る。曾て相國寺の景徐周麟に書を寄せて曰く

漆桶萬里再拜。氣候甚熱。喜承。起居輕安。伏辱慈誨。懃懇千萬。委之以九鼎之重。義味深遠。時々讀之。不覺洗然。忘民談之敗人意也。登龜臺而小魯。上日觀而眇天下。是閣下日進之謂乎哉。京師二三大老之外。厥人品。未有出閣下之右者。天未喪斯文時也。甚善甚善。如某

乙則弊軫枯絃。不敢覩不敢鼓。寓殘骸於東濃鵜水之北灣。齋扁梅花無盡藏。以萬里爲名以漆桶爲表號。每日漁人樵子業徒習之。有二子。一號千里。一號百里。辛丑五月。千里逝矣。今也百里一人而已。比常有小異。傳承京師諸老。往々掉風波之舌。而水遠山長之外。唔咿某乙。於戲。脩姤路藏海。示利衰毀譽稱譏苦樂之八物。八物便是無明種子也。人各從無明種子出生。連皮帶骨。豈有可逃之地。但以百歲之後觀之。則人與我。彼八物。皆成一空。全非斷見之空。然則一空之中。持戒也得。破戒也得。利衰毀譽也得。稱譏苦樂也得。落花舞。而飛鳥歌。不亦快乎。伏承。今玆結制。閣下說小釋迦之禪。六變震動。祝々。猶企以待推輿之日也。某乙之家兄。在越上者。不聞存沒二十年于今。以的便見告多幸。賣書漢文恩。其稿未滿而歸。汗顏汗顏。古聞。邊鄙之人。謄書以鬻之於京師。今胡爲肩京之書。而鬻之於邊鄙。所謂周之禮盡在魯。寔非無其由也。欽想敦學之風。無階會面。臨書增懷。萬々自珍自壽。漆桶萬里再拜再拜。惶懼惶懼。

以て居士が當時の家庭と、その周圍の事情とを窺ふに足るべし。又文明十五年の仲夏、等持寺の桃源瑞仙に答ふる書に云く、

漆桶萬里頓首。贈書慇々懇々。三讀不止。一幅之文。終始關鍵。有開有闔。如四瀆納百川。或匯而爲廣澤。汪洋千里況堂上師。莅事繁。而不忘不肖。又且齒不肖於先達龍象之間。件々

梅花無尽藏第五 混雜 頌并詩 七言八句 五言絶句 五言八句

龍阜閣公座元乱後住江介之与恵有七八

恁般若翁次其韻 西堂 雖未有和故云

白髮座元初拜顔丁寧自説住江湾杏花賣尽辨木島

昼角吹残大士山終夜両篇招月讀今朝一笠掛雲還

傳聞南郡凱歌後大卧不驚民戸開 江介之竹生島有佳酒 觀音奈通古戦場也

題杜子美昼像

天地一驢行踏料畳境諌草遂無邪都将五十年間雪

吹作千茎鬢上花春樹入詩真正法残盃遺恨幾河沙

尋常不醒〻還酌酒債猶多乱後家

屁之飯顆山下大拳禅流則大安之附庸而風浪渺茫雖隔大川之草

可執而已戊戌冬東大北老人自携鉢嚢而視篆謹賦釉一扁奉

江湖歉笠之加賀云

見推重。實不敢當也。亦使堂上師。品藻之論。不信於時人。不肯換服以還平生之識面。有笑有罵。有涕泣。其笑者情之疎也。其罵者情之親也。其涕泣者情之心切也。三會（月翁周鏡）小補（横川景三）大昌（天隱龍澤）栖老（益之）松泉（龜泉集證）及堂上師。可謂心切者也。雖然二十年來。雲長水積。鴻斷鯉沈。無承隻字片言往來之問。但三會大昌及堂上師。數次之奉而已。見所知而喜。見所似而喜者豈非去國之常乎。奉已落手。則溫然匹似對眉宇之春。吁不肖。死灰枯木。齒牙墮者四五。故語訛而洛音悉變。六十之年。忽焉既至。不肖纔除其四。堂上師亦除其六。餘生不幾。互無追歎息也。云々

知るべし當時月翁横川天隱益之龜泉瑞仙等五山の名星と猶交を締したることを。

又曾て景徐壽春二老の湯山聯句に和し之を洛社の徒に寄せたるのこと、翰林葫蘆集中に明かなり、云く

（上略）前歳。余與壽春老禪。有溫泉聯句五百韻。或傳到岐。今雨老人。偶覩之。其梅藏和之。千句成章。可謂多々益辨。因寫此。寄之於洛水之陽。以見示余。余披之。則題舊作於上。而以其所和者。附于下。（中略）吁梅藏。四十年前。在洛社日。川。桃。兩翁時々會合。鼓氣挑戰。余在席末。服其余勇。今讀之。其雄心覇氣。不少衰也。可喜矣。云々

曾て自ら寫照に題して曰く『菴主々々。全無輔車。春風昨夜。現出梅花。』と。　時に齡七

十歳。居士、嘗て東坡の詩を抄して『天下白』といふ。その自序に云く、芳脞翠（翰苑遺芳脞説續翠學此三而曰芳脞翠也）之三部。迺坡集之日月星也。凡好レ學者而孰不レ借二其餘光一。故彌二綸夏夷之間一。今不二悉錄一也。三大老。若有二異說一。則擧二某謂之二字一。以判矣。加之史傳小說。詩話圖經。天竺之悉曇。扶桑之假名。有レ矜二于本集一。而三大老不レ載者。件々纂焉。余一日。憑レ几座睡。椰冠葛屨之尨眉。徐々然來。指二空中一。告レ余曰。識二彼天下白一邪。蓋雪而非二越女一也。余欲レ問二來由一。則忽焉不レ知レ所レ去。吁夢亦覺。覺亦夢乎哉。漫名二此緒餘一。曰二天下白一。實慕二先生之堂一也。

遺稿あり梅花無盡藏（六冊）といふ。その本貫と生死の年月を詳にせず。

華屋宗嚴

宗嚴字は華屋。幼にして南禪寺の眞乘院に入り香林宗簡に就て剃染受具。法を香林に嗣で後、四方に周游し、博學を以て一世に名あり。夙に名利を厭ひ居常讀書に耽り、東福寺の岐陽方秀に從つて學ぶ所甚だ多かりしと云ふ。諸山に出世せず平僧を以て終り、位は首座に止まる。又經史を抄して述作多しと雖も今時一も傳らず。寔に惜むべし。

惟明瑞智

瑞智字は惟明。本貫と生死の年月を詳にせず。幼にして愕隱慧蔵に投じ嗣法の後、斗室を構へ軒に扁して玉芳といふ。横川。景徐と文交あり。文明十六年鹿苑院に住し左街の僧錄に補せらる。此の年鹿苑院を再興し落成の日、偈を作つて之を賀す。景徐其の韻を次で云く、

奉依鹿苑惟明賀新軒落成寶偈韻

萬年官院再興時。柳色左街風雨滋。佛慧親酬相公問。鷲峯一咲在花枝。

同く十七年、席を月翁周鏡に讓りて退院す。

季亨玄嚴

玄嚴字は季亨。日向の人なり。別に又紫府眞人靈松道人等と稱す。東福寺の即宗院に住し、文明年間、東福寺百卅七代に開堂す。文名を以て其名一時に高く、遺稿靈

松集一卷、今に傳へて叢林の間にあり。長祿元年十二月廿五日寂す。靈松集中、『送曳公外記叙』に

日去京遠矣。陸出西海道。驛堠二千餘里。轉南海得飄風。舟日行百里。否則留乎陽渚陰濆之間。動彌年月。故西人來京。常以此爲艱。余寓京之惠崎四十有七年于此矣。

の語あり。以て其の東福在住の久しきを知るべし。

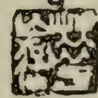
正珍書記

正珍書記。其字を詳にせず。建仁寺大統院の嘉隱寮にありて讀書を專にし、叢林に文名あり。諸山に出世せず平僧を以て終る。天神の贊に曰く『梅花落手臙脂雨。三月木犀無此花』又辭世の偈に云く『夫子不知字。達磨不會禪。倒入無間獄。笑吽四禪天』と。その生死の年月を詳にせず。

華嶽建冑

建胃字は華嶽。南禪寺五十四世喆岩祖濬の法嗣、自ら栗隱叟又は樵隱子と號す。居常、東福寺の常喜菴に住し、又後に移て本成寺に居る。寛正年間東福寺百四十二世に視篆し、寛正三年四月公文を以て南禪寺百九十三代に陞住す。當時文名あり九淵村菴瑞溪等と交游したりと云ふ。文明二年二月廿二日常喜菴に寂す。亦是れ當代の一明星たり。而も遺篇傳らず、惜むべし。

華嶽建胃墨蹟



玉英慶瑜

慶瑜字は玉英。東洋允彭の法嗣にして嵯峨招慶院の第三世なり。文明七年、國信を奉じて明に入るや憲宗皇帝特に金襴の袈裟を賜ふ、時人之を榮とす。季弘の蔗軒日錄、文明十八年三月十三日の條に『因知招慶者龜阜之瑜玉英入明國之人其族二階堂』云々と、以て其の俗姓を知るべし。又、蔭涼軒日錄、長享元年十一月三

日の條に『三日。赴招慶院齋會。盖玉英慶瑜首座七年忌燒香。冀瑞和尙燒香』云々と。以て其の沒年と法位の首座に止まりしを窺ふべし。

正楞元芳

元芳字は正楞。其の師承と生年月を詳にせず。永享、享德の頃、建仁寺の洞春菴に住して文名一代に馳せ、東福寺の以篤信中、建仁寺の九鼎器重、瑞巖龍惺等と深く道交を締し、唱酬來往常に絶ゆることなかりしと云ふ。四六文に工にして今時傳ふる所の遺稿中、尙ほ四十六篇の多きを存す。曾て鍾馗の像讚を作る。文に云く、

鍾馗不知何人。或曰鍾南山人也。明厥內而恠于外。故世以神異稱矣。余竊讎諸史以閱。厥行卓然。殆超忠臣義士之風者存矣。唐高祖之試武功也不第。羞而觸殿階以卒。遂賜七品服葬之。吁何相知之晩。御之之深也。盖以激其義邪。方明皇染痁。則眇一目。而現夢于禁中曰。與我王願除天下虛耗之孽也。厥爲狀也。藍衫角帶。足靴腰笏而巾于首。其髮蓬如。前而用拇指刳勵鬼之目。擘而啖之。及寤上疾勿藥而瘉。亦知旌其忠邪。夫一身而二任焉。雖賢

哲不易能也。聞之伯夷義不事周。而人以爲違忠。子胥忠不忘郢。而國以爲棄義。然則進之以忠。退之以義者。行之兩全也。噫古今之下。處世之行。必發乎性之所近也。苟見其進退。則其人忠義不可掩矣。顧〓之爲人。終始一節。可以正人倫。可以輔教化。豈與夫夷胥道止於一義一忠。不跂步乎兩全之行者。並歲而話焉哉。隷是而言。若夫署之九齡之上。加以仁傑之見。措社稷於泰山之安。則高將軍所云唐果有獨眼龍之瑞已耳。嗟乎惜夫。世咸指〓爲神異。余以爲忠義之人也。是以余粗論列厥行事如斯。凡展玆像者。不啻國而禳妖。家而鎭惡。或亦有激而旌焉。辭曰

於戲天乎。錫唐以社。高明之朝。得只奇士。義膽忠肝。坐麾姦宄。愼始克終。噫弗難美。累千萬年。鮮見其比。

久しく洞春菴に住して禪餘讀書を專にし、功名の外に超脫して曾て諸山に出世せず、位は藏主を以て終る。遺稿を越雪集と云ふ今時傳へて法社の徒、之を珍とす。

天隱龍澤

龍澤字は天隱。別に默雲と號す。應永二十九年（紀元二千零八十二年）播州揖西郡千本村に產

る。七歳にして京に上り、師叔、寶洲衆の室に投じて童役を執り、後に薙染して名を建仁寺に隷す。長じて法を天柱和尙に嗣ぎ、後に洛北の眞如寺に住す。文明十四年三月十六日建仁寺二百十八世に視篆して大昌院に住し、後に又南禪寺二百卅一代に陞住し、明應九年九月二十三日寂す。壽七十九。遺稿、默雲稿に左の自述あり、其の傳の缺を補ふに足るべし。

予七歳之秋。出播入洛。十歳佛降誕日。備驅烏之役。以隷名於東山古刹也。中間三十七年。每王正未嘗不在東山也。前年乙亥之亂。京師燬于兵。群緇星散。或陷賊或逢刑。獨荏中之徒無恙。應仁二祀歳次戊子三元日。諸徒團欒。各致祝詞中略及九月之季。發京寓播之班鳩村。閏十月又奔京。臘之二十四日再至播。元日猶在班鳩村。云々默雲稿卷四十三丁

師の東山に在るや常に講說に耽り學徒其門に趨るもの多く、綿谷、文摠の如き其の尤なるものなり。默雲稿に

余壯歳中略應松鷗綿谷懇求。時々鼓唇皮。一月之中不過五六日。或隔日。或隔歳。不必專攻也。長安收復之日。余又移家於東山舊址。松鷗又來。遂終其說。卜長享二年小春某日爲獲麟一句。其間殆乎更十四歳龠。云々

又、月舟の幻雲稿に文摠就游の事を叙して

天隱龍澤墨蹟

萬年文摠老人。就吾山默雲翁。而講杜詩。蓋始于辛未。終于戊申。可謂勤也。余(月舟)亦侍傍剽聞焉云々。

是の如くなるを以て學徒の集るもの市の如く、景徐の如き翰林葫蘆集中に

玉府先天隱大禪師(中略)昔日。師之踞乎玉府(建仁その)也。學者歸之者。以七十子之游於仲尼門。各得其所而去。云々

と記するが如き其の盛

を知るに足るべし。師は又當時の明經家清原常忠に就て疑義を扣きたるにや、天與清啓に與ふる書中に

余自去月（年代未詳）隨古雲侍史。僦府中民屋。而卜環翠先生之隣。其志在聽絳帳餘論。所恨十年之前。不定斯策云々。（天隱天集）

諸家の善說を集むるに汲々として、其の下問を耻ぢざるの狀以て觀つべし。又和歌の嗜好もありけん。實隆公記、明應八年四月六日の條に

自大昌院有使者。新古今序不審事也。切句改文字返遣之云々

とあり。其の古今の歌集を涉覽したるを知るべし。曾て汲古賢公和歌の次韻に云く、

故人唱酬。有次韻。有依韻。有用韻之法。然則和章之作。其模不一也。本朝和歌不調平灰。不拘聲韻。和其意。以爲酬答也。盖神代淳朴遺風乎。文明六載元旦。汲古賢公有試毫和歌。落句押春之一字。幕下諸公次其韻。以擊節。豈非和歌次韻權輿乎。所恨者和漢朗詠集無玆策也。需余以唐律賡之。卒綴一章。以應其命云爾。

昇平奇策豈無人。輿座偏歸公一身。汲引有時天下士。井華氷解早知春。

寛正六年、後土御門帝の即位を賀するの作に云く、

謹奉慶親王踐祚

吾皇治出禹湯前。九五位高龍在天。太史若書登祚日。宜徧寛正甲申年。

又、皇居の重建を賀するの作あり、

一統乾坤闔鳳闕。九重日月照龍顏。茅茨宜復帝堯昔。莫學阿房赭蜀山。

江天暮雪の題に云く、

江天欲暮雪霏々。罷釣誰舟傍釣磯。沙鳥不飛人不見。遠村只有一簑歸。

語錄を翠竹眞如集と稱し、詩集を默雲稿といふ。外に文集二卷あり。師曾て錦繡段を編し、其の後序に記して云く、

詩者非吾宗所業也。雖然古人曰。參詩如參禪。詩也。禪也。到其悟入則非言語所及也。吾門耆宿不外之。覺範。參寥。珍藏叟。至天隱諸老。或編其集。或注其詩。豈謂吾宗無詩乎。余壯歲之時。頗有志于詩矣。唐宋元三朝之詩。累篇連牘。游目於其間。則望洋向若。不測津涯。退而採膾炙人口者三百餘篇。睡課有暇則諷之味之。不覺手舞足踏。或自書以付小兒輩以止其啼。名之曰錦繡段。往々爲人寫去也。所恨者逸衆作者惟夥矣。玉府字峰藏主膽之。以索華谷雅丈吟疵。重其人可知矣。花晨月夕。手之口之。則詩之外無禪。禪之外無詩。於是始知少陵之詩。有雲門三句。後山之詩有洞家玄妙也。

又嘗て嘉吉の亂に赤松性存時九歳にを携へて山中に隱れ、其の難を免れしむ。故に性存の子政則、文明三年十月十四日、亡父追薦のために大昌院を再造し、其の舊恩に報いたりといふ。

少林如春

如春字は少林。弱年にして鎌倉の建長寺に入り東明に侍して法を嗣ぎ、後に建長に住して第八十三世に列す。嘗て『琴高生騎鯉圖』に題して曰く、

宋代高仙名未朽。鯉魚背上欲何之。琴中白雪乾坤潤。海外靑山日月遲。

應永十八年四月十八日寂す。遺稿傳らず。

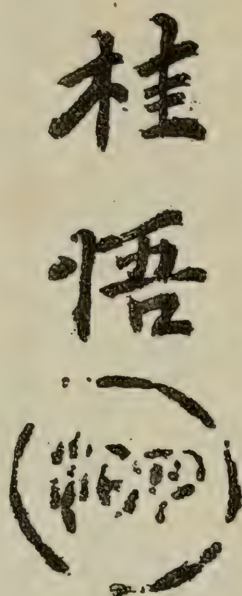
恕中中誓

中誓字は恕中。天龍寺物先周格の法嗣なり。永享六年、國信を携へて明に入り、宣宗皇帝に見へ、歸朝の後相國寺に住し、又尋いで天龍寺に視篆す。蔭涼軒日錄

永享八年七月二日の條に云く『遣唐使恕中和尙歸朝。被參御前』云々。文安元年九月六日寂す、世壽七十一。

了菴桂悟

桂悟字は了菴。別に鉢袋子と號し、或は三浦桂悟、伊川桂悟等の號を用ひし事あり。應永三十二年（紀元二千零八十五年）を以て生る。幼にして京に上り、洛北眞如寺の大疑信に投じて戒を受け、後に證悟を得て法を信に嗣ぎ、文明の初年伊勢の



了菴桂悟印影

安養寺に住し、同九年の頃、京の東福寺（百七十一世）に出世す。後土御門帝、其名を聆き召して法要を問ひ、且つ大に喜び特に宸翰を蘸し、了菴の二字を大書して之を賜ふ。夏を過ぎて退院、塔頭大慈院に住す。退院上堂に曰く『密傳。官命。住山僧。失照宗門日下燈。忝賜。宸奎了菴號。五湖風月一枝藤』と。後專ら文事を以て樂とす。永正三年、後柏原帝、其の道價を崇び特に佛日禪師の號を賜ふ。敕宣に云く、

勅。五岳孤秀。起法雲於大慈。七世早移。分度門於淨刹。桂悟和尙。癡兀之正脉。大疑之的兒。誕瑞現白光。更感朝曦入室。直指發玄要。却如古井不波。龍章鳳姿。侍靑雲而講經卷。牛行虎視。步緇林而提紀綱。道德兼充名聲達聽。特賜佛日禪師。

永正三年五月十一日

越えて永正六年齡八十三、幕府の命に應じて明國に使す。半途颶風に遇ひて歸棹し、永正九年更らに副使光堯、玄衛勝康沈運等の諸役者以下六百人を率ゐて入明す。蓋し當時の使節は、名は概ね進貢と稱するも、實は貿易に過ぎず、此を以て往々彼れの掣肘を受け、抑壓を被ることなしとせず。師の使命を奉じて彼の地に入るや、又この錯節に遇ふ。卽ち一書を大官に呈して强硬の態度を示せり。其書に云く、

日本國差來正使桂悟等。謹呈爲進貢事。本國進貢附搭太刀。累蒙上國憐我國王遠來忠敬之誠。賜價優厚。賜勅於國。古今欽報矣。今度悟等來貢。在南京承用本國四號舡宋素卿誑奏達。蒙聖旨。國王附搭使臣自進刀。都准進收。後不爲例。刀價每把欲賜新舊錢參百文。悟等愁訴四號舡非進貢舡之由。以此諸位老爹惟愚之例。刀價依弘治年號年間支給。則是弘治八年九年例並行之。悟等仰荷聖主大恩。可以全歸國。不勝喜躍。今承布政司文書。捨

弘治八年一千八百文例。止用弘治九年三百文。我輩於南京與所聞四號舡例。何其異哉。聖旨亦宣用弘治年間例。未嘗捨八年例而取九年。何故布政司大人獨錯會聖旨。專用九年例。欲行之乎。大抵國家費出不可不惜。或恐惜不在是也。若或布政司大人。決欲以參百文爲公家惜費。是欲以及加我使臣頸也。夫豈堪乎。夫夷官爲貢朝事。頃者。頻呈疏稟往昔

了菴桂悟墨蹟

泰叔

有安侍者求我稱泰叔以一辭證義云。
難々易々絶言論伊呂商名伯仲門今古
鷲峰閣佛祖同風羅海一乾坤
永正十一年龍集甲戌三月吉辰
大明育王山廣利禪寺前席了菴九十歳

優寵之降。今年恩榮之減。敝邦正可絶職貢事。幸蒙諸司老爹哀憐。欲使愚訟奏達聖聽。是使悟等忽出於再生之地。人皆有一天。悟等獨戴二天者也。聖天子負祖宗累世之德。懷天覆地載之仁。含氣之類。咸願得其志。況歷代忠臣遠來使命乎哉。賞賜復舊包茀再入也必矣。引領日夜可待明詔降而已。然萬一新例不改。賞賜不復舊。則敝邦貢事。一切絶于此時

也。抑洪武以來。進貢者幾番。奉使者幾人。今日悟等何人薄福奉レ節入朝。逢二此時運一。迷惑之極。進退惟谷。如二桂悟光堯一。何面目可レ見二國王一哉。決留二殘骸於大國之地一。與二草露一倶銷可レ示二孤忠一。其他六百餘人。一任二彼進退一。舊年於二蘇州一呈レ疏以稟二此事一。歳月雖レ移。此志不二敢少屈一。今日再犯二尊嚴一愁告者。若其當二明詔此降新例不レ改之日一。俄申二□事一。則列位老爹必曰。儞等實有二此心一。何其未二奏達一以前不レ言レ之。欽定如レ此。儞言何益之有。是以。預呈レ疏申レ之。畢竟悟等死生。係二於賞賜之復レ舊與一レ不レ復已矣。伏希憐察。

是れ其爭ふ所は、貿易新刀の價格、弘治八年一刀、一千八百文を以て賣買せしにも拘らず、今次は止だ三百文に下落したるがため、一行に代りて愁訴したるものにて『若成布政司大人。決欲下以二參百文一爲二公家一惜上レ費。是欲レ以レ及二加我使臣頸一也』と云ひ、又は『然萬一新例不レ改。賞賜不レ復レ舊則敝邦貢事。一切絶二于此時一也』と稱し、『決留二殘骸於大國之地一。與二草露一倶銷。可レ示二孤忠一』と記する如き是れ一種の虚喝に過ぎざるも、其死を以て彼れと爭ふの硬骨に至りては、又使命を辱めずと謂ふべし。武宗皇帝其道價を重んじ詔して育王山廣利寺に住せしむ。師門に臨で曰く『育王門戸。八萬四千。毘盧樓閣。雨華現前（進歩云）纔動二一歩一。東土西天』と。是の日、皇帝使を遣はして金襴の袈裟を賜ふ。卽ち衣を拈して云く『晝錦恩榮北闕天。黃梅夜半不二曾傳一。育王山頂

横雲霧。無相福田擔一肩』と。又、此の日、賜進士出身奉訓大夫提督浙江司舶司事華人黄相。一疏を具して其の榮を祝せり。文に曰く、

日東了菴禪師轉職育王寺疏幷序

黄　相

了菴異域叢林之彥也。僧臘八十餘。龐眉鶴髮。動止雅恂。尤不苟於言笑。清齋習靜之餘。默究經典祕義而已。初在本國。大檀越征夷大將軍。以瑞龍山南禪寺丈室乏人。特命主之。緇流允服。頃啣國王之命。遠使中華。得窺聲名文物之盛。聞寧波有育王寺。琳宮梵宇。金碧焜煌。乃轉職此寺。而居者久之。大修敎典。寺之懽騰。寧波府衞諸官僚亦喜其能不墜迦葉。而像敎之中有人矣。予故爲之疏。

竊以大敎。顯于西方。流慈于東域。分形分跡之時。大開廣濟。常現常光之世。每覺凡愚。及于衣鉢失傳劫灰易代。金容掩色。不鏡三千之光。麗象開圖。空端四八之相。微言極含類於三途。遺訓導群生於十地。況日本乃扶桑之鄰壤。而徐僊託蓬島以潛形。間生異士。今任了菴。飛錫瑞龍山。究一乘五律之道。浮杯育王寺。了八藏三篋之文。萬派必朝江。千岐同適國。塵塵刹刹。現一毫端。去去來來。無千界外。大海法流。洗塵勞而不竭。智燈長焰。歸幽暗而長明。不減不增。無垢無淨。袖裏千年鐵柱骨。本自西來。手中萬歲胡孫藤。行將東去。謹疏。

爾來彼の土の緇白悉く歡呼し、士大夫も亦來り謁して法を問ふに至る。時に彼の地の正德八年即ち我が永正十年なり。幾もなくして育王の印を解きて歸朝す。諸儒大官別を惜みて、送行の言を寄するもの多し。王陽明の送序に云く、

世之惡奔競而厭煩挐者。多遯而之釋焉。爲釋有道焉。不曰清乎。撓而不濁。不曰潔乎。狎而不染。故必息慮以浣塵。獨行以離偶。斯爲不詭於其道也。苟不如是。則雖皓其髮。緇其衣。梵其書。亦逃租繇而已耳。樂縱誕而已耳。其於道何如耶。今日本正使堆雲桂悟。字了庵者。年踰上壽。不倦爲學。領彼國王之命來貢珍於大明。舟抵鄞江之滸。寓館於驛。予嘗過焉。見其法容潔脩。律行堅鞏。坐一室。左右經書。鉛朱自陶。皆楚々可觀愛。非清然乎。與之辨空。則出所謂預修諸院殿之文。論敎異同。以並吾聖人。遂性閑情安。不譁以肆。非淨然乎。得名山水而游。得賢士太夫而從。靡曼之色。不接于目。淫泆之聲。不入于耳。而奇邪之行。不作於身。故其心日益淸。志日益淨。偶不期離而自異。塵不待浣而已絕矣。茲有歸思。吾國與之文字交者。若太宰公及諸縉紳輩。皆文儒之擇也。咸惜其去。各爲詩章。以艷飾迴躅。固非貸而濫者。吾安得不序。

姚江の楊端夫、廣平府知府盧希玉等又各贈行の作あり、

日本了菴禪師。膺使命。來我皇明。館于姑蘇。幾半載。凡士大夫之相與者。無不敬且重焉。以

其齒德既高。□學亦稱是故耳。昔王摩詰所謂。色空無得而不物々。語默無際而不言言者。爲似今日禪師道也。予接遇日久。因賦二詩以贈。一以詠號。以送行云。

楊　端　夫

撥開雲霧靈臺湛。著盡工夫豈憚勞。六鑿已空無箇事。一身天地自逍遙。
文采飄然語意眞。聖朝尤重老成人。明朝授節歸東國。會見賢王眷顧頻。

贈了菴歸國　　盧　希　玉

明發行囊曉拂塵。豈辭霜鬢苦吟身。調高不是陽關唱。杯泛何妨麴米春。水闊帆飛風力順。華紅葉綠雁聲頻。至家解知詩筒重。爲報賢王謝紫宸。

時に齡九十歲。師入明に先だつ數年前、大慈院内に堆雲軒を創め、隱棲の處とす。歸りて後又此に居り幾もなくして後柏原帝敕して南禪寺（二百四十一世）に住せしむ。師山門の丘墟せるを見て、自ら衣資を出して無關の山門を再建す。尋で又南禪寺の印を解きて堆雲軒に歸棲し、永正十一年九月十五日寂を軒に示す。壽九十一歲。東福の大慈院に塔す。語錄一卷の外、了菴和尚壬申入明記一冊あり。語錄は我が文明十七年、明の成化廿一年、師の法嗣東歸西堂之を携へて渡航し、序を賜進士出身中憲太夫四川按察副使四明の黃隆に請ひしもの是れなり。其の文に云く、

日本東福了菴和尙語錄序

黄　隆

夫人之所主者心。心之所具者性。性之所發者道。道一也。而名不同。釋所謂道得其極曰菩提。交徹融攝曰法界。常樂我淨曰涅槃。不濁不漏曰清淨。不妄不變曰眞如。超越玄閟曰密嚴國。隱覆含攝曰如來。若是者背之則凡。順之則聖。迷之則死生始。悟之則輪廻滅。引而爲智。然後爲正智。依而爲因。然後爲正因。嗚呼其可語言而盡乎。易曰書不盡言。言不盡意。悔菴曰。下學可以言傳。上達必因心悟。豈欺我哉。且言者心之聲。而辭者聲之著。上古未有文字傳道以心。而不以言。以意而不以辭。得其傳者。冲虛妙粹。炳煥靈明。若驪珠獨耀於滄海。桂輪孤朗於碧天。奚俟語言文辭也耶。昔遠公曰。無上妙道。照然於心目之間。大覺曰。前輩有聰明之資。無安危之慮者是也。迨今人不皆□德。不皆初。雖以言傳以辭授。亦在在若居暗室。若患聾疾。不見不聞。徒聘文辭。徒費語言。其得傳者幾何人哉。噫古人之風。吾不得而見之矣。得見達於言辭者。斯可矣。余聞日本東福和尙。曰了庵者。乃大疑禪師之法子也。自八歲薙髮。受本師業。抵今六十餘年。潛心遜志。於禪道無不究竟。不涉聲利。不住形相。朝夕兢兢。罔敢逸怠。一玉之潔潤。而丹紫莫能渝其質。一松之堅勁。而雪霜莫能摧其操。其鐵中之錚錚者歟。爰有了庵之社友東歸座元。大明成化甲辰歲。承彼國命。浮舟越海。不辭險阻。而來貢我皇上。沐文明之化。際禮遇之隆。遍歷兩京名寺。博覽南北勝境。□今年乙巳。返邸

四明。言旋而歸。則其目之所接。耳之所濡。心之所契。不亦廣且大而道德倍常乎。亦僧中之表表者也。余觀書暇時。東歸座元。命僮持一帙來。展之即了庵和尚平日語錄也。求予序諸首。余觀之三再。余亦嘗庵心於釋學者。不覺心目豁然。自忘其倦。不忍釋手也。嗚呼休哉。後之人觀茲語錄。則知了菴之爲人。觀了庵之爲徒。則又足以見大疑之爲師矣。遂書之以爲序。

壬申入明記は洛西嵯峨妙智院に藏し。語錄は近時之を傳ふるもの甚だ稀れにして僅に其の一本を内閣記錄課の書庫に藏するのみ。

約之令契

令契字は約之。箕山の人なり。建仁に入りて僧となり詩才を以て當代に知らる。生沒の年代を詳にせず。嘗て人の兵庫に之くを送るの作に曰く、

秋風何處可縱梢。攝上之佳山水泓。手把珊瑚敲白夜。夜深月在老龍巢。

桂菴玄樹

玄樹字は桂菴。應永三十四年（紀元千八十七年）周防國山口に生る。早歳より京に上り南禪寺の雙桂院に入り、惟肖得巖に就游し長して法を豐州萬壽寺の景蒲玄忻に嗣ぐ。その双桂に在るや、得巖に侍して、儒釋古今の書を學誦し、精究毎に怠らず。後に大隅の正興寺（同寺三十九世）に住して經學を講ず。縉紳儒生の徒に至るまで皆走りて其講筵に列す。應仁元年幕府建仁寺の天與清啓をして明國に使せしむるや、師は第三號船の土官として就て入明し、北京に入りて憲宗皇帝に見え、又蘇杭の間に游び、諸儒を訪ふて程朱の新義を學び、彼の地に在ること七年、文明五年歸朝す。

一翁の宗派目子に云く、

桂菴南游而在蘇杭之間者七年。終居天童第一座。皈朝之日。自天童第一座直領建仁台帖。晩年位至南禪。在中華之日。依學校諸先生。聞四書六經新註之講義者。熟矣。至予爲童蒙誦習之師者。新註程子朱子之義也。

又、日州龍源寺前住次第記に云く。

桂菴自早歲在南禪雲興庵問禪。十七歲有磬一聲頌。四十二歲而入中華。爲太白山第一座。八十一歲於于薩之桂樹院示寂（靈隱寺也）

當時、京師の爭亂未だ已まず、亂を石見に避けて讀書を專にす。時に周防の大內政弘、肥後の菊池重朝、薩州の島津忠昌等皆儒學を喜ぶ。同く八年菊池氏に招かれ、十年又島津氏の聘に應じて鹿兒島に客游す。忠昌侯即ち桂樹院を創して師を第一世となす。盛んに宋學を講明して、時人の耳目を新にし、又島津氏のために尙書を講ず。次で國老伊地知重貞と謀り大學章句を刊行す。是れ我國に於ける朱子新注開版の嚆矢なり。島津氏の一族忠廉、日向の飫肥に封を移さるるや亦往いて龍源寺に住し、旁ら簡牘記室の任に當る。後に忠廉、聘するに州の安國寺を以てす。その常樂塔を拜するの偈に曰く、

佛祖不傳端的旨。麟々產出鳳凰兒。祇因昔日婆心切。三拜開山一國師。

爾後常に日薩の間を往來して講明を怠らず、學徒倍多く、新刊の大學も亦大いに行はれ、明應元年改版するに至る。同く七年五月十三日、幕命を以て京の建仁寺二百三十九世に視篆す。蓋し公文に坐するなり。宗派目子に云く、

桂菴領建仁帖之時。蘭坡和尙有道舊之疏。八字稱。百紙參軍。五經博士。云々。

又云く、

鄂渚（桂菴の法嗣）領帖之時。江心和尙有道舊之疏。說桂菴在中華經歲之事。疏中一語暗記之。故國無心渡海潮。乃翁遊華歷歲□。我今多雨聲。斯郎望闕祝鳌。云々。

文龜二年、鹿兒島の伊敷村に茅菴を創し、東歸菴と稱す。爾來多く爰に隱棲して尙講學を怠らず。永正五年二月島津忠昌侯薨す、同年六月五日、師も亦病みて桂樹院に寂す、壽八十二歲。師始め薩州侯の聘に應じてより大凡卅餘年、足跡曾て封境の外に出でず、薩南文教の基礎を開きし功績は寔に百世に傳ふべきものあり。宜なる哉、享保中彼の地の有志者、東歸菴の遺址に墓石を建て越へて天保年間、伊智地季安、碑銘を佐藤一齋に囑し、之を墓側に建つと云ふ。一齋の銘に曰く

吾道一貫。無隱乎爾。身披禪衣。心服闕里。洛派東漸。寔自師始。心月千古。桂影遠被。

吾が國宋學の勃興は全く五山碩學の力にして、中巖圓月、義堂周信、岐陽方秀、了菴桂梧、桂菴玄樹等はその傳統者の錚々たる者、就中之を始めにしては岐陽、之を後にしては桂庵の如き、我か儒學史上寔に沒すべからざるの功ありと謂うべし。遺稿を島陰漁唱集（三卷）といふ。外に文集一卷あり、島陰雜著と稱す。又別に家法倭點一卷あり、刊行して世に行はる。若し其の詳傳に至りては日本宋學史に詳

桂庵玄樹畫像



唐明瓚號懶瓚隱居衡山之頂石窟中嘗作歌其畧曰世事悠悠不如
山丘卧藤蘿下塊石枕頭其言宏妙皆發佛祖之興德宗聞其名遣
中使進之使者即其窟宣言天子有詔尊者幸起謝恩瓚方撥牛糞
火尋煨芋食之寒涕垂膺未嘗答使者笑之且勸瓚拭涕瓚曰我豈
有工夫為俗人拭涕耶竟不能致而去德宗欽嘆之予嘗見其像垂
涕自若氣韻超然若不可犯干者為題其曰眞火但知黃獨美銀鉤
那識紫泥新尚無心緒收寒涕豈有工夫問俗人

仲方中正筆蹟

なれば今茲に叙せず。

正玖書記

其の字を詳にせず。建仁寺嘉隠軒の僧にして平僧を以て終る。北野天神の賛に曰く、『梅花落手臙脂雨。三月木犀無此花』と。辭世の頌に云く、

夫子不ㇾ知ㇾ字。達磨不會禪。入無間獄。咲吽四禪天。

文明の頃、寂すといふ。其の年月詳ならず。

横川景三

景三字は横川。別に補菴、小補等の號あり。西國の人なり。年甫めて四歲、京に上り相國寺養源院に入り英叟に投して童役を執る。年十三にして安國寺の龍淵和尙に依止す。資性敏俊にして早くより學を好み、長して文墨を弄す。曾て自ら記して云く、

小子甫五歳養于先師手。曰此兒可教。教以梁千字文。唐三體詩。及空和尚外集。皆俾背誦之。忘一字則從賜一拳。歳稍長誨勵無倦。至十九歳。先師棄小子去。爾來二十八年于茲矣。

横川録

横川京華集　享祿寫本

補菴京華新集

書天龍開山師自賛後　　三州三河云々

余昔十二歳書寫師像于時吾叢林精住所勢〻二世師

行道之地也於是侍翁羽側者有年矣人種〻家敬求之蓋在

師不在葉之求天下讀亂所努燬于兵矣時命工若載舊畫

本唯存此像請書自賛語視之童時所作也公又求係一

語於其下余今老矣不能書之處書之寔其命云〻新集壬

辰孟夏吉辰滌筆於紅樫菴之菴云補菴景三



後年、曇仲道芳の三十三回忌に値ふて齋筵に赴き其の肖像を拜して心に感ずるこ

とあり自ら之れが嗣となる。又諸山の名宿に謁して推許を受け應仁の亂に京師騷擾、諸刹焦土となるに及び瘦藤破笠、桃源瑞仙と共に洛を出で、江州の飯高山下に僑居す。此の時、東游集の著あり。又小倉松齋（實澄）居士あり和歌に長ず、師に隨つて禪を問ひ識廬菴を搆へて延請す。居ること六年にして相國寺の養源院に還る。爰に又斗室を營築し扁して小補といふ。文明十三年足利義政、聘して等持寺に住せしむ。同く十七年移て相國寺（七十九世）に住し、大亂以後入寺の規式を再興す。長享元年十一月廿一日南禪寺（三百卅九世）に陞住し義政贈るに金襴の伽梨を以てす。明應二年十一月十七日小補軒に寂す。壽六十五。嘗て亂を江州に避くるの日、湖上の舟中詩あり、

白頭避亂棹行舟。風雨兵前草木秋。若不論詩宿湖上。有何面目見砂鷗。

又一日、小倉の私第に會し『菊後話梅』の題に曰く、

過了黃花吾始來。主人和氣挽春回。樽前一醉無儒佛。笑摺袈裟話早梅。

文明十二年、後土御門天皇、中華、本朝の故事各三十題を選び公卿幷に緇徒に命して詩歌を賦せしむ、横川之れに預り富士山、住吉、菅家の三題を賦す。其の詩に曰く、

文明庚子仲冬。天子親選二中華故事三十題一命二歌人一詠二和歌一。又選二中華故事三十題一命二詩人一賦二唐詩一。予奉レ敕得二三題一。所謂富士山。住吉浦。菅家是也。今之天子。文思神武。固天縱也。蘭坡長老賜座以講二心經一。吉田三位昇殿以讀二神書一。千載嘉會也。萬機之暇。旁及于此。吁盛哉。景三記。

菅家

菅家丞相是天神。一寸丹心白髪新。聖代祇今無二逐客一。梅花北野不藏春。

住吉浦

住吉神靈地亦靈。市橋一色水天青。近聞浦口風波隱。鷗鳥宿レ松呼不レ醒。

富士山

莫言北闕隔二東關一。富士朝々如レ對レ顏。四海一家皆帝力。千秋白雪御前山。京華集

遺稿に東游集、閭門集各一册、京華集十余册あり。共に今尚ほ世に傳ふ。

桃源瑞仙

瑞仙字は桃源。別に蕉了、蕉雨、春雨、亦菴、卍菴、竹處等の稱あり。永享二年

六月十七日、江州愛知郡市村に產る。幼にして恩愛の羈絆を脱れ、鄉寺に入りて句讀を受け、幾もなく洛に上り相國寺に投して明遠俊哲に就いて剃染受具し、去つて四方の老宿に參じて印可を蒙り又還りて法を俊哲に嗣ぐ。資性讀書の癖あり、常に好みて儒釋の書を讀み當時碩學の門を叩かざるはなし。南禪寺の天岩牧中の如き其の師事すると最も久しく嘗て曰く、

余嘗就慈氏牧中師學此書（史記）中傳之師叔大椿翁及其兄江心川首座。聽漢書於妙智。而上自六經諸史。下至子集。無學不講。況於經教語錄哉。可謂博聞强記矣。所恨者。唯著述少。雅名不聞叢林。惜矣哉。

又

余嘗慨叢林入場屋之人。例皆其學之不振。故以此書福業。自學此以來。看書無難者。實牧中師之恩也（中略）嗚呼學之之日余二十年也

と云へるに見ても其の親炙して益を受けたるの深かりしを知るべし。又、等持院の竺雲等蓮、東福寺の雲章一慶、相國寺の瑞溪周鳳等に就いて示誨を蒙りしにや後年、其の史記抄の中に記して

二老之在天下。猶三光五岳之於天地之間。誰不仰瞻哉。況余三十年親升其堂入其室親

受講磨。則隻字片言皆無非其膏腴。展虛空爲紙。束須彌爲筆。而虛空雖有破焉。須彌雖有禿焉。不能書二大老之德之與恩之萬一。

と云ひ、瑞溪に就いては

予出入北禪門餘二十年。親受其鉗鎚。則不可謂無講明焉。中略疏僅撰數篇。皆得北禪是正。經諸名宿之眼者不爲少矣。

と云ふが如き、壯年學に專らにして刻苦精勵孜々として怠らざりしを想見するに足るべし。蓋し當代五山の學風は詩文彫琢の流行漸く衰へて講學抄書の風、將に萠さんとするの傾あり。等蓮の如き雲章の如き一代の大宗師を以てして猶ほ盛に講筵を開きければ志あるの學徒西より東より雲集して、曩きには風月に吟詠せし徒輩も今は挾書の客となるに至り。桃源が後年、應仁の亂を江州山上に避けて貧寒と戰ひつゝ史記を抄し周易を抄し、披詩を抄するに至りたる、想ふに當時の學風が彼を驅つて決然此の大志を成さしめしや明かなり。百衲襖廿三の識語に、

文午小春念四之夜三更抄此篇畢矣。余之貧與寒倶徹骨也。勝去年焚無膏油。猶分延丈之燈焉。

と誌せるが如き四百歳の下。其の困學の狀轉た想見するに足るべきものあり。

桃源の講學は啻に當時五山碩學の門閫を跨りしのみならず、更に轉じて一條兼良、清原業忠等の縉紳家に謁して其の疑義を質し、後年、其の抄中に『古今無双の名儒』と稱揚したるに見ても其の感化の大なりしを窺ふべし。

同門の交游中にては横川景三。景徐周麟。月翁周鏡。周興彥龍等あり。又建仁の天隱龍澤。桂林德昌の如き、其の時代を同うせしかば往來講習絕へざりしが如く、就中横川に對しては『唯横川老人。以朋友之義。箴規磨切。其功居多』と云へり。東游集に記する所に據れば、應仁丁亥、亂を江州に避くるの日、其の行を同うし、永源寺畔に居をトして後も横川との往來最も頻繁なりしかば箴規磨切其功居多は單に形容のみにあらざりしならむ。其の亂を山上に避くるの日、京を發して途を堅田に取り、兵主村の安樂寺に月翁周鏡を訪ひ、留まると五日、一日、置酒高會、席上『以湖上逢故人』の題を以て各一詩を賦す、

二老風流問白頭。碧雲吹落月明舟。方今四海鴻溝割。只有西湖一樣秋。　月翁

白頭避亂棹行舟。風雨兵前草木秋。若不論詩宿湖上。有何面目見沙鷗。　横川

出洛遠尋湖上家。煙簑雨笠破生涯。秋風却有歲初意。安樂主人和氣花。　桃源

斯くして横川と偕に山上に到るや虎溪橋畔に佇立しつゝ

路入山腰數里程。上方臺殿白雲横。袈裟手掬永源水。洒向長安欲洗兵。　横川
佳寺聽名身未攀。今朝直入白雲關。永源喬木故家路。落日崢嶸山上山。　桃源

と吟しつゝ、永源に入りて一宿し、長老に會しては

鼙鼓聲中天下破。永源一塔尙層々。靑山盛出空王飲。明月挑殘古佛燈。日久年深黃葉寺。雲來水往白頭僧。何當此地寄行李。廿箇蒲團七尺藤。　横川
滅後百年欽祖風。袈裟來問主人翁。許渾千首門臨水。杜牧三生坐愛楓。治亂興亡付天下。鐘魚鼓板宿山中。支分派別君休說。究到永源東又東。　桃源

の作を呈して相見の禮を述べ、横川は龍門菴に桃源は識盧菴に分宿し、爾來錫を掛くること十餘年、講學抄書一日も怠らず、蕉雨稿に『余避亂寓於重山複水之間者餘十年』と云へるは、其の京師の戰塵を厭ひしのみならず、靑山白水の間、枯を拾ふて茶を煮るの淸寂、又、都門官寺の煩に比すべくもあらず、頗る懷に愜ひしがためならむ。一日。菴前に榜して云く、

本菴掛搭之人。只須嚴守一制。山前小菴雖有大會齋不可赴焉。何況不時出入。若足一跨其門閫。卽起單。猶違此條。聞官決罪。

今月今日榜　菴主榜

桃源瑞仙畫像



圜庵尊衆禪師

伏冀衆悉

當時、其の講に列せんがため四方より集まりし海衆、數十人を下らざりしが、就中、東川、一獨、南榮、錦溪、春榮、東綿、練江、秀玉、光聞、圭之、光延の如

瑞僊和尚自筆稿本

永觀上人号

圓明性遍絶塵空本自無初豈有終不信惟看夜參半扶桑日〻輪紅

永觀上人滅後其友請立字〻以絶照亦墓上徧西那述一偈代掛劍云

文明己亥秋二日　蓬丫子瑞僊

き其の尤なるものにして、其の書を講ずるの傍ら學徒を策勵して、禪坐を怠らざりしが如し。百衲襖十三の中に

仲春稍溫。自今朝又打板座禪。而不憂莊園之不登。而憂無一人參得箇狗無話者焉。古德言。於今亦云。

と記するが如き其の志のある所を見るべく、時には又、

愚謂。今之世。爲學者多矣。入其庠序。而纔過三二年。則止。是與未曾入學者同。夫人各有所業。而舍本業以就于學。學未見分寸之功。而俄然棄去。已失於本業。又不得於所學。則其罪大於未初學者也。甚矣。縱學至于頭白齒割。而若未成其功。則其可止哉。是汔至亦未繘井羸其瓶四者也。其汔至猶與未汲同咒未至中道而止者哉。不唯學而言。於吾禪家者流亦如此。聖人之戒有深意矣。可不加警策耶。

と言ふが如き痛切味ふべきものあり。又、

愚謂。自丁亥歲。天下瓜裂。於是乎有東朝廷西朝廷之言。僭僞之甚。莫大焉。夫天子相公之所在。不可加以東字也。既無則豈得稱朝廷也哉。且夫挾天子。而世居于相將之位者。自尊氏相承。八代于今。其溫恭和順之德。莫加今相。唯所少者剛武之略焉耳。是以賊臣作亂。塗炭乎蒼生。而未得撥亂之策者。其爲臣者之罪矣。猶可之謂柔弱。而不可謂無其道也。彼以不湯武之臣。而犯不傑紂之君者。其勢可久哉。赤其族之誅。不旋踵而加矣。是愚之平素開大口。罵曰畜生。蓋是之謂也。（百衲襖九）

と喝破せる如き、言極めて簡なりと雖も其の大義明分を正して寸毫も假借する所なきに至つては、山林に隱れて松風に嘯き磵水を掬する一講學僧の言とも覺えさ

るべく、彼れも亦伯夷の亞流とや謂ふべけん歟。其の長く識廬庵裡を出でざりし消息も亦推想するに難からざるべし。

文明十四年の頃、洛に歸り、同く十八年七月相國寺八十世に住し、後に寺内に梅岑軒を創して靖退し、延德元年十月廿八日大德院に寂す。壽六十。遺稿數策あり、楞嚴を抄して梅岑集分記今時泯びて傳らずと云ひ、東坡の詩を抄して蕉雨餘滴といひ、周易を抄して百衲襖と云ふ。外に史記幷に三體詩を抄す。又平生の述作を蕉雨稿と名づく。共に今猶ほ傳へて得るもの之を珍襲す。了庵桂悟、深く其の遷化を悼み偈を作つて薦めて云く、

閻浮界上暫時人。何隔前鋒與後塵。欲問來源無別路。桃花流水幾回春。蔭涼軒日錄

其の翌年、小祥忌に逢ふや、景徐又諸老と共に作善の法要を營み『燕尋舊主』の題にて追悼の偈あり、

社燕來時巢尙安。主人堂上欠相看。平生所用先窺破。文海波瀾三日乾。翰林葫蘆集

又、頂相を圖せしめ横川に讃語を需む。文に曰く、

前住相國桃源和尙大禪師眞讃

昔蕉堅名喧明朝。直超三萬里於脚下。

後桃源德光日域。坐閱四百州於胸中。
君子抱孫。此語可兆。
祖師有記。其傳無窮。
掀翻漢書唐書及十七史波瀾。鏡裡數莖雪白。
嘲弄韓文柳文幷三千首風月。灯影一點花紅。
日々開談義林。負笈歸之如市。時々臨騷雅席。簪筆從者爭功。
淸涼圭峯四目八臂。掃盡經論窠窟。
臨濟曹洞五位三玄。喝散佛祖羅籠。
慈悲惡辣道合。富貴寒乞詩工。
諸方贋長老。雜道人。驀口罵倒四天下。
到處鄕先生。村夫子。隻手打破十虛空。
初公在官寺掛搭。兩人皆少年兒童。
將謂赤梢躍浪。元來白額嘯風。
當應仁喪亂之歲。深藏山上。老禪方丈虛左。
逢文明太平之春。再歸洛陽。耆英會合起東。

忝蒙故丞相恩澤。各據先國師禪叢。
自景德到等持。自等持到相國。寺々住持交代。
非過去必現在。非現在必未來。世々因緣會同。
誰歟參軍獨弄。老矣橫川三公。
東坡面前文章。自悔自愧。
北禪門下愛客。有始有終。
夫是之謂巍々堂々竹所禪匠。塵々刹々。梅岑主翁者也。
師以丙午歲。入院相國。予時守崇壽祖塔。當晚小參。有謝語曰。馬祖堂前恩超師資。鰲山店上義齊骨肉。昔信北山開堂爲同行月窟拈一香時論高之。某猶拘俗情不攀此例。莫愧於心乎。感戴。嗚呼。師今則亡。予已矣哉。景徐師。持此像來乞讚。不覺老淚之橫臆也。仍題數語。以酬知己之恩云。
延德二年庚戌十月廿八小祥忌日。前南禪景三焚香九拜謹書

龜泉集證墨蹟

拙詩奉送
圓通老師持山東節歸越云
松泉集證葉林



東藩兩將理盈時洛社
三年借 我師白首功業
又向越舟中載者可
花詩

龜泉集證

集證字は龜泉。美作の人なり。俗姓は赤松の家人、後藤氏。別に松泉主人、又は松岳と號す。早歳にして相國寺季瓊の門に投じて、禪誦日に怠らず。參詳の後、法を瓊に嗣ぎて雲頂院に住し、後に相國寺の中に瑞春庵を創し、學徒を提撕す。その所居の室に季潭書する所の松泉主人の四大字を掲ぐといふ。集箴に繼ぎて蔭涼の職にあること多年、その日記を龜泉日錄といふ。蔭涼軒日錄の一部是れなり。嘗て天龍寺に視篆し、幾

もなくして瑞春に還り、明應二年九月廿七日寂す。五山の一碩學、曾て師の像に讃して曰く

前天龍龜泉和尚肖像讃

日月匪高貫之者義也。天地匪大動之者誠乎。維師義以與人。則見其交態。誠以臨事。則斥彼面諛。分回輔三公之權。翊僧錄於左右。弄五山十刹之印。擧兄弟於江湖。榮敷叢林。玉芝八葉。蔭涼天下。大樹一株。蚤在童兒之列。或從章句之儒。學勤六經。盡是心通口諷志邁千古。不啻目染耳濡。好古文而卷中識愈。傳新樣而書法叫虞。覺範師開北禪室。讀老坡集。著著善知識。靈源叟續南公宗。評魯直體。篇々義丈夫笑指風月。拈作衣盂。憶昔十題之詩。梅影松聲。刻燭擊鉢。某春一日之樂。桃翁曇公。染翰操觚。就中小補。情等友于。方丈頭。桂映金榜。同甲會。花輝玉都。法華維摩。鐘報講時。秉掌藏下双檮之鑰。集雲禪佛話行當代。久依堂中後板之圖。以巽等降上台鈞帖。而瑞世匡西禪學徒。次據聖福最初法窟。後領龜氛第一靈區。誦敎鼎鹽梅之名。白鹽山氣象。年々不改。稱華軒松泉之主。赤松府外衞。永々靡渝。諸弟茂矣梗楠杞。幼子秀矣瑤瓊瑜。夫是之謂曹源一滴漫瀾大地。玉雲膚寸。蓋覆迷廬也矣。

その所歷の一斑を見るべし。龜泉日錄の外、遺稿を松泉集といふ。弘法大師の讃に云く、

果公曾付一袈裟。五佛寶冠輝帝家。好向金剛峰下睡。野雲歸處待龍華。

九淵龍賝

龍賝字は九淵。別に葵齊と號す。丱歲にして建仁寺の天祥一麟に就て得度し、嗣法の後、寺內の靈源院に住す。寶德三年冬、允澎芳貞等の國信使に從ふて入明し一時の宗匠に參じ又文物を縱觀す。當時、東福寺の慧鳳藏主、其の行を送るの作あり云く、

奉贈九淵禪師遊大明國序

吾海東爲國也。以州而數者僅六十又六。一州府至有領縣者五十又奇。洎乎一千五百有餘里。其最小者。一州而二縣。其無下乎百里者。牽其爲州也。縣之屬焉八九者。躐十而七八者。三四者居三之二。其途二十者。十之一二也。是其壤連而溝接。以爲之提封者也。至其海絕而舟達者。不在此限。政敎之布於外焉。武人以專禮樂之修乎內焉。文士以任。文世其文。武世其武。武無文者之位。文無武徒之權。六十六州府之門。佛宇僧廬。與民戶相半。以較其多。與王宮相奪。以極其麗。自三漢三國之代。吾國受中州之賜。爲不淺也。讀周公孔子之書。

知其道可尊也。察律曆觀天文。卜筮陰陽術數之學。如與中州分符。無不同也。至夫浮圖氏之道。上自王公。下及黔首小人之流。莫不注誠以依賴焉。其道亦與敎化相表裏。良有不可以欺矣。梁陳齊周以上。傳而紀之者。或失之茫昧。殆不可得而考。隋唐之後。吾船之入中州也。浮圖以性相顯密自負者。偉人高德。到今烈烈。其不一也。其儒家者。授經傳道。潤色文學。

歸吾國者。往往廟食封贈。諡之百世。而不絕其祀。國人事之以爲神焉。趙宋中世以來。浮圖少林之道。始倡之國。東山千光祖是也。寔爲吾禪氏藝祖矣。千光乃黃龍九傳之子也。千光又傳四得龍山翁。龍山翁入大元國。住隆興兜率。刺史

黃鶴聲光樹蒼〻悵望何堪矣夏長是歲南州不知暑逝公白雲使人盾

棻齋野衲龍睬

九淵龍睬墨蹟

以下。作疏以請。一時勝事。以爲照映海東之錦綉也。九淵禪師琛公。龍山之的孫也。家世武閥在吾國顯族也。自其祝髮。譽望隆然。出入之上。其續翠翁字江西。時人推之。以爲覺範參寥復出于吾國。乃禪師之法兄。而世叔也。今知足翁字瑞岩。亦續翠之弟禪師之兄。而譽望殊相承。何其吾徒奇傑。獨集乎一門也。禪師有志乎南遊者久矣。今茲方有入貢船。乃之匿

名於使臣士官之列。姑以隮其夙志也。蓋其志有所在而存焉。非淺徒可覬覦也。或議之曰。禪師自少而壯。以人之道。併之於已。自壯而老。以已之道。播之於人。故嚮祉以禪師之道。而自充然者。其亦幾人乎。况此出世。已據其位。此行何所爲乎。解之者曰。古之南遊。在李唐之世。儒者得儒者。浮圖得浮圖。浮圖家。台敎密學。大有其人。自宋之季年。吾禪尤出哲匠。前元之末。皇朝之初。其有意於賦詠者。往焉。故當時佳作往往在人之口。禪師此行。自謂龍翁兜率一擧以振大元。吾生獨後。有忝其先。可自棄乎。其意不可挽也。將行戲予曰。何不一言以慰吾之行。予曰。亦何言乎。禪師德韞於內。望彰於外。如此。非小子所得而和也。况諸老妙於語言。名乎當世者。既述既載。足以發揚焉。因粗言吾國版圖之大。文武衆士之務。且叙其所求於中州。與時黜陟者。以寓吾之嗟。壯禪師志。以祝其他日旋里錦綉。庶乎克繼龍翁之踵。後作將來之美譚云。

彼の地に留まると四年、此の間、四明に登り又金臺に詣りて斯文を商量し、享德三年歸帆恙なく本朝に歸る。後に正宗の禿尾長柄帚に其の遍參の概を叙して曰く、

北朝寶德乙酉。余從國信使入大明國。踰百越。歷三吳。大江之南北。長淮之東西。行不輟足者。殆六七千里。遂達燕之北京。而遭時盛明。禮樂繁興。人物秀整。實莫媿漢唐之化。於是乎。晨而謁貴仕達官。暮而接名緇英衲。殆獲酬平素之志也。云々。

其の得意知るべきなり。後、幾もなくして建仁寺百八十七代に視篆し、四來の龍象を接化す。寛正七年の頃、南禪寺二百一代に陞住し、後に又靈源院に靖退し、明應七年二十三日寂す。遺稿を葵齋集といふ。入明の諸作蒐めて此中にありと。而かも今は泯びて世に傳らず、洵に惜むべし。

景徐周麟

周麟字は景徐。別に半隱と號し、軒を宜竹又は對松と號し、江左に在るを江雲といふ。俗姓は佐々木氏、永享十二年に生る。幼にして相國寺の用堂中材五十九世に就て句讀を受け、參詳の後其の法を嗣ぎ、長享元年七月二十八日等持寺に住す。當時作あり云く、

丁未七月廿八日。予承乏滌篆京之等持。月印西堂先居之。表率于衆也。以故入寺開堂。立班有光。予解腰包卸頂笠者六十餘日于茲矣。分座領衆。退位爲人。吾首座在焉。古規有請大方西堂充首座職者。蓋其事嚴重。不敢輕擧。今其庶乎一夕招之笑話。出詩見示。其一聞鴈有感者。其二自述懷者。仍求拙和。不能默止。依其韻云。

鴈兩三聲萬感來。知君歸思一時催。細看花鳥向陽意。香雪亭南昨夜梅。
詩於窮者愈清新。酌以門前薄々春。月下擧盃君自看。梅花無喜又無嗔。

越えて五年、延德二年七月遣明正使の命あり、師之を辭す。蔭涼軒日錄今年七月十六日の條に此の間の消息あり、

渡唐正使事。以景徐西堂有御定。以此旨可被白遣。葉室殿奉之。乃遣棠首座於大德院傳命。景徐對面云。正使事。不及覺悟子細也。以參可白述云々。

同く十八日の條に云く、

以久上司（中略）景徐翁渡唐難叶之條々以被白旨。傳葉室殿。葉室殿曰。以前正使以不才日本耻辱有之。以故擇其才被仰出。不被面目存難叶之由被白。曲事也云々。

同く十九日の條に云く、

修懺前大德來。樹公葉室公昨日所諭懇々話之。大德（景徐の事）以一行賜愚。可供台覽之命也。其狀云。

去十六日渡唐正使之事爲上意被仰出候旨承候。拙者事自然可被及聞召候。依持病一里五十町渡海之儀サヘ難儀至極候間。大洋乘船之事一向難叶候。去々年兩度大事ノ歡樂仕リ去年當年中風相加候。就其對身上纔世計之儀サヘ不便儀候。爲正使

今年癸丑三月前鹿山竺開和尚大禪師自丹丘
來同門諸老迎歸山坐祖塔五月越人復以丹山
來聘我等並各懷戀慕而不敢留以師之為先廬
也擇日在近不遑往餞遣使贈牋履二物係以詩
云
送君以葉縣鳧舄之履贈君以蘭亭蚕繭之牋履採
脚底邑雲術牋寫眼前懷古篇喬仙來往未為異內
史風流何傳恰如來趣往山日又似雪峯回越年三
張白紙同千里兩緉青鞋直一錢楮衾難作相思夢
鐘度若耶雲寺邊

成敗等事者。不及了簡候。渡唐之事者。始末相調候ハテハ不可然候樣ニ承及候處。私以調法可事行事一切不可有之候。身上之事者。數十年被知召儀候間。以御執合。可然候樣ニ預御披露御免候者可爲祝着之由宜得御意候。恐惶謹白。

七月十九日　周　麟（判）

蔭涼軒　侍衣禪師

斯くて明應四年三月二十三日相國寺に住す。六月上堂に云へるあり、曰く、山門頃者官命降約法五件。就中商賈者不可假道於寺。射獵者不可遊佚於寺。女人不可入寺。此乃吾山相國開闢先相所定。著令在焉。此法不行也。亂後殆三十年。佛殿花壇爲之射琛。法堂廊廡。爲之市鄽。云々。宜禁一也云々。今獵者千人萬人。中無一箇半箇石羣。而皆見僧如讎。云々宜禁二也。云々。吾山由禁法出。而諸院緊閉偏門。爾來晝則雜僧白面侍者。避婆毘迦羅之難。老宿免暉公之變。夜則絶賊打門之患。宜禁三也。一號令之下。安堵如故。檀越外護之恩。可以並天。自今日守此法累月積年。而法益固。則雖千億代亦可卜山中萬全。各々勉旃。

と。翌五年二月鹿苑院に移る。同く六年、後土御門帝御製を染めて源公某に賜ふ當時某漢詩一章を賦して謝恩の意を表し、又五山の老宿に請うて次韻を需む。師

之に應じて曰く、

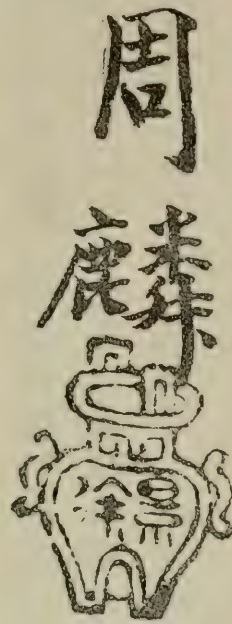
明應丁巳之秋　御製國詞一闋。親灑翰而繫之菊枝。以賜從三位源公某焉。公抃舞莫措。欽賦唐詩一章。呈亞相公以致謝恩之意。因命禪林諸老宿。而次韻同賦。兼以見及。弗克默止。書以奉寄。

聞昨詞頭自内來。勝於賜翰紫薇開。玉堂微霰結爲雪。衣被寒村竹裏梅。

又、人の大明より歸るを喜び、便面に書して贈るの作に云く、

海濶天高旅鴈回。朔風吹裂碧崔嵬。羽翰欲晒扶桑日。挾得燕山積雪來。

又、鎌倉建長寺の書僧祥啓の貧樂齋の頌に云く


景徐周麟印影

筆端幻出好林泉。有地卓錐如去年。到處無求皆樂土。支郎猶貢買山錢。

後柏原帝の文龜二年、二三の老宿と柳營に入つて賀歳す、仍て山家詩を出して各之を和せしむ。即ち韻を次で奉呈して云く『瀟輪召老漢安車。初覺山家雨露加。四海九州皆入轂。春明門外不天涯。』と。同く三年正月の御製に和して云く、

年甫御製一首。公卿百僚。以韻奉和焉。傳及山林。景徐欽進一篇。其詩云。

詩至紅樓應制新。皇恩分與紫宸臣。臣僧無二復涓埃報一。游手一民非二四民一。

此歲三月、將軍足利義澄、朝鮮に書を遣す。師をして之を草せしむ。永正五年再び相國寺に住す、十月望、上堂に曰く

吾山頭鈞命降。而見レ還下開山塔莊園在二泉南一者上。大衆歡抃無レ措。云々。山野景徐適住二持于本寺。得レ覩二斯盛事一。陞堂之次。賦二伽佗一以奉レ謝二檀恩一云

珍重檀門新割レ符。泉南佛國復歸レ吾。歸逢二祖塔再興日一。數件莊園合浦珠。

永正十五年三月二日相國寺の慈照院に寂す。壽七十九。遺稿を翰林葫蘆集卷十七といふ。又日涉記の著あり、共に世に行はる。

壽春妙永

妙永字は壽春。東福寺海藏院の僧なり。別に自ら睦軒と號す。聯句に長じて名聲叢社に喧し。相國寺の横川景三景徐周麟等と道交を訂し、日夕往來を斷たず。明應九年五月、周麟と偕に湯山に湯治すること三七日、韻を聯ぬること五千言、題して湯山聯句といふ。自序に曰く、

寒月五日一浴。暑天每日淋汗。是我叢典入浴之法也。宜竹老宿。招予以趍温泉。蓋除無垢垢。去無病病也。晝夜入浴。出浴之暇。旅懐無可以遣。聯以句者五千言。始于單五。終于念三。不亦快乎。互唱互酬者。溪聲便是廣長舌。共洗共浴者。山色豈非清淨身。更問如何八萬四千偈。如何擧似人。演禪二子在座。告之曰。請參活句。莫參死句也。蕉下妙永書

其の師承と生死の年月を詳にせず。

蘭坡景茝

景茝字は蘭坡。初め善秀といふ。別に雪樵と號す。其の住院の書院を雪樵と稱するを以てなりと。江州の人なり。幼にして南禪寺の仙館軒に投じ、大模梵規（南禪百六世）に侍して剃髪受具、内外の典籍を學習す。獨唱集に『予在龍阜。侍瑞松之床者日久矣』と云へるもの是れなり。大事を了畢し、法を梵規に嗣で後、東西に遊方し、歸りて仙館軒に住し、幾もなくして正因菴に移る。尋で南禪（二百廿六世）に視篆し其後相尋で歴住すること八回、後土門帝屢召して法要を問ひ給ふ。京華集に云く、

文明十二年仲冬（中略）蘭坡長老賜座以講心經。吉田三位昇殿以講神書。千載嘉會也云々

蘭坡景茝墨蹟

詩贈
周通老人還越
北山雪樵景茝



贈別無物獨自嗟越王
臺北是君家殷勤
好去臘殘月海先來春又
在花

師、天資聰慧、諸子百家の書に該研せざるとなし、時人皆之を重むず。嘗て應仁の亂を避けて江州の草野にあり、橫川景徐萬里等と會し、『洛社三年空作空著英遁在野花中』の句あり。其の江伯に寄するの作に云く、

桃花坊北有寺。與皇居相接。然而其地蕭散。如在烟霞泉石之間。寛正辛巳之歲。予暫寄行李焉。交游之來問者。斑々有之。其交尤厚而來者獨江伯也。范叔退而附秦。韋賢出而相漢。

則利驅之也。江伯其豈然乎。一夕對月。忽焉有得。敎中說。菩薩子見初發心者。必敬之。譬如世人不禮滿月而禮自分之初月。蓋以其希而現也。由是言之。則江伯吾初月也。因作詩招之云

春色將塵風雨稠。牡丹院落暮生愁。檐聲未斷花移影。初月嬋娟半上樓。

又江伯の詩に和して云く、

本朝之俗。以九月十三夜。爲中秋。其一夕與江伯相會。共論此事。輒告予而謂。東坡在嶺南詩曰。涼天佳月便中秋。且作詩見誦焉。予歡其知言。而次韻答之

風露桂花飛欲背。喜吾相遇細消懷。只因今夜人心足。節不中秋月亦佳。

嘗て喬年の支那に遊ぶを送るの作に云く、

景德前住喬年老友。才學兼備。而詩無島可之寒。實無愧爲蕉堅貽厥。茲冬。俄企南游。蓋欲觀先人所經歷也。其志可美焉。輙作小絕。壯行色云

萬里南游只一竿。滿船風月鬢絲寒。請君急掃燕山雪。吹碧芭蕉黑未乾。

と。南禪寺の村菴、其の雪樵齋に題するの作あり、

爲蘭坡題雪樵齋有序

少室立雪之後。曹溪采樵以來。是雪是樵。互相光耀。蓋謂之一花五葉。至于黃梅。而其衣

法。能者得焉。自時厥後。吾宗大振起。兒孫遍寰宇。猗歟盛哉。蘭坡以雪樵目其室者。不翅拈出吾家舊公案。亦將有所矜式。必如百衲被。天寒歲晚。乃見其効耳。蟬闇老人。四句妙偈。規祝所至。不鄙。命予贅其末。云。

雪中樵客欲歸家。白盡蓑衣山路斜。遙想經過嶺頭處。擔肩薪上挿梅花。

文龜元年病を獲て正因菴に寂す。遺稿二策あり、云く仙館集、云く雪樵獨唱集。前者は駢儷、後者は詩集なり。滅後、後柏原帝、師の道聲を聞き、追褒して諡を佛慧圓應禪師と賜ふ。其の勅宣に云く、

敕。玄門作範。重天海之上床。法道提綱。眠雪樵半間室。景茝和尚。行中規矩。語熟詩文。竟透達悟之機關。三世感兒孫矣。映擘大樸之衣鉢。八住間衆望焉。紫蘭□□□得咫尺于鳳闕。緇林禮行。忽躍令名於龍淵。肆當先□□□。賜聖代之榮號。諡曰佛慧圓應禪師。

永正四年二月廿二日

與可心交

心交字は與可。自ら如水道人と號す。東福寺桂昌派下の僧、定山祖禪の法嗣なり。

後に東福寺に住し永享九年六月廿七日寂す。滅後少林菴に葬る。『馬上續夢』の題に曰く、

獨策羸驂曉出門。征鞍眠穩忘塵喧。不知朝日上東嶺。幽夢猶尋殘月村。

遺稿を如水觀といふ。今時泯びて傳らず可惜哉。

周興彥龍

彥龍字は周興。別に半陶と號す。山城國深草の土器師の子なり。早歲にして相國寺の法住院に投じ剃染受具、默堂久に隨侍して參詳功を累ね、後に法住院に住す。資性英達にして夙に文章の譽れあり。惺窩曰く『彥藏主雖爲異敎之徒。又一代偉人。余所甚愛重也』と。又聯句に工にして時人に推重せられ時人皆曰ふ『章句彥龍對月舟』と。月舟は卽ち建仁の壽桂なり。桂も亦、當時の達人を以て推さる。一日相國の社中、製䟽の事あり、山中の老幼相議して云く、彥龍は脫達、社中に入るべからずと。横川卽ち云く、學、彥龍の如き者、脫達と雖も賤となさず、若し製䟽の彥龍に勝る者あらば以て止むべしと。大衆口を箝し終に䟽を製したりと。曾

て南禪の文成藏主と三丹に遊び、西游稿一篇を草し又常に横川月翁桃源等に代りて文を製す。その一時の宿老に重んせられしことを以て知るべし。永正五年景徐周麟半陶稿に序す、その略に曰く、

余亡友與彥龍。年纔三十四。而拋筆硯去。有遺稿成鉅卷者六策。同門舊友厚乎平生者類之筆之。一日携之過余以見示。且曰暇日披覽。請以一言冠于其首。朋友不相忘之義也。就

半陶稿

青油幕下白鷗沙　百畫師間馬上過　意是將軍凱旋日
滇兵十萬洛看花　緑髮將軍領百蠻　時將軍之河州故用白鷗字
六十餘州十首詩　方中繋一亦胡爲　白牛不度海東國
髣髴阿房杜牧之　跋明人日東曲

視之則四六一策。文大小二策。詩長短二策。號西游集者一策。先栖芳跋之。余得之行吟坐詠。或倚枕而展翫。其才之茂也學之富也。譬如富人之稼也。其田美而多者。不容芳言於此間。決非十口之家百畝之田。寸々而取之。日夜以望之之比。此乃古之君子所以用於既足之後。而流於既溢之餘。夫是之謂乎云云

曾て嵯峨に遊ぶ、その作に云く、

洪井嵐山一棹秋。寺從溪足入溪頭。鐘聲夜半月西落。又約楓時來泊舟。

と。又人の畫扇を惠むを謝するの詩に曰く、

畫扇曾聞出日東。夏摸冬景暑塵空。輕羅一握拜君賜。相國寺中無價風。

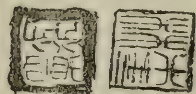
曾把芭蕉代五明。熱時折盡幾多莖。輕羅爲謝君佳惠。從是窓前添雨聲。

位は藏主に終り、卅四歳にして寂す。其の生死の年月を詳にせず。遺稿を半陶稿といふ、明曆二年仲夏、版行して世に行はる。

桂林德昌

德昌字は桂林。別に葬闇靑松松窩武陵藥闇晦夫等の號あり。五歳にして建仁寺に入り、童役を執り稍長じて內外の典籍を學習し、英俊を以て稱せらる。後に伯州安國寺の和甫忍に就て法を嗣ぎ、寂室禪師四世の孫となる。よりて江州山上の石頭菴に住し、尋で建仁寺の西來院に移居す。延德元年建仁寺二百卅世に視篆す。結制上堂に曰く『四月十五日頭頂天脚踏地。七月十五日脚踏地頭頂天。窮其結制了不可得。元來無結可結。無解可解。解亦不後。結亦不前。畢竟向結制未判已前會取。作麼生是未判已

桂林德昌墨蹟



前。擊禪牀曰。更參三十年』と。後に視篆すること十二夏、常に天隱龍澤祖溪德濬と深く交り、又當時明經の老儒淸原常忠と交遊せりと云ふ。建仁の西來院にありて讀書に耽り、傍ら童蒙のために史學提要抄を撰し、又古文眞寶、三體詩等を注す。正德九年九月廿七日病で寂す。遺稿に桂林錄、葬闇疏稿各一册あり。今に傳へて叢社の徒これを珍とす。

景甫壽陵

壽陵字は景甫。瑞溪周鳳の法嗣なり。別に自ら栖雲と號し、能書を以て一代に名あり。享祿四年鹿苑院に住し左街の僧錄に補せらる、時に齡八十。嘗て能忠大德の爲に南叟の號を附し且つ一絕を賦して云く、

景甫陵印影



嶺梅迎暖一枝開。盧老潛傳示法來。明鏡非臺誰□會。北人可笑拂塵埃。

天文五年席を梅叔に讓りて退院す。其の沒年を詳にせず。

春荘□椿

□椿字は春荘。別に蒙庵と號す。丹州の人、州の安國寺東明の法子なり。諸家の記錄中、その諱を逸す。後年建仁寺に入り大龍庵に住し、又諸方に參詳して夙に才名あり。而も生涯一疏をも製せず、時人言ふ東山に二の遺憾あり、春荘に疏なく、常庵に陞座なしと、其の重むぜられたるを知るべし。後に赤松氏の請に應じて播州に赴き寶林寺に住し居ると數年。後に播州より歸りて、又建仁寺の大龍庵に住し、位は僅かに西堂に止まり、五十五歲にして寂す。建仁の月舟壽桂その肖像の讃に序して、曰く『永正五年の春、吾友春荘老人、赤松府君の請に應じて、播州の寶林に住し、其任未だ滿たざるに兼て法雲を領ず、蓋し兩刹は赤松一門の墳寺なり、近年荒廢言ふべからず、故に老人を擧げて、土木の役に與らしむ、去歲冬の仲、老人頗る微疾あり、醫に洛に就く、未だ幾もなくして滅を示す、世壽五十五歲なり、吁老人我より老ふると二歲なり、然かも平日戲れに我を以て先輩となす、或は同甲子となす、今は則ち亡し、是より先き吾徒僉な曰く、老人洛に

歸らば必ず鈎帖を拜し、清涼軒上に安坐せんと、豈圖らんや道化我が山に行はれず識ると識らざると皆感喟す』と。月舟の像讃に云く、

前住寶林春莊禪師肖像

痴絕據太白秉領育王。後登徑塢。法眼賦牡丹入對后主。現居清涼哦詩則換骨體得公論。轉機則醫晴法沒商量。四海之內皆是不肖。普天之下獨有此郎。蓋與祖翁同塗。既攝寶林法雲雨刹。雖爲太守出世。未董玉府興國大方。初在少日遠離故鄕。赤驥墮地而走。丹鳳覽輝而翔。其瘦骨稜々也寒岩枯木。其仁心郁々也昏月暗香。縹緗囊緗帙於魯壁漢渠。負笈問道。緇黃卷赤軸於龍宮海藏。秉拂提綱。双眸塊視五岳。一喝坐斷兩堂。學書雅健逼眞。規摸右軍伊字筆勢。吐語平淡有味。彈壓北澗僧史文章。何圖時丁季運。亦能家有餘慶。東明公西明公。若人兒孫以振。大戊子小戊子。於我老少和忘。不翅益壯。所期俾壽俾昌。雖然三僧祇刧豈非一須臾頃乎。佛智元有延促。兩八千歲亦爲五十餘年耳。法。齡寧較短長。其是謂之痴翁雲孫東明的子前住寶林諱椿字春莊者也。

以て其の傳の足らざる所を補ふに足るべし。遺稿を蒙庵百首といふ。今數首を錄して其風騷の一斑を觀るの便に供う。

花時待故人不至

十歳往還交義深。春來猶未聽鴬音。三千丈髮鶯梢雪。花亦待人多夜心。

敗荷

荷葉半枯風露收。數莖憔悴使人愁。越溪女子靑羅薄。双袖龍鍾不耐秋。

春宵與故人閑話

溫語連床惜漏移。春宵安得似僧衹。鶯梢落月曙雲外。不爲故人留少時。

護花鈴

唐帝金鈴器小哉。護花未省護賢才。草堂秋雨夜郎月。双鳥驚飛去不回。

花下讀書

鯉庭桃李已東風。絃誦琅々欲策功。想不春衿愛春色。山林花在六經中。

琴叔景趣

景趣字は琴叔。別稱を松蔭といふ。江州の人なり。幼にして桑門に入り、長じて法を天龍寺の用剛乾治南禪百四十八世に嗣ぐ。後に南禪寺の正因庵に住し、寺内に松蔭軒を創し、禪餘詩文を弄して一時の諸老と唱酬す。明應七年南禪寺に住し、後三

たび觀了す。文明十四年平生所作の詩百有餘篇を携へて、村庵の評を需む。庵卽ち卷後に書して云く、

近來時世有詩人之名者甚夥矣。然而得古作者之風者未有之也。每盆有識之歎而已。而今琴叔自携詩卷來。徵予評點。凡一百有餘篇。句々清新。口之而不置。章々俊逸。手之而不釋。是謂在今世存古風者。時有頑況。必曰老夫前言戲之爾。然琴叔所徵不已。故僭評者若干篇。卷而還之。

文明壬寅臘月立春。村庵靈彥八十歲漫書

此の外、蘭坡景茝橫川景三祖溪德濬等も亦之れが序を作る。橫川その序文の初に曰く『詹葡林間有一箇吟佛。龍山風流琴叔是也』と。祖溪も亦卷頭に序して云く『展九苞之翼者必出丹山。散千里之蹄者必產赤水。顧君邦雖處東海之裔。文物之盛。與中華而抗衡矣』と。何ぞ其の文辭の莊重雄偉なるや。曾て法弟鑑祖庭を失ひ、一詩を賦して云く、

予弟鑑祖庭。從幼好學。而同硏席者。殆三十年。今茲夏臥病彌留。秋九月二十四日遂逝矣。其初恍然如暫別而又可相見者。然日往月來。宵夢之外。未由復見。烏乎已矣。感懷之餘。賦小詩以充祭文云。

三十年來共聚頭。一朝永訣不禁愁。可憐獨雁叫群夜。殘月聲寒湖上秋。

後に病を獲て南禪寺の松蔭軒に寂す。その世壽と生死年月とを詳にせず。遺稿あり松蔭集といふ。今猶ほ法社の間に傳ふ。

古桂弘稽

弘稽字は古桂。その本貫と生死の年月を詳にせず。初め建仁寺の乾仲宗亨に侍して内外の典籍を學び、後に諸方に參詳して、歸つて清住院に住す。後に神應、眞如等に歷住し、文龜元年八月廿七日建仁寺二百四十三世に視篆し、爾來永正八年に至るまで二十二住を重ぬ。退院上堂に曰く『流年去似水朝東。萬事無心双鬢蓬。熟所誰忘人世癖。出山中又入山中。』と。其の邵康節の像讃に云く、

古桂弘稽印影



洛社投身計已成。國家興廢不關情。百年唯合此中老。無賴天津杜宇聲。

『王昭君』の題に曰く、

近代和戎有幾人。琵琶聲中涙痕新。漢家四百州天下。豈謂安危繫妾身。

又、相國寺の僧雲澤の越に歸るを送るの作に云く、

名花處々幾人栽。題品何如越國梅。別後一枝煩寄信。炎天應想待君開。

其の『花下彈琴』の作に云く、

老去疎慵舊業空。我琴一向付松風。今春更被花勾引。紫韻紅音曲未終。

平常所居の軒に題して揖松といふ。語錄二卷あり桂子禪味と題し詩集を鷄肋集と稱す。兩書共に今猶ほ傳ふ。

三益永因

永因字は三益。卯歲建仁寺に入り如是院の雪嶺永瑾に師事し、後に建仁寺の第一座に補せらる。尋いで如是院に住し、參詳の傍ら讀書を專にす。當時大龍庵に春和西堂あり唱酬常に絕ゆることなく、又月舟常庵河淸汝器等の諸老に從游して古今の文事を商確す。天性文藻に長じ、錦心繡腸一世を囊括するの概あり。是を以て一度筆を執れば、深く想を凝らさゞるに忽にして篇を成し章を作すに至る。

『人日』の詩に云く、

君不見。唐室忠臣杜拾遺。落魄昔年遠赴夔。泰曆三年逢人日。寓懷吟出兩篇詩。鶯難至兮花較遲。佳句千古磨不盡。又不見。七世文章蘇太史。曾在惠州長糸々。落梅村前挑菜渚。曉雨人日愁攢眉。二翁價聲動天地。可惜一生不得時。才大從來無用處。此語可信不可疑。我今愚昧眞鹿々。終身只合在蠻夷。何幸衣冠陪鵷序。春王正月趨丹墀。鷄狗猪羊牛馬過。今日又喜獻一詞。聞說聖朝無棄物。吾儕沐恩太平基。太廈燕雀有吉語。千仞鳳凰亦來儀。登庸著無賢不肖。八荒同軌國豈危。言不盡意高閣筆。堯紅舜紫萬年枝。

此頃京師五條の橋、朽廢して久しく架せず。重修の日、一絕を作つて云く、

第五橋荒久漲波。奈斯朝往暮還何。雲斤月斧一新日。多少人從虹背過。

『喜氣消雪』の題に云く、

喜氣滿城春早和。餘寒送雪不容多。瓊瑤融入五橋水。今日都無流恨波。

永正の末、如是院に寂す。遺稿兩策あり曰く三益艷簡、曰く三益詩稿、兩者共に今猶ほ叢林の間に傳ふ。

雪嶺永瑾

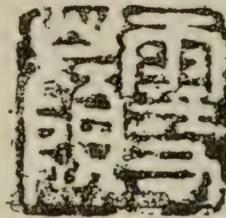
永瑾字は雪嶺。別に識廬又は樵庵と號す。梅溪は地名にして丹後の人なり。幼にして建仁寺十如院の九峯以成に隨て落髮稟戒。參詳久うして法を以成に嗣ぎ、後常に十如院に住す。天性詞藻の才に富み、其名叢林に鳴る。永正五年二月公命を以て建仁寺に進み、一夏結制の後、又十如院に靖退す。其の新正醉雪の題に云く、

新正對雪酒淋漓。一酌勸君君無辭。天
何人間浮太白。今季不醉又何時。

詩囊の題に云く、

囊中風月是三千。何管平生無半錢。盛
取梅花百篇玉。貧儒笑道富薰天。

雪嶺永瑾印影



天文六年九月八日寂を東山に示す。遺稿二篇あり、詩集を梅溪集、文集を識廬稿といふ。兩書共に轉々寫錄して今猶ほ叢林の間に傳はる。

用林材

材公字は用林。天龍寺の僧なり、其の嗣承詳ならず。人となり穎脫、胸次豁如た

り、天性禪を會し、其言測るべからざるものあり。文明八年海に浮びて明國に入る、蓋し國信使に隨ふなり。常に建仁寺の天隱龍澤に師事して示誨を受くること多く、此の行、天隱文を作つて陽關の曲に擬せり。歸朝の後、三國甕天の著あり、蓋し彼の土にて觀る所の山川の勝概、異風奇俗の一斑を記したるものなりといふ。此の書、今は泯びて傳らず、僅かに天隱の其の書後に題する一篇を存するのみ。洵に惜むべし。

月舟壽桂

壽桂字は月舟。別に幻雲又は中孚道人と號す。江州の人なり。丱歲にして州の磯野楞嚴寺に投じ、正中首座（敕諡祖燈大明禪師）に就きて毒拳に觸着し、參詳功を累ね、又夙に博學宏才の名あり。法を正中に嗣いで後、越前の弘祥寺に住し、又善應寺に移る。後京師に來りて諸老と唱酬し文名を以て五刹の間に重せらる。明應八年京の亂を避けて、丹州の願勝寺に退く、幻雲集に『明應己未秋。南人起兵。京師戒嚴。予避亂入丹。以居願勝』と、居ること數年、永正七年二月、公命を奉じて建仁寺に視篆し、



錦繡學

疏

白鷗坡和尚住相國江湖　諱[illegible]二十三歲作

[illegible]執釋壽桂月舟

潤精藍于古戰場　有懐息亂太平之日

四翠華于上林苑　無愧偃武中興之時

勝惟叢社老成　際此朝廷嘉運

某

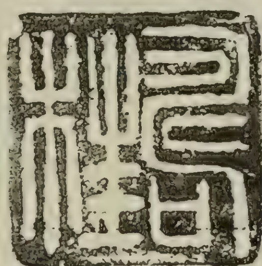
賀箋修鳳

蜀錦織鯨

四衆を接化すること年あり、結制上堂に曰く、

大悟堂前望闕樓。幾回作レ主此遲留。雜華刹界竹篦下。圓覺伽藍柱杖頭。紅欒著レ花春尙在。萬梅綴レ子雨初收。山僧不レ結九旬網。鳥自高飛魚自游。

後年帖を賜ふて南禪寺に陞る、公文に座するのみ。明應の頃、屢聖恩を承けて禁闕に出入し、優遇を蒙る。永正十三年其の師正中首座の行道記を作り、又師資の縁を以て天聰に稔く。是に於て敕謚の恩詔降る。晩に自ら建仁寺内に一華院を開創し、常に玆に居し、禪餘専ら文事を以て樂みとなす。常庵龍崇師を祭るの文に云く『才名貫二古今一。暇日語二南禪梅屋一曰。我少時漫慕二翟洪覺範之才一。今日却匿笑云々。梅屋。月谷默識信服。誠哉。佛經儒書諸部之不レ審。至二此翁一盡曉折。恰如二湯雪一。可レ謂三獨歩二于古今一矣。雪嶺。月舟一時鳴二于五岳一。祖溪翁時在二阿州一。每レ見二詩文一。欣然謂二門生一。天未レ亡二斯文一。都在二吾山一』と。一時の推奬を受けたるとを知るべし。文明九年、皇居重建、應仁兵亂の後、玉輦初めて大内に還御を賀するの作に云く、


月舟壽桂印影

畫棟琱梁拆半空。重看樹色擁新豐。太平一山歌臺上。不賦秋風賦大風。

『孤村一犬吠』の題に云く、

柴門不瑣樂昇平。何事今宵一犬驚。知認月明成越雪。孤村曉吠兩三聲。

天文二年十二月八日寂す。世壽と生死の年月とを詳にせず。遺稿あり詩集を幻雲稿といひ、外に幻雲文集、北征集、并に語錄三卷を存す。又嘗て兒輩の爲に續綿繡段を編し、共に今猶ほ法社の間に傳ふ。

一韓智翃

智翃字は一韓。東福寺孝仲の法嗣なり。參詳の後、諸刹を經て鎌倉の圓覺寺に住し永正の頃、伊勢にありて屢々徒を聚めて經史を講ず。永正元年景徐の湯山聯句を抄し序中

永正元年九月重陽前一日。老門生智翃爲小子光集侍者書之。舐犢意可咲。

云々の語あり、又其の跋に記して云く、

上略余侍景徐之左右。荷其恩顧者年久。今見此聯句。不覺老淚沾襟。吁成慶人。不拜尊顏者

十四年也。休矣哉。光集小子請₂余注₁之。略注破以授ㇾ之。若成₂其功₁老懐足矣。

永正元年八月二十日。書于祥瑞北簷。　智翃

是に依りて其の京師に在るの日、相國寺の景徐周麟に師事したるを知るべし。景徐曾て智翃に寄するの作あり云く、

送痴庵叔藏主回故里。兼簡一韓老人。

憐子三年事乃師。江津路水影相隨。安心却勝藥千裹。食淡何憂玉一炊。夜雨讀殘前漢史。春風吹落浣花詩。只須勤業又終卷。幸有僧中韓退之。

生死の年月詳ならず、聯句抄の外、古文眞寶抄今猶ほ坊間に流布す。

如月壽印

壽印字は如月。建仁寺月舟壽桂の法嗣なり。幼にして壽桂に從つて經籍を習ひ、怜悧の譽あり、叢林の徒、稱して文殊喝食と云ふ、その記誦の强堅なりしことを知るべし。永正十四年春、月舟に隨つて禁筵に陪し、後柏原天皇特に扇一柄を賜ひたること、載せて朳韻梅溪集にあり、云く、

滅却正法眼扶起破沙盆粉碎聖凡窠臼識破生死根源擲名藍二三處興普鑑菴遺蹟振宗旨四十年為玉山玉磵子孫無位真人赤骨律舒卷縱横有通変涅槃後有大人相眉間白光洞群昏雖然如此諸人向甚處与此老人相見去也擲胷云倒騎佛殿出山門

若木集終

享徳参甲戌年七月一日守塔比丘妙菊書之

如月壽印

永正丁丑春。禁花盛開。宸遊賞焉。如月印公。年少敏而好學。此日隨一華師翁。陪宮中高會。特五字應制。一座皆驚。叡感之餘。辱賜移扇一柄。華袞之榮。蔑以加焉。他日幅焉。請余之爲贊。峻拒不允。遂裁小律一章。應厥命云。

天報昇平上林中。鳥歌花舞樂融々。何人妙筆畫成扇。殿閣凉生一握風。

文殊喝食の稱空しからずと謂つべし。嘗て中華若木詩抄を編して世に行はる。後年俗に還り帷を下して學徒に誨へたりといふ。其の終所を詳にせず。

春和啓誾

啓誾字は春和。別に東湖と號す。近江の人なり。師承詳ならず。明應、永正の頃、建仁寺の大龍菴に住して月舟壽桂、常庵龍崇、東福寺の湖月信鏡等に從游す。平生文辭を愛し、騈驪の如きその最も得意なり。位は西堂に止まりて諸山に出世せず、常に諸老と詩章の間に往來し、優游自適したりといふ。一日、詩稿を携へて月舟壽桂に評點を需む、月舟卽ち其の詩後に題して云く、

詩不易知。易知非工。工而新。新而奇。奇而邪健。雅健。雅健而穠麗精緻者。就詩尊宿不可不

參。猶若禪之在句外。以故僧之工詩。比々有焉。宋之參寥乃其一也。儒者知識人家翠微一聯爲參寥師號。寔叢林嘉話也。玉府春和。袖一鉅篇。示予。且需評點讀之。篇々句々。氷淸玉潤。至于興寄高遠。予豈可知焉哉。然懇請不止。批之點之。凡若干首。噫。公遠承于翠微二十五長老。異日有儒之知識。爲公必贈十四字之號。未知詩稿有彼翠微句法也否（幻雲集）

文中謂ふ所の翠微二十五長老とは雪村友梅支那に在りし時翠微に住せしを以て此の稱あり、而して師は當時大龍庵に主たり、庵は雪村の塔所なりこれ其の字句の出でし所以なり。 角虎道人常庵も亦その詩卷の後に記す、其の略に曰く『上略一淸春和丈人。其傑特魁偉者。理社盟於吾□西之次。以辯其首云。予接未繙之曰。夫挹天地之淸者。莫若詩。而人倫之和亦詩爲主。丈人併斯二爲寶之賓。其形於言者可知矣。然後手不釋卷。翫味累日。天文也。地理也。卉木也。人畜也。雖所賦萬殊必歸之於一心。而篇々圓美。譬諸和氏璧不待工而其價連城。況歷幻翁品題。則如秦始皇帝琢以爲璽。豈非天下珍乎。更請他後尋以數編見惠。則庶慰西社荒寒焉耳』（寅闇序跋集）此の詩卷今時傳らず、僅かに春和絶句集一卷（三十八葉）を存するのみ。 生死の年月又詳ならず。

常庵の寅闇序跋集中、左の一篇あり、その交游の一端を窺ふに足るべく、又以て其の傳の足らざる所を補ふに足るべし。

蓮湖泛舟詩序

玉府春和小友。乃江之傑產也。一日爲余告曰。凡吾州之奇於天下。非謂有大湖之謂也。謂有落花也。花之擅美亦不能自美。以有人所愛也。吁矣見花者夥。而愛花者尠。千載只一濂溪耳。同袍春莊詞伯。以素願將禮大士於石山。石山與落湖才里許。豈臻此外彼乎。其公之於詞伯蓋莫逆也。與偕胥率遊目於彼。則足爲來者誇奇觀不亦悅乎。余踊然曰。濂溪所謂蓮花之君子者。以其質惟肖而猶愛之。何況眞君子乎。春莊誠方袍君子。孰弗企從遊焉。遂後數日。與詞伯同出洛入江。春和迎接。厥翌乃裝扁舟泛大湖。一碧萬頃。況半日程。香飈迎櫂漸入佳境。望而視之。靑者早知其爲葭葉。紅者白者早知其爲芙蕖。爲菡萏。褻而玩之。傾而如蓋。擎而如盤。大而如舟。小而如簪。淺邃遐邇不可窮到。諒天下奇觀也。於茲與二昆季。傳筩唧之。劈瞉的而加之。且以蓮湖泛舟爲題。一咏一觴終斯日於斯間。豈濂溪云乎哉。宜矣君子人而愛君子花。余雖非其人。晞顏亦顏之徒。則幸不以就陪奉見斥也耶。于其去也。春莊更出一篇見示春和及余。々和云。

湖面皆蓮無畔涯。初遊洛客看堪誇。朝漁暮釣知多少。占盡烟波不到花。

湖月信鏡

信鏡字は湖月。別に簑庵と號し、又或は楠溪、豐阜の號を用ふ、蓋し地名なり。幼にして桑門に入り、東福寺（百七十五代）の商霖信佐に就て參詳歲月を積み、印可の後法を信佐に嗣ぎて、塔頭大慈院に住す。永正十四年八月幕命に應じて東福寺（百九十六）

代に住す、自叙の語に云く『信鏡千不如人。一無所取。忝蒙台命叨董名藍。増愧赧顔泚尸素之類。云々』幾もなくして大慈院に靖退し、常に學徒の請に應じて禪、儒の典籍を講じ、又屢々古文眞寶を講じ後に自ら抄して叢林學徒の便に供す。又永正十三年夏常樂庵に於て四敎儀の講を開きたると抄の卷末識語に詳なり、云く

此書。湖月師。永正十三丙子之夏。於常樂塔下講之。雖然。集諦以下。以故講演不畢。云々

師晩年に及びて伊勢の無量壽寺にあり、京師の諸老各々詩を寄せて其の歸洛を勸む、當時景徐も亦一絶を寄せて云く、



湖月信鏡印影

洛之東西山先輩。凋零莫甚於茲時矣。慧皐不二老師謂人云。吾山之介于諸峯。凋零稱最矣。湖月師留滯伊陽。借辭諸老欲致之於洛下。萬牛五丁庶幾其來乎。予聞之曰。湖月則予故人也。老師之言則予之心也。不可默止。村體一章。代書奉寄。其詩曰。

眼覩叢林日下衰。非梅非棟待風吹。吾窓換水月移影。五百丈花蟾窟枝。

天文三年十二月十六日寂す。本貫と世壽とを詳にせず。古文眞寶抄、湖鏡集の二書、今猶ほ世に傳ふ。

惟高妙安

妙安字は惟高。別に懶安、又は葉集と號す。惟高は横川景三の安する所にして、景徐之れが記を作る。其の一節に云く、

惟高妙安印影



萬年安公藏司。以二惟高一副二其諱一。横川師之所レ命也。師欲三作レ說以解二其義一而不レ果矣。一日公袖レ紙扣二余丈室一曰。某之字。請繼而說レ焉。何賜加レ焉。余不レ辭而領レ之。云々（翰林葫蘆集）

文明十二年、江州に生る。初め妙心寺に入りて句讀を受け後に相國寺光源院の瀑岩等紳に就て受具し諸方に參詳して法を等紳に嗣ぎ後に光源院に住す。居常讀書を好み手に卷を釋かず、後年自ら記して云く『余入洛以來。不晝游者殆十三霜』と、以て其勉めたるを知るべし。天文九年九月鈞命を以て相國寺（九十世）に住し、同年又南禪寺に陞住す。尋いで十四年鹿苑院に移住して僧錄の事を領す。同く十九年五月四日足利義晴薨じ、東山の慈照寺に葬る、師是れが秉炬をなす。又鈞命

を奉じ兼ねて東山慈照寺を領す。鹿苑に在ること七年、時に雲州伯州兩國の太守の知遇を得て伯の金龜山護國寺、多寶山海藏寺に住し、伯州に留滯すること三十年の久しきに及び、尙兼ねて慈照寺を領したりといふ。曾て江州に游び、倦游集の著あり、又策彥と深交あり常に往來したりと傳ふ。曾て松永久秀の爲に其の愛玩する所の茶壺『如意寶珠』の記を作る、其の文に云く、

古諺云。夫物以遠至爲珍。事以稀見爲貴矣。玆有珍奇寶物。其體質也。具軒后（軒轅皇帝）之德色。其狀貌也類墳裏之彭亭焉。相傳曰。往昔中華（京師）造蓬萊假山。（盃山）山頂安置小寶壺。號如意寶珠。遠贈我扶桑國。以不詳年代爲遺憾矣。載有黃考日碑云。如意珠有梵曰摩尼。其祥瑞美德。不可勝計焉。日本第一天下無雙之尤物。爲席上可居奇貨也。小有匹偶。此者是名小茄。較之則霄壤胡越而已。可同日言也耶。中間於此寶壺。以有百關一數之事。而本古歌之意。以名作物。易名無異論者乎。四肝弓量以齋棋樹。倭朝俗呼曰御多羅技之流亞也。遞代大樹十襲祕寵焉。碌々賤輩介爾不得偸眼也。自異域跨歷萬里而至。寔以遠而珍。以稀而貴者。夫是之謂歟。

鹿苑相公。向內野戰場之時。金甲裡繫之隨身。其御愛保重可知焉。近來。慈照相公。以之忝賜山名禮部。其以男色寵幸故也。自後華夷擾搶。此寶沈淪落賈鬻手。淹委塵土。世所罕類

慨喟也。先是。天文丙申。台宗講徒法中鬪諍。鋒楯起亂（俗謂之法華亂）京城寶玉燬焚分散。寶壺亦隱埋。殆爲可惜矣。有好事者。千方百計。東討西討。不知所在。技盡于此。粤藤原朝臣松永彈正少弼久秀。握國家政柄。權威畏服。繇是永祿戊午之春。偶有賫持寶壺至者。副以七寶臺（七寶臺內也）玻瓈盞（天日）可謂摩尼寶（謂之長）在處衆寶悉集焉。且又妙典說云。無上寶聚。不求自得。金言可徵矣。集以大成。異哉慶幸之甚。蔑以加焉。可嘉可尙矣。竊按漢史。順帝朝。孟嘗伯周。任合浦守宰。爲人道德淸行。革易前幣。去珠復還（合浦因前守宰貪欲也。海底寶珠。散在於他海。或時孟嘗伯。爲合浦官令時。復寶珠悉還也。去來可見之）稱爲神明。千古美事。照照於簡冊矣。今也久秀德行所化。寶壺如意一去復還。玄又玄奇又奇。不意日域海隅。復覩合浦孟伯周焉。秦始皇帝。聞倭國有蓬萊仙島。遣來徐福。求長生藥。徐福至于南紀之金峯。止于東駿之富士。指此等地。以爲蓬萊方壺。皆爲神仙一靈境也。當世韻人佳士。靡然嗜陸桑苧盧玉川之事業。家家人人。貯蓄十器一陶。晞顏苧翁慕蘭川子。川子嘗作茶歌。茶歌六椀通仙靈。七椀蓬萊在何處焉。茶是仙家瑞草也。公官暇日。兵衞晝戟。燕寢淸香。與佳客會飮。賞味壺中仙葩（茶異名也）終日淸談。消遣世慮。兩腋習々身裡七十蓬萊。三萬弱水。不移步而自至山頂。延壽還童顏色如桃花者必矣。然則此一壺者。如意上々寶珠也。世間綺羅珍玩。縱使積齋北斗。以可塵視塊看焉。珍重至祝。松氏需予記此一事。予痴兀退衲。不肯措片詞。命侍史顯漫記之。

昔永午夷則如意珠日。萬年龜洋派下。葉巢賴安叟。

文は以て誦するに足らずと雖も、亦本邦喫茶史の一端を補ふに足るべし。雪屋の惠墨を謝するの作に云く

雪屋畏友。昨見惠一裹。披而見之乃光明朱也。雖云陳梁之朱。漢魏之紫。不可多讓。何賜加焉。而惠之意。在令予校讎諸子。雌黃群書乎。珍重々々。歡抃罔措。小詩一篇聊奉答恩惠之萬一云。唾擲爲幸。

籠前賜紫豈如之。朱有光明色最奇。滴露自今勤隱几。點周易又抄唐詩。

曾て一條家に於ける和漢の會に『寄夜御殿戀』の題に應じて云く、

六々宮中玉漏頻。芙蓉別殿御香韻。願言得作飛蛾去。要近搔燈帳下人。

古歌云。立ソイテキヘヌ思ノクルシキハ。カイトモシセシ人ノ面影。天子ノ御寢所也。奉案劒璽。故常令燈不消。挑レ燈曰二搔燈一也。清涼殿ノニアリ。四方ニ妻戸アリ。四方ニ燈樓アリ。東頭ニ案劍璽。北南西敷レ疊。垂レ帳爲女房座。上臈內侍之外不レ入二夜御殿一也。上臈內侍ハイツレモ女官也。此趣自二近衞御家門一書而給之者也。

又『相國寺觀燈』の作に云く、

相國寺前高設棚。燈燈佳節競觀燈。餘光續得花間焰。分與雲堂且過僧。

是は以て當時風俗史の一節を補ふに足るべし。師又義堂の空華日用工夫集四十餘

卷を抄略して四卷とし空華日工略集と稱し、又瑞溪の臥雲日件錄七十四卷を抄略して二卷となし、臥雲日件錄拔尤といふ。今時傳ふるもの卽ち是れなり。永錄十年十二月三日寂す、壽八十八。集あり葉巢稿といふ。又韻府を抄し尋いで詩學大成を抄して詩淵一滴と名づく。後者旣に泯びて前者今猶ほ傳ふ。

笑雲清三

清三字は笑雲。時人稱して三東堂といふ。伊勢の人なり。幼年にして州の阿彌陀寺（或は無量壽寺といふ）に往いて湖月信鏡に從學し剃染受具の後、東西に參尋して斯事を商量し又曾て業を東福寺の一韓智翃に受けて經史を究明し、後に鎌倉の建長寺に住す。常に讀書を好みて手に卷を釋かず、太岳周崇の翰苑遺芳、萬里集九の天下白、一韓智翃の蕉雨餘滴、瑞溪周鳳の脞說を合せて一百卷となし、名けて四河入海といふ。又自ら古文眞寶を抄して十卷となす。其の當時の學者を益したるや甚大なりといふべし。同門の伊納賢諄、四河入海の後に跋して云く、

慧日派下。笑雲三和尚者。勢之奇產也。自レ幼好レ學。手不レ釋レ卷。臂不レ離レ案者四十餘年。至レ老益

壯也。讀書既破二數萬卷一矣。最殫二思于蘇堂之詩一。夜雨靑燈漁獵者。歳積日深。與二王梅溪趙堯卿之輩一。共可三拍レ肩挹二袂。暇日因二後學之請一。錄二本邦脞翰白諸抄一。受業師一韓翁聞抄。合成二一集一。而分レ卷爲二五十一。名曰二四河入海一云々

以てその平生の一斑を窺ふに足るべし。その生死の年月を詳にせず。四河入海古文抄、共に今猶ほ世に傳ふ。

一華碩由

碩由字は一華。筑前國箱崎の人、父は秦氏、母は藤氏、文安四年二月四日生る。五歳にして箱崎建德寺の梅隱和尙に養はれ、禪門所要の諸經諸咒等を習ふ。寬正四年十七歳祝髮して僧となり名を博多の聖福寺に隷し、侍局の職を司る。爾しより勤學孜々として怠らず、專ら經錄に精通す。寬正六年梅隱寂す、後に建德の傍らに山莊を搆へ、假山を築き、諸花を栽へて養花軒と號し、常に風雅の士と會して樂む。廿六歳、俄に歎じて云く叢林の參禪學道を棄てゝ文字禪を專らにせば胸中徒らに妄塵を生するのみ、豈に眞正の知見ならんやと、附近に大德養叟の參徒

にして宗良居士といふものあり往いて參し、又、通玄、大徹、實峯派下の宗匠に就く、後に又玄室碩圭禪師の驢牖に入り鉗鎚を受くること多年、文明十三年、卅五歲にして覺晶菴に於て玄室の密符を受く。是れより法道日に盛にして緇素群歸す。文龜三年五十七歲の時、將軍足利義植、周防に在り、九州僧徒の中、其の仁を選びて列刹に住せしめむとす、師其請を受けて聖福寺に住し、自ら號を改めて雷隱といふ。幾もなくして退去、又建德寺に歸り雲堂を作り衆寮を創して覺晶菴と號し徒を集めて商量す、永正四年三月四日寂す。世壽六十一、法臘四十三。師、在日、諸錄中、所要の句一千餘を閱し、初關より兩關三關に到り分類定位し『吾宗家珍』と名く。又、碧岩百則、無門關四十八則、臨濟錄等一々下語して後學の指針となす。法嗣に頤賢碩鼎あり、よく師道を發揚すといふ。

湖心碩鼎

碩鼎字は湖心。後年別に頤賢と號し、また三脚と稱す。文明十三年に生る。始め一華由和尙の室に投じて髮剃受具し、嗣法の後、筑前博多の新篁寺に住し、永正

十六年十二月聖福寺に視篆す。天文十四年七月九日帖を賜ふて南禪寺に住す。是より先き天文八年、太守大内義隆の命を受けて天龍寺の策彦以下數百人を率ゐて支那に使し、北上して明の世宗皇帝に謁す、時に彼國嘉靖十八年なり。世宗、師の德を崇び號を頤賢と賜ふ。

頤賢元字湖心。奉使入明朝。明朝天子賜號頤賢。頤賢在聖福。菴曰幻住。院曰新篁。聖福山號安國。耳峯和尙住南禪目子

時人皆之を榮とす。歸朝の後京師の諸老各詩を作つて之に贈るといふ。嘗て自ら肖像に題して云く、

我似渠耶似我耶。離婁明不辨眞假。畢竟非渠又非我。惠崇蘆雁趙昌花。

大明嘉靖己亥歲。山野承吾扶桑國之正使。同庚子到北京。忝賜青色朝衣金襴袈裟。及歸朝日。着來拜辭矣。傍有畫工。寫予陋質充餞。同辛丑。歸吾本朝。爾來屈指十九年。今茲永祿二年己未。門弟子景轍玄蘇首座。謂予曰。此影無讚語。他日喚誰乎。請着一語可也。予老矣。懶下筆。雖然不獲止。拈禿毫爲後來之點鬼簿云。昔永祿二年己未。仲秋前一日。幼住十世的骨。前住聖福後住南禪兼高源杜多頤賢碩鼎。春齡七十九歲書焉

師歸朝の際、明の碩儒方梅崖送行の詩あり、曰く、

送日域正使湖心尊宿歸國

四海歸臣不但君。惟君懿行獨超倫。一言已悟瞿曇祕。方寸能參聖諦眞。表納天朝蒙寵異。帆懸江國問通津。他年月白興思處。應念雲翁亦故人。

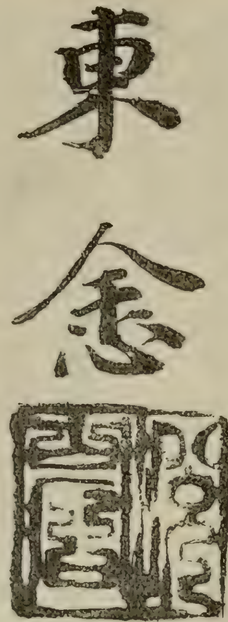
湖心公來王而寓四明。故予得領其淸論。乃謂古釋如大顚文暢。焉能過之。茲將分袂可無言乎。因書以識是云。嘉靖辛丑夏。雲關翁梅厓書

永祿七年疾に罹り筑前國宗像郡曲江山隆尙菴に寂す。遺稿あり三脚稿といふ。慶安三年、法孫無方子、弘治四年の日史を抃錄して一册子となし名づけたる者なり。蓋し師の遺稿止だ斯れのみに非ずして、一代の語錄並に入明の當時、彼の地の諸老と宗旨を商量して通ずる所の筆語、且つ名卿諸官と接遇の際、酬唱の詩文、裒積して數卷ありしも、滅後、聖福寺祝融の災に罹り、文籍遺稿悉く灰燼となり、僅にこの集を殘すのみ。寔に惜むべし。法嗣に景徹玄蘇あり、後に對州に以酊菴を創す。

悦岩東悆

東悆字は悦岩。別に西湖と號す。京師の人、俗姓は林氏、元人林淨因の裔なり。幼にして建仁寺の兩足院に入り西菴以亮（建仁第一座）に從游し、印記を受けて後、薩州の大願寺に住し後に兩足院に還る。永正十八年三月建仁寺（二百六十六世）に視篆し一時の諸老と文墨を以て相交はる。是れより先き京師の亂を避けて能州の行あり、龍崇其の行を贈つて云く、

悦岩東悆印影



送悦岩悆藏主遊登州詩序

久矣吾熟於悦岩兄。々歩亦歩。兄趨亦趨。推其志譜必控于大邦。揣其才雅必擢于玉府。究而搜之則華韜於弸之實。行浮於外馳之譽。接貴長之恭而不瀆。忘道術之執誼而信。故余畏而兄之。去茲夏日履選佛之場並點空之弟。覿其佔畢濡素。翔乎鸞舞躍爾龍飛。降肩臆視同僚拱手甚可壯也。今茲秋播然將有登州之行。余猝攔其裝云。聞君子不居

亂邦。時也河洛交兵朝野騷動。而兄將避往因宜。雖然身寄於祖翁甘棠。棄而違之。則賊必時其亡而來拜之可不思乎。兄曰甘棠固我所不棄也。於吾子豈復外此乎。幸其代之。顧余嚮觀光於彼邦者累歲。酬知之誠區々于內。矧今有折簡之招。々而不往於義何如焉耳。余於是弗克剛攔之。遂言之曰。是行也。兄將奮才猷於千里。覽德輝而下之。轅門明府之重必增羽儀之光。然天指越北候寒氣壓可不愼乎。宜備刀圭。身弱公重。非自己之所得私也。悅岩忻然曰。知我勸我其唯吾子乎。於其往也。仍繼之以詩。々曰。

叢祉日凋瘁。菊荒栗里秋。風塵新白髮。天地一青眸。情極黯無淚。行遙顧且留。同床何日又。夜雨子瞻由。

曾て某人春首の韻に和して云く、

台府權威傾禁城。奉神鴿嶺雨吹晴。佳人亦賀昇平瑞。揮筆革牋傳舊聲。

『花間待月』の吟に曰く、

人生半百髩如銀。忍見殘紅吹委塵。一刻千金宿花夜。欲迎新月繼餘春。

又、暮春嘆老の題に曰く、

紅紫委塵春已歸。山禽可笑世情非。暮齡七十有遺恨。兩髩殘花吹未飛。

享祿二年十二月十一日寂す。遺稿に悅岩集あり。

仁如集堯

集堯字は仁如。別に睡足叉は雲間野衲と稱す。幼にして相國寺の瑞春菴に投じ、龜泉集證に集つて句讀を習ひ、長じて京畿の諸老に參詳し、歸りて法を龜泉に嗣

縷氷集　仁如集堯自筆稿本

ぐ。嘗て播州の金華山法雲寺、赤松山寶林寺等に住し、天文十三年十二月、鈞命を以て相國寺九十一世に視篆し、同く十六年二月帖を賜ふて南禪寺に陞住す。その相

國に在るの日、寺中に靈泉軒を創して樂隱の地となす。永祿三年三たび鈞命を蒙つて鹿苑院に住し、僧事を錄すること十四年、天正二年七月老病を以て靈泉軒に退休す。常に東福寺の彭叔守仙と深交を訂し、また天龍寺の策彥と交る、彥の甲州慧林寺に之くや詩を贈りて曰く、

龜山妙智主盟策彥大禪師。先是航海觀光大明繁華之上國者一再矣。歸朝之日。繫纜於西周。西周府君。欽其道風。推奬之厚。以言不可述。雖然。以國多故。遂歸舊址矣。如晴月生嶺。孰不仰慕乎。可謂龜山得師增其重矣。今也甲州慧林禪剎者。正覺祖先揷草大法窟也。頃者缺主席。諸徒謀國君。迎師補其丈室。不獲峻拒。欲發軫。蓋其志以欲見士峰爲心也。於是乎。平居講膠漆之交者。不堪截鐙臥轍之情。聊製小詩。以潟離索之懷云。

一錫飄然雲又風。昨游見盡大明宮。要尋富士甲天下。此是蓬萊日本東。

又一日書を策彥に寄せて曰く、

昨日雨中泥行屈尊趾。恐懼不淺。何況一籠四餅之賜。不堪戴荷。雖然有禁酒誓。師不學一盞。失佳興。平日所受用。俄斷絃則却生病。予見之一念所發。慕球老美言。雖於義尤篤。能仁有唯酒唯開之語。在祇陀末利許之矣。淺酌則爲百藥長。老來禁之。於尊體不相應。愚夫之言有一得。請師早止禁酒之制。再會相和而已。亦恐爲長生術乎。卒走筆奉和禁

酒尊韻。
惟三傻指感流年。逝者如斯命在天。酒是從來掃愁帚。只宜共酌醉陶然。
永祿の始め、京畿騷擾して寧日なし、卽ち三章を賦して曰く、
夫永祿初元。閏六月旬有五日。卽立秋佳節也。頃日天下騷亂。不知氣候變遷。但日々談兵事而已。今曉。偶有西風淅瀝于時文鳳侍史。讀歐陽秋聲賦。忽然知秋節之至。奇哉。於是作詩見示。賦中銜枚赴敵之語。所謂情動于內。言感于外者也。因依芳韻者三章。聊泄老懷云。
亂裏逢秋動客情。東山近望搆新城。君其文陣英雄將。宜爲官軍借援兵。
可是悲秋宋玉情。金聲肅殺入愁城。時哉鬪諍今堅固。澡欲人々生五兵。
胸無雪月及吟情。踈懶生涯擲管城。學得浮山活機用。時々說法鬪棊兵。
天正二年七月廿八日寂す、壽九十二。嗣子あり賢仲周良と云ふ、眞如寺に住す。
遺稿あり縷氷集(四册)と云ふ。

驢雪鷹灞

鷹灞字は驢雪。本貫を詳にせず。幼にして建仁寺の洞春菴に入り東林如春に就て剃染受具參究年月を積みて、法を如春に嗣ぎ、越前の寶應菴に住す。時に領主日下景紀公、深く師の道價を重んじ崇敬措かず、後ち寶應を退いて建仁寺に移るの後と雖も時々舊梓に歸りて景紀の恩遇に酬いたりと云ふ。遺稿中一絕あり『東山視篆後一月旋越之舊梓。寓日下氏景紀公館傍。公待餘甚厚。不勝忻慰。作一絕呈麾下云。晝游今日得時哉。逢著鄉人眉忽開。葉々染殘山未雪。天公亦待我歸來』寶應菴を退いて後建仁寺の洞春菴に移り、繼天壽戬等一時の諸老と交游し天文三年六月の頃建仁寺二百七十九世に視篆し、同く十年八月再住、翌十一年夏三たび住山して接化に努む。幾もなくして又越前に還り、時に洞春と寶應の間に往來せしものゝ如し、是を以てその遺稿中下の一絕あり『予去洛者四十年。今茲來而看洞春祖塔。作一絕以記往事云。洛寺歸來又聽鐘。先廬半破奈斯冬。不忘四十年前舊。傾蓋迎吾門前松』又『天文十年正月初三日。庚寅也。予偶在洛。携二三子詣鞍馬寺』『旋越之日。聞洛攝兩軍出戰』等の語あり、その景紀公の爲に崇重せられ偶ま洞春に歸るの外、足跡封彊の外に出でざりしことを推知すべし。『偶題』に云く、

瓢然蹤跡小虛舟。南北東西得自由。名利海中波不起。比來天地一閑鷗。

『七里半道中』と題する作に云く、

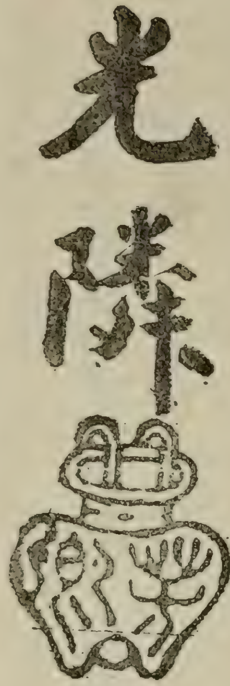
南來北往老生涯。馬上吟ㇾ詩忘路賖。意足不ㇾ論時節異。越山霜葉洛山花。

惜哉、終焉の歳月を詳にせず。驢雪詩集一卷今猶ほ存す、その詩琅々誦すべし。

芳卿光隣

光隣字は芳卿。東福寺斯立光幢の法嗣、俗姓は赤松氏、自ら愚島と號し、書齋に扁して安枕といふ。東福寺の寶勝院二代に住し、茂彥善叢と偕に文名一代に高し。

芳卿光隣印影



芳卿光隣印影



每に學徒の爲に史記を講じ、終年絕たざりしと云ふ。後に眞如寺に住し又永正十六年鹿苑寺に移る。越えて大永四年東福寺に開堂し、住すること數歲、後に老を寶勝院に養ふ。天文五年六月十四日寂す。

彭叔守仙

守仙字は彭叔。別號を瓢菴といふ。後土御門帝の延德二年信州に生る。早歲にして京に上り、東福寺の自悅守懌（東福百八十九世）に侍して童役を執り、長じて諸方の老宿に參詳し、又法を自悅に嗣ぐ。後年講抄の卷末に記して云く、

瓢菴子。自幼歲。侍于不二自悅和尙大禪師之左右。以故禪也。敎也。詩文也。每講之陪其席尾矣。碧岩錄亦其一也。自首至尾。不缺一則故和尙謂予曰。吁勤哉。雖然予性不敏而如聾如啞。汗顏汗顏。

後に不二菴に住し、又洛北眞如寺に住す。天文七年五月廿一日東福寺に視篆し、住すること十年、天文十六年五月七日帖を賜ふて南禪寺に陞住す。後に東福の山內に善慧軒を創して第一世となり、尋いで能州の崇壽寺、近江の慧雲寺等に移り、居ること數歲にして又善慧に歸る。所居の書院に扁して烹金と謂ふ。讃に云く、

字號彭叔。諱稱守仙。生別出神家。咸謂榑桑全俊。在信州。本貫於諏訪廟。長而創梵宇。獨慕檮林善慧。到梁朝下降自兜率天。端的不辨。寫帝爲虎。後生可畏。問禪答蟬。雖然如此。契多

子榴纖則宏振能祖之宗風初當四十九齡。而滌篆文於我東福擧長松樹偈。則竊比佛慧師之法道。後遇五十八歲而領鈞帖於他南禪兎角龜毛。杖拂石在手隻手。烏足馬齒。袈裟掛着于牛肩。或時奴呼彌勒釋迦拙談惡口。或時驗過德山臨濟。熱喝噴拳。直饒描得頂顴上者。豈夫識取脚頭邊乎。団式祝波瀾千萬丈。龍孫龍子激龍淵。

小師梅霖守龍西堂。命工寫予之幻質。而邀讚詞。輙贅其上。以塞請云。星舍壬子天文廿一稔季秋廿日。善慧老人六十三歲自題、



彭叔守仙印影

居常學徒の爲に儒釋の書を講じ、其の講了るや自ら筆して之を存したるもの多し。永正十八年講抄の江湖風月集卷尾に云く、

斯江湖風月集二百六十一首、自永正十八歲辛巳八月十三日。至同十月初六。首尾十七會。爲大仙菴運仲乘公西堂。於善慧境界講說焉云々

又の記に云く、

自天文元壬辰仲冬初七至天文二癸酉仲夏廿八日爲藝陽西禪主盟梁公首座。講者十五會云々。

以て其の一般を知るべし。師は又、熈春龍喜と深交を訂したりと見え、龍喜の枯

木集中唱酬の作少なからず、其の序引に記する所を見るに天文十八歳己酉、京師の亂を江州に避けたるものゝ如し、
去歳天酉冬之仲。善慧堂上老師。辭洛。避亂於江左之田上云々
善慧堂上和尚。玆比避兵。寓于江左一精舍云々（枯木集）
弘治元年十月十二日寂す。遺稿兩策あり鐵酸餡集、猶如昨夢集是れなり。師は生來文藝の達者なり、故に遺稿中、誦すべきもの太だ多し。

太原崇孚

崇孚字は太原。初め錫を建仁寺に掛く、曾て靈源短尺の會に列ならんことを望みしも、其の員に備らざりしを恨み、轉じて籍を洛西の妙心寺に移し、雪齋を改めて太原と號し、□菊を更めて崇孚と稱し、再び東山に入らざりしといふ。鐵山宗純の法叔たり。

河清祖瀏

祖瀏字は河清。延瑞祖龜の法嗣、建仁寺興雲菴の住僧なり。當時詩文の達者を以て叢林に重ぜられ、月舟壽桂、龍崇常菴、驢雪鷹灞等と交游す。天文元年八月建仁寺二百七十五世に開堂し、爾來天文九年に至る迄四度本寺に住す。一日、人あり酒樽を携へ來つて讚を樽面に請ふ、清、言下に書して云く、

見時如白水。飲則勝丹砂。八十老翁面。春風二月花。

晩年越前の寶應寺に退休し、某の年七月廿九日寂す。驢雪追悼の詩あり、

寶應堂上河清和尚。予五十年之舊也。今茲七月廿九日。俄然瘞履。感嘆之餘。滴老淚寫一偈云

今日天俄奪此才。吾無老伴可悲哉。機鋒壓倒諸尊宿。甲子胡爲不兩回。

奉和繼天西堂悼寶應堂上河清和尚嚴韻

此老掩光々更清。向人不道死耶生。室中侍者猶如昨。欹耳要聞三喚聲。

遺稿に頑雲集ありしも、今時世に傳らず、惜むべし。

月渚永乘

永乘字は月渚。別に宿蘆と號す。薩州牛山の人なり。幼にして塵俗を厭ひ、肥後の清源寺に投じ栖碧和尙に就て句讀を受け、尋で髮を下して戒壇に登る、時に隣刹に一枝和尙あり詩書を以て其名遠近に聞ゆ、卽ち就て學得する所甚だ多し。一枝は曾て桂菴玄樹と親み文墨の友たり。一枝寂して後、猶ほ其跡を慕ふを聞いて桂菴之を歎賞したりといふ。師後に事を以て桂菴に見ゆ、其歸るに迨て詩を作りこれに贈て云く、

孤錫瓢然報遠來。開門掃葉小嵐隈。牛山有才古今美。桐瀨禪林用楚材師門業在壯年時。好寄書巢借一枝。人逝筆亡無限恨。爲君不說又憑誰。

尋で桂菴に從遊して深く其の推重を受け、門下の秀才を以て目せらるゝに至る。當時海外通商の船舶、多くは日向の港灣に據る、故に之れが通事簡牘は禪僧にして儒に通ずる者を以てするの例あり、是に於て師は擇ばれて州の福島龍源寺の主となり、後に飫肥の安國寺に遷る。その至る所徒弟を聚めて講學曾て怠ることな

く、一枝、桂菴等の說に據りて朱學を講明したりといふ。大永三年相國寺の鸞岡瑞佐、及び宋素卿、幕府の命を受けて明に使し、三月薩州の山川港に碇泊す。此の時、大內義興も亦師弁に宗設等を遣して同く明國に使せしむ。師一行の船、順風に乘じて先に寧波に達し、宋素卿の船舶後れて至る。然も宋の一行、彼の大官を買收して先に上陸することを得たり、宗設乃ち怒りて亂を爲し紹興府を陷る。是に於て師一行の者、累の身に及ばんことを慮り俄に歸棹す。幕府命を傳へて建仁寺に住せしむ、蓋し公文に坐するなり。師明國より歸朝の後、門弟子倍々多く、終生文墨の間に遊戯して薩南の文敎を開拓するに專なりしといふ。天文十年二月寂す。後年南浦文之和尚、追薦の偈に云く『密雲不ㇾ雨南陽寺。可ㇾ惜終身作ニ臥龍一』と。蓋し師の如きは桂菴以後の宋學者中洵に錚々たる者と謂つべし。井上哲次郎氏著、日本朱子學派之哲學(參照)

繼天壽戩

壽戩字は繼天。別に牧雲と稱し所居の軒に扁して皆春といふ。本貫と生死の年月

とを詳にせず。始め建仁寺の一華院に投じ、月舟壽桂に就て剃髮稟具し、諸方に從游の後、月舟に嗣ぎて一華院に住す。天文六年十一月二十七日、建仁寺に住して四衆を棱化す。資性聯句に巧にして、屢々諸友と會す。月舟曾て聯句の跋を作つて云く、

戩子招諸友。比辭聯句。諸友虛左以屈老友。蓋需改正也。吁吾耄矣。將何言哉。然請者數。況志可嘉矣。老夫不克緘口。頗詠數句。河淸聞之而來。豈爲無老伴哉。戩及終其章。擧以坡翁夜坐與邁聯句之事。老夫云。子其邁乎。夫不才豈比坡翁。異日若能游河淸諸友之間。旭鍛嘌錬。益加策勵。則吾所願者。出于小坡之上。今慕邁者。所不取也。勉哉

又一宵、月舟に侍して對話す。後に句を續て百句となし、批點を舟に需む。舟乃ち之れに批して點し、且つ又其後に書して曰く、

跋戩子夜坐聯句

戩子偶侍予坐側。時暮雪忽晴。寒月如洗。予開窓高吟曰。天地若無雪。詩人胸不淸。命戩對之。戩答曰。古今雖有月。俗客眼何明。予又曰。梅骨瘦於鶴。戩曰。柳腰屈爲鶯。予既困就睡。數日之後。戩足成百句。且需評點。予笑曰。坡翁夜坐與邁聯句僅十六句而已。爾若勤而不止。則人咸以予不爲虛譽。中道而廢。予亦取笑。汗顏汗顏。於是批者四十七句。圈者二十三句。

其中予所吟者三句也。嗚呼。劉後村撰千家詩、蔡蒙齋撰聯珠詩格、各自點其詩。予薄識淺材。不敢傚顰。盍點識句。則其波及矣。思之。

月舟曾て錦繡段を抄す、而かも編次一ならず、師代つて之れが先後を分ち、異同を辨ず、稿成て後、月舟其後に書して云く、

書戢子唐賢三體詩後

予少壯時。應童蒙求。講唐賢詩。纂諸老抄。記諸老所談之義。書于本之上。紛拏而不倫次。雖論可否。尚未詳焉。戢子寫之。分先後辨異同矣。予見桃源翁之抄。唯止實接。不及虛接。蓋以人之無所令借而見也。戢今得之。以補其闕。又據大明一統志考其地理。蓋一統志近年傳來于吾朝。以故予曾不檢焉。戢之所書。尚恐多謬。後之君子。頗改正焉。則杜元凱爲左氏忠臣也。

又曾て駿州臨濟寺の雪齋大原の問に應じて宗門の要を論じ、稿を綴りて雪繼問答といふ。又駢驪を善くし、其の作數十篇あり、集めて柳西落葉といふ。又續錦繡段の著あり、共に今猶ほ傳ふ。

茂彥善叢

茂彥善叢印影



善叢字は茂彥。松嶺義公の法嗣、自ら浣華道人、又は恕菴と號す。東福寺の有隣菴（或は曰ふ如意菴）に住し、詩文の達者を以て當代の推奬を受く。天文の始め東福寺（百九十九世）に視篆し、住すること多年、又有隣菴に靖退す。遺稿に浣華集ありしも泯びて傳らず、恕菴駢驪一策、今に叢林の間に傳ふ。天文十年十二月十四日寂す。

心翁等安

等安字は心翁。竺雲等連の法嗣にして儒釋古今の書精通せざるはなし。鹿苑寺、天龍寺等に歴住し晩年嵯峨の妙智院に靖退して文墨を以て優游自適す。法嗣に策

彦周良あり、當年父子相併びて文名を擅にしたりといふ。其の生沒の年月未だ詳ならず。

策彦周良

周良字は策彦。別稱を怡齋と稱し、後に又謙齋と更む。文龜元年四月二日京師に生る。管領細川氏の家老井上宗信の第三子なり。永正六年十二月甫めて九歲にして洛北鹿苑寺に入り、心翁等安の籌室に投ず。幼より筆華流麗、一たび目を過れば遺忘することとなし、後年此の間の消息を自ら記して曰く『凡朝經夕梵、觸耳輙諳過目輙誦』と。翌年十歲の正月、門徒の小會あり『年後梅花』を以て題となす、等安和尙師に寫錄を命ず。二月の始め自ら三體詩を謄して學習し、每日一首を以て課となし、翌朝必す等安の前に於いて暗誦するに、屋上に瓴水を流すが如く、半字も停輟あることとなし。十一歲の夏偶々鹿苑寺、賊の災火に罹る。時に寺僧十餘輩、各々世事營辨の具を抱きて、此に離群し彼に索居す。師は獨り三體詩一册、取名一幅を懷にし夜に乘じて等安に從つて天龍寺に抵る。尋いで等安、丹波の性

智院に退休するや、師も亦巾瓶に隨侍し、傍ら諸子百家の書を自ら寫して以て誦習す。師又此の間の消息を自ら記して曰く『隨侍之暇。論語。孝經。杜詩。蘇二。黄九二集等。自書以誦習。鄭氏箋。左氏傳。古文眞寶。莊孟二子。粗渉二半部一。未レ終二全部一。且復臨濟錄。正宗賛等受二師口業一』云々と。永正十一年齡十四歲、三月廿日、鹿苑寺に於て佛國禪師の二百年忌を修す。將軍義植、入山して香を燒く、時に之れが給侍を命ぜらる。蓋し此職たる、當時叢林に於て貴と爲し、良家の子弟に非ずんば任に當り難し、是れ鹿苑の宗主宗山和尚の推薦する所、子の才を愛して榮除したるなり。永正十五年齡十八歲にして鈞許を得て、天龍寺に薙染し、翌年詢

策彦和尚墨蹟

南英、備中井山の寶福寺に住するに當り、諸山の疏を作り、之を袖にして建仁寺の諸老に示す、皆口を併せて稱美せざるはなし。廿一歳の十一月法叔梅莊和尚嵯峨の臨川寺に住す、師又同門の疏を作る。時に山中の耆宿嘆賞して曰く、此の父ありて此子ありと。廿三歳の時、等安俄かに寂を天龍寺の妙智院に示す、師此際の心情を記して曰く『爾來閑居蕭然。孤陋寡聞。如嬰兒失乳』と。此れより更に刻苦勵精して學を勉め、暫くも懈怠なく又自ら此の間の消息を洩して曰『時參詩而風品月評。有時耽句旬煆旭煉。借螢光。惜駟隙。動忘寢食。勤則勤矣。無幾年已迫不惑。然而才不見稱於人。字不見助於友。加之病懶相仍。百不記一。于朝于夕。忘篇忘筌。只自嗟恨耳』と。越て十四年、後奈良天皇の天文六年、防州の大守大內義隆、筑前博多新篁寺の碩鼎和尚に命ずるに入明の使節を以てし、師に囑するに其の副使を以てす。妙智院文書當時の消息を洩して云く

來年渡唐之儀必定候無餘日之間早々可令下向給候猶武任可申候慶事期後信候也恐々謹言

六月廿日　　　義　　　隆（花押）

周良首座禪師

急度爲飛脚宗泉入道被差上候來渡唐船之事來春可爲必定候仍以直書被申候早々御下向肝要候　御疏事可有御隨身候年內役者悉至博多可被差下候條聊不可有御延引候隨而御出立料百貫文此宗泉可致勘渡候慥被請取之御請取狀對此宗泉可被渡遣候猶々御下向不可有遲々候恐々謹言

八月十日

武　任（花押）

弘　成（花押）

隆　輔（花押）

隆　滿（花押）

妙智院侍者御中

是に於いて天文八年四月十九日、纜を五島に解き、翌年三月二日北京に入りて參內し、使命を了へて同年七月、星槎恙なく馬關に着す。時に明の嘉靖二十年なり。後八年を經て卽ち天文十六年、再び遣明正使の囑を受く。妙智院文書又此の間の消息を傳ふ、其の一に云く、

來年爲正使渡唐可目出候然者年內雖無餘日候下向待存候猶安房守可申候也恐々謹言



惟高妙安畫像



策彥周良畫像

十月二十六日　　義　　隆（花押）

妙智院

其の二に云く

來春御船渡唐必定候早々可令下向給候於趣者正法寺可申候恐々謹言

十一月十五日　　義　隆

妙智院丈室

是に依て同年五月四日再び纜を五島に解き、同十八年四月十八日北京に参朝す。明の世宗、特に唱和の詩を賜ひ、且つ上林苑に召して盛宴を張り、これを饗す。その翌年六月、使命を全うして歸槎するや、大内義隆歎賞して優遇至らざるなし。其京師に還るや、後奈良天皇特に召して遠行慰勞の宴を賜ひ、親ら菊花を頒ち、銀塊を賜ふて其の功を褒賞せらる。是より先き織田信長久しく師の道價を聞き、數々師を城中に請して、異域の人物、風土、山川、政治の要を尋ぬ。又一日親ら師を天龍寺の妙智院に訪ひ、道話の次、偶々師の寢室に入る、架上に衲衣、紙衣、各一領の外、函櫃一箇のみにして、更に他物の存するなきを見て、撫掌して嘆じて曰く、眞の大道人なりと。肥田若干を割て師に付與す。信長嘗て師に囑するに

安土城の記文を以てす、師自ら辭して薦むるに南化和尙を以てす。文成つて後、信長師に贈るに百金を以てし、南化に五十金を與ふ。蓋し師は自ら南化の能文に及ばざるを識り、信長は又師が南化を推すの雅量に服したるなり。當時甲斐に武田晴信あり、殊に師を崇敬し、州の慧林寺、長興寺等を以て之れを請す。妙智院文書、又此の間の消息を存す、

內々可有御下向之旨候之間相待候處御延引不審存候、雖然御病氣切々𦾔之由被顯先書候條承屆候、同者正二兩月之間急度慧林御入院可爲本望候、慧林長興繼統三ヶ寺共に可爲御計候其上於當府小梵宇一所可令建立候、和尙過半御在寺可遂閑談心底候、就中有存知之旨近日令剃髮候、彌早速御發足簡要候恐々敬白

極月十四日　　　　信　玄（花押）

妙智院玉床下

懇請辭し難く、錫を甲州に飛ばし、居ること數年。後ち更に一寺を創建して、師をして開山第一世たらしめんとす、固く辭して赴かず、天龍寺に歸り、妙智院に靜居して禪寂に耽る。天正七年六月一日病に罹り妙智院に寂す、世壽七十九歲。前後住する所、洛北の等持院、丹波の常照寺、嵯峨の西芳寺、華藏院、妙智院、

景德寺、臨川寺、甲州の長興寺、慧林寺、防州の福生寺、鎌倉の圓覺寺等十餘刹なりき。遺稿に南游集、謙齋雜稿、謙齋詩集、並に初渡集、再渡集等あり。初渡、再渡の兩集は、足利の末運に於ける、海外交通の一班を知るに極めて有益にして、蓋し邦家の珍籍なりとす。

江心承董

承董字は江心。竹岩貞の法嗣、別に自ら芳隱、又は嵐齋と號す。天龍寺三秀院の住僧なり。聯韻に工にして時人に推重せらる。嘗て妙智院の策彥と九千句を作る。天文の始め彥支那に游ぶ、卽ち携へて豐存叔に序せしめ、歸來、跋を惟高妙安に需む。一時の諸老皆之を榮とす。嘗て天龍寺百八十六世紀に住して學徒を接化し永祿年間に寂す。

一翁玄心

一翁字は玄心。別に二洲と號す、薩州犬迫の產なり。永正四年（紀元二千百六十七年）を以て生る。幼にして桑門に投じ、日向の安國寺に入り月渚に師事して進具受衣し、内外の典籍を學ぶ。後に京に上り眞如寺に掛錫して參詳すること多年、又建仁寺に移り、宿老に就て斯文を商確したりと傳ふ。尋で日州に歸り安國寺に住し、明國連江縣の人黃友賢なる者に就て、程朱の學を討論し、苟も疑ふ所あらば就て質さざる所なかりしと云ふ。此頃一弟子を得て、名を玄昌と安し、常に左右に隨へて訓諭怠らず、誘掖倍々厚し。天正元年大隅の神護寺に靖退し、同く九年玄昌をして龍源寺を董さしむ。文祿元年十月寂す壽八十六、居常、弟子に誨へて曰く『人の學をなす啻に文辭に通じ世用を辨ずるのみならず、切實に人たる道を學はさるへからす、父に事ふる孝を以て君に移せは忠となり、兄に事ふる弟を以て長者と朋友とに移せば信となる、皆之を我心に反省工夫して德性を涵養せんのみ、之を舍てゝ外に求むるも豈得る所あらんや』と。以て其の平生を知るに足るべし（山田準「釋桂菴藤原惺窩」參照）

春澤永恩

永恩字は春澤。別稱を泰安、枯木、萍鄉、又は天津といふ。若州の人なり。父は

道號
○春藏主一日价人需別号曰書東嶺二大字應需今擬以伽陀一章證云
全不西方南北側　巍々突出碧溪顚　扶桑夜半擧頭看　日照巖
和韻也
○君々青松山田春泗下裔泉書記需別号曰竜潭二大字擬以伽陀一章應需令下云
三級浪前透網鱗　碧波深処躍鰭　果然領下探珠得　方在空階月一輪

春澤永恩枯木集

州の領主武田大膳大夫元光（法名發心寺殿天源勝公大禪定門）にして永正八年に生る（紀元二千百七十一年）。幼にして建仁寺の九峰以成に就て得度し、參究功を累ねて後ち以成に嗣承し、如是院

に住す。天文二十一年三月六日建仁寺二百八十七世に視篆し、元龜二年四月二十四日、帖を賜ふて南禪寺に陞る。師平生妙智院の策彦と道交を訂す、彥の甲州に之くや送別の一絕に云く、

妙智堂頭和尚游大明者再矣。未幾又有甲州行。離索之懷。不言而可知。賦一絕。擬三疊曲云。

曾游再到大明來。未見士峰如有遺。欲送行人慰離恨。梅無香影柳無絲。

永祿十年若州高成寺の住持某、賀正の偈を贈る、師之れに酬ゐて云く、

高成堂頭有賀丁卯元旦一絕。遠寄示予。予不獲默止。押嚴韻者二篇。前篇催春游。後篇以祝開堂之日云。

詩律吾輸一百籌。老來無夢到溫柔。春游夜々君何睡。花有清香月勝秋。

常盈芴室鞠多籌。忍辱爲衣和又柔。應是開堂祝香瑞。山呼萬歲雪千秋。

始め建仁に住してより、元龜元年に至る迄四十八住を重ね、天正二年八月十六日病で建仁寺の如是院に寂す。語錄一卷あり春澤錄と名け、外集を枯木集と云ふ。兩書共に今猶ほ傳ふ。

竺雲慧心

慧心字は竺雲。法を允芳に嗣ぎ、東福寺の退耕庵に住す。永祿の始め山口の國清寺に住し、元利氏の崇敬を受く。曾て東福寺[二百三十三世]に住し、幾もなくして又山口に歸る。永祿三年元利元就、卽位費を正親町帝に献ず、師をして京に至らしむ。天皇、其の勞を嘉して扇子一柄を賜ひ、且つ南禪寺住持職の帖を賜ふ。當時文名あり上下の爲に推重せらる。天正七年八月三日寂す、特に佛智大照國師の謚號を賜ふ。

熈春龍喜

龍喜字は熈春。東福寺龍吟菴の住僧なり。別に自ら清溪と號す。東福百六十一世天覺宗綱の法嗣なり。夙に詩文の聲譽あり、遠近の學者、就て教を請ふもの甚だ多し。天正の始め東福寺[二百十五世]に住し、天正十七年九月、賜帖を以て南禪寺に陞

住す。天文十九年、齡四十歲、元旦の口號に云く、

四十人生髩雪加。飛騰從此日西斜。桃紅李白雖春徧。身似病梅癯不花。

永祿六年三月廿五日『葉底殘花』の題に云く、

鶯紅燕紫易成塵。愛見殘花葉底新。應是主人安樂意。綠陰深處別藏春。

又南浦文之に贈るの詩二首あり、

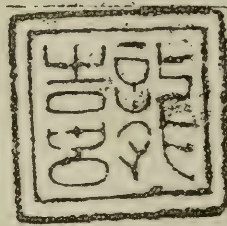
送文之緇郎歸海西

人生七十雪髯鬙。老話離愁情倍恒。此去舟中君可記。一篷寒月讀書燈。

文之禪師住日之龍源

海西古刹幾風霜。仰止禪老興道場。高激龍源萬仭浪。瑞雲遍覆盡扶桑。

煕春龍喜印影



天正九年、齡七十一、春初病を獲て龍吟の寢室に臥するや、又一絕を賦して云く、

七十人生又一年。浮雲流水任天然。老無多日病床上。籬槿留秋落照邊。

文祿二年正月三日寂す。淸溪遺稿、枯木集各一卷あり、稀れに叢林の間に傳ふ。

師は壯年の頃、下野國足利學校に游び、九華に就て經史の書を學び、洛に歸つて

後、學徒に誨ゆる所ありしといふ。枯木集に左の數首あり、以て其の消息を窺ふに足るべし。

利陽能化玉岡大禪師七周忌

天正第十二秋之初十蓂。伏値利陽能化前禪興玉岡大禪師七周忌之辰。頃罹微疾不離枕席三旬餘。不識歲月之逝。于時閑室禪伯來告予曰。今月某日當玉岡大禪師七周忌之辰。翁記之否。乃袖香瓣爲大禪師要供茶菓。予聞之且駭且嗟。老淚潛然不快。予東游之日就大禪師聞講周易十旬而終之。恩義大哉。先是禪伯寓利陽十餘霜。從大禪師說通經籍之奧。竟抜萃於杏壇之諸徒。加之。代能化爲諸徒講書傳。其才望誰不仰止哉。然則予之於禪伯可謂異性兄弟。於是。不勝感激。設伊蒲塞。供養近寺淨侶。諷演楞嚴神呪之次。賦伽陀一篇聊充菲薄奠云。

大興聖業魯東家。萬卷蟠胸小五車。八月回春再來相。德香不改七梅花。

寄學校九華老禪　於桐生

離會依然收五螢。十年灯雨眼纔靑。鈎衣寄宿御床側。添得桐江一客星。

試筆　於足利

到處有花京洛春。東游千里影隨身。二年斯地解鞍馬。從此靑山我故人。

鐵叟景秀

景秀名は鐵叟。別に九禾と號す。江州山上の人なり。初め永源寺の靈仲英に隨ひ、髮を剃り衣を更へて後、此事を參究すること多年、法を靈仲に嗣ぎて後、建仁寺の定慧院に住し、天文二十一年五月建仁寺（二百八十八世）に住す。爾來天正六年に至るまで前後十八住を重ぬ。又元龜二年四月廿七日帖を賜うて南禪寺（二百六十三代）に陞住し、翌年又再住すと云ふ。此の間南禪寺內に一宇を創して楞嚴院と名け、靖退の後常に此に住して禪餘讀書を樂みとなす。是れより先き天正七年五月、東國の僧、靈譽なる者、近江國安土に至り、淨土宗の旨を徇ふ。安土の城士大脇傳內、建部紹智等固く日蓮宗を重んじ、靈譽を忌みて日々論難し、遂に爭を起し京師頂妙寺の僧日光を招て優劣を決す。安土の城主織田信長、命じて之を和解せしめんとす、日光從はず、城中に對論せんことを請ふ、卽ち南禪寺に命じ師を招て對論の判者となす。織田信澄、堀秀政命を奉じて不虞に備ふ。旣にして靈譽の徒貞安なる者、日光と詰難す、日光辭屈して遂に罷む。乃ち其の袈裟を剝て之を逐ふ。是に於て

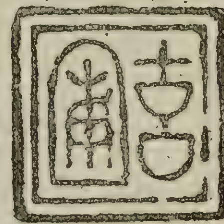
信長、大脇建部等の事を企てゝ禍を招きたるを怒りて之を斬り、又師及び靈譽、貞安等に厚く賞賜したりといふ。以て師が當時の敎界に重視せられたるを窺ふべし。師は又壯歲、建仁寺の月舟壽桂に就て學ぶこと久し、故に其學殖文辭共に一世の崇敬を受けたるも、その遺稿今時一も存せず惜むべし。天正八年十一月十八日寂す、壽八十五歲。

玄圃靈三

靈三字は玄圃。南禪寺聽松院の住僧なり。春芳光の法嗣、夙に才名あり、詞藻を以て其の名叢林に鳴る。天正十四年五月廿六日、南禪寺二百六十六世に陞住し、學徒を接化すること十有二年、慶長二年靖退して又聽松に歸る。是れより先き天正廿年豐臣秀吉、朝鮮を征す、春三月、命を承けて二十日先づ攝津に抵り秀吉の洛を出づるを待つ。廿六日秀吉に從つて舟を同うし、肥前の名護屋に赴く、時に從ふもの東福寺の惟杏永哲、相國寺の西笑承兌等あり、偕に帷幄に參じて參議謀畫せし者の如く、啻に記室の任に備はるのみにあらざりしなり。大明朝鮮御朱印記錄一

卷は師が此の役、陣中に於て記述せし者にして、大明勅使と筆談商量し、又は彼我和平の條件を草したる等其の精力を盡瘁したるの跡歴々觀るを得べし。是を以て豐臣氏の寵遇を受け、慶長十一年南禪寺の法堂供養を行ひ、百廢俱に擧ることを得たり。慶長十三年十月廿六日寂す、壽七十四歲。遺稿傳らず惜むべし。

玄圃靈三印影



景徹玄蘇

玄蘇字は景徹。天文六丁酉の年を以て生る。筑前國宗像郡の人なり。始め州の博多聖福寺に入り碩鼎頤賢に就て得度し、五家の宗風を聞き、傍ら儒流百家の典籍を習ふ。長するに迨で洛に上り建仁寺に錫を留めて春澤永恩に師事すること尤も久しく、其の題を乞うて詩を賦し、春澤の批點を受くる者八百餘首に及びたりといふ。後に豐後の安國寺に住し、又其師湖心の命を受けて筑前宗像郡曲江山隆尙

菴に住すること二十年、天正八年府主義調の請に應じて對馬に往き以酊菴を創し此年朝鮮に赴く。後に豐臣秀吉、命ずるに朝鮮通文の任を以てす、卽ち賀使を作ふて洛に上り、滯錫の餘暇、東福寺の熈春龍喜に就て斯事を商量し酬唱往來せり。後に博多の聖福寺百九代に住し、慶長十年三月、賜帖を以て南禪寺に住す。尋て又建長の命あり。乃ち一詩を錄して僧錄司に呈して云く、

柳營賜建長南禪兩帖之日奉呈鹿苑堂上謝登庸之恩

旅食京華春欲過。無能有味老生涯。一朝誤拜紫衣賜。只合終身着綠簔。

此頃、朝鮮の聘使松雲大師來る、師之れが接伴の任に當る。一日本田上州の私第に於て饗宴を催す、座客皆詩あり、師も亦一詩を吟じて云く、

自古扶桑與樂浪。鄰交結得百千霜。縱然是有主人情。請挾江山歸故鄉。

又松雲を伴ふて對馬に歸るの日、大阪に出てゝ下流に泊す。詩あり云く一四月日

一雨洗空三月天。時隨異客又乘船。篷窓欲問春歸處。只有沙鷗無杜鵑。

天正八年對州侯の囑を帶びて朝鮮に聘使す。今歲元朝の試毫に、

每賀新正詩不工。白頭長愧黑頭翁。春帆欲掛朝鮮國。渡口輕吹日本風。

と。蓋し其の半生は對馬に在りて日韓の間に往來し、その簡牘を掌りたる者の如

し、遺稿中自ら『寓對馬通筆語於異邦前南禪仙巣老衲玄蘇』と稱し、又『來奉使命超海者數回。始于庚辰終已酉』と記するが如き以て知るべし。一日韓客斗峰に似して曰く、

唱和幾回吟撚髭。臨行一句更酬知。君看甚矣吾衰也。生別今應死別時。

明の萬暦二十三年（我が文祿四年）二月、明の神宗皇帝特に詔を下して蜀錦の袈裟幷に本光禪師の徽號を賜ふ。其の劄に云く、

賜玄蘇本光禪師號幷蜀錦伽梨劄

兵部爲欽奉聖諭事照得。頃日因關白具表乞封。皇上嘉其恭順。特准封爲日本國王。已足以遠慰内附之誠。永堅外藩之願矣。但關白既受皇上錫封。則行長諸人。卽爲天朝臣子。似應酌議量授官職。令彼共戴天恩。永爲臣屬。恭候命下。將僧玄蘇授日本禪師官職。以示獎勸。擬合給劄。爲此合劄。本官遵照。劄内事理。永堅恭順。輔導國王。恪遵天朝約束。不得別有他求。不得再犯朝鮮。不得擾掠沿海。各保職位。共享太平。一有背違。王章不宥。須至劄付者。

右劄付日本本光禪師玄蘇。准此（萬暦貳拾參年二月初四日給）

師の詞藻は夙に京師諸老の推重せらるゝ所となり、東福寺の熈春龍喜の如き、其の唐律五十韻の卷尾に跋して云へるあり、云く、

予嘗與徹禪翁執交者向四十祀。讀其述作。未始不擊節嗟倒。邇徠罹渦風之厄。背晉齊盟者。有年于茲。今復覽唐律五十韻。格高意至。字々與花月爭妍。與江山鬪麗。圓規而方矩。靡不合乎度。舍宮而激商。靡不應乎律。若夫續五十韻成足伯。則曷異曩祖大宋幻住古佛與馮海粟賦百梅唱和也乎。嗚呼道之所存。吾翁之所存也。其由京師歸歸關西舊梓。筆軸末以贈之。

于時天正十又八仲冬上浣日　　枯木山人龍喜書

越て慶長十六年十月廿二日寂す、壽七十五。遺稿三卷あり仙巢稿といふ。法嗣規白玄方、慶安三年梓に鏤めて世に布く。而も今時之を傳ふる者甚だ稀なり。

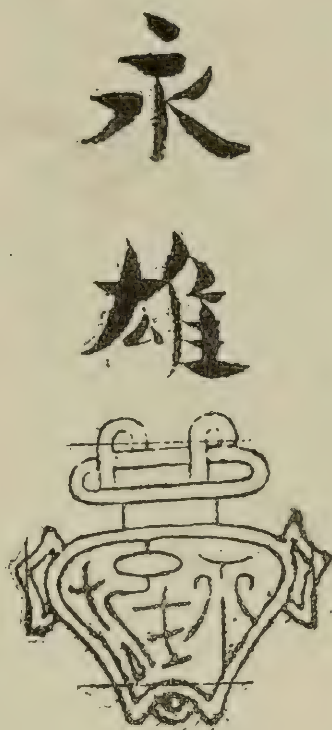
英甫永雄

永雄字は英甫。別號を武牢、又は小溪といふ。若州の人、武田宮内少輔信重の子なり。幼にして桑門に入り建仁寺二百八十九世の文溪永忠に隨待して句讀を受け、後ち江湖に游びて名衲の門を叩き、飽參の後、文溪に嗣法す。始め建仁寺の如是院に住し、尋て天正十四年十一月建仁寺に視篆し、慶長五年に至るまで十八住を重ね、

文祿三年九月三日、賜帖を以て南禪寺に陞住す。鹿苑寺の西笑承兌と常に往來して道交を重ねたりと。當時、隣刹大統院に林羅山あり、院主古澗和尚に侍して書史の句讀を受く、彼れ隣刹の故を以て日として師を訪はざるはなく、師が古語故事を搜索する毎に、彼れは之を助けて師に便したりといふ。爾後之を便とし、其の南華口義を講ずるや、彼れに囑して其援用する所を搜索せしめ、白氏の長恨歌琵琶行を講ずるの際も亦彼れに囑せり。後彼れが長恨琵琶抄を作るや、師一絕を記し褒揚して云く、

洛下他力門下有好少年。其名謂又三郎。去歲之春十有三歲而入吾東山。而游大統菴裏。先于孔丘志學者二歲。今玆冬仲。又君袖一書來見示予。予管窺之。白傳所製長恨歌之露抄也。予問云是何人之所抄乎。又君答曰。去秋入和尚講席自聞之。爾來本于此以書之出矣。熟視者如于回明皇樂盡哀來之起。本玉妃生前沒後之事跡。祿兒又相方士幻術等。一々無所缺。加之。文字反切之例。義意深密之理。悉顯于筆端。鼓舞者妙中得妙。奇外呈奇者也。而今君之所抄

英甫永雄印影



之事歷等。皆非先是予所講謬說。寔後生可畏者。其斯之謂乎。昔堯夫十有四歲而作明妃引。與今又君十四歲而抄玉妃傳。異曲而同工也。不孰稱美之。戲賦一絕以褒之云。

年少揮毫憐馬嵬。露抄雪纂最奇哉。羨看子學作他力。長恨吾徒無此才。

後ち慶長四年の頃、彼れは文選六臣注を借りて一日一卷を讀み疑義を質したりといふ。同く六年又三郎十九歲、秋九月二十七日彼れが養母小篠氏逝けり、小篠氏は彼をして『先妣有慈信于余者異常人』と追慕せしめたるものにして、彼れが當時の悲痛知るべきなり。其の盡七日忌に當り、師卽ち哀悼の偈を作つて云く、

林氏有佳士。謂之信勝。慶長辛丑小春十有六。値慈母妙珍大姉盡七忌之辰。供佛齋僧予亦赴其席。卒賦野偈一章。以助其哀情云。

母堂此去仲秋終。七々光陰如駟忩。定有挽詩尤絕妙。珍才佳學莫如公。

當時又東山の諸老、毎月詩會を催すの例あり、時に又三郎も亦少年の身を以て、諸老と詩文の交を訂す、某月の例會、諸老、醉西子を以て題となす、師卽ち一絕を賦し云く、

醉西子　林又三郎始入此會衆、其父云理西、以故西子爲題

芍藥紅粧天下無。譬諸西子醉姿姝。捧心猶病果非酒。盃底呑吳呑五湖

是れ慶長七年、彼れが洛閩の學を起さんと志し、長崎に游ふの時なりしなり。思ふに羅山が幼時の學殖は古澗長老の訓諭に原づく所多しと雖も、抑も亦た師の門に出入して、その薫澤を受けたるの功、蓋し少々にあらざるべし。

師は性來多能、聯句、和歌の如き亦其の長所なり。是を以て中院通村等と屢ゝ會合して和漢の唱酬に耽り、就中、狂歌に至りては當時最も高名にして新撰狂歌集の著さへありたりと傳へ、現に雄長老百首の板本、間々書賈の店頭に出づるを觀る。而して古今夷曲集、後撰夷曲集の如きも亦師の作を引用する所多し。今『醒睡笑』に載する所に就て其の數首を錄せん、蓋し詩僧傳中の一異彩を以て目するに足るべし。

○ある女房のもとにつかはる下主の名を福といふ有き、大どしのゆふべ下主にむかひ、そちよひがし宿へゆきてやすみ、あすはとくおききたり門をたゝけとひまをやりぬ、夜もふけすぎ五更におよべともきたらず、されども門をたゝくおとせり、すはやと思ひ誰ぞといふに返事なし、あまりにたへかねて、福かやれといひければ、與二郎でござるなにしろふくであらふ、福はよひからよそへゐた物をとぞつぶやきける、

鬼を内福をはそとへ出すとも
としーツつゝよらせずもかな　　雄長老

也足の判尤興あり、されどもたとひ年は一二よらせ候とも、福をそとへ出さん事いかゝと申へくや一笑々々

○貧乏神とわりなき知音の者ありしか、ちと酒にゑひて壁にもたれゐねふりしけるみぎり、肩から物がなにともしれずとうとおちけり、目をさまし手をあはせやれ〳〵嬉しい事や、此年月かたにゐたる貧ほう殿が今日といふ今日おちて、我身をはなれたよと合點せしが、たれいふとも知れずあまりおほくよりあひそちがいねぶりするあひた油べうしを踏むとてとりはづし、ひとりおちにき、いまだ果てはないぞといへり、なにと心にいはふても笑止しや、

大なる梯うちはかな二三ぼん
びんぼう神をあふきいなさん　　雄長老

○雄長老の小宿に鳥をさす上手あり、前大樹御耳にたちし内々尊意の旨長老承

及申され、辱き儀なり様子たち罷出よ、名をば松若といふなる、此まゝにてはいかゞと伺ふ、さらば伯耆になれとありければ、それはあまり分に過てと恐れたり、大事なし幸柄さしはふきよ、

○相撲とりあり、雄長老のもとに出て、なにとぞ名と名字をつけて給れと望しかば、荒磯浪助ついでに名乗をこふ時堅苔と、

○中風を煩ふ者あり、醫者のもとに行き脉を見せければ、薬ばかりにては治しがたき證なり、富市三里に灸をすゑられよといふに、いづれもかさねて請合候はんと、いそぎ宿にかへり、さて〳〵うつけたるくすしの申されやうや、富士はきゝおよぶ大山也、其のふじ三里が間に灸せよとは、如何に病がなほるとても、そも〳〵もぐさがつゞくものかと、

雄長老

灸すゑて富士に煙はたやさねと
猶ちか〳〵と足曳のやま

○上手の碁が今朝めし過よりやつさがりになるが、いまだ二番はてぬといふを聞きて、それ、逆馬になつた物であらう、はてまいぞ、

王ゆゑに歩をも馬をもたてをきて
かくきやうの外につかふ金銀

美濃の國に野瀨といふ碁打いまはの時、
碁なりせば劫をすてゝもいくへきに
死ぬる道には手一つもなし

裸の次手に、雄長老の裸でおはせし處へ、客來りければ、私は母者もの手織のまゝ罷居候とありし、此手織のたけはゞこそ大なる苦勞にて出來候へ、されば忉利天にのぼり安居の法とて、父母恩重經を說き給ふ、母に十恩ある中に、回乾就濕の恩といふあり、
子をはごくむは親の憐み、

とある前句に、
狹筵のぬれたる方に身をよせて、
物の理知らずんばあるべからず

○堂前にふりたる松一木あり、老僧少人にたはぶれ、あの松は男松であらふか、

妻松であらふか知れぬよ、歌よみの子息出で、妻松にてあらん。月のさはりになるほどに、土民の子、いや男松にするだ、あれほど松ふぐりのあるものを

天のはしだてにて　雄　長　老

橋立の松のふくりも入海の
波もてぬらす文珠しりかな

○八月十五夜の月に、むかひ坊主あまたあつまり、兒もまじはり詠め居けるに、大兒あれほどの餅を抱へて、そう〳〵くはゞ面白からうのとさゝやきける時、小兒されば大きはあれほどでもよいが、あつさを知らぬと、

月を題にて　雄　長　老

圓かりしなりもかくるや天人の
夜毎にかふかもちつきのはて

○悴侍の遠路を行く時、しきりに飢たり、見ればたゞ一人つれたる仲間こしに飯をつけて持てり、石の上にたうと居て、おのれが腰にあるめしを、われにおくれよと、仲間是非におよはず、さし出しさまに、これはおそれをしうござあれどもと、

恐れはやすめ字、をしいは定であらうそ

雄長老

櫻さく遠山までの花見には
なか〳〵し日ぞもてや中食

○雄長老霜月の半ば、四條の橋を渡らる、河上に法師一人水につかりて居たり、あはれさに立寄り、國はいづくぞ下野のものといふ

修行とて水に腰よりしもつけの
なす野のはらはいかにくたらん

○山中檢校死去のみぎり、とし四十八といふを聞いて

雄長老

南無阿彌陀四十八までながらへて
今ぞおもむくしでの山中

○利陽にうひすなをもち、一人の女房うぐひす棊めせ〳〵というてたれば、買はんとする人、そちはうたことをいふ、あをなめせとはなせいはぬぞ、うぐひすにあをとよみ聲ありやと、彼のうりてかちにし事よ、

鶯も笠きて出よ花の雨

賣りにくる程をしとへは我園の
　うぐひすなとて音こそ高けれ　　雄長老

○雄長老ある寺に立ちより、是れに數寄屋はないか、いやなしとの返事なり、さらば我茶にてもたてゝ出たされよと所望ありて後、
　數寄屋あらぬ茶や昔のお茶ならぬ
　　我身ひとりはうすのみにして

○京都六條の道場に文閑といふ連歌の作者ありき、其親の名を惣吉とよふ、或時彼惣吉火事にあへり、其砌文閑雄長老へ尋ねられたれは、長老出合ひ、文閑に火事の噂を問ふて後、
　御親父の貧乏のかみをやきはらひ
　　惣吉事にやならんとすらん

右の惣吉家やけてより後、一段仕合せなほり富貴なりしも、生死の年月を詳にせず。遺稿に倒痾集一策、語錄一巻あり、倶に今猶ほ傳ふ。



西笑承兌畫像

梅屋宗香

宗香字は梅屋。攝津兵庫の人なり。別に鷗菴と號し、又皃菴、松鷗等の號あり。南禪寺の華屋宗嚴に嗣法し、建仁寺の月舟壽桂に就て學ぶ所多し、才名當時に冠たり。蓋し近代の法語は梅屋の文を以て法となしたりと傳ふ。文集あり鷗菴集といふ。策彥の初渡の送行に云く、

尋詩景休到杭蘇。日本從來多勝衢。好去風帆千里月。梅同北野定西湖。

又、再入明の送別に云く、

風流禾上鬓將霜。又見浮杯天一方。吐出文章花五色。大唐日本動人香。

天文年間の人、其の沒年を詳にせず。

西笑承兌

承兌字は西笑。天文十七年を以て生る。幼にして洛北眞如寺に投じ、鱗甫功和尚

に就て業を受け、後に中華舜の塔を追拜して法を嗣ぐ。資性英邁にして時人に稱せられ、天正十二年二月十九日、相國寺九十二世に視篆し、同く十七年四月廿三日、帖を賜ふて南禪寺に陞る。始め相國寺に住するの日、心華院を創し、尋で天正十三年洛北鹿苑寺に移る（此年秀吉關白に任ず）同く十七年五月十九日、足利義昭光源院に就て、光源院殿（義輝）の廿五年忌を修するや陞座說法す。慶長二年八月廿八日義昭薨ず、越て九月八日、師又等持院に赴きて葬禮下火の導師となる。此頃秀吉、洛の東山に大佛殿を建立し、師をして之れが供養の導師たらしむ。文祿の役諸將敵屍の鼻を剿りて之を獻ず、秀吉乃ち命じて大佛殿の門外に瘞め慶長二年九月廿八日、大施食會を行ふ、師又之れが導師たり。此の日、先づ善光寺前に赴き、卒塔婆の文を書す、


西笑承兌印影

慶長第二暦。秋之仲。大相國命本邦諸將。再征伐朝鮮國。於是大明皇帝運脣亡齒寒遠謀。出數萬甲兵救之。本朝銳士攻城略地。而擊殺無數將士。雖可上首功。以江海遼遠。剿之。備大相國高覽。相國不思怨讎。卻深慈愍心。仍命五山淸衆。設水陸妙供。以充怨親平等供養。

爲被築墳墓。名之以鼻塚。況又造立木塔婆一基。看々此塔婆。喚作殺人刀也得。拈做活人劍也得。喝一喝 清風明月本同天。于時龍集丁酉秋九月二十又八日敬白

書し了て、施食大旛の文、古篆を以て筆となしたりと。當日雲集する所の僧四百餘人に越えたりといふ。是れより先き左街の僧錄に任ぜられ、久しく天下寺社の公務を司る。また常に秀吉の帷幄に參し、簡牘布政の事概ね皆師の方寸にあり、秀吉之れを德とし、慶長の初め相國寺に豐光寺を建立し開山第一世となし、特に寺號を許し、肥田を與へて優遇す。慶長十二年七月十五日家康、豐光寺に遊び音樂を奏して終日優遊したりといふ。慶長十二年十二月廿七日心華院に寂す、壽六十。塔を豐光といふ。遺稿あり土偶集と名く。又慶長中の文案拾冊、文錄中の日記三冊、外に數通の筆札あり。蓋し當代史實の詳を知らむと欲せば、必ず此れに據らざるべからず。

閑室元佶

元佶字は閑室。別に三要と號す。肥前國小城郡晴氣村の人。俗姓は多々良、大内

氏の一族なり。天文十七年を以て生る。始め金庭菊に侍して句讀を受け、長じて法を菊に嗣ぎ、學殖深遠、夙に叢林に推さる。後に下野に游びて足利學校の席を董す。時に徳川家康、與ふるに一百石の地を以てし學校の頽廢を理め、百事を整頓せしむ。師は卽ち中興なり。尋いで家康、關ヶ原に陣して中原の鹿を爭ふや、常に師をして帷幕の中に侍せしめ、その覇權を掌握するや、京師伏見の里に圓光寺を創建して畿內の學校となし、召して之れを統理せしめ、儒釋の典籍二百餘部を下し、大いに文敎を督勵して都鄙の國學を掌らしむ。

閑室元佶墨蹟

後ち又家康の命に應じ、圓光寺を相國寺內に移し、更に師に命じて寺社の訴を聽

かしめ板倉伊賀守勝重と連署して政務を署理せしむ。當時肥前の太守鍋島勝茂、州の小城に醫王山三岳寺を創建し請して開祖となす。然も師は常に京師、駿府の間を離れざりしと云ふ。慶長十四年に至り、家康更に駿府に圓光寺を營み、師が駿府に在るの時は常に此に居らしむ、その優遇を蒙りたるを見るべし。

是れより先き、慶長の初年、家康京の圓光寺に肥田二百石を下して永く寺產となさしめ、後又加增せられんとするや固く之れを辭す。是に於て活字十萬箇を頒降して書籍印行の便に供せしむ。卽ち命を奉じて、孔子家語、貞觀政要、七書等數部を印刷す。今時傳ふる所の圓光寺活版なるもの是れなり。始め頒降の活字を用ひて孔子家語四冊を印刷するや、師之れが跋を作つて曰く、

世際季運。而學校敎將廢也。維時內府家康公。于文于武得其名。故興廢繼絕。爲後學刻梓文字數十萬。而賜予。退爲謝公之恩惠。初開家語。此書是聖人與義。治世要文。寔非小補也。刊字列盤中。則明本家語以數本考正焉。或板行有訛謬。或文字有顚倒。以亡加之以餘刪之。雖如此有帝虎烏鶴誤者必矣。只願待博雅君子改制焉也。謹跋

慶長第四龍集已亥仲夏吉辰　　前學校三要野衲於城南伏見里書寫

尋いで慶長十年周易二冊を印刷するや、相國寺の西笑承兌にその跋文を囑す。文に曰く、

古今學儒書者排斥佛經。學佛經者排斥儒書。是世之常而共不辨眞理也。釋尊生中國設教則如周孔。周孔生西天設教則如釋尊。儒釋元來不渉二途。如鳥雙翼。似車兩輪也。如閑室大禪師者。壯歳入東關。讀四書六經而品論之講說之。旣稱學校者有年于茲。暮齡到洛陽。傳中峯法要。位空門極品。僉曰儒釋兼幷也。頃蒙大將軍源家康公鈞命。印行周易。其志要弘聖道於萬年。能校正舛差而加陸德明音義於王輔嗣注。集而大成者乎。古德曰鷲嶺拈華。伏羲初畫。少林面壁。文王重爻。然則於禪門。亦不可不究盡易道。予於禪師其情如骨肉。因需跋其後。不獲堅辭。漫書焉也。

慶長十年星集乙巳孟夏初五日　　鹿苑西笑叟承兌

その翌年又七書五冊を印刷す、師の跋に曰く、

夫兵書古今雖多。諸家說凡以七書爲樞機。孫子以兵書於闔廬。闔廬知孫子能用兵爲將破彊楚。是孫子力也。吳起學書於曾子。事魯君後事魏文侯。擊秦拔五城。所以吳起爲將也、穰苴齊景公時。文能附衆。武能威敵。景公聞爲將。尉繚以天官時日決勝敗而已。三略老人授子房書也。是漢代平均基乎。太公以文武龍虎豹犬。傳於文王。興起周代八百餘歳者乎。太宗問李靖。靖對曰。先仁義後權譎。可謂文武兼並也。前大將軍家康公。以文安人。以武彙威。天下萬民咸歸服。雖周漢不能過。忽隨公鈞命。記七書於梓、以講直正之畢矣。予爲令知太平於後人。跋其後也。

慶長十一龍集丙午初秋念又一日　　紫陽閑室元佶叟書焉

以て當時家康が、天下治安の基、その須らく文敎を興すの利あるを看破し、有爲の材を拔擢して各々その長所に從事せしめたるの一斑を見るべく、其天海を始めとして、承兌、元佶、崇傳の如きは當時の僧界に於いて家康が尤も重視したる者

と見るべく、殊に元佶の學殖は家康の尤も服したる所なるべし。
當時の五山は詩文漸く衰へて復た觀るべきもの少かりしも、師の述作に至つては稍々稱すべき者なきに非ず。その一禪人を送るの作に云く、

心也禪伯俄然而被告歸來。引予牽裾留之。伯有約再來之辭。予亦應其命。漫賦一章。以賀行裝之義云爾　　微　　哂

佳人告別出中華。老淚沾巾惱淡涯。又約再來行不得。鷓鴣聲裡夕陽斜。

日東學校　三要野衲拜

慶長五年三月十三日、賜帖南禪寺に陞る。彼の安國寺慧瓊瑤甫和尙の賜帖に後ること僅かに九日なりき。瑤甫は此年十月朔日捕はれて六條河原に斬らる此頃將軍秀忠、師に贈るに和漢合運圖三冊を以てす、現時圓光寺に傳ふるもの是なり。

慶長十七年五月瘧に罹り、廿日終に駿州の圓光寺に寂す、壽六十五。遺偈に曰く、

萬事人間傀儡子。棚頭日々使狂吾。言非言是是何物。端的看來脫有無。

遺徒玉質宗樸、師の遺物として黄氏日抄全部を家康に獻じたりと云ふ。

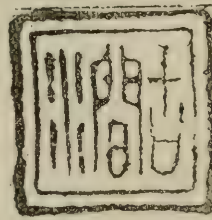
古澗慈稽

慈稽字は古澗。天文十三年を以て生る。俗姓土田氏、信州の人なり。卯歳にして建仁寺の大統院に投じ、奎文慈瑄に投じて句讀を受け、稍長じて鬀髮受衣、參詳歷叩の後、法を奎文に嗣ぎ、道譽叢林に喧しく道を問ふ者多し。時に博多聖福寺の請を受けて錫を飛ばして垂化し、住すること數年。後、京に歸り奎文の後を承けて大統院に住す。慶長十年十一月建仁寺（二百九十四世）に住し、同く十三年賜帖南禪寺に陞る。此頃　後陽成天皇の敕を蒙り屢々禁裡に出入して三體詩等の諸書を進講し、常に寵遇を受く。當時大統院に林羅山寓して書を讀み、居常師に侍して敎を受く、師一日又三郎に出家を勸む、彼れ肯はずして去る、然れども從學故の如し。後ち彼れが德川家康に識られ駿府に移り、又た江戸に駐まりし後も、猶ほ音問省覲を怠らざりしといふ。加之、彼れの家は京師に在りて老親長子等終始師に參して敎を受け、長子叔勝の如きその啓沃する所甚だ大なりしと云ふ。後ち叔勝、父に從つて江戸に移り、寛永六年六月十九日病に罹りて夭折（十七歳）するや、羅山卽ち

京に歸り、大統院に靈牌を納れ、供佛齋僧、その冥資を祈れり。時に師悼偈を作つて云く、

林氏左門秀才者。具逸群絶倫之器。而游目於典墳。塞心於詩禮。有隙則必扣山野陋室。常打雄談博辯。出其類者也。慈父道春老人。侍大相國簾下。不退股肱。日尚矣。於是秀才爲省覲之。嘗數州險阻。對慈父床則。歡抃無限。雖然。經東游數月後。被侵膏肓二豎。以換骨頤神靈藥。雖療之。倉公拱手。越人攢眉去矣。終易簀而亡兮。故改其名。諱曰叔勝。字敬吉者也。春老萬恨千愁之餘。達尊聽。望歸駕之命。相國憐之。許還鄉。春老入洛下。如律令。即掛一牌。供佛齋僧。山野亦赴其請之次。綴拙偈。助一哀云。

古澗慈稽印影



常隔東關思萬重。況聞其訃涕彌從。慈親長別似王衍。造次不忘情所鍾。

以てその林家との交情を觀るに足るべし。思ふに德川氏三百年間に於ける官學の鼻祖は羅山を推さゞるべからず、而も彼れ羅山の學殖、五山の僧徒に基くを見る時は、德川氏三百年間文教の淵源に於いて五山文學の輕視すべからざる者ありと謂ふべし。

慶長十二年春、羅山駿府に赴くの時、師の送詩に和し一絕を呈して曰く、
曾聞海外有蓬萊。富士巍然邪馬堆。雪似東山山上月。白鷗疑是鶴飛來。
時は寛永十年、師は猶ほ九十の高齡を以て、大統院に住して、南窓の下、古今の經史を繙いて倦ます、初夏病を獲て九月に至り、十日終に寂す。遺稿二策あり、集を廬瀑と曰ひ、錄を口水といふ。弟子に九巖中達あり師に嗣いで大統院に住し、禪文偕に高名なり、潦水錄、鵝退集等の著あり。

文之玄昌

玄昌字は文之。別に南浦と號し、軒を雲興、齋を時習と名づく。俗姓は湯淺氏、父は河內の人なり。亂を避けて日向の福島に寄寓し、里人の女を娶り、弘治元年師を州の外浦に生む。桂菴の寂後實に四十八年なり。天資聰明にして、夙に出家の志あり、父之れを奇とし、永祿三年州の延命寺に詣り、天澤和尙に投ず、時に師齡僅かに六才。天澤之に法華を授くるに讀誦琅々として又一も礙滯なし。年十三にして元旦の詩を作る、里人稱して文殊童といふ。依て天澤以爲らく是れ所謂

神童なり、駑材の育する所に非ずと。市來の龍源寺に遣り、一翁に師事せしむ。一翁は當時宋學を講明して聲明甚だ高し、卽ち四書、三體詩等を學ぶ。文祿十二年齡十五才にして京に上り、東福寺の龍吟菴に錫を掛けて熈春龍喜に學ぶ、熈春一日嘆じて云く『汝は眞の英物、他日能く吾道を弘めん、必ず克く勉めよ』と、

文之玄昌筆痕

慶長板素書跋

其点書而識之諭之非復一日。於是使南京邵光道謄寫之、願正其誤、旁加倭点、与郷友之好古者講之。猶有所未至者、闕之以俟知者焉。
慶長二十年乙卯閏六月下澣。太龍老夫玄昌書

就て內外の典籍を綜覽し、又傍ら相國寺の仁如集堯に就て敎を受けたりといふ。既にして西に歸り、龍源寺に主となる。島津義久其の名を聞き召して顧問に備ふ。慶長四年始めて和點を周易大全に施し又之れに跋す。是の歳島津義弘に從ひ、京に上りて伏見邸に入る。嘗て大學章句を東福寺に講ず、聽者甚だ多く耳を傾く。

後水尾帝其の學識の高きを愛し、詔して新注を禁廷に講ぜしむ、會々廷臣の事を言ふ者あり、云く『惜哉、師博識宏才と雖も、亦西陲に生れ、詞辯鄙陋にして文飾少し』と。其の薩州の土音を以て進講したるの狀を想見すべし。幾もなくして薩州に歸り、世子家久に侍讀す。是れより先き又桂菴の訂補せる四書和點本に本づき、更に訂補して弟子に授く。緇素翕然として門に聚り、桂菴以來殆んど地に墜ちし文教再び隆運を見るに至れり。慶長十六年、家久、大龍寺を創し、迎へて開山第一世たらしむ。元和六年九月寂す、加治木の安國寺に葬る、年六十七。遺稿に南浦文集六卷、聖蹟圖和鈔、日州平治記、砭愚論、決勝記等あり。門人業を受くる者甚だ多く名臣儒流の徒簇然として其門より出で、就中、如竹最も世に聞ゆ。蓋し師は岐陽以後、我國僧傳朱子學者中尤も著名なる者と謂ふべし。

嘯岳鼎虎

鼎虎字は嘯岳。其の師承と本貫を詳にせず。別に萬年と號す。長州萩の鄕洞春寺(今の萬年寺)の開祖なり。此の寺もと安藝國吉田にあり、元龜四年大江輝元、祖父元就

の爲に建つる所にして、慶長十年今の地に移す。天正五年四月六日賜帖を以て南禪寺に住す。同く廿年三月豐臣秀吉大軍を發して朝鮮を征す。仍て諸將と偕に軍に從つて韓地に入り、簡牘記室の任に當る。當時、師の記する所の禁制一札今現に萬年寺に藏す。其の文に云く、

禁制

一慶尙道者。日本國安藝宰相奉勅命令世治也。自今日可守其旨事
一郡内官人。幷黎民。避亂山中海外之輩。如前代歸我舊家可安居事
一日本人奪唐人之妻子家財。於令狼藉者縛之以可誅事
一業其農者勤田畠耕耘。引水拔草。以可待秋成事
一朝鮮人若手弓矢。妨我兵之往還者。悉捉之以可行刑罰事
一若官民以下有可訴之旨。錄以可捧之吾將軍陣于開寧。奏以可達素望事
右條目不可容疑團。天道昭鑑不可相違矣
日本天正二十季壬辰　　安藝宰相代　宍戶元次

是れ安藝宰相に代て筆する所の者、其の外、此の役に關する多くの簡牘等、師の草する者尠しとせず。歸朝の時、韓書若干卷を携へ歸りて洞春寺に置く。今現に

柳成龍の捺印ある前漢書四十八卷、萬年寺に藏すと云ふ。慶長四年十月五日寂す。

文英清韓

清韓字は文英。不放子と號す。伊勢國河藝郡合川村の人なり。建長寺の文叔清彥の法嗣、參詳の後、伊勢の無量壽寺に住し後に洛に來りて東福寺の天得院に住し、次で東福寺に晋み、慶長九年五月帖を賜ふて南禪に昇住す。豐臣氏の寵遇を受け文名一代に冠たり。嘗て秀頼の命を受けて洛東方廣寺大佛の鐘銘を作り、計らず事端を開き物議囂然たり。於是、片桐且元と共に頻に辯解すれども聽かれず、遂に左遷せらる。當時、伊勢の中尾右馬介に與へたる書簡に、

伊介殿御遠行之由扨々驚入候、御力落し被推量候、御母儀様へも此段御吹聽所希候、拙生、大御所樣より御せつかん被下、大略なかされ候はんと存候、猶以拜顏可申上候、恐惶謹言

九月五日　　　　無量壽寺清韓花押

中尾右馬介殿

人々御中

以て當時の消息を窺うに足るべし。是れより先き清韓、肥州熊本に在ること十有六

文英清韓集　文英自寫本

乱世英雄着戦袍
瓊楼玉殿燼城郭
剣後不回送兆車
人間一万八千日
戦馬周旋静塞烟
海邦臣子拋生日

太平天下與賢豪
換得昔並三丈高
残僧揮涙掛袈裟
幻作秋風紅槿花
猶存勇力滿乾坤
匆諳使君飯九泉

前住東福後住南禅文英清韓拝

年。又嘗て加藤清正の囑に應じて軍に朝鮮に從ふこと數年。清正の熊本城に薨ずるや文を作つて之を奠す、其一節に、

某也。從軍朝鮮。逐肥馬塵。辱蒙寵顧。寓跡于肥。十有六年。丕費檀施。初住惠日。後住瑞龍。恩遇難忘。悲惘之情。往來于懷。

の語あり。又爲めに哀挽五章を製して顧慕の情を述べて云く、

生前富貴駕朱轓。不意長眠在蔣園。雖曰德光遍天下。虎泉日落暗昏々。

妙齡馳譽百夫雄。壯歲旌名第一功。夜半有人負山去。千岩萬壑忽成空。

亂世英雄着戰袍。太平天下喚賢豪。瓊樓玉殿遶城郭。換得古丘三尺高。

別後不廻送死車。殘僧揮淚濕袈裟。人間一萬八千日。幻作秋風紅槿花。

戰國周旋靜塞垣。智名勇力滿乾坤。治邦臣子如生日。勿謂使君歸九原。

其の淸正の寵遇淺からざりしを知るべし。元和七年辛酉三月廿五日寂す。遺稿一策あり文英韓長老集といふ。北野天神の贊に云く、

赫彼日域。醍醐天皇。信侍臣讒。竄貶紫陽。櫻其枯悴。梅亦飛揚。觀世應化。丕發靈光。洛陽之北。丞相祠堂。往來絡繹。人祈吉祥。直到太宋。不待舟航。託惠日夢。傳徑塢芳。和歌唐律。冠于扶桑。經史子集。儒家棟梁。禪熟文熟。惟德惟香。



似心崇傳畫像

惟杏永哲

永哲字は惟杏。東福寺正統庵の住僧なり。高岳令松の法嗣、天正の始め東福寺二百十八世に住し、天正十八年九月公文を以て南禪寺に陞住す。同く廿年秀吉征韓の役、承兌、靈三等と秀吉に從つて肥前の名護屋に赴き通文の任に當る、其の詞藻を以て當時の叢林に重んぜられたるを觀るべし。遺稿に四六一篇あり今尙ほ存す、其餘の詩文一も世に傳らず洵に惜むべし。慶長八年六月十二日寂す。

惟杏永哲印影

永哲



以心崇傳

崇傳字は以心。永祿十二年に生る。一色式部少輔晴具の孫、紀伊守秀勝の子なり。

幼にして南禪寺の聽松院に入り玄圃靈三和尚に就て得度し、參學の後、法を金地院の靖叔德林（南禪二百六十二世）に嗣ぎ、林の後を承けて金地院に住す。慶長十年五月廿八日、帖を賜ふて南禪寺（二百七十二世）に陞住し、同く十三年德川家康に召されて駿府に赴き、彼れが記室となれり。爾來家康の爲に重んぜられ、金地院に附するに數多の田園を以てし、皇居造營の際、その舊殿の建物を賜はりて南禪寺を再興し天下僧錄の如きもその事務を相國寺より南禪寺に移して自ら僧錄司となり、寛永二年家康薨去の後、江戸に移りて秀忠を輔け、天下の政柄を掌中に握り、又金地院を江戸に創立して京師江戸の間に往來して聲望一世を壓し、人々稱するに黑衣の宰相を以てするに臻れり。寛永三年十月、後水尾天皇勅して圓照本光國師の號を賜ひ、その德を崇尙せらる。

其の始め幕政に參與するや公家諸法度、武家諸法度等凡て立法制定の任に當り、又海外通商の方策を定めて、外國往復の文書を草し、更に耶蘇教の禁制、佛教各宗宗制の制定、寺院の訴訟裁斷等一手によりて策定せられ、その幕政の機要に關し、力を盡したる者甚だ多しと謂ふべし。當時幕府の樞機に參したるもの外に天海僧正あり、天海は天台宗の僧にして、常に天台一流の宗義を鼓吹して將軍の親

任を受け、漸次その勢力發展して、二代秀忠の末に及びては遂に師の上に越ゆるを見る。蓋し天海は權謀術數の才に富みたるも常に爪牙を隱して表面忍辱の相を粧ひ。師は常に政治家を以て自ら任じ覇氣滿々として倨傲尊大毫も憚る所なかりしが如し、故に三代家光の時に至りては師の聲望は一時に失墜して、天海獨り之を擅にするの狀態となれり。

家康の薨後、彼れの神靈を久能山に葬るや特に神號を立つるの議、幕府の間に起り、師は東照大明神論を主唱し、天海は天台一流の一實神道說を本據として大權現說を主張し、遂に二代秀忠の面前に於て各々其の主張を戰はすに及びたるも、遂に天海の權現說勝を制して、師の明神論は仆れざるを得ざることゝなれり、是れ師が聲望失墜の一頓挫と觀ざるべからず、當時師が細川忠興に與へたる左の書簡に見るも其の胸中の不滿を察するに足るべし、

一板伊州九月四日當地に下着候節に參上上方の儀共相談し
一傳奏衆も近日下向のさたにて候
一相國樣御神號の事
東照大權現、日本大權現、威靈大權現、東光大權現
右四つの內何へ成共、將軍樣次第に被爲定候樣にて內證被游に付、禁中被仰出候、右は二條殿

菊亭殿兩人二つゝ內書の由に候、未だ何も可被成御定も不被仰出候、傳奏衆下向候者、御雙談にて可相定候と存候、吉田殿は不被指出何もかも南光坊の神道と相聞へ申候

九月七日　　金地院

細川越中守樣

一拙老罷上候時分もいまたしれ不申候、此月相には傳奏衆下向と申候間、御神號も相定り、左樣の御用等うち明候者、板伊州上洛之時分、御暇申上候て見可申候と存候に、今屋敷の作事も無御座候、借屋にてべん／＼と罷在候事、迷惑さ可被成御推量、先書にも度々如申候、以來はゆろ／＼と罷在候樣に念願にて候、今は大御所樣の時のことく隙入候事無御座、折々御城へも出仕申體に候へとも、事の外氣も草臥申候

九月十八日　　金地院

細川越中守樣

加之、寺社奉行職の如きも始は師と圓光寺元佶との手に於て支配したるにも拘らず、元佶の寂後、代ふるに板倉勝重を以てして、行政の權力を漸次僧侶の手より奪はんと欲したるが如き、且つ是れが爲めに師の勢力範圍の減少せられたる少しとせざるなり。思ふに兩雄幷び立たず、天海も亦師以上の才力氣魄ありたるに非ざるべきも、天海の溫和寛容手段は遂に師の剛腹不遜主義に勝ちて上下の人心を收攬したるぞ是非もなき事と謂ふべし。

當時上下の人々、師を目するに黑衣の政治家を以てしたるも、是れその半面に過ぎずして、師は文事に於ても亦一頭地を出づるものあり、南禪法語の如き其他の述作に於て觀るべきもの甚だ多し。寛永三年四月、京師五山の長老等　敕を奉じて各杜鵑の文を奉る、時に師は江府にありて是の盛事を聞き、遙に左の一章を奉つて曰く、

寛永第三。龍集丙寅。首夏下澣。辱降綸命。徵五岳之諸彥。賜杜鵑新綠之兩敕題。各賦詩文。以曰其志。臣僧侍柳營于東武之江城者。年於茲。遙傳承此榮擧。不堪羨殺。叨綴卑詞。以奉呈阿野黃門閣下。執奏。惟幸。

文曰

噫嘻春天。萬花競焉。交爭嬋娟。群鳥貪芳。驚落花房。減却韶光。殘英丙摧。燕雀嫌猜。蜂蝶絕媒。時至孟夏。梅霖漸瀉。綠樹新也。群鳥聲竭。衆芳皆歇。林間宜月。子規喚名。彷彿千聲。一度飛鳴。翺翔喬木。甲羽虫族。族皆欽伏。臣甫撚髭。賦再拜詩。以感舊時。起望雲端。祭楚天寬。請蜀道難。騷人留題。巫峽東西。靑壁無杼。耶溪放斥。鼓澤歎聞。長松猶存。皈與々々。未忘鄕閭。欲勸躊躇。化南游花。色誇洛涯。餘天下嫮。薰殿日永。山築越嶺。池移湘景。一聲々中。勵群臣忠。高入天聽。詩曰

滴盡群花雨始晴。上林新綠晝崢嶸。高誦盤銘一兩聲。宮鶯日々樹陰裡。　臣僧崇傳

寛永五年師は南禪寺の五鳳樓を修造し之れが供養を執行す。當時五山の長老等、師が陞座の頌に和して詩偈を贈る者多し。建仁寺古澗長老の和に曰く、

圓照本光國師五鳳樓修造供養。陞坐頌。社中和其韻。予附驥尾。本韻。聳粲然。啓禪筵。咫尺天。

瑞龍靈鷲地皆然。萬德莊嚴金刹筵。彌仰國師行道日。無量演說動人天。

寛永十年正月七日、微恙に罹り一切の公務を辭し、同く廿日六十五歳を以て江戸に寂す。世に傳ふ。憂憤の極、自ら死を早めたるものなりと。其の眞僞俄に斷ずべからずとするも、末路甚だ振はざりしものあるべく、天海と爭權の結果、遂には上下の怨府となり、京師江戸の人々、喚ぶに大山氣院惡國師の稱を以てし、更に寛永九年是れより先き師の處分によりて流罪に處せられたる大德寺の澤庵、玉室等の天海の執成によりて赦免を受け、殊に澤庵の如きは三代家光の歸崇を博して政事に容喙せんとしつゝありしが如きは胸中顧みて甚だ憂悶に堪へざりし者ありと謂ふべし。

然れども師は德川初代の政治に於ては天海以上の功勳者にして、一事の惡德を以

て全幅の功勳を沒却すべからざるなり。遺著若干あり、本光國師日記四十六册は就中重要の史實と謂ふべし。

師の始め家康に知られて駿府に召され、尋で江戸に移りし後も、常に一侍者ありて身に隨ふ、侍者名は元松字を堅操と云ふ。若州の產なり。幼にして京に上り南禪寺の海印元冲に投じて受具し、廿三歲の時海印寂す、是に於て師は堅操を伴ふて朝夕其の傍に侍せしめ、冠蓋の送迎を典らしむ、故に師の門に趨走する一時の公卿士大夫等先づ操に約して交を結びしといふ。師南禪寺に歸るの日、操を擧げて前板職に充て、化を江戶に戢むるの日、遺命して洛西の延慶院を董さしむ。操凡て師に侍すること殆んど三十年、後ち延慶に住すること二十年、明曆元年七十三歲にして寂す。此に揭ぐる所の暹羅文書の草案は卽ち堅操の舊物なりしといふ。

五山詩僧傳 終

別稱並室號

（五十音發音順）

【ア】

【イ キ】

惟肖得巖
　蕉　雪
　歇卽道人

惟忠通恕
　雲壑道人
　白雲丹壑（書齋號）

以篤信仲
　松花老人
　千　松
　宗鏡嬾衲
　海南隱衲

維馨梵桂
　泰　雲
　東　虛

一菴一麟
　也　足
　泉聲幽處（室號）

以遠澄期
　雪　坡
　西嵐殘衲

惟高妙安
　鳥　江

一了宗登
　枕　流

以心崇傳
　松　窩

惟杏永哲
　草　湖
　梅　里
　芸々叟

惟堅周逕
　巖　下

以成東規
　無求子

維天承瞻
　葛　陂
　松　雲

以參省

牧松

【ウ】

雲溪支山

率性

賸隱

雲章一慶

流芳

雲岳靈圭

若雲

雲叟元云

孤雲

雲崖道岱

艮岳

惺々

雲外東竺

長水

依幻

雲壑永集

南洲

自來子

雲叟

阿呌

【エ】

悅雲宏怡

聖箭子

英甫永雄

武牢

芳洲

小溪

英岳景洪

桃隱

越溪禮格

鑑湖

英珠

杜南

悅巖東忿

西湖

六橋

【オ】

横川景三

補菴

小補

【カ】

海門承朝

伊川
覺雲顯吉
江左
如是子
鄂隱慧奯
關西
河清祖瀏
賀湖
頑雲
潤甫周玉
集雲

【キ】

吉山明兆
破草鞋
義堂周信

空華道人
琴叔景趣
松蔭
希世靈彥
村菴
東村
菊晩曇種
艮岑
季弘大叔
蔗菴 或云作軒
竹谷
季亭玄嚴
雲松道人
業仲明紹

半雲
規伯元方
白雲
熈春龍喜
清溪
菊齡元彭
西硼
九巖中達
卯橋 或云洛橋
玉峰光璘
安西
玉嶺守瑛
鵬南
無得

歸山光一
墨田
鈞溪元貞
參雨道人
岐陽方秀
怡雲
不二道人
鳳栖
昕叔顯晫
樂窩
幻松
日下

【ク】

空谷明應
若虛

愚極禮才
風月主人
華嶽建胄
樵隱子 或云栗隱
關中智悅
城南
景亮
愚溪等厚
龜巢
愚中周及
岳松子

【ゲ】

月林道皎
獨步叟
圓明叟

西山暮翁
清居
月窓元曉
自悟
嚴仲周噩
懶雲
月谷周進
樵雲
繼天壽戩
牧雲
月舟壽桂
幻雲
柴桑
中孚
橘洲

桂林德昌
松窩
京左
青松
蘚閣（或云作菴）

彥材明掄
養拙

桂岩運芳
天香

月溪英廣
鳳城

慶仲周賀
瀝華道人

月溪中珊
道隱

月翁周鏡
交蘆
三蘆
江介老人

景甫壽陵
棲雲
平陰
懶漁
半泥
東京

景徐周麟
宜竹
平陰
半隱

彥龍周興

半陶

乾峰士曇
少雲

謙岩原冲
蘿雲

月溪聖澄
江東

月洲承光
芝隱

賢溪元倫
天津

月心性湛
梅湖
可竹

乾崕梵竺

六橋
顯令通憲
横渠
鳥巣
點雲
桂巖龍芳
華東
指月
景岱
平城

【コ】

古劍妙快
了幻
古幢周勝
無染

離幻
江西龍派
豩菴
眞豩叟
續翠
木蛇
古桂弘稽
錦江
江心承董
嵐齋
丹崖
芝隱
翺之慧鳳
幻菴
木豩道人

借菴
古筠
江春瑞超
長蘆
虎岑昌竹
江東
剛室章寛（初名元侃）
東林
香蔭宗薫
薩地
虎林中虔
鑑湖
江岳元策
泗濱
古靈道充

礀東
雪礀
古溪性琴
新豐
松雨
湖月信鏡
楠溪
古澗慈稽
河東
三川
黄巖慈璋
阿閣
岫雲
剛外令柔
孤山

枯木紹榮
關西
古菴普紹
五臺
古先印元
高橋

【サ】

策彦周良
謙齋
龜陰
在中中淹
南華
三章令彰
水西
雲臥

作成令偉
富春
最岳元良
巣雲
三江紹益
城北
在庵普在
鶴峯

【シ】

此山妙在
如是住
絕鑛爐
春屋妙葩
芥室
自南聖薰

沖默
性海靈見
不還子
叔英宗播
交蘆
推枕
正宗龍統
蕭菴
常菴龍崇
寅闇（或云作菴）
角虎
栗浦（或云作里）
心翁等安
小朶
春容宗恕

雅洒
舜徒光韶
松月
春莊椿
蒙菴
春和啓闇
東湖
春澤永恩
泰安
松江
枯木
萍郷
天津
心田清播
謙齋

春耕
松花老衲
聽雨
松岡
叔京妙祁
天隱子
如心中恕
碧雲
春溪洪曹
睡快
有牧
仁如集堯
乾城
子建寅
是菴

自牧
春陽景果
樵雲
汝雪法叔
雪齋
日南
叔原宗菅
眠雲
勝剛長柔
梅野野人
蒲軒
佩經齋
斯立光幢
峨竹
竹所

笑隱善樟
藤陰
慈　　承
豐嶺
舜岳玄光
備陽
自悅守擇
舊塢
翠隱
春葩宗全
丹壑
汝舟妙恕
清溪
松堂宗植
黑水

集雲守藤
湖山
周南圓旦（初俊市光勝）
金華
霽陽
松隱玄棟
洛濱
噓々
宗峰妙超
大山
象外禪鑒
長峯
周　　嚴
濯錦
周　　龍

竹西
祥啓書記
雪溪
貧樂齋

【ス】

瑞溪周鳳
刻楮子
臥雲
北禪

瑞巖龍惺
蟬闇（或作菴）

瑞源等禎
泉南
竹軒
知盈

【セ】

清拙正澄
畢竟滅

雪村友梅
幻空

絶海中津
蕉堅

清溪通徹
天游

青山慈永
來青

春夫宗宿
不昧子

西胤俊承
眞愚

雲巢
靖叔德林
諾菴

西笑承兌
月浦
南陽

清叔壽泉
番易

泉叔梵亨
葛里

拙山周寅
柳湖
電久

雪岑梵崟
岐下

恐蕉
全室彥勳
爐峯
雪巖中鈞
阿丘
雪髯叟
雪堂令研
鵝湖
石霜龍莒
梅洲
宜默
全禪
東林

【ソ】

宗山等貴

松徑
松下
宗勤
澤南
祖溪德濬
水拙
鶴峯

【タ】

大業德基
了幻
聽雪
氷雪窩
太白眞玄
暮山老人
太岳周崇

全愚
逸休
大典顯常
蕉中
梅莊
太眞
太淸宗渭
意足
大成集
話月
大周周脩
三周
東川
大愚性智
倚松

萬空
大圭宗价
啞羊僧
太虚顯靈 初號龍天
越溪
惟參
大華令膽
湖南
愷々
丹陽光鶴
神洲

【チ】

竺仙梵仙
來々禪子
思歸子

中巖圓月
中正子
東海一漚子
海漚子
椿庭海壽
木杯道人
仲芳圓伊
嫩囝
孏室
三山
竹隱自嚴
春雨
竺雲等連
小朶子
自彊

繫雲
竹香全悟
嘯竹
紫篷山人 或云蓬萊
仲芳中正
一止子
仲安梵師
松屋
仲甫周璘
丹岳
中山玄中
泉南
漚華
不倚子

【ツテ】

鐵舟德濟
百拙
鐵菴道生
曇華
貞叟梵利
逍遙道人
鐵叟景秀
九禾
天與清啓
海樵
萬里
鷲湖
天隱龍澤
默雲
天章澄彧

呆菴
棲碧山人
天翁永幸
豎松
天澤圓育
伊川
天啓集仗
閑汀
天叔顯台
菅湖
雪蕉
天岸覺芭
玉溪
散木子
天衣守倫

嶺南
是鑛
天然興運
三笠
天圭中瓏
坏幻
釣天永洪
其叔

【ト】

獨芳清曇
自牧
東岳徵昕
雪巣
西山遺樵
東旭等輝

無々

桃源瑞仙

蕉雨

蕉了

亦菴

卍菴

春雨

梅岑

東漸健易

潜空

龍石子

東沼周曮

默齋

留月道人

祥光老子

鷗鄉散人

東輝永杲

嵩陽

洞叔壽仙

松巖

東明覺沇

星江

澄翠

棠陰玄召

江陰

東雲景岱

平城

東峰通川

長岡

東林友丘

三谷

等瑤

蓬島

【ナ】

南英周宗

懶雲

南江宗沅

漁菴

南宗祖辰

維浦

常羊

【ニ】

仁甫元壽

碧鷗子

【ヌネノハ】

伯英德俊
青丘遺老

伯巖殊楞
不白

梅屋宗香
鷗菴
松漚
臭菴

萬宗中淵
旅泊老衲

萬里集九
漆桶
梅菴

瀑巖等紳
葉巢子

梅叔法霖
半梅

梅仙東逋
滴翠
南華
南城

梅谷元保
河南

白堂竺津
南冥
呆菴

柏巖繼超
曲江

【ヒ】

文溪永忠
蒲菴
高安

文溪聖才
若耶子
耶溪

文中賢昌
釣月

文禮周郁
肥水
無盡

文成梵鷟
葵軒

物外可什
豐城

聞溪良聽

吉　水
不聞契聞
萬　休

【ヘ】

別源圓旨
縱　性
越　山
平仲中衡
臥　遊
別宗玄豫
江　沙
頤　神

【ホ】

抱節中孫
茨　菴

芳　洲
意釣散人
補仲等修
雲　臥
清　洲
彭叔守仙
瓢　菴
鳳林承章
竹　窠
芳春圓柔
稽　山
芳鄉光隣
愚　島
安　枕

【マ　ミ】

妙　貞
東　華

【ム】

夢窓疎石
木　訥
無塵燈
幻化道人
無傳普傳
筑　波
無極志玄
天　游
知　足
無礙妙謙
武　陵

【メ　モ】

茂伯全才
扣角子
茂源紹柏
巽亭
茂彥善叢
浣花
恕菴
茂叔集樹
仙臺

【ヤ ユ】

遊叟周藝
集雲
友月龍淵
三峯
有自瑞承

維瀣
有和壽鈞
維瀣
有節周保
東湖
生闇

【ヨ】

用剛乾治
心牧
與可心交
如水
要津東梁
木阜

【ラ】

蘭坡景茝

雪樵
蘭室玄森
防渚
蘭谷祖芳
丹田
幻虛
藍溪光瑄
西華
尚謙

【リ】

了菴桂悟
鉢袋子
三浦
伊川
龍湫周澤

咄齋

利峯東銳

片雲

華・林

【ルレ】

靈岳宗古

依此輪

【ロワ】

和中東靖

遯齋

撰述書目

（五十音發音順）

【アイキ】

一寧一山

一山錄

五燈會元抄

惟肖得巖

惟肖錄

東海瓊華集

惟忠通恕

繫驢撅

雲壑猿吟

以篤信仲

信仲錄

松花集

晦夫集

一菴一麟

龍涎集

藏叟箋

佛祖歷年圖

一韓智翃

蕉雨餘滴（東坡詩抄）

一瑞中曇

貞和集抄

一休宗純

狂雲集

續狂雲集

一休年譜

一絲文守

佛頂國師錄

以心崇傳

本光國師錄

慶長中文案

【ウ】

雲溪支山

雲溪錄（或西巖錄）

朦隱集

金蘭簿（太淸合作）

雲章一慶

淸規要綱

五燈一覽

百丈清規雲桃抄（雲章說 桃源記）

【エ】

英甫永雄

雄長老百首

羽弓集

倒痾集

悅巖東悆

悅巖集

圓爾辨圓

聖一法語

聖一錄

同年譜

【オヲ】

横川景三

京華集

東遊集

百人一首

【カ】

河清祖瀏

頑雲集

鄂隱慧奯

南遊稿

【キ】

規菴祖圓

南院錄

季瓊眞蘂

季瓊日錄

季弘大叔

蔗菴遺稿

蔗軒日錄

龜泉集證

龜泉日錄

松泉集

希世靈彥

村菴稿（雪巣集）

村菴小稿

義堂周信

義堂和尚語錄

空華日工略集

空華集

禪儀外文抄

東山外集抄

枯崖漫錄抄

百丈清規抄

古今雜集

九淵龍賝
葵齋集（長樂集）
九華
分韻雙璧
九鼎器重
蘋薺集
九鼎疏稿
岐陽方秀
不二稿
琴川錄
僧寶傳不二抄
碧巖不二鈔
中峰廣錄不二鈔
琴水稿
玉崖受環

佛語心論鈔
鏡堂覺圓
鏡堂錄
琴叔景趣
松蔭集
【ク】
空谷明應
空谷錄
若虛集
愚中周及
稟明抄
丱餘集
觀中中諦
觀中錄（或青嶂集）
碧巖鈔

【ケ】
桂庵玄樹
島陰漁唱集
島隱雜著
桂州道倫
諸錄俗語解
黃龍書釋集事苑
夢窓錄事苑
景徐周麟
翰林葫蘆集
宜竹殘稿
日涉記
繼天壽戩
柳西落葉
繼天筆語

桂林德昌
桂林錄
蕣閭疏稿

月庵宗光
月菴錄

月翁周鏡
交蘆集
江介集

月溪中珊
道隱集

月舟壽桂
月舟錄（獅子吼集）
幻雲文集
幻雲稿
蒲根

攢華集
續錦繡段
錦繡段抄

月堂宗規
月堂錄

月峯了然
月峯錄

景徹玄蘇
仙巣稿

月泉祥洵
月泉錄
月泉文集

月林道皎
月林錄
拈古頌古集

元翁本元
元翁錄

原古志稽
施餓鬼分解
心經秘鍵鈔

元亨泉
河濟集（入元行卷）

乾峰士曇
乾峰錄（拔關集）
見性義記

元方正楞
越雪集

彦龍周興
半陶稿

【コ】

兀菴普寧

兀菴錄

虎關師練

元亨釋書

佛語心論

十禪支錄

濟北集

紙衣謄

禪餘或問

正修論

宗門十勝論

五家辨

禪儀外文集

聚分韻略

古桂弘稽

古桂錄（或桂子禪味）

雞肋集

湖月信鏡

湖鏡集

古劍妙快

扶桑一葉（入元諸作）

了幻集

翺之慧鳳

竹居清事

竹居西游集

江西龍派

天馬玉沫（東坡詩抄）

新選集

江西錄（或續翠一葉）

江西疏稿

剛中玄柔

剛中錄

古篆周印

五燈會元抄

伏仰天觀圖（出日件錄）

佛祖宗派圖

高峰顯日

佛國錄

功甫洞丹

釋門排韻

合浦永琮

合浦錄

【サ】

在菴普在

在菴錄

在先希讓
在先錄
策彥周良
南遊集（入明詩集）
城西聯句（九千句三千聯句）
初渡集
再渡集

【シ】

此山妙在
若木集
寂室元光
寂室錄
性海靈見
石屏集
宗峰妙超
大燈錄
叔英宗播
曇華集（撰中華古德入寺開堂諸語）
春屋妙葩
普明錄
雲門一曲
天龍紀年考略
春莊椿
蒙菴百首
春澤永恩
枯木集
春庸宗恕
春庸錄
笑雲清三
四河入海（脞說、翰苑遺芳、天下白、蕉雨餘滴、）
勝剛長柔
古文眞寶抄
梅野的聞
笑山周念
五燈會元抄
正宗龍統
禿尾鐵䈴帚
禿尾長柄帚
蒲牙
如心中恕
碧雲稿
汝霖良佐
歸隱稿
高園集
松嶺秀

證羊集

心岳通知

心岳錄（春暉錄）

心華元棣

心華臆斷（杜詩抄）

業鏡臺

仁浩無涯

無涯錄

仁甫元壽

續臆斷（杜詩抄）

仁如集堯

鏤氷集

心地覺心

法燈法語（或由良法語）

法燈年譜

心田清播

心田錄（或春耕四會錄）

焦尾帚（四六文）

春耕集（或松華集）

聽雨集（或一節集）

【ス】

瑞巖龍惺

瑞巖錄

蟬闇外稿

瑞溪周鳳

臥雲夢語集

臥雲稿

臥雲日件錄

竹鄉集

入東記

刻楮

脞說（東坡詩集抄）

善隣國寶記

嵩山居中

少林一曲

【セ】

西胤俊承

眞愚稿

清溪通徹

清溪集

青山慈永

青山錄

清拙正澄

禪居錄

大鑑廣清規

同略清規（小清規）

石屏子介

石屏錄

絕海中津

絕海錄

蕉堅稿

雪村友梅

雪村錄

岷峨集

西笑承兌

日用工夫集

士偶集

雪嶺永瑾

雪嶺錄

識廬稿

梅溪集

潛溪處鎌

潛溪錄

旃室周馥

翰林殘稿（東坡詩抄）

【ソ】

藏山順空

藏山錄

倭傳燈錄

祖溪德濬

水拙集

雙峰宗源

雙峯錄

【タ】

大有有諸

雪村行道記

師子吼集

南禪寺記

法華撮注

太岳周崇

三國合運圖

翰苑遺芳（東坡詩抄）

前漢書抄

大休正念

大休錄

大愚性智

堆雲和尚七所九會錄

大歇了心

楞嚴新疏

太清宗渭

太清錄（是無上咒紙襯錄）
金蘭簿（雲溪合作）
大拙祖能
大拙年譜
大道一以
赤肉團（又大道語錄）
太白眞玄
柳文抄
太白四六
鴉臭集
【チ】
中巖圓月
中巖錄
東海一漚集
中正子

自曆譜
藤陰瑣細集
文明軒雜談
中立一鶚
臥龍吟
竺隱宗五
南禪舊記略
仲芳圓伊
仲芳錄
蘭室錄
仲方中正
蒲室疏解
蒲葉
竺雲等蓮
瓶梅（聯句）

繫雲集
竺山
竺山錄
痴兀大慧
註釋摩訶衍論
大日經見聞
法華要抄
枯木集
十牛訣
竺仙梵仙
續叢林公論
宗門千字文
捐益淸規
圓覺經注
竺仙錄

來々禪子集
天柱集
東渡集
尚時集

直翁知侃
直翁錄

定山祖禪
續釋書

椿庭海壽
傳燈錄抄
碧巖抄

【ツテ】

徹翁義亨
徹翁錄

鐵舟德濟
鐵舟錄
閻浮集

鐵菴道生
鐵菴錄
鈍鐵集

天隱龍澤
天隱錄
默雲稿
點鐵集
錦繡段

天岸慧廣
東歸集

天境靈致
無規矩集
洞裏春風集（玉岡唱和）

天柱宗昊
海滴集

天章澄彧
梅城錄
前聞記（無極行業記）

天祐梵𣈽
天祐錄
萬壽寺記

鐵山宗純
鐵山集

天與淸啓
萬里集（入明時作）
再渡集（再入明時作）

【ト】

東岳

大覺禪師鏡像記實
伯師祖稜
伯　師　錄
拔隊得勝
拔　隊　錄
拔隊法語（或鹽山法語）
萬宗中淵
百丈淸規抄
萬里集九
梅花無盡藏
天　下　白（東坡詩抄）
帳　中　香（山谷詩抄）
曉　風　集（三體詩抄）
【ヒフ】
文英淸韓

韓長老詩文集
復菴宗已
復　菴　錄
不遷法序
鳳林吒之
菩　薩　蠻
禪林集句韻
文學契
花　上　集
【へ】
平田慈均
平　田　錄
別源圓旨
別　源　錄
南遊東歸集

【ホ】
峰翁祖一
正法直傳
彭叔守仙
鐵　酸　餡（或東語西話）
猶如昨夢集
增集句韻
【マミ】
明菴榮西
興禪護國論
出家大綱
三部經開題
一代經論總釋
菩提心論口訣
圓頓一心戒和解

師子淨敵論
喫茶養生記
法華入眞言門訣
眞禪融心義

明遠俊哲
芙蓉冊(宋元諸家詩)

明叟彥洞
明叟錄

明極楚俊
餘慧語要
明極錄
滄海餘波(明極天岸東渡作)

【ム】

無我省吾
一心妙戒教

無學祖元
佛光錄
佛光年譜

夢巖祖應
夢巖錄
旱霖集

無已道聖
聖景記(無極行業手)

無極士玄
色塵集(宗鏡錄抄三十卷)
無極錄(或天龍一指)

無象靜照
興禪記
無象錄
夢遊集

夢窓疎石
夢窓錄
同年譜
西山夜話
夢中問答
夢窓法語
谷響集
夢窓明極唱和編

無等以倫
黃龍十世錄

無住道曉
沙石集
聖財集
雜談集
妻鏡

無著道忠
新羅箭

【メモ】

蒙山智明
五燈會元抄

默菴周諭
提耳訓

默翁妙誡
禪餘吟

慕哲龍攀
新編集

【ヤ】

約翁德儉
佛燈錄

【ユ】

有自瑞承
有自錄

【ヨ】

與可心交
如水觀

【ラ】

蘭溪道隆
蘭溪錄
坐禪論

蘭洲良芳
蘭洲錄

蘭坡景茝
雪樵獨唱集

【リ】

了菴桂悟
了菴錄

龍湫周澤
龍湫錄
隨得集

龍泉令淬
松山集

常庵龍崇
常庵錄
角虎集（文集）
寅闇稿（詩集）

【ルレ】

靈山道隱
業識團

【ロ】

驢雪鷹灞
驢雪集

【ワ】

謚號

（五十音發音順）

【アイヰ】

一寧一山
特賜妙慈弘濟大師

一翁院豪
勅謚圓明佛演禪師

一峯明一
勅謚佛海禪師

韋航道然
勅謚大興禪師

以心崇傳
特賜圓照本光國師

意翁圓淨
佛通禪師

【ウ】

雲章一慶
勅謚弘宗禪師

雲叟元云
勅謚佛性通應禪師

雲屋慧輪
勅謚佛地禪師

【エヱ】

圓爾辨圓
勅謚聖一國師

越溪秀格
勅謚圓照佛慧禪師

【オヲカ】

可菴圓慧
勅謚圓光禪師

海門承朝
勅謚寶智圓明禪師

可翁宗然
勅謚普濟大聖禪師

鄂隱慧奯
勅謚佛慧正續國師

寒潭慧雲
勅謚通照禪師

【キ】

希世靈彥
勅謚慧鑑明照禪師

義天玄承
勅諡大慈慧光禪師
金潭素城
勅諡廣照禪師
規菴祖圓
勅諡南院國師
碁山賢僊
勅諡照覺普濟禪師
鏡堂覺圓
勅諡大圓禪師
義翁紹仁
勅諡普覺禪師
貴菴從尊
勅諡佛慧振宗禪師
玉山德璇

勅諡佛覺禪師
恭翁運良
勅諡佛慧禪師
玉山玄提
勅諡佛智大通禪師
玉岫英種
勅諡圓極眞修禪師
久菴僧可
勅諡佛印大光禪師
【タ】
空谷明應
特賜佛日常光國師
愚中周及
勅諡佛德大通禪師
觀中中諦

勅　性眞圓智禪師
【タ】
景川宗隆
勅諡本如實性禪師
乾峯士曇
勅諡廣智國師
乾巖元雄
勅諡大智圓通禪師
元翁本元
勅諡佛德禪師
嚴仲周噩
勅諡智海大珠禪師
傑翁是英
勅諡佛慧禪師
見山崇喜

特賜佛宗禪師
月峰伊卍
勅賜勇猛菩薩
月林道皎
勅諡普光大幢國師
月船琛海
勅諡法照禪師
月菴宗光
勅諡正續大祖禪師
月窓元曉
勅諡圓光禪師
月山希一
勅諡覺智禪師

【コ】

虎關師錬
特賜正覺國師
古劍知訥
特賜佛心慧燈國師
古先印元
勅諡正宗廣智禪師
古幢周勝
勅諡鏡智法明禪師
兀菴普寧
特賜宗覺禪師
高峯顯日
勅諡佛國應供廣濟國師
高山慈照
勅諡廣濟禪師
孤峯覺明
特賜三光國濟國師
孤山至遠
勅諡廣照禪師
香林識桂
勅諡等慈禪師
肯山聞悟
勅諡覺海禪師
悟溪宗頓
勅諡大興心宗禪師
剛寶崇寛
特賜佛慈普濟禪師

【サ】

在菴普在
勅諡佛慧廣慈禪師
最岳元良
勅諡正宗大興禪師

山叟慧雲
勅諡佛智禪師

【シ】

松嶺道秀
勅諡圓明證知禪師

宗峰妙超
大慈雲匡眞國師

寂菴上昭
勅諡宏光禪師

寂室元光
勅諡圓應禪師

心地覺心
勅諡法燈圓明國師

授翁宗弼
勅諡本有圓成國師

(加賜)佛心覺照(又加賜)大定聖應(又加賜)光德勝明。神光寂照禪師

春屋妙葩
特賜智覺普明國師

慈雲妙意
特賜清泉禪師

淨光鏡圓(又號通翁)
特賜普照大光國師

峻翁令山
勅諡法光圓融禪師

笑堂宗忻
勅諡圓應大機禪師

象外禪鑑
勅諡妙覺禪師

嶮崖巧安
勅諡佛智圓應禪師

秋澗道泉
勅諡大法源禪師

正中端
勅諡慧燈大明禪師

【ス】

瑞溪周鳳
勅諡興宗明敎禪師

嵩山居中
特賜大本禪師

樞翁妙環
勅諡佛壽禪師

宗山等貴
勅諡佛眼天祐禪師

【セ】

清拙正澄
勅諡大鑑禪師

西磵子曇
勅諡大通禪師

潛溪處謙
勅諡普圓禪師

省伯令慧
勅諡佛光眞照禪師

青山慈永
勅諡佛觀禪師

雪村友梅
大元特賜本朝勅諡寶覺眞空禪師

雪江宗深
勅諡佛日眞照禪師

雪庭宗禪
勅諡眞覺禪師

絶海中津
特賜佛智廣照淨印翊聖國師

絶崖宗卓
勅諡廣智禪師

石梁仁恭
勅諡慈照慧燈禪師

石屏子介
勅諡佛宗眞悟禪師

仙巖澄安
勅諡佛種大滿禪師

【ソ】

雙峰宗源
特賜雙峰禪師

藏山順空
勅諡圓鑑禪師

卽菴宗心
勅諡弘宗普門禪師

桑田道海
勅諡智覺禪師

【タ】

大休正念
勅諡佛源禪師

大拙祖能
勅諡廣圓明鑑禪師

大歇勇健
勅諡正眼智鑑禪師

大綱全擧
勅諡佛眼禪師

大虫全岑
勅諡大證禪師
大有利有
勅諡大觀禪師
大林善育
勅諡僧海禪師
大法大聞
勅諡佛範宗通禪師
大朴玄素
勅諡眞覺廣慧大師（元文宗特賜）
大喜法忻
勅諡佛滿禪師
太平妙準
勅諡佛應禪師
太古世源

勅諡國一禪師
大用慧堪
勅諡靈光禪師
太拙文巧
勅諡廣覺禪師

【チ】

直翁知侃
勅諡佛印禪師
痴兀大慧
勅諡佛通禪師
痴坡妙頴
勅諡正宗護法禪師
中巖圓月
勅諡佛種慧濟禪師
定山祖禪

勅諡普應圓融禪師
竺雲惠心
特賜佛智大照國師
竺隱崇五
勅諡慈明廣慧禪師

【ツテ】

天岸慧廣
勅諡佛乘禪師
天境靈致
勅諡寶鑑圓明禪師
天鑑存圓
勅諡佛果禪師
天菴妙受
勅諡佛性禪師
天外志高

勅諡眞覺禪師
鐵菴道生
勅諡本源禪師
鐵舟德濟
大元特賜圓通大師
徹翁義亨
勅諡大祖正眼天應大現國師
廷用宗器
勅諡德光普照禪師
【ト】
東巖慧安
勅諡宏覺禪師
東山湛照
勅諡寶覺禪師
東陽英朝

勅諡大道眞源禪師
東陵永璵
勅諡妙應光國慧海慈濟禪師
東海竺源
勅諡法光安戚禪師
桃溪德悟
勅諡宏覺禪師
德叟周佐
勅諡宗猷達悟禪師
獨照祖禪
勅諡眞覺禪師
特芳禪傑
勅諡大寂常照禪師
嫩桂正榮
勅諡大醫禪師

【ナ】
南浦紹明
勅諡圓通大應國師
南峰妙讓
勅諡佛嚴禪師
南嶺子越
勅諡佛心慧燈禪師
南英周宗
勅諡普覺圓光禪師
南洲宏海
勅諡眞應禪師
【ニ】
日峰宗舜
勅諡禪源大濟禪師
【ヌネノハ】

白雲慧曉
勅諡佛照禪師
白雲慧宗
勅諡佛頂禪師
白隱慧鶴
勅諡正宗國師
拔隊得勝
勅諡慧光大圓禪師
柏庭淸祖
勅諡佛運禪師
【ヒフ】
不遷法序
勅諡佛照慈明禪師
不識妙存
勅諡圓通禪師

復菴宗已
勅諡大光禪師
物外可什
勅諡大定禪師
聞溪良聰
勅諡佛海慈濟禪師
【ヘ】
碧潭周皎
勅諡宗鏡禪師
別峯大殊
特賜圓光國師
平心處齋
勅諡覺源禪師
【ホ】
寶山乾珍

勅諡圓乘宏濟禪師
峰翁祖一
勅諡正宗大曉禪師
【マミ】
明極楚俊
特賜佛日燄慧禪師
明巖正因
勅諡大達禪師
明窓宗鑑
勅諡明覺禪師
妙翁弘玄
勅諡眞寂禪師
彌天元釋
勅諡見性悟心禪師
【ム】

夢窓疎石

（後醍醐）特賜夢窓國師

（光明）正覺

（光嚴）心宗

（後光嚴）普濟

（後圓融）玄猷

（後花園）佛統

（土御門）大圓

夢巖祖應

勅諡大智圓應禪師

無學祖元

勅諡佛光常照圓滿國師

無礙妙謙

勅諡佛眞禪師

無隱圓範

勅諡覺雄禪師

無關普門

勅諡佛心禪師、大明國師

無象靜照

勅諡法海禪師

無隱元晦

勅諡普濟法雲禪師

無爲昭元

勅諡大智海禪師

無住一圓

勅諡大圓國師

無外爾然

勅諡應通禪師

無涯師海

勅諡興文圓慧禪師

無極志玄

勅諡佛慈禪師

【メ】

滅宗宗興

勅諡圓光大照禪師

【モ】

蒙山智明

勅諡泰定廣濟禪師

【ヤ】

約翁德儉

特賜佛燈國師

【ユ】

友山淸師

勅諡佛興禪師

【ヨラ】

蘭溪道隆
勅謚大覺禪師
蘭洲良芳
勅謚弘宗定智禪師
蘭坡景茝
勅謚佛慧圓應禪師

【リ】

龍山德見
特賜眞源大照禪師
林叟德瓊
勅謚覺照禪師
龍川元津
勅謚勝覺禪師
了菴桂悟
特賜佛日禪師

了堂素安
勅謚本覺禪師

【ルレ】

靈山道隱
勅謚佛慧禪師
靈仲禪英
勅謚圓智悟空禪師

【ロワ】

閑堂上村君、五山詩僧傳を公にせんとし、予に一言を徵せらる、予いふ、君が五山文學に畢生の力を傾注せる、世既に定評あり、この編著、君に於ては蓋し鷄を割くに牛刀を用ゐたるもの、また門外漢予の如きもの丶言を要せず、然れども、若し强ひて予に謂はしめんとならば、予は先づ君に問ふに、何が故にこの書を著はせるかを以てせん、想ふに、五山の詩は、槪ね唐宋の糟粕を嘗むるにあらざれば、元明の殘殺を啜るに過ぎず、その詩僧として傳ふるに足るもの果して幾人ぞや、しかも名衲雲の如き五山の叢林、政治に、外交に、將た文敎に、逸すべからざるもの多し、今此を措いて彼を取る、予竊に五山のために悲しむのみならず、亦た君の爲めに惜しまざるを得ず、君何ぞその蘊蓄するところを以て、他の各方面に發揮せざる、是れ實に君の使命にあらずやと、閑堂君呵

東京帝國文科大學史料編纂官黑板博士題

々大笑答へず、予乃ち錄して以て更に之を問ふと云爾、

明治四十五年七月上澣

黑板勝美記す

五山詩僧傳跋

本邦僧史の作ある、之を先にしては凝然の日本高僧傳要文抄あり、尋いで虎關の元亨釋書あり。之を後にしては師蠻の本朝高僧傳、延寶傳燈錄あり。近時又近世禪林僧寶傳、續日本高僧傳の選ありて我國の僧傳玆に始めて備はる。然れども此等の書は法系、傳燈の紹述を主として其他は略せしがため當代文明の史的發達を考究する上に於て遺憾なき能はず。是れ其の目的此れにあらずして彼れに在ればなり。

我國室町氏の末、戰亂相尋ぎ、空國君子なく、武夫儒冠に溲して、文藝の荒廢此の時を最となす。當時幸にして五山の僧徒あり、克くこの墜緒を紹述して二百七十餘年間、文藝復興の中心となり、既墜の文教を維持し、延いて德川氏三百年間

女子高等師範教授、古社寺保存會委員荻野學士識

學問の淵源となり、遂に明治の文運を胚胎するに至れり。而して此間に輩出せし碩學其人に乏からずと雖も、從來之を闡明して其の幽光を發揚せし者曾てあらず。吾が親友上村閑堂君、曩きに五山文學小史を著はし、又五山文學全集三千餘頁を編輯して闇黑裡の文學玆に稍々昭然たり。爾後、君の研鑽は日にその歩を進め文學史上より見たる五山の僧傳二百三十餘人を選し、目けて五山詩僧傳と稱し、近頃之を世に公にすといふ。洵に努めたりと謂ふべし。蓋し五山の文學は我國の宗教史上重要なる位置を占むるのみならず、學問の歴史に於て輕々に看過すべからざるものにして、在來國史の研究家が之を忽諸に附せしにも拘らず、幸に閑堂君の此に著目するありて國史上の一大缺陷を補ひしは其の功績虎闞、師蠻に讓らずと謂つべく、我が學界は君の恩澤を享受して闇黑中一點の

燈火を得たるの感あるべし。君、近頃、跋を余に需む、因て所懷の一端を記して責を塞ぐこと爾り。

內務省神社局考證室に於て

荻野仲三郎

明治四十五年五月下澣

拾得落の薹を得て寒山之を味噌に和し
閑堂閑を得て此に僧傳を草す
作麼生是和尙述作の意
それ味噌の味噌臭きは上味噌に非ず
非ずと雖も味噌臭からざれば味噌に非ず
誰か言ふ僧家の詩蔬筍の氣に滿つと
蔬筍の氣なきものは僧にあらず
蘭に芳あり味噌に臭あり
要は只太甚を厭ふのみ
五山五山其人傳ふべきか
詩僧詩僧其詩誦すべきか
禪と詩とわれ共に之を知らず
借問す和尙が擂木底の筆

京都帝國文科大學助教授吉澤學士𨁝

よく味噌をあげたりや
はた味噌をつけたりや
未だ讀まざれば又之を知らず
嘗めずして味はむと欲せば
去つて之を五山の味噌摺坊主に問へ

明治四十五年二月

紫影生漫題

『序　跋』

閑「罷出でたる者は、此のあたりにかくれもない書作りで御座る。今度五山詩僧傳を作つて、賣りひろめうと存ずる。何が扨今の世の中は、中身よりも飾りが大切で御座るによつて、太郎冠者や、次郎冠者、三郎四郎など申すうつけた人たちをすかいて、序をなが〳〵と書かせて御座る。又川一つ彼方に白水と申す似而非國學者が御座る。總じて山には枯木でも澤山ながゝ、ましぢやと申す程に、あの白水にも序をかゝせうと存ずる。何かと申す中に、早やこれぢや。のう〳〵白水は御座るか、居させらるゝか。白「誰やら聲がする、誰ぞ、どなたで御座る。エ、閑堂か。何としてわせられたぞ。閑「別の儀では御座らぬが、今度五山詩僧傳を作つて御座る。何が今の世

の中は、中身よりも飾りが大切ぢやと申す程に、こなたの御名が借りたう御座る。なんと御迷惑には御座らうが、序をばし書いては下さるまいか。白「はてさてようこそおりやつたれ。安い事、書いてまつせう。それにおまちやれ。扨ても困つた事を申して參つた。それがし何かとくわは申せども、未だ序と申すものを作つた事が御座らぬ。それ〳〵、假名の序には古今集の序を手本にせよと申すは。これは歌の序ぢや。詩僧傳の序はないかしらぬまでは。こゝに何やら書いてある。「序はいたくたはれず、うるはしく可書」。清輔朝臣とも云はる人が序の文句を作つては置かいで。あちらの棚に無名抄と申す物が御座る。ちと見ませう。ヱイあるは〳〵。「何々それにとりて、はねたる文字入聲の文字のかきにくきなどをば、皆すてゝかく也」。ハ、、、、。捨てゝ書く也と御座るは。長明

は一段と物識りで御座つた。末世の今日までも見抜かせられて、書きおかせられたる法文なありがたい事で御座る。のう〳〵はや出來ておりやる。閑「早や出來ましたか。白「おんでも無い事。筆を下せば千言萬言は噓一つせぬ間に出來まする。閑「さすが人の申す程御座つて、えらい者で御座る。見せて下されい。白「見た分ではわかるまいによつて、讀うで聞かせませう。よう御聞きやれ。まづ、上村カドの君。閑「カドが分りませぬ。閑「さて〳〵こなたは文盲な人ぢや。撥ねたる文字は撥ねぬが法で御座る。閑堂の君といふ事でおりやる。先きを讀みまする。「コド五サシソデを作らる。古を戀ひざらめかも」。何とでけたか。閑「出來ましたやうには御座るが、たゞ其だけで御座るか。白「これだけでおりやる。閑「それだけでは何とやらものたらぬやうに御座る。白「こゝな。假名の序と申すもの

は、書きにくきなどは皆すてゝ書く法でおりやるは。閑「何の法が。そのやうなものはほしうもおりない。白「序がいらずば跋をやらう。お手。まゐつたの。閑「アいた〳〵その罰もかへさうぞ。あの横著者、やるまいぞ〳〵。

稲荷の狐が子年の油揚始めて食うて、今といふ日、室町の草庵に於いて草し畢んぬ。

白　藏　主

明治四十五年七月十七日印刷
明治四十五年七月二十日發行

五山詩僧傳
定價金貳圓五拾錢

不許複製

編者　上村観光

發行兼印刷者　渡邊爲藏
東京市京橋區日吉町十番地

印刷所　民友社
東京市京橋區日吉町十番地

發行所　民友社
東京市京橋區日吉町

民友社出版書籍目録（明治四十五年六月改正）

（一）本社書籍は全國各賣捌店にて賣捌致候若し賣捌店に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非ずして其賣捌店に何等かの事故ありて發送を受け能はざるものと知られたし
（二）斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし
（三）注文の書名は明瞭に記入せらるべし上下又は第一第二等ある書籍は落なく之を記別せられたし

（明治二十年二月創立）

東京市京橋區日吉町
民友社
電話新橋五一五番
振替口座壹参壹〇〇番

天下萬世の龜鑑、字々皆血、國民必讀の經典、句々皆涙

毛利元昭公題辭　山縣有朋公題辭　桂太郎公題辭　土方久元伯題辭
島津忠濟公題辭　松方正義侯題辭　東久世通禧伯題辭　渡邊千秋伯題辭
徳川圀順侯題辭　井上馨侯題辭　寺内正毅伯題辭　股野琢氏序文
德富猪一郎氏序文

天覽　維新志士正氣集

【未曾有の廉價】【特價金五圓】【送料】（内地金二十錢　鮮臺金四十錢）

【注文】必ず前金―或は引換小包の事
【本文】―◉寛政諸家◉頼氏一門◉華山、瑞皐◉秋帆、坦庵◉諸公卿◉七卿◉畿内◉水戸◉櫻田◉坂下◉薩州◉長州◉土州◉越前◉尾州◉大和◉生野◉近江◉信州◉加賀◉播州◉宇和島◉肥後◉佐賀◉東北◉禁門◉筑波山◉諸州以上の志士二百六十六家の傳記並に諸
―文章、詩、歌、俳句、書束、日記等　三百八十六頁
【遺墨】コロタイプ　三十九點　寫眞石版　二百〇一點　二百三十八頁　計六百五十頁
【體裁】表紙　絹紬　大和綴　帙入　菊二倍　舶來極上等紙　製本　高尚清雅　眞に空前の美

賜 天覧台覧 故従一位大勲位島津久光公著

通俗國史

實價金拾五圓五拾錢
小包市内八錢内地六拾錢
朝鮮、臺灣、支那壹圓拾錢

△用紙美濃判特製　製本和裝精美全二十二冊

故島津久光公が、前後拾有五年の心血を注ぎて、編述せられたるものは、實に此通俗國史なり。即ち六國史の後を承け、上は宇多天皇より後小松天皇の御宇に至るまで、編年體にて假名交り文を以てし、一字一句悉く公が手稿に係り、五百有餘年間の治亂得失の要を採り、明快にして漏さず、嚴正にして枉げず。且つ假名遣ひの精確なる、尤も周密なる校訂を經たり。今や公爵家の許可を得て、民友社に於て出版するの榮を得たり。國史研究者には、座右に缺くべからざるの一大良典なり。

學界の寶典

字考正誤

定價壹圓
郵税六錢

△用紙極上和紙製本和裝帙入

文字を作らざれば即ち已む、苟も文字を作る以上は眞正の字を作らざるべからず。美人の美を羊の羑に誤り、諂諛の諂を諂疑の舀に混同し、東西の西を西同の西と一にしたる類は太だ多く、一點一畫の訛は即ち本字にあらず遂に文義を并せ失ふに至る。明の文字學者黃蔘人の字考に長谷川良察の加へたる正誤を書は斯道の寶典なるも久しく絶板して坊間に存することなし本社此に寫眞凸版にし世の文字を以て業とする士に頒つことゝせり此書一たび出で、世の文字を作る者自家の訛字多きに驚くべし。

文章家の良師友

國民叢書

德富猪一郎著

冊	書名	定價	郵税
◎第一冊	進歩乎退歩乎	十錢	二錢
◎第二冊	人物管見	二十錢	四錢
◎第三冊	青年と教育	二十錢	四錢
◎第四冊	靜思餘錄	二十錢	四錢
◎第五冊	文學斷片	二十錢	四錢
◎第六冊	天然と人	二十五錢	四錢
◎第七冊	第二靜思餘錄	十五錢	二錢
◎第八冊	風雲漫錄	二十錢	四錢
◎第九冊	家庭小訓	十五錢	二錢
◎第十冊	經世小策 上下各	二十五錢	四錢
◎第十一冊	單刀直入錄	十五錢	二錢
◎第十二冊	寸鐵集	十五錢	二錢
◎第十三冊	文學漫筆	十五錢	四錢
◎第十四冊	漫興雜記	十五錢	四錢
◎第十五冊	世間と人間	二十錢	四錢
◎第十六冊	社會と人物	二十五錢	四錢
◎第十七冊	生活と處世	十五錢	二錢
◎第十八冊	日曜講壇	十五錢	二錢
◎第十九冊	處世小訓	十五錢	二錢
◎第二十冊	人物偶評	二十錢	四錢
◎第二十一冊	教育小言	十五錢	二錢
◎第二十二冊	第二日曜講壇	二十錢	四錢
◎第二十三冊	第三日曜講壇	二十錢	四錢
◎第二十四冊	近時政局史論	二十錢	四錢
◎第二十五冊	第四日曜講壇	二十錢	四錢
◎第二十六冊	第五日曜講壇	二十錢	四錢

◎第二十七冊 第六日曜講壇　定價二十錢　郵税四錢

◎第二十八冊 讀書餘録　定價二十五錢　郵税四錢

◎第二十九冊 第七日曜講壇　定價二十錢　郵税四錢

◎第三十冊 第二天然と人　定價二十五錢　郵税四錢

◎第三十一冊 第八日曜講壇　定價二十錢　郵税四錢

◎第三十二冊 第九日曜講壇　定價二十錢　郵税四錢

◎第三十三冊 第三天然と人　定價三十五錢　郵税六錢

◎第三十四冊 第十日曜講壇　定價二十錢　郵税四錢

◎第三十五冊 第十一日曜講壇　定價二十錢　郵税四錢

政治法律及經濟

高橋二郎著 ◎國勢及市勢調査法　定價五十錢　郵税六錢

英國ローレンス原著　古谷久綱譯 ◎日露戰役國際公法論　定價一圓五十錢　郵税十錢

ウエストレーキ原著　深井英五補譯 ◎國際法要論　定價一圓五十錢　郵税十二錢

平田久譯述 ◎實業振興策　定價一圓三十錢　郵税十錢

大島貞益譯 ◎李氏經濟論（特別定價半減）　二册金一圓　郵税十五錢

吉田虎雄著 ◎支那貿易事情　定價一圓　郵税十錢

德富猪一郎著 ◎七十八日遊記　定價七拾五錢　郵税十錢

福島中將序　井上雅二著 ◎四大陸遊記　定價一圓卅五錢　郵税十錢

井上雅二著 ◎中央亞細亞旅行記　定價六十錢　郵税十錢

外務次官珍田捨己序　外務省調査 ◎西伯利亞及滿洲　定價一圓　郵税十錢

德富蘇峯題詩、松尾小三郎著 ◎南米航海日記　定價四十錢　郵税四錢

山路彌吉著　◎新井白石　定價十八錢　郵税四錢

人見一太郎著　◎ユーゴー　定價三十錢　郵税六錢

德富健次郎著　◎トルストイ　定價二十五錢　郵税四錢

塚越芳太郎著　◎瀧澤馬琴　定價五十錢　郵税六錢

内田貢著　◎ジヨンソン　定價二十錢　郵税四錢

米田貢著　◎バイロン　定價二十五錢　郵税四錢

濱田佳澄著　◎シエレー　定價二十五錢　郵税四錢

塚越芳太郎著　◎柿本人麿及其時代　定價三十錢　郵税四錢

早川貞水口演　◎日本武士道赤穂義士（自一篇至六篇）　一冊四十五錢　一冊郵税八錢

文學美術及哲學

德富蘆花著　◎不如歸　上製七十錢　並製四十五錢　郵税六錢

德富蘆花著　◎思出の記　上製壹圓　並製六十五錢　郵税十錢

村上浪六著　◎八軒長屋（全三冊）　前編七十錢　後編七十錢　續編六十五錢　郵税各八錢

村上浪六著　◎稻田一作（全二冊）　前篇七十五錢　後篇六十五錢　郵税各八錢

高濱虛子著　◎俳諧師　定價一圓　郵税十二錢

高濱虛子著　◎續俳諧師　定價七十五錢　郵税十二錢

坂本文泉子著　◎夢の如し　定價三十五錢　郵税四錢

山路愛山著　◎懺悔　定價二十錢　郵税四錢

◎探偵異聞　德富蘆花著　定價二十五錢　郵稅四錢

◎外交奇譚　德富蘆花著　定價二十五錢　郵稅六錢

◎歸省　宮崎八百吉著　定價十五錢　郵稅四錢

◎自然と人生　德富蘆花著　上製五十錢　並製二十五錢　郵稅四錢

◎青蘆集　德富蘆花著　定價二十五錢　郵稅四錢

◎青山白雲　德富蘆花著　定價二十五錢　郵稅四錢

◎栗の花　吉野左衞門著　定價六十五錢　郵稅六錢

◎元田先生進講錄　蘇峰學人校訂　定價八十五錢　郵稅八錢

◎小楠遺稿　横井時雄編　上製一圓五十錢　並製一圓二十錢　郵稅十六錢

◎松陰先生遺著　吉田庫三編　第一篇二圓九十五錢　郵稅十六錢　第二篇二圓九十五錢　郵稅十二錢

◎松陰先生女訓　吉田庫三編　定價五十錢　郵稅四錢

◎唐詩絶句　宋章泉趙蕃昌父　宋澗泉韓淲仲止　精選　宋疊山謝枋得君直註解　日本槐南森大來校閲　定價五十錢　郵稅四錢

◎國民歌集　佐佐木信綱選　定價一圓　郵稅八錢

◎新俳句　故正岡子規君監修　定價三十五錢　郵稅六錢

◎一休和尚狂雲集　森大狂居士參訂　定價七十五錢　郵稅十二錢

◎閑葛藤　釋宗演禪師口述　定價七十五錢　郵稅六錢

◎鎌倉禪話　前圓覺寺管長　建長寺管長　釋宗演禪師細評　菅原時保禪師新著　定價五十錢　郵稅八錢

◎詩禪一味　鈴木子順著　定價六十五錢　郵稅六錢

青年及家庭教育

◎新日本之青年　定價二十錢　郵稅四錢

◎苦學奮鬪錄　鈴木明著　定價六十五錢　郵税八錢

◎宮中儀式略　宮内大臣題辭　平田久編　定價一圓　郵税八錢

◎帝國主義と敎育　浮田和民著　定價十五錢　郵税二錢

◎遊戲全書　三井秀雄著　小學適用　定價一圓八十錢　郵税十錢

◎書法階梯　高堂墨池著　習字速成　定價二十錢　郵税二錢

◎漕艇術　高杉新一郎著　定價二十錢　郵税四錢

◎育兒の燈火　小兒科專門醫學士眞下正太郎述　定價三十五錢　郵税四錢

雜著

◎千代のひかり　定價五十錢　郵税二錢

◎不老長生之祕訣　平田久譯述　定價五拾錢　郵税六錢

◎最近朝鮮事情要覽　朝鮮總督府御編纂　定價五十五錢　郵税四錢

◎熊澤蕃山敎訓錄　拓城學人著　定價五十錢　郵税六錢

◎國民と非國民　定價二十錢　郵税二錢

◎朝顏圖說と培養法　岡不崩著　上製一圓廿五錢　並製八十五錢　郵税各八錢

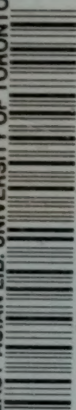
◎海戰の俤　則松傳著　卅七八年　定價一圓二十錢　郵税十一錢

◎當世膝栗毛　歷助著　鬢六畫　定價二十五錢　郵税四錢

◎東海道旅行記　田口杏村、田井羊公合著、平福百穗畫　牛と驢馬　定價三十五錢　郵税四錢

◎一語千金　民友社編纂　定價十錢　郵税二錢

◎五山詩僧傳　上村觀光著　近刊


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03002 2164